蔵王町文化財調査報告書　第6集

六　角　遺　跡

－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－

２００８年（平成20年）３月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

序　　文

蔵王山麓の豊かな自然に恵まれた私たちの蔵王町は、大昔から大変住み良い土地だったのでしょう。私たちの足もとに埋もれている多くの遺跡が、悠久の時をこえてそのことを力づよく物語っています。

蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成８年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。事業の計画区域には多くの遺跡が含まれていたことから、文化財の保存協議が重ねられました。この結果、水田となる部分は盛土によって遺跡を保存し、道路や水路などの工事によってやむを得ず削平される部分について、平成13年度より記録保存のための発掘調査を行なうことになりました。

本書において皆さまにご報告するのは、平成18・19年度に行なった六角遺跡の発掘調査成果です。今回の調査では縄文時代の狩猟場や、古墳時代と奈良・平安時代の集落跡などが発見され、円田盆地に居住した人びとの暮らしぶりの一端が明らかになりました。また、奈良時代の初め頃には関東地方から移住してきた人びとの集落も営まれていたようです。本書にまとめられた学術的成果が、広く皆さまに活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡保存へのご理解とご協力をいただきました地元地権者の皆さま、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、発掘調査の実施にあたりご指導をいただきました宮城県教育委員会、また発掘作業にあたられました地元の皆さまに厚く御礼申し上げます。先人の残した文化遺産を町民の宝として永く後世に継承していくことは、これからのまちづくりには欠かせない大切なことであります。今後とも、町民各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成20年３月

蔵王町教育委員会

教育長　山田　紘

例　　言

1．本書は、蔵王町大字小村崎字六角地蔵地内に所在する六角遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、経営体育成基盤整備事業の円田２期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）に伴う事前調査として宮城県大河原地方振興事務所より委託を受け、平成 18・19 年度に実施した。

3．発掘調査は蔵王町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。

教　　育　　長　山田　紘

教育総務課長　我妻　一　　課長補佐　平間　茂子（H18）　阿部　宏（H19）

文化財保護係長　佐藤洋一　　主　　事　鈴木　雅

文化財臨時職員　庄子善昭　　小泉博明　　齋藤史佳　　庄子裕美　　一條　隼　　重森直人

4．本書の作成は蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係が実施し、調査員全員の協議のもと佐藤洋一の協力を得て鈴木　雅が執筆・編集した。

5．本遺跡の発掘調査および資料整理と本書の作成に際し、以下の諸氏・諸機関よりご指導・ご助言ならびにご協力を賜った。ここに記して謝意を表する（敬称略）。

菊地逸夫・佐久間光平・千葉直樹・佐藤貴志（宮城県教育庁文化財保護課）

菅原祥夫（㈶福島県文化振興事業団）・佐藤敏幸（東松島市教育委員会）

安倍奈々子・大久保弥生（東北学院大学大学院文学研究科）

宮城県教育庁文化財保護課・宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区

6．本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、遺物写真撮影、図版レイアウトは鈴木　雅・庄子善昭・小泉博明・齋藤史佳・庄子裕美・一條　隼・重森直人が中心となり、我妻英子・岩佐若奈・近江真利子・會田亮介・小杉佐和子・小林四郎・小林美智子・佐藤貴美子（文化財整理作業員）がこれを助けた。

7．本書の内容は、これまでに公表した本発掘調査に関わるすべての資料･報文等の内容に優先する。

8．本発掘調査で出土した遺物および写真・図面等の記録資料については、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡　　例

1．本遺跡の測量原点の座標値は、日本測地系に基づく国家座標第Ⅹ系による。各調査区の測量基準点の座標値は第１表に示した。なお、方位は座標北を表している。

2．本書第３図「遺跡位置図」は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図「村田」を複製して使用した。

3．本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原 2005）を参照した。

4．本書で使用した遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。

5．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＡ：柱穴列、ＳＤ：溝跡・河川跡、ＳＥ：井戸跡、ＳＫ：土坑・落し穴状土坑、ＳＸ：性格不明遺構

6．遺構・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりで、それぞれスケールを付して示した。

遺構実測図　遺構配置図：1/600、ＳＢ・ＳＡ・ＳＤ平面図：1/100、

ＳＩ・ＳＥ・ＳＫ・ＳＸ平面図・断面図およびＳＢ・ＳＡ・ＳＤ断面図：1/60

遺物実測図　土器：1/3、石器・石製品・金属製品：2/3

遺物集成図　土器：1/6

7．遺物観察表および考察における土師器の説明では、成形にロクロを使用しているものを「ロクロ土師器」、使用していないものを「土師器」と表記した。

8．本遺跡では、複数の竪穴住居跡で掘方底面に土坑状の落ち込みが確認された。これらは住居床面より下層で確認されたことから、本書ではこれを「床下土坑」と表記した。

9．遺構実測図および遺物実測図における網点の凡例は以下のとおりである。

遺構実測図　焼　　面　柱・壁材痕跡　貼　　床

遺物実測図　黒色処理　赤　　彩

10．遺物観察表および遺構観察表で（　）内の数値は残存値である。

11．遺構観察表のカマドの説明では、付設される壁面の方位により「北カマド」のように表記した。

12．遺構の説明および遺構観察表の方位の説明では、例えば北を基準として東に 10 度傾いている場合、「Ｎ－10°－Ｅ」のように表記した。

13．引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。

調 査 要 項

遺　跡　名：六角遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：05112　遺跡記号：ＵＥ）
所　在　地：宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵地内
調 査 原 因：経営体育成基盤整備事業 円田２期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）
調 査 主 体：蔵王町教育委員会
調 査 担 当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係
調 査 協 力：宮城県教育委員会
調 査 期 間：平成 18 年（2006 年）5 月 15 日～ 11 月 24 日
　　平成 19 年（2007 年）8 月 21 日～　9 月　4 日
調 査 面 積：約 25,800 ㎡（事前調査分 16,700 ㎡　確認調査分 9,100 ㎡）
調　査　員：佐藤洋一　鈴木　雅（蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係）
　　庄子善昭　小泉博明　齋藤史佳　庄子裕美　一條　隼　重森直人（同文化財臨時職員）
協力調査員：菊地逸夫　佐久間光平　千葉直樹　佐藤貴志（宮城県教育庁文化財保護課）
発掘作業員：我妻英子　芦立　清　岩佐若奈　太田忠義　大庭慶志郎　會田亮介　加藤初子
　　加藤洋一　亀井勇二　菊地　茂　熊坂信子　小杉佐和子　後藤扶美江　小林四郎
　　小林美智子　佐藤和子　佐藤貴美子　佐藤恵子　佐藤照子　佐藤福治　佐藤義晴
　　眞貝誠一　鈴木光一　鈴木　昇　鈴木初江　鈴木　勝　竹内恂子　樋口豊一
　　樋口良子　福田保次　堀内　博　山岸　崇　山家次郎　横山清蔵　吉田三郎
整理作業員：我妻英子　我妻　大　岩佐若奈　近江真利子　會田亮介　小杉佐和子　小林四郎
　　小林美智子　佐藤かおる　佐藤貴美子
協　　力：宮城県大河原地方振興事務所　蔵王町土地改良区　蔵王町小村崎区

目　　次

序　　文
例言・凡例
調査要項
目　　次

第１章　調査にいたる経緯　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第２章　遺跡の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
１．遺跡の位置と地理的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
２．周辺の遺跡と歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

第３章　調査の方法と経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

第４章　調査の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
１．基本層序　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
２．発見された遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
（1）Ｓ１区・・　11　（5）Ｎ２区・・　67　（9）Ｎ６区・・111　(13) Ｎ10区・・・・・・・149
（2）Ｓ２区・・　50　（6）Ｎ３区・・104　(10) Ｎ７区・・126　(14) その他の出土遺物・・150
（3）Ｓ３区・・　50　（7）Ｎ４区・・104　(11) Ｎ８区・・127
（4）Ｎ１区・・　63　（8）Ｎ５区・・109　(12) Ｎ９区・・133

第５章　考　察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
１．遺物　・・162
２．遺構　・・172
３．旧地形と集落形成の様相　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181

第６章　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・183

引用・参考文献
遺構観察表
写真図版
解　　説
報告書抄録

挿図目次

第１図　青麻山展望台より北東に円田盆地を望む … 1
第２図　遺跡の位置と周辺の地形 …… 2
第３図　六角遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第４図　遺跡遠景（南東から） …… 8
第５図　表土除去作業 …… 8
第６図　発掘作業 …… 8
第７図　現地説明会 …… 8
第８図　仙南地域の農業農村めぐり …… 8
第９図　整理作業 …… 8
第10図　調査区配置図 …… 9
第11図　S1東区遺構配置図……11
第12図　SI1・SI9竪穴住居跡……12
第13図　SI1竪穴住居跡出土遺物 ……12
第14図　S1中・西・南区遺構配置図……13
第15図　SI2竪穴住居跡 ……15
第16図　SI2竪穴住居跡出土遺物 ……15
第17図　SI9竪穴住居跡出土遺物 ……17
第18図　SI601竪穴住居跡(1)……18
第19図　SI601竪穴住居跡(2)……19
第20図　SI601竪穴住居跡出土遺物 ……20
第21図　SI602竪穴住居跡 ……22
第22図　SI602竪穴住居跡出土遺物 ……22
第23図　SI603竪穴住居跡 ……23
第24図　SI603竪穴住居跡出土遺物 ……23
第25図　SI609竪穴住居跡 ……25
第26図　SI609竪穴住居跡出土遺物 ……25
第27図　SI621竪穴住居跡 ……26
第28図　SI621竪穴住居跡出土遺物 ……27
第29図　SI633竪穴住居跡 ……29
第30図　SI633竪穴住居跡出土遺物 ……29
第31図　SI634竪穴住居跡(1)……31
第32図　SI634竪穴住居跡(2)……32
第33図　SI634竪穴住居跡出土遺物 ……32
第34図　SI635竪穴住居跡 ……33
第35図　SI645竪穴住居跡 ……34
第36図　SB11掘立柱建物跡 ……35
第37図　SB12掘立柱建物跡 ……36
第38図　SB615掘立柱建物跡……37
第39図　SB616掘立柱建物跡……38
第40図　SB636掘立柱建物跡……39
第41図　SB643掘立柱建物跡……39
第42図　SB650掘立柱建物跡……40
第43図　SB655掘立柱建物跡……41
第44図　SB657掘立柱建物跡……41
第45図　SA10柱列跡 ……42
第46図　SK29落し穴状遺構 ……43
第47図　SK30落し穴状遺構 ……43
第48図　SK33落し穴状遺構 ……43
第49図　SK38落し穴状遺構 ……43
第50図　SK36土坑 ……45
第51図　SK610土坑……46
第52図　SK624土坑……46
第53図　SK610土坑出土遺物……46
第54図　SK619土坑……46
第55図　SK625土坑……47
第56図　SK626土坑……47
第57図　SK628土坑……48
第58図　SK628土坑出土遺物……48
第59図　SX623性格不明遺構……49
第60図　S2北・S3西・中・東区遺構配置図 ……51
第61図　SI91竪穴住居跡……53
第62図　SI91竪穴住居跡出土遺物……54
第63図　SB66掘立柱建物跡 ……55
第64図　SB67掘立柱建物跡 ……56
第65図　SB68掘立柱建物跡 ……57
第66図　SB72掘立柱建物跡 ……57
第67図　SB95掘立柱建物跡 ……58
第68図　SA96柱列跡 ……59
第69図　SK56土坑 ……60
第70図　SK61土坑 ……60
第71図　SK64土坑 ……60
第72図　SK81土坑 ……60
第73図　SD55溝跡 ……62
第74図　SD73・SD74・SD75溝跡 ……62
第75図　N1北・南、N2西・中・南区遺構配置図 …65
第76図　SI305竪穴住居跡出土遺物 ……64
第77図　SB306掘立柱建物跡……64
第78図　N2東区遺構配置図 ……68
第79図　SI201a竪穴住居跡・SD205溝跡 ……69
第80図　SI201b竪穴住居跡(1) ……70
第81図　SI201b竪穴住居跡(2) ……71
第82図　SI201b竪穴住居跡出土遺物……71
第83図　SI201b竪穴住居跡(3) ……72
第84図　SI209竪穴住居跡 ……74
第85図　SI210・SI261竪穴住居跡……75
第86図　SI210竪穴住居跡出土遺物 ……76
第87図　SI212竪穴住居跡 ……77
第88図　SI222竪穴住居跡 ……79
第89図　SI222竪穴住居跡出土遺物 ……80
第90図　SI223竪穴住居跡 ……81
第91図　SI223竪穴住居跡出土遺物 ……83
第92図　SI225竪穴住居跡出土遺物 ……83
第93図　SI230竪穴住居跡 ……84
第94図　SI230竪穴住居跡出土遺物 ……84
第95図　SI231竪穴住居跡 ……85
第96図　SI231竪穴住居跡出土遺物(1) ……86
第97図　SI231竪穴住居跡出土遺物(2) ……87
第98図　SB235a・b掘立柱建物跡……89
第99図　SB239掘立柱建物跡……89
第100図　SB251a・b掘立柱建物跡……90
第101図　SB256掘立柱建物跡……91
第102図　SA203柱列跡……91
第103図　SA253柱列跡……92
第104図　SA254柱列跡……92
第105図　SK216落し穴状遺構……93
第106図　SK217落し穴状遺構……93

第107図　SK258落し穴状遺構……94
第108図　SK224土坑……95
第109図　SK224土坑出土遺物……95
第110図　SK236土坑……96
第111図　SK243土坑……96
第112図　SD202溝跡……97
第113図　SD206大溝跡……97
第114図　SD206大溝跡出土遺物……98
第115図　SD228大溝跡……99
第116図　SD228a大溝跡出土遺物……100
第117図　SD228b大溝跡出土遺物……100
第118図　SD228a･b大溝跡、SD801大溝跡(1) ……101
第119図　SD228a･b大溝跡、SD801大溝跡(2) ……102
第120図　SD228a･b大溝跡……103
第121図　SI811竪穴住居跡出土遺物……104
第122図　N4中・南区遺構配置図 ……105
第123図　SI701竪穴住居跡(1) ……106
第124図　SI701竪穴住居跡出土遺物……107
第125図　SI701竪穴住居跡(2) ……107
第126図　SA707柱列跡 ……108
第127図　SK703落し穴状土坑 ……109
第128図　SD354大溝跡……109
第129図　N5北・南区、N6東区遺構配置図……110
第130図　N6西区遺構配置図 ……110
第131図　SI424竪穴住居跡(1) ……112
第132図　SI424竪穴住居跡(2) ……113
第133図　SI424竪穴住居跡(3) ……114
第134図　SI424竪穴住居跡出土遺物(1) ……115
第135図　SI424竪穴住居跡出土遺物(2) ……116
第136図　SI443竪穴住居跡……117
第137図　SB402掘立柱建物跡 ……118
第138図　SB414掘立柱建物跡 ……119
第139図　SB432掘立柱建物跡 ……120
第140図　SB434掘立柱建物跡 ……120
第141図　SB440掘立柱建物跡 ……121
第142図　SB436掘立柱建物跡 ……121
第143図　SA431柱列跡 ……122
第144図　SA435柱列跡 ……122
第145図　SE403井戸跡 ……123
第146図　SK409・SK419落し穴上遺構 ……125
第147図　SK418土坑 ……125
第148図　SK423土坑 ……125
第149図　SX406円形周溝跡 ……126
第150図　N8東・西区遺構配置図 ……127
第151図　SI751竪穴住居跡……128
第152図　SI753竪穴住居跡……129
第153図　SI753竪穴住居跡出土遺物……130
第154図　SI755竪穴住居跡……131
第155図　SI755竪穴住居跡出土遺物……131
第156図　SK759土坑 ……132
第157図　SD754大溝跡 ……132
第158図　SK759土坑出土遺物 ……132
第159図　N9南区遺構配置図 ……133
第160図　N9北・中区遺構配置図 ……134
第161図　SI553竪穴住居跡……135
第162図　SI554a竪穴住居跡(1) ……136
第163図　SI554a竪穴住居跡(2) ……137
第164図　SI554a竪穴住居跡(3) ……138
第165図　SI554b竪穴住居跡(1) ……139
第166図　SI554b竪穴住居跡(2) ……140
第167図　SI554c竪穴住居跡(1) ……142
第168図　SI554c竪穴住居跡(2) ……143
第169図　SI554a・c竪穴住居跡出土遺物……143
第170図　SB569掘立柱建物跡 ……145
第171図　SB570掘立柱建物跡 ……145
第172図　SK501土坑 ……146
第173図　SK547土坑 ……146
第174図　SA568柱列跡 ……146
第175図　SK548土坑 ……147
第176図　SK567土坑 ……147
第177図　SD555･556･557溝跡 ……148
第178図　N10区遺構配置図……149
第179図　S1区遺構外出土遺物 ……151
第180図　S3区遺構外出土遺物 ……151
第181図　N2区遺構外出土遺物 ……151
第182図　N2南区遺構外出土遺物 ……152
第183図　N5区遺構外出土遺物 ……152
第184図　N9区遺構外出土遺物 ……152
第185図　瓦、陶磁器 ……154
第186図　金属製品 ……155
第187図　転用砥、砥石(1) ……156
第188図　砥石(2) ……157
第189図　縄文・弥生土器 ……159
第190図　石器(1) ……160
第191図　石器(2) ……161
第192図　土師器分類図 ……163
第193図　土師器・ロクロ土師器分類図 ……167
第194図　須恵器分類図 ……168
第195図　第1群土器・第2群土器 ……170
第196図　第3群土器……171
第197図　第4群土器……172
第198図　主な遺構の分布と変遷 ……177
第199図　関東系土師器 ……179
第200図　関東系土師器を伴う竪穴住居跡 ……180

表　目　次

第１表　測量基準点一覧 ……　8
第２表　各遺構出土土器一覧 ……169
第３表　竪穴住居跡観察表 ……185
第４表　掘立柱建物跡観察表 ……186
第５表　柱列跡観察表 ……186
第６表　落し穴状遺構観察表 ……187
第７表　土坑観察表(1) ……187
第８表　土坑観察表(2) ……188
第９表　大溝跡観察表 ……188
第10表　溝跡観察表 ……189
第11表　井戸跡･円形周溝跡･性格不明遺構観察表…189

第１章　調査にいたる経緯

蔵王町北東部の円田盆地に広がる水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和 63 年度に盆地南部（円田１期地区）の事業計画が策定され、同年に埋蔵文化財保存協議が実施された。この結果を受け、同年から平成２年度にかけて事業実施区域内に存在する埋蔵文化財包蔵地の遺構確認調査および事前調査が宮城県教育庁文化財保護課により実施されている（宮城県教委 1989・1990・1991・1992）。

一方、盆地中・北部（円田２期地区）の事業計画は平成８年度に策定され、平成 12 年度には事業年次計画が提示された。事業実施予定区域内には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、平成８年度より文化財保護側の宮城県教育委員会、蔵王町教育委員会と原因者側の宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区の四者による埋蔵文化財保存協議が開始された。

平成 11 年度の協議において事業実施区域内における埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査が必要であるとの判断がなされ、平成 12 年度に蔵王町教育委員会が分布調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した。この結果を基に再協議を実施し、埋蔵文化財包蔵地の破壊される面積をできるだけ少なくするよう事業計画を大幅に見直すことが決定した。平成 13 年度には大河原地方振興事務所より、水田および畑地となる部分については、地下の遺構を保護するよう適宜盛土を行なうとともに、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として事前調査対象範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、合意に達した。

平成 13・14 年度には宮城県教育庁文化財保護課と蔵王町教育委員会によって事業実施区域内の遺構確認調査が実施され（宮城県教委 2002・2003）、この結果を踏まえた協議により、遺構の存在する部分については基本的に盛土による現状保存を行ない、計画田面が遺構面よりも下がる切土部分と、道路･水路の建設に伴って遺構面が掘削される部分について事前調査を実施することが決定した。平成 14 年度には事業実施区域のうち県道の南側部分を平成 15・16 年度に、北側部分を平成 17 ～ 21 年度に順次施工する最終的な事業計画が提示され、これに先立って平成 15 年度に南側部分を、平成 17 ～ 20 年度に北側部分を対象とする計 14 遺跡の事前調査計画が策定された。

蔵王町教育委員会は宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、平成 15 年度に都遺跡、窪田遺跡、新城館跡（蔵王町教委 2005）、平成 17 年度に車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡（蔵王町教委 2006）の事前調査を実施してきた。本書で報告するのは、平成 18・19 年度に実施した六角遺跡の調査成果である。なお、平成 19 年度以降は戸の内遺跡、窪田遺跡、十郎田遺跡、前戸内遺跡、西屋敷遺跡、磯ヶ坂遺跡の事前調査を実施し、本事業計画にかかわる遺跡の事前調査を終了する計画である。



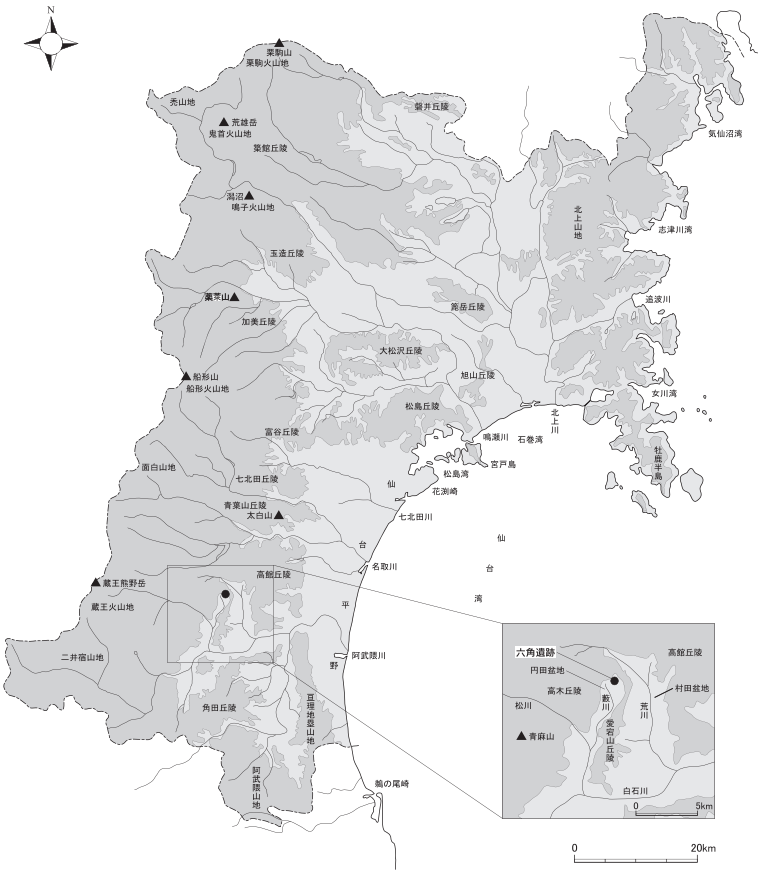
第１図　青麻山展望台より北東に円田盆地を望む

第２章　遺跡の概要

１．遺跡の位置と地理的環境

六角遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵に所在する。蔵王町役場の北東約 4.3km に位置し、町北東部に広がる円田盆地北縁の丘陵上に立地する。

円田盆地は松川の支流である薮川をはじめとする複数の中小河川によって形成された沖積地である。薮川は盆地中央部から東縁に沿って緩やかに蛇行しながら南流し、盆地周囲の丘陵からは無数の小規模な沢が流入している。盆地は南をのぞく三方を丘陵で囲まれており、盆地底面の範囲は東西約 1.2km、南北約 3.5km におよぶ。薮川流域は自然堤防が未発達で、盆地底部に湿地帯を形成しており、盆地の南側は松川との合流地点に向かって開けている。



第２図　遺跡の位置と周辺の地形

円田盆地を三方から囲む丘陵のうち、北側から西側にかけては高木丘陵と呼ばれ、蔵王山系の東麓部にあたる。東側は高木丘陵から細長く派生した愛宕山丘陵と呼ばれる小丘陵が南へ延び、さらに東側の村田盆地との地形的な境界をなしている。標高は高木丘陵東端部で約 130m、愛宕山丘陵頂部で約 170m、盆地南端で約 80m である。

愛宕山丘陵はやや急な傾斜をもつ丘陵地で、小規模な沢によって開析された比高差の大きい舌状の小丘陵が連続的に連なっている。盆地東側に分布する遺跡の多くがこの舌状小丘陵状に立地する。一方、高木丘陵は比較的なだらかな傾斜をもち、丘陵端部は緩やかに標高を減じつつ盆地中央部まで達している。この低平な丘陵上には多数の遺跡が分布し、今回の県営ほ場整備事業（円田２期地区）に伴って調査してきた盆地中・北部の遺跡もこれに含まれる。

近代以降に行なわれた耕地整理や薮川堤防改修工事の結果、盆地中・北部は平坦な水田地帯となり地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は遺跡が立地する微高地と小規模な沢状の低地とが複雑に入り組んだ景観であったと考えられる。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	六角遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代	33	塩沢北遺跡	集落	弥生、古墳、古代
2	前戸内遺跡	包含地	旧石器？、縄文後、古代	34	赤鬼上遺跡	包含地	弥生、古代、中世
3	三本槻遺跡	包含地	縄文早期	35	原遺跡	水田・包含地	弥生、古代
4	山崎遺跡	包含地	縄文早期	36	大柿内遺跡	包含地	弥生
5	稲荷林遺跡	包含地	縄文早期、古代	37	戸ノ内遺跡	集落	弥生、古代、中世
6	戸の内脇遺跡	包含地	縄文早・中期、弥生、古墳～中世	38	堂の入遺跡	包含地	弥生、古代、中世
7	中沢Ａ遺跡	包含地	縄文早期、弥生、古墳～中世	39	白山遺跡	包含地	弥生、古墳
8	北境遺跡	包含地	縄文早期、弥生、古代、中世	40	諏訪舘遺跡	包含地	弥生、古墳
9	中組遺跡	集落・包含地	縄文早・中期、弥生、古代、中世	41	土ヶ市遺跡	包含地	弥生、古代
10	本宿前遺跡	集落・包含地	縄文早期、弥生、古代、中世	42	三の輪遺跡	包含地	古墳、古代
11	立目場遺跡	包含地	縄文、弥生、古墳	43	諏訪舘横穴墓群	横穴墓	古墳
12	新並遺跡	包含地	縄文中期	44	八幡山古墳群	古墳	古墳
13	鳥山遺跡	包含地	縄文中期、古代	45	宋膳堂古墳	方墳	古墳
14	上野遺跡	包含地	縄文中期、弥生、古代	46	伊原沢下遺跡	集落	古墳
15	大橋遺跡	集落・包含地	縄文後期、弥生、古墳、平安	47	車地蔵遺跡	包含地	古代
16	都遺跡	集落	縄文後期、弥生、古墳、古代	48	鍛冶屋敷遺跡	水田・包含地	古代
17	諏訪舘前遺跡	集落・包含地	縄文晩期、弥生、古墳前・中期、古代	49	上葉の木沢遺跡	包含地	古代
18	小高遺跡	経塚・包含地	縄文、弥生、古代、中世	50	丈六遺跡	包含地	古代
19	中葉の木沢遺跡	包含地	縄文、弥生、古代	51	平沢遺跡	包含地	古代
20	角山Ｂ遺跡	包含地	縄文	52	沢遺跡	包含地	古代
21	見継遺跡	包含地	縄文	53	鹿野遺跡	包含地	古代
22	堀の内遺跡	集落・包含地	縄文、弥生、古墳、古代	54	大久保遺跡	包含地	古代
23	清水遺跡	包含地	縄文、弥生、平安	55	後原遺跡	包含地	古代
24	十郎田遺跡	集落	縄文、古墳、古代	56	清上遺跡	包含地	古代
25	窪田遺跡	集落	縄文、古墳、古代	57	新城館跡	集落、城館	古代、中世
26	西屋敷遺跡	集落・包含地	縄文、古墳～中世	58	寺坂遺跡	包含地	平安
27	磯ヶ坂遺跡	包含地	縄文、古代	59	西小屋館跡	城館	中世
28	宋膳堂遺跡	包含地	弥生、古墳、平安	60	平沢館跡	城館	中世
29	台遺跡	水田・包含地	弥生、古墳、古代、中世	61	諏訪館跡	城館	中世
30	愛宕山遺跡	包含地	弥生	62	築館館跡	城館	中世
31	屋木戸内遺跡	包含地	弥生	63	花楯館跡	城館	中世
32	中沢Ｂ 遺跡	包含地	弥生、古墳、古代	64	兵衛館跡	城館	中世

第３図　六角遺跡と周辺の遺跡

２．周辺の遺跡と歴史的環境

蔵王町における周知の遺跡は約 200 か所を数える。その多くは町域の東半部を占める円田盆地とその周辺、および脊梁山脈東麓に連なる丘陵地帯に立地する。大略的にみて縄文時代の遺跡は蔵王山東麓部から延びる高木丘陵上と青麻山東麓部の標高 150 ～ 250 m付近に、弥生時代以降の遺跡は円田盆地とその周辺の丘陵辺縁部の標高 80 ～ 100m 付近に立地する傾向がみられる。

こうした様相の違いは、概ね当時の人びとの生業形態の変化に伴うものと考えられる。縄文時代の食糧獲得の場は主に丘陵地に繁茂した森林であり、弥生時代以降の食糧生産の場は低湿地に作られた水田であったと考えられる。後述するが、蔵王町内における稲作の開始を裏付けるものとしては、籾殻の圧痕がある弥生土器片や、古墳時代の水田跡がある。なお、縄文時代の集落が低湿地の周辺に作られることはなかったが、低平な丘陵と湿地の入り組んだ円田盆地北部の一帯は、縄文時代には狩猟の場として利用されていた。以下、各時代・時期における蔵王町内の考古学的様相を概観する。

旧石器時代

宮地区の持長地（もっちょうじ）遺跡、鉄砲町遺跡、明神裏遺跡、小村崎地区の前戸内遺跡が知られている。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層の下部よりナイフ形石器が単独出土している。石刃を素材として基部の両側縁に刃潰し加工を施しており、いわゆる茂呂型ナイフ形石器の範疇に含まれるものである。鉄砲町遺跡では彫刻刀形石器が採集されている。大型の石刃の末端側に施した急角度剥離面を打面として側縁に樋状剥離面を作出しており、いわゆる小坂型彫刻刀形石器の範疇に含まれるものである。明神裏遺跡では細石刃と槍先形尖頭器が採集されたというが、詳細は不明である。また、円田盆地北西部の前戸内遺跡では槍先形尖頭器が採集されている。剥片を素材として両面調整が施されており、平面形はやや左右非対称な木葉形を呈する。このほか、宮地区の二屋敷遺跡では石刃状の縦長剥片に基部加工を施したナイフ形石器の可能性がある石器が出土しているが、本遺跡では同様の縦長剥片を素材とする縄文時代の石器も散見されることから、旧石器であるかどうかの判断は難しい。

以上のことから、持長地遺跡と鉄砲町遺跡については後期旧石器時代、明神裏遺跡と前戸内遺跡については後期旧石器時代終末～縄文時代草創期に属する可能性が考えられる。しかし、いずれも単独出土ないしは採集資料のため、明確な時期や遺跡の性格については不明な点が多い。

なお、円田盆地の東側に隣接する村田盆地の東縁をなす高舘丘陵西麓部では玉髄が産出し、これを利用して石器製作を行なった原産地遺跡が点在している（新川流域遺跡群、大場 2004）。このうち、村田町小泉地区の賀篭沢（かござわ）遺跡では 2003 ～ 2006 年度にかけて東北学院大学による学術発掘調査が行なわれ、後期旧石器時代の在地型原産地遺跡の様相が明らかにされた（佐川・鈴木・安倍 2005）。今のところ蔵王町内における旧石器時代の人びとの暮らしぶりは明らかになっていないが、このような原産地遺跡に関連して残された遺跡が今後発見される可能性は十分に考えられる。

縄文時代

草創期については前述のとおり明確な遺跡が発見されていない。周辺地域でも白石市福岡深谷地区の高野遺跡で槍先形尖頭器が、同大鷹沢地区の小菅遺跡、戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されてい

る程度で、具体的な様相は明らかでない。早期の遺跡には宮地区の明神裏遺跡、沢入Ｄ遺跡、円田地区の手代木遺跡、三本槻Ａ遺跡、遠刈田地区の北原尾遺跡、前期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、八幡平遺跡、円田地区の入山遺跡、愛宕山遺跡、中期の遺跡には宮地区の上原田遺跡、円田地区の高木遺跡、鞘堂山遺跡、湯坂山Ｂ遺跡、後期の遺跡には宮地区の二屋敷遺跡、山田沢遺跡、一本木遺跡、円田地区の西浦遺跡、晩期の遺跡には宮地区の下別当遺跡、沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡などがある。

早期の遺跡は小規模なものが多く、高木丘陵から青麻山東麓部にかけての広範囲に点在し、遠刈田地区から白石市福岡深谷地区にかけての不忘山東麓部にまとまった分布域を形成する。前期の遺跡数はやや少なくなるが、高木丘陵上と青麻山東麓部に点在する。中期から後期にかけては高木丘陵上に大きな集落が形成され、集中的な遺跡分布域となっている。一方、青麻山東麓部では後期になると多くの集落が形成され、晩期まで継続する大規模な集落がみられる。

このように、時期による分布域の移動と、微地形選択の志向性に変化は見られるものの、縄文時代のおよそ１万数千年間を通して彼らの生活の中心は蔵王山東麓部から延びる高木丘陵上と、青麻山東麓部にあったと言って良い。なお、円田盆地北部の小村崎地区にある都遺跡、窪田遺跡、原遺跡では縄文時代のものと考えられる落し穴状土坑が見つかっており、低湿地に面した低平な丘陵裾部が狩猟の場として利用されていたことが分かっている。

弥生時代

縄文時代晩期から継続する宮地区の沢北遺跡、これに後続する桝形囲式期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、円田地区の清水遺跡、西浦遺跡、塩沢地区の宋膳堂遺跡、東根地区の立目場遺跡、円田式期の遺跡には東根地区の大橋遺跡、塩沢地区の台遺跡、上野（うえの）遺跡、塩沢北遺跡、小村崎地区の都遺跡、円田地区の西浦遺跡、十三塚式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、立目場遺跡、天王山式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、塩沢地区の天王遺跡、平沢地区の赤鬼上（あかぎかみ）遺跡などがある。

桝形囲式期以前の遺跡は、縄文時代の立地を踏襲しながら、一部円田盆地周縁部の丘陵に立地している。円田式期になると円田盆地周縁部に急速に展開し、遺跡数も急増する。遺構が調査された例は皆無であるが、稲作が受容されたと考えるのに十分な変化と言える。しかし、十三塚式期から天王山式期にかけてはこうした流れを引き継ぐ一方、標高の高い丘陵上に立地する遺跡も見られる。なお、都遺跡で出土した円田式土器の破片と、大橋遺跡で出土した天王山式土器の破片、中沢Ａ遺跡で出土した弥生土器の破片の表面に籾殻の圧痕が観察されている。

古墳時代

前期（塩釜式期）の遺跡には東根地区の大橋遺跡、伊原沢下遺跡、円田地区の堀の内遺跡、中期（南小泉式期）の遺跡には小村崎地区の都遺跡、東根地区の中沢Ａ遺跡、台遺跡、後期（栗囲式期）の遺跡には東根地区の塩沢北遺跡などがある。また、高塚古墳には宮地区の明神裏古墳、東根地区の夕向原古墳群、古峯神社古墳、塩沢地区の宋膳堂古墳、天王古墳、西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳、横穴古墳には諏訪舘横穴墓群がある。

古墳時代の遺跡は、弥生時代の立地を踏襲し、円田盆地周縁部に集中している。前期の大橋遺跡、伊原沢下遺跡は宮城県内における塩釜式最古段階の、中沢Ａ遺跡は南小泉式最古段階の遺跡として知

られ、当該地域が周辺地域に先駆けて新しい文化要素を受容していたことが窺われる。また、盆地を取り囲む丘陵上にいくつもの高塚古墳が築かれている。古墳のほとんどは未調査であるが、宋膳堂古墳は直径約 30m の円墳で、埴輪が採集されている。明神裏古墳は昭和 31 年に発掘調査され、凝灰岩板石によって築造された箱式石棺が確認されている。

古代

奈良・平安時代の遺跡としては 100 か所以上が知られているが、このうち発掘調査が行なわれた遺跡としては宮地区の二屋敷遺跡、矢附地区の東山遺跡、塩沢地区の塩沢北遺跡、円田地区の堀の内遺跡、平沢地区の都遺跡、赤鬼上遺跡などがある。

奈良・平安時代の遺跡は、弥生時代以降の立地を踏襲し、円田盆地周辺に多く分布する一方、町東部の丘陵麓部の広い範囲に分布するようになり、生活領域が拡大したことが窺われる。堀の内遺跡、都遺跡では当時の在地の土師器とは異なる特徴を持った関東系土師器が少数ながら出土している。また、都遺跡では多賀城創建期のものと類似した軒平瓦が採集されているのをはじめ、遺跡の立地する残丘状の微高地を取り囲むような区画溝と塀跡が確認されており、当時の円田盆地を中心とする地域の経営に関する拠点的な施設が営まれていた可能性がある。東山遺跡からは、石組みのカマドを持つ平安時代の竪穴住居跡と土器溜遺構が確認され、灰釉陶器、転用硯のほか、「万田」、「子田」などの墨書土器が多量に出土している。

中世以降

中世の遺跡としては、宮地区の宮城館跡、山家館跡、館の山城跡、曲竹地区の曲竹小屋館跡、円田地区の花楯館跡、棚村館跡、小村崎地区の西小屋館跡、兵衛館跡、平沢地区の平沢館跡、諏訪舘跡、矢附地区の矢附館跡などがあり、町東部の丘陵麓部に多くの城館が築かれている。また、宮地区の持長地遺跡では中世の掘立柱建物跡群が確認され、常滑系陶器、馬具、鉄鈴、刀子などが出土している。このほか、平沢地区の保昌寺境内に現存する丈六阿弥陀如来坐像は平安時代末期の作風とされ、当時の平沢地区と奥州藤原氏との関係性を示唆している。遠刈田地区の岩崎山金窟址では戦国末期には採掘が開始されていたとみられ、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。

近世の遺跡として確認されているものは少ないが、小村崎地区の車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡では近世の有力者層の屋敷地の一部と考えられる掘立柱建物跡、区画溝跡、水場遺構などの遺構群が確認された。現存する近世の建造物としては、曲竹地区の我妻家住宅、小村崎地区の奥平家住宅、宮地区の刈田嶺神社本殿・拝殿・随身門などがある。我妻家住宅は江戸中期に建てられた大規模な茅葺民家で、国重要文化財に指定されている。奥平家住宅は江戸後期に建てられた茅葺入母屋造の民家である。刈田嶺神社は江戸期には刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。本殿は江戸中期に建てられたもので、県指定文化財に指定されている。

近代の遺構としては遠刈田製鉄所高炉跡、軽便鉄道跡などがある。遠刈田製鉄所高炉は明治後期に当時最先端の設計で建てられたもので、残存するのは基礎及び地下部分のみだが、国内に現存する唯一の近代製鉄遺構である。明治後期から大正にかけて大河原－遠刈田間を結んだ軽便鉄道は、現在の道路あるいは路地として、その路線敷きの名残を留めるのみである。

第３章　調査の方法と経過

遺跡の立地する丘陵は盆地北側から中央部に向かって南東方向に延びている。丘陵の西斜面は比較的急な傾斜をもち、東斜面および丘陵先端部の南斜面ではきわめてなだらかな傾斜をもって盆地底面と接している。調査前の現況は丘陵の尾根筋から西斜面にかけては主に畑地、東斜面から南斜面にかけては主に水田として利用されていた。

埋蔵文化財保存協議により遺跡範囲の全域が事業計画範囲に含まれることが判明したため、遺跡範囲における遺構分布状況と遺構面深度の把握を目的とした綿密な遺構確認調査を平成 14 年度に実施した。これに基づく最終的な事業設計案が平成 17 年度に提示され、田面となる部分は原則として盛土によって遺構面を保護し、やむを得ず切土が発生する道路・水路の予定範囲について平成 18 年度に事前調査を実施する運びとなった。なお、田面となる部分について膨大な盛土量を少しでも削減し、法面の落差を安全な高さに抑えたい旨の要望を受け、遺跡範囲の辺縁部の調査区において遺構密度が低いことが確認され、隣接する田面予定部分を削平しても遺跡の保存に大きな影響を与えないと判断された場合、事前調査範囲に追加することとした。

発掘調査は平成 18 年 5 月 15 日から 11 月 24 日までの約 6 ヶ月間を要した。今回の発掘調査は、道路・水路の整備によって遺構面が削平される範囲を対象としたものであり、遺跡範囲の全域に主に東西・南北方向の調査区が配置されたことになる。遺跡中央部を東西に横断する農道より南側をＳ区、北側をＮ区とし、それぞれ南からＳ１・２・３区、Ｎ１・２・３・４・５・６・８・９区として順次調査を実施した（第 10 図）。なお、未舗装の砂利道となる道路部分で、施工時に遺構面まで掘削が及ばない範囲については遺構確認調査を実施して遺構の分布状況を記録した。また、調査の過程で遺跡範囲辺縁部に位置するＳ１西区、Ｎ４中区、Ｎ９中区では遺構の分布状況が比較的散漫であることが把握され、これに隣接する丘陵辺縁部の切土が可能となれば盛土量の大幅な削減が可能となることから、宮城県教育委員会との協議を経てＳ１南区およびＮ４中区東側、Ｎ９区西側を事前調査対象範囲に追加した。さらに、調査終了後に設計の一部変更により延長約 100m の道路が追加となったため、これをN10 区として平成 19 年 8 月 21 日～９月４日に遺構確認調査を実施した。これらを含めた最終的な調査面積は、事前調査分約 16,700 ㎡、確認調査分約 9,100 ㎡の合計約 25,800 ㎡に及んだ。

調査の方法は重機による表土除去の後、手作業による遺構確認と遺構精査を行なった。確認した遺構は竪穴住居跡 52 軒、掘立柱建物跡 29 棟、柱列跡 10 条、落し穴状土坑 39 基、大溝跡 4 条、溝跡 44 条、土坑 71 基、柱穴多数である。遺構は必要に応じて 1/20 縮尺の平面図・断面図を作成し、調査区ごとに 1/100 縮尺の平板実測による遺構配置図を作成した。また、35mm モノクロームフィルムとデジタルデータにより、必要に応じて遺構の検出状況と土層断面、完掘状況、遺物の出土状況および調査区全景などの記録写真を撮影した。出土遺物は調査区および遺構、出土層位別に取り上げた。なお、測量基準点は各調査区付近に打設された工事用基準杭２点を機械設置点および方位視準点として使用し、測量基準線に平行・直行する３ｍグリッドを設定した。各調査区の測量基準点の位置と国家座標値は第１表に示した。

調査期間中の平成 18 年 7 月 29 日には一般町民を対象とした現地説明会を開催し、約 50 名の参加があった。調査が進行中であったＮ２西区で確認した遺構群を中心とした解説を行なった。また、9 月 21 日には宮城県大河原地方振興事務所が主催する「仙南地域の農業農村めぐり」の一環として町内の平沢小学校の児童とその保護者ら約 20 名が発掘作業を見学した。

第１表　測量基準点一覧

基準点	調査区	局地座標系		方角	点名	X 座標	Y 座標
T1	S1	N-0-S	W-0-E	N－6.3°－E	155	-208271.327	-12195.834
T2		S-9	W-0-E		164	-208321.045	-12201.136
T3		N-0-S	W-40		154	-208267.085	-12235.608
T4	S2（南）	-	-	-	011	-208230.485	-12252.792
T5		-	-		023	-208187.126	-12267.324
T6	S3	N-0-S	W-98	N－6.3°－E	K-70	-208118.588	-12297.456
T7	S2（北）	N-0-S	W-0-E		K-73	-208129.114	-12198.766
T8	N1	N-0-S	W-0-E	N－6.3°－E	K-74	-208017.745	-12186.887
T9	N2	N-0-S	E-89		058	-208027.290	-12097.394
T10	N4	N-0-S	W-0-E	N－6.3°－E	091	-207921.526	-12122.557
T11	（中・南）	N-0-S	E-41		092	-207925.899	-12081.551
T12	N4	-	-	-	110	-207864.708	-12113.090
T13	（北）	-	-		109	-207818.073	-12108.115
T14	N5	S-105	W-0-E	N－6.3°－E	K-68	-207997.117	-12380.290
T15	N6	N-0-S	W-0-E		K-65	-207892.212	-12369.101
T16	N9	N-0-S	E-178		K-64	-207910.878	-12194.093
T17	N8	N-0-S	W101	N－13.2°－W	131	-207867.466	-12356.947
T18		N-0-S	W-0-E		133	-207843.892	-12258.879

※方角は国家座標第Ｘ系における北方向を基準にしたときの局地座標系南北軸との角度。



第４図　遺跡遠景（南東から）



第５図　表土除去作業



第６図　発掘作業



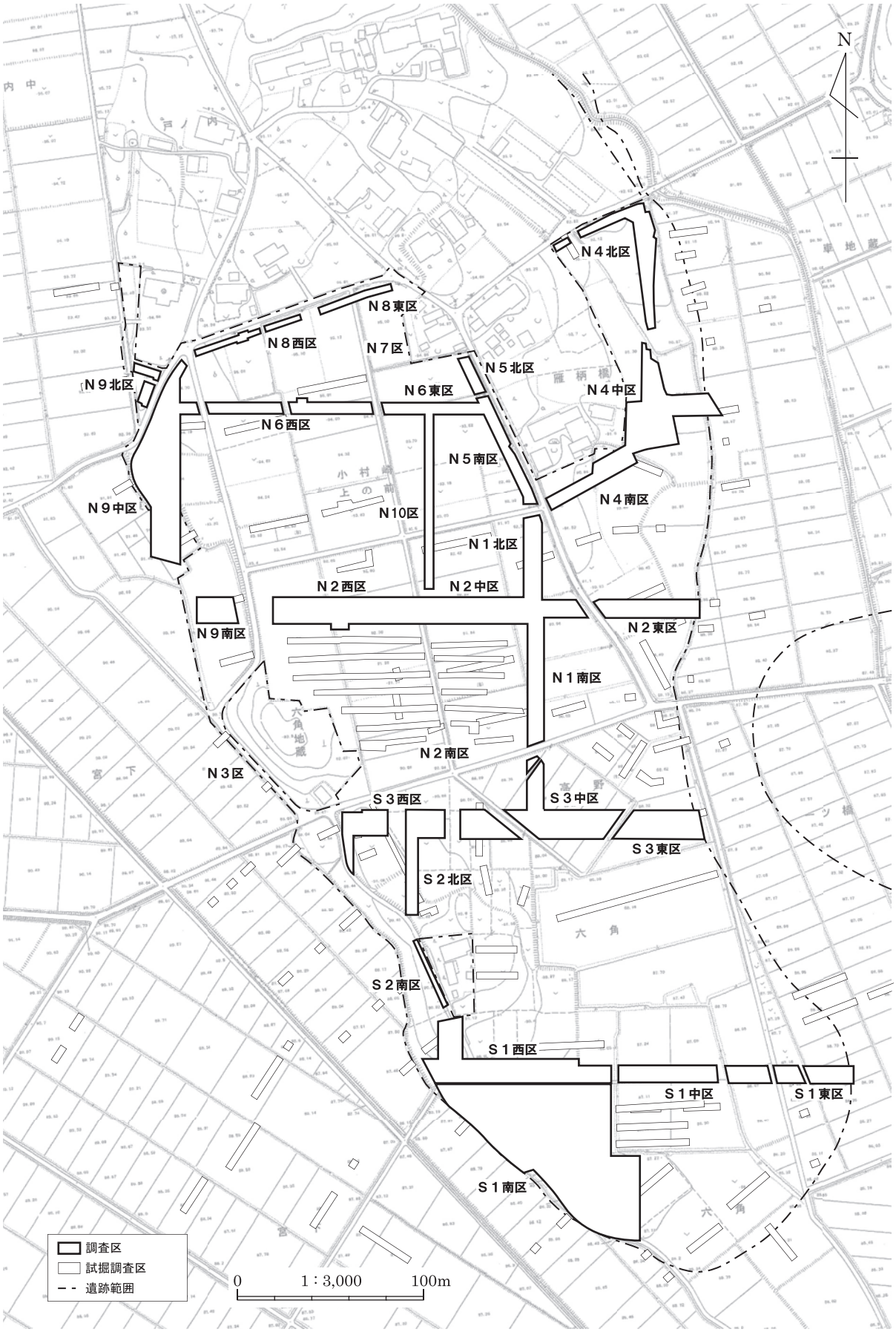
第７図　現地説明会



第８図　仙南地域の農業農村めぐり



第９図　整理作業


N
N４北区
N８東区
N８西区
N７区
N５北区
N９北区
N６東区
N４中区
N６西区
N５南区
N９中区
N４南区
N10区
N１北区
N２西区
N２中区
N９南区
N２東区
N１南区
N２南区
N３区
S３西区
S３中区
S３東区
S２北区
S２南区
S１西区
S１中区
S１東区
S１南区
調査区
試掘調査区
遺跡範囲
0
1：3,000
100m

第 10 図　調査区配置図

第４章　調査の結果

１．基本層序

調査区により立地条件と土層の堆積状況に違いが見られるが、基本層序はⅠ～Ⅶ層に大別される。Ⅰ層は表土ないしは現耕作土で、層厚は 10 ～ 20cm 程度である。Ⅱ層は旧表土ないしは旧耕作土で、層厚は 15 ～ 30cm 程度である。近代の陶磁器片などを含む。Ⅲ層は黒ボクと称される黒色火山灰土で、層厚は 20 ～ 40cm 程度である。縄文土器片などを含む。丘陵東斜面を中心に厚く堆積し、丘陵斜面の下部では複数の再堆積層が形成されている。Ⅳ層はⅢ層下部とⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は 20cm 程度である。Ⅴ層は黄褐色ローム層、Ⅵ層は白色粘土層、Ⅶ層は猿岩と称される凝灰質シルトで、川崎スコリア層に相当するとみられる。遺構はⅢ層、Ⅳ層、Ⅴ層上面で確認しているが、丘陵頂部から斜面上部にかけては削平などによりⅠ層ないしはⅡ層の直下がⅤ層となっている場合がある。このため、本来の遺構掘り込み面はすべてⅢ層上面であったと考えられる。

Ⅰ層：表土　　a：現耕作土　b：現水田耕作土　c：現代の盛土
Ⅱ層：旧表土・旧耕作土　（近代の陶磁器片を含む）
Ⅲ層：黒色火山灰土　　（斜面下部では複数の再堆積層を形成）
Ⅳ層：暗褐色シルト　　（Ⅲ層とⅤ層の漸移層）
Ⅴ層：黄褐色粘土　　（黄褐色ローム層）a：黄褐色シルト　b：黄褐色粘質シルト
Ⅵ層：白色粘土　　（水成堆積層）
Ⅶ層：凝灰質シルト　　（川崎スコリア層）

２．発見された遺構と遺物

確認した遺構は、竪穴住居跡 52 軒、掘立柱建物跡 29 棟、柱列跡 10 条、井戸跡 1 基、落し穴状土坑 39 基、土坑 71 基、大溝跡 6 条、溝跡 44 条、円形周溝跡 1 基、性格不明遺構 1 基、柱穴多数である。このうち、主体を占める竪穴住居跡には古墳時代前期のものと古墳時代後期～奈良・平安時代のものがある。落し穴状土坑は縄文時代のものと考えられる。掘立柱建物跡や土坑・溝跡などには中・近世以降や時期不明のものがある。

出土した遺物は、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器・ロクロ土師器・須恵器・鉄製品・石製品などである。また、表土および基本層から縄文・弥生時代の土器・石器、中・近世の陶磁器などが出土した。出土遺物の総量は遺物収納コンテナで約 35 箱分である。

以下、調査区ごとに主要な遺構と遺物の説明を行なう。なお、遺構の重複関係について、ＡよりＢが新しい場合「Ａ→Ｂ」、掘立柱建物跡などで重複関係にあるが新旧関係が不明な場合「Ａ－Ｂ」のように記載した。

（1）Ｓ１区

遺跡の立地する丘陵の南端部に位置する。東・南側はなだらかに傾斜して黒ボク土が厚く堆積するのに対し、西側は黄褐色ローム層ないしは白色粘土が露出し比較的急傾斜となる。東区、中区、西区、南区を設定して調査を行なった（第 11・14 図）。遺構は西区、南区の東向き斜面を中心に分布し、竪穴住居跡 12 軒、掘立柱建物跡 9 棟、柱列跡 1 条、落し穴状土坑 14 基、土坑 23 基、溝跡 5 条、性格不明遺構 1 基のほか、柱穴多数が確認された。以下、主要な遺構と遺物について説明する。

Ａ．竪穴住居跡

【SI1 竪穴住居跡】（第 12・13 図、図版 3- 7、 4- 1 ・ 2）

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SI9 →《SI1》

〔規模・形状〕西側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 1.2m 以上、南北約 3.5m の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：E‐4°‐N

〔壁面〕Ⅳ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から 10cm である。

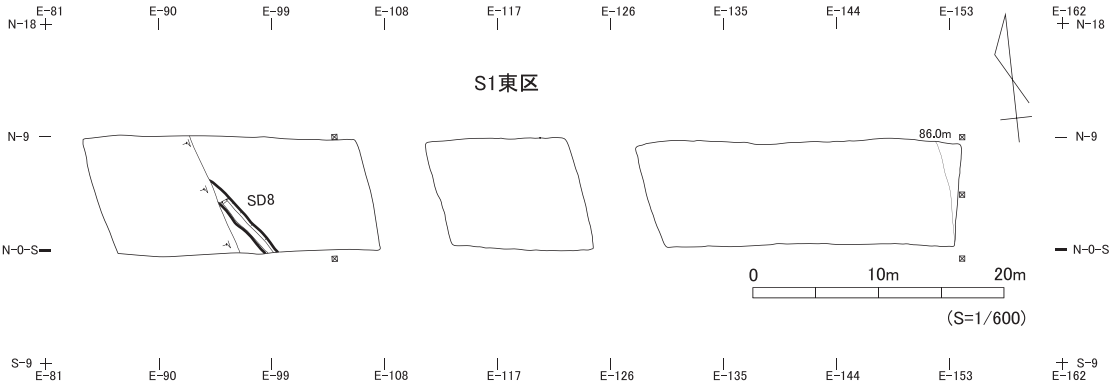
〔床面〕Ⅳ層を床面とし、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居東壁中央に設置されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ 80cm、幅 76cm で、焚口幅は 50cm である。燃焼部底面は幅 50cm、奥行 72cm で、床面より 5cm ほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ 70cm、幅 16cm、高さ 15cm、右側壁で長さ 66cm、幅 15cm、高さ 13cm が残存する。白色粘土と暗褐色シルトで構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。側壁先端には角柱状の凝灰岩切石が据えつけられており、焚口部を構成している。奥壁は住居東壁と一致する。

〔貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は 2 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土なしいしは自然堆積



第 11 図　Ｓ１東区遺構配置図

土である。

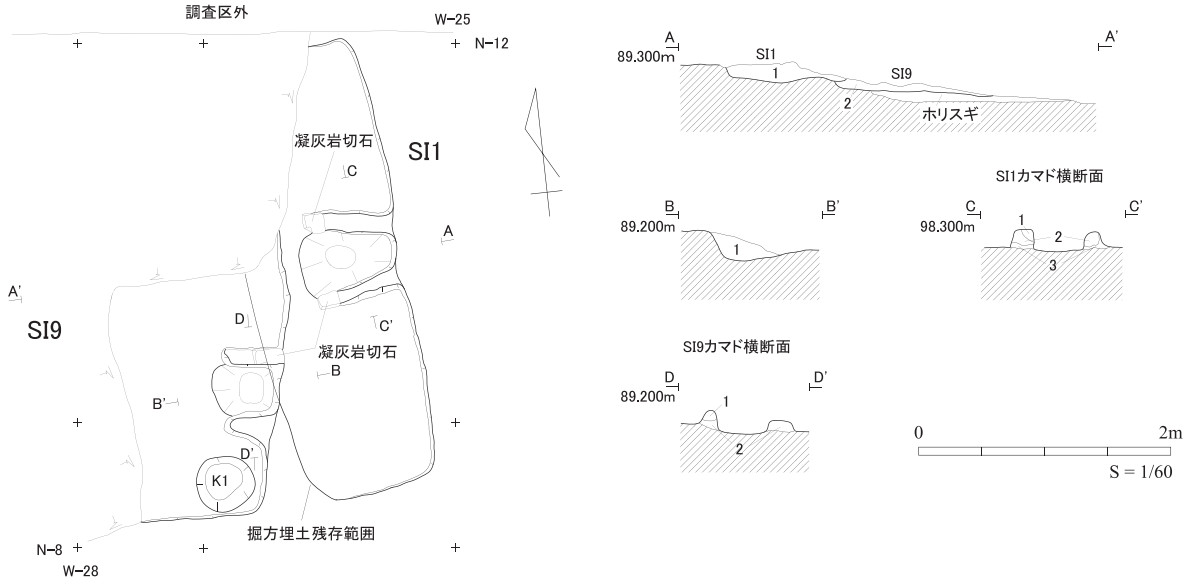
〔出土遺物〕床面よりロクロ調整の土師器坏（第 13 図１）・甕（第 13 図３）須恵器坏（第 13 図２）、が出土した。１は内面に黒色処理が施されている。１・３とも外底面に回転糸切痕がみられる。

このほか、床面よりロクロ調整で内面に黒色処理が施された土師器高台坏の破片が出土した。

【SI2 竪穴住居跡】（第 15・16 図、図版４- ３・４）

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし



SI1、9竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	5YR4/8 赤褐	シルト	焼土ブロックを多量に、暗褐色土ブロックを含む SI1堆積土
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を含む　SI9堆積土

SI9竪穴住居跡東西断面

No.	土色	土性	備考
1	5YR3/6 暗赤褐	シルト	焼土ブロックを多量に、暗褐色土ブロックを含む

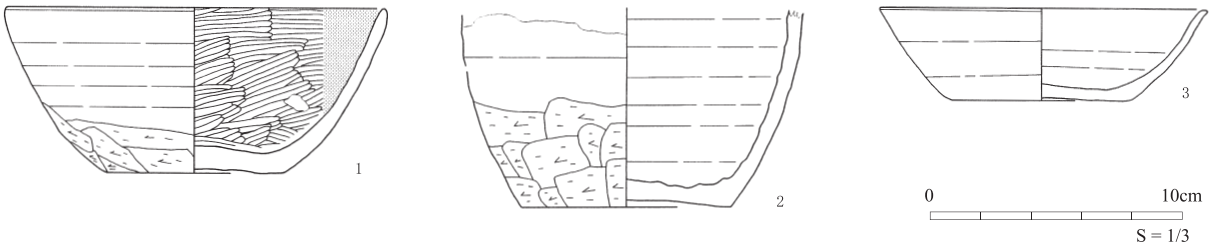
SI1竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	5YR3/4 暗赤褐	シルト	焼土粒を含む　被熱により赤色化　カマド側壁構築土
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、小礫を含む　カマド側壁構築土
3	10YR2/3 黒褐	シルト	カマド側壁構築土

SI9竪穴住居跡カマド横断面

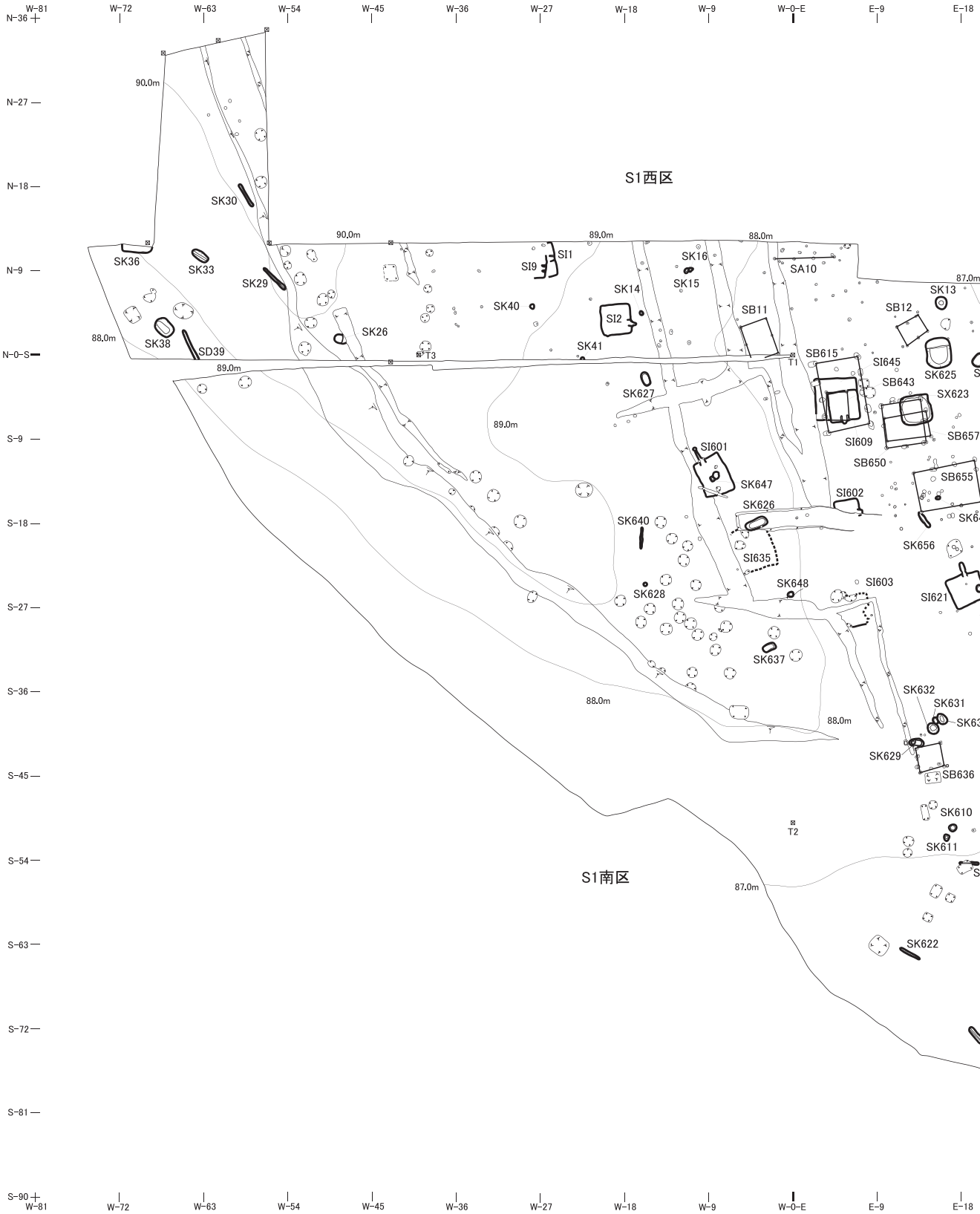
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	粘土ブロックを多量に含む　被熱により赤色化 カマド側壁構築土
2	10YR2/3 黒褐	シルト	カマド側壁構築土

第 12 図　SI1・SI9 竪穴住居跡

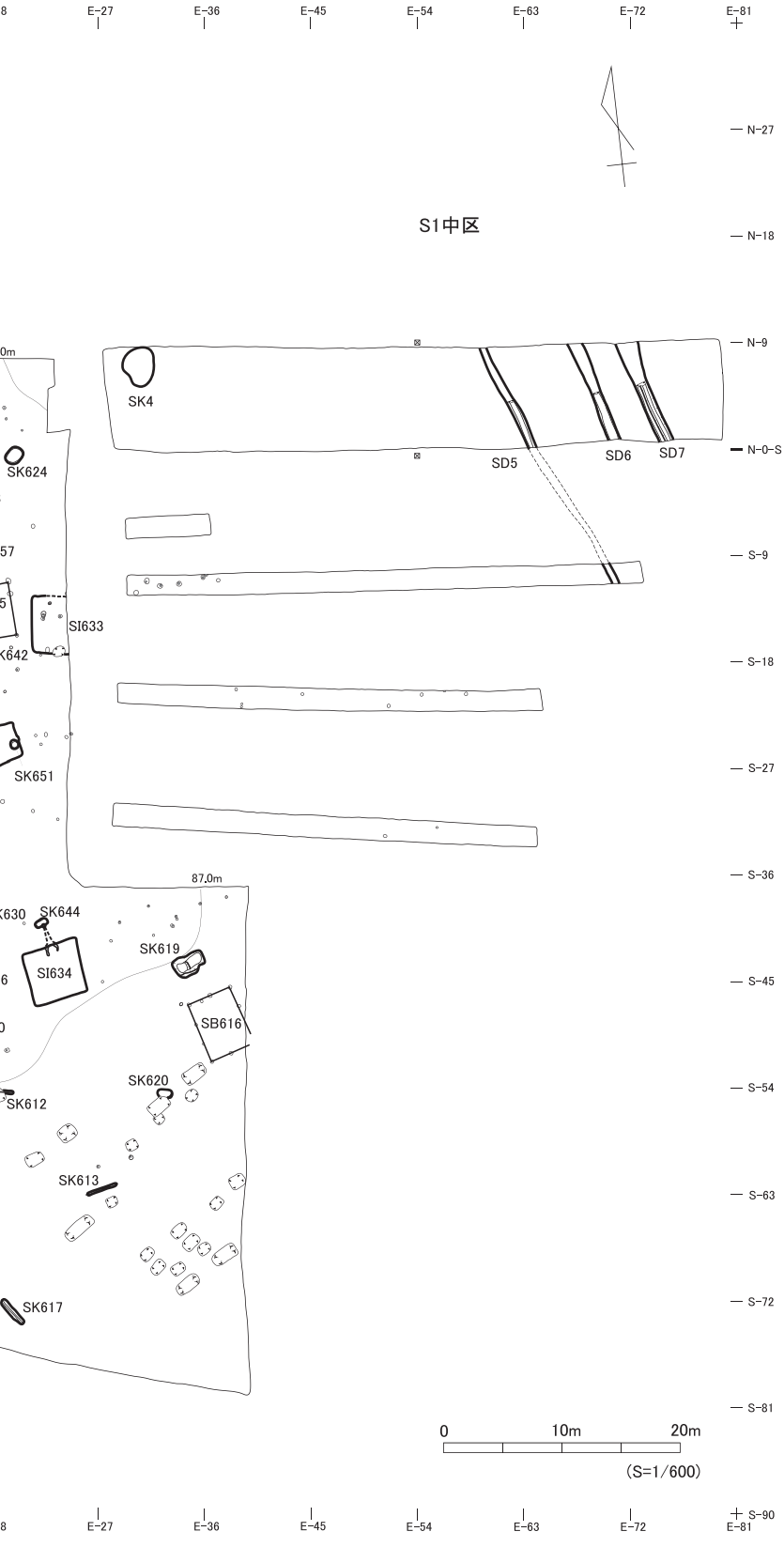


No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	床	ﾛｸﾛ土師器	坏	B	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ（底面）回転糸切→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	(15.0)	(7.0)	6.5	1/2	06092	28-1
2	確認面	ﾛｸﾛ土師器	甕	D	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ（底面）回転糸切　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	—	8.2	(7.8)	一部	06090	28-2
3	床	須恵器	坏	A	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ（底面）ﾍﾗｷﾘ無調整　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　外面に重ね焼きの痕跡	12.95	7.0	3.6	9/10	06002	28-3

第 13 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物



第 14 図　S 1 中・西・南区遺構配置図


E-27
E-36
E-45
E-54
E-63
E-72
E-81
N-27
S1中区
N-18
N-9
SK4
SD5
SD6
SD7
N-0-S
SK624
S-9
SI633
S-18
SK651
S-27
S-36
87.0m
SK644
SK619
SI634
S-45
SB616
SK620
SK612
S-54
SK613
S-63
SK617
S-72
S-81
0
10m
20m
(S=1/600)
S-90

〔規模・形状〕東西約 3.1m、南北約 3.2m の方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E－13°－S

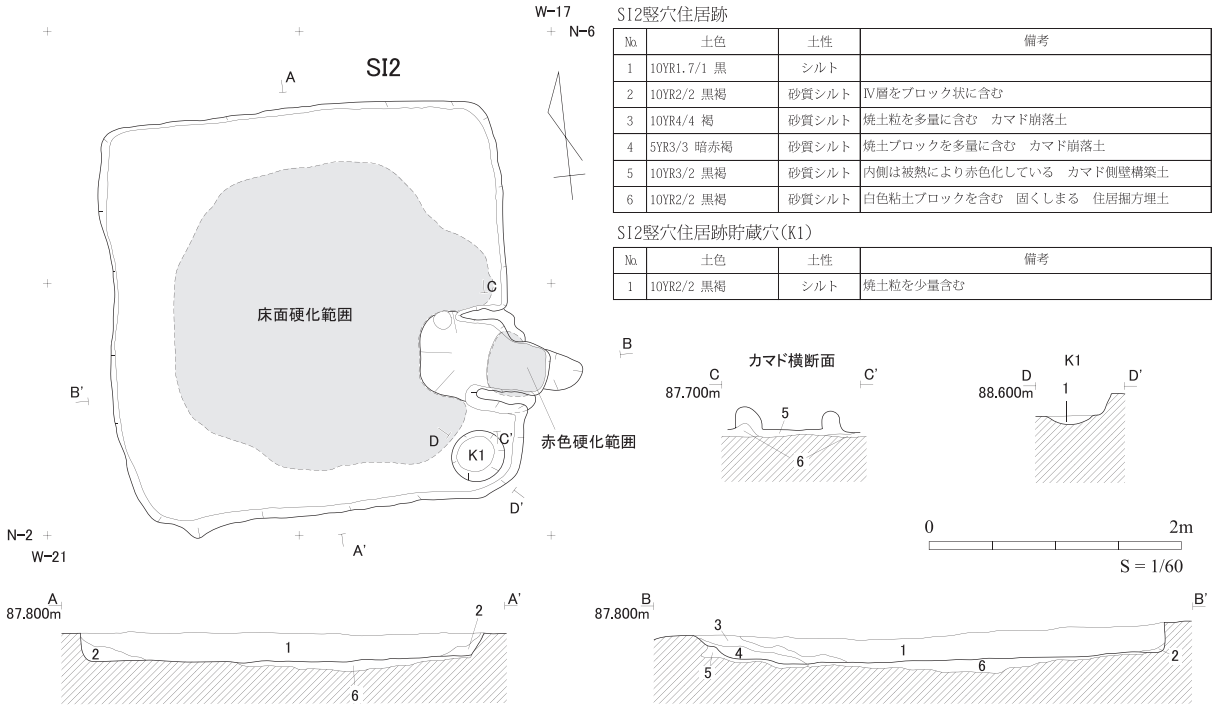
〔壁面〕Ⅳ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から 26cm である。

〔床面〕白色粘土ブロックを含む掘方埋土を床面とする。東に向かってわずかに傾斜し、カマド焚口から住居中央部にかけての東西約 2.5m、南北約 2.4m の範囲で床面の硬化が認められた。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕東壁中央南寄りに設置されている。燃焼部と煙道の一部が残存する。燃焼部は長さ 75cm、幅 85cm で、焚口幅は側壁先端間で 65cm である。燃焼部底面は幅 46cm、奥行 74cm で、奥壁から焚口に向かってスロープ状に傾斜する。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ 40cm、幅 15cm、高さ 24cm、右側壁で長さ 48cm、幅 18cm、高さ 20cm が残存する。白色粘土と黒褐色砂質シルトで構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。奥壁は住居東壁より 20cm ほど張り出し、奥壁上部からスロープ状に立ち上がる煙道の一部が残存する。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。平面形は直径 40 ～



SI2竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	シルト	
2	10YR2/2 黒褐	砂質シルト	Ⅳ層をブロック状に含む
3	10YR4/4 褐	砂質シルト	焼土粒を多量に含む　カマド崩落土
4	5YR3/3 暗赤褐	砂質シルト	焼土ブロックを多量に含む　カマド崩落土
5	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	内側は被熱により赤色化している　カマド側壁構築土
6	10YR2/2 黒褐	砂質シルト	白色粘土ブロックを含む　固くしまる　住居掘方埋土

SI2竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む

第 15 図　SI2 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆３層	須恵器	坏	C	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	14.4	8.6	3.7	1/5	06091	28-4

第 16 図　SI2 竪穴住居跡出土遺物

45cm の不整円形を呈し、深さは 6cm で底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 1 層で、自然堆積土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は 4 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居内堆積土より須恵器坏（第 16 図）、ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。須恵器坏は外底面に回転ヘラケズリ調整が、土師器坏は内面に黒色処理が施されている。

【SI9 竪穴住居跡】（第 12・17 図、図版 3 - 7 ）

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕《SI9》→ SI1

〔規模・形状〕北・西側が残存しないため全体の形状は不明である。東西 1.9m 以上、南北 1.3m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：E - 5° - S

〔壁面〕Ⅳ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から 10cm である。

〔床面〕Ⅳ層を床面とし、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居東壁の南寄りに設置されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ 55cm、幅 70cm で、焚口幅は側壁先端間で 55cm である。燃焼部底面は幅 34cm、奥行 50cm で、床面より 8cm ほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ 50cm、幅 15cm、高さ 15cm、右側壁で長さ 40cm、幅 32cm、高さ 8cm が残存する。黄褐色粘土ブロックを含む黒褐色シルトで構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。左側壁では角柱状の凝灰岩切石が骨材として使用されている。奥壁は住居東壁と一致する。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。平面形は長軸 46cm、短軸 40cm の楕円形を呈し、深さは 10cm で底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 1 層で、自然堆積土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は 1 層で、住居廃絶以降の自然崩落土なしいしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器甕（第 17 図 1 ～ 3）が出土した。いずれも口縁部ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリ調整が施されており、2 は底面に木葉痕がみられる。

【SI601 竪穴住居跡】（第 18・19・20 図、図版 4 - 5 ～ 7 ）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

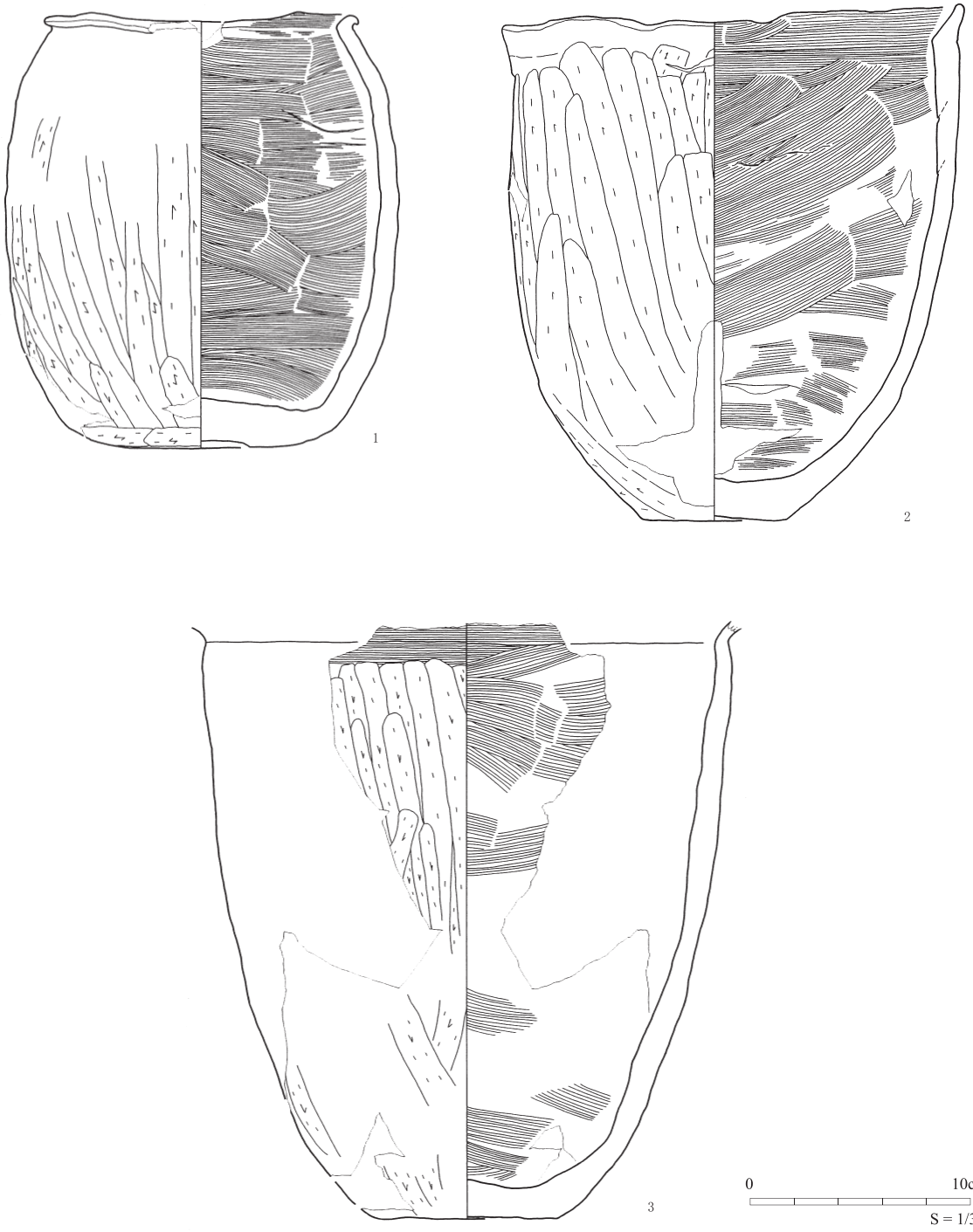
〔重複〕SK647 →《SI601》

〔規模・形状〕東西約 3.0m、南北約 4.3m の長方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N - 25° - W

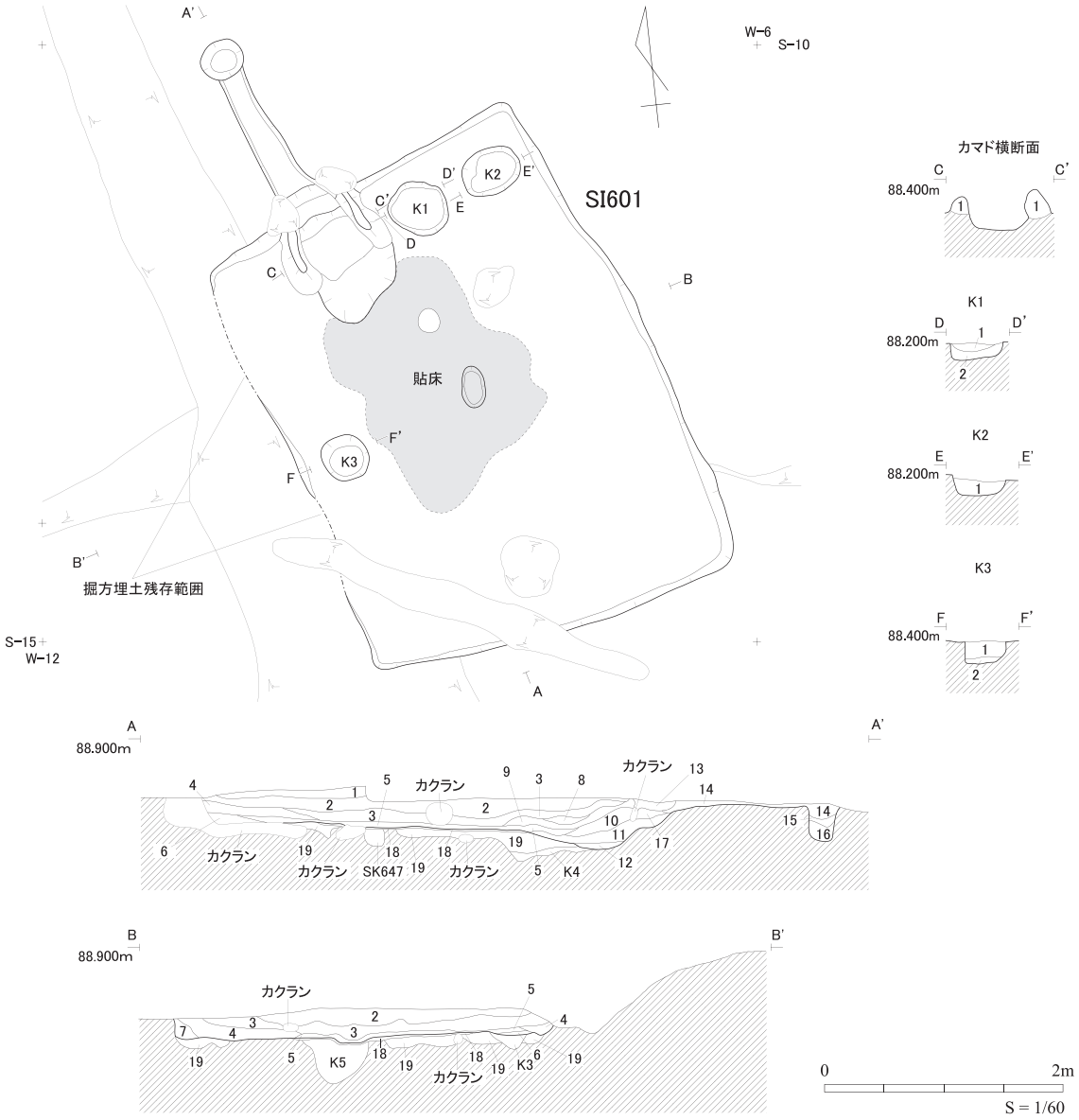
〔壁面〕Ⅳ層およびⅤ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から 27cm である。

〔床面〕Ⅴ層起源の黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を主体に、一部でⅤ層を床面とする。北に向かって僅かに傾斜する。中央部の東西約 1.4m、南北 1.8m の範囲に黒褐色シルトを主体とする硬



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	堆	土師器	甕	B 2	外：(胴) ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾅﾃﾞ	(14.1)	8.5	19.6	1/5	06094	28-7
2	堆	土師器	甕	E	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(胴) ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 木葉痕　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ	(20.7)	6.6	22.4	1/3	06093	28-5
3	堆	土師器	甕	E	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(胴) ｹｽﾞﾘ (底面) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾅﾃﾞ	—	7.9	(26.9)	1/5	06095	28-6

第 17 図　SI9 竪穴住居跡出土遺物



SI601竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	炭化物を少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物を少量含む
3	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を含む
4	10YR2/3 黒褐	シルト	
5	10YR2/3 黒褐	シルト	炭化物、焼土粒を多量に、黄褐色ローム粒を含む
6	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
7	10YR2/2 黒褐	シルト	
8	10YR2/3 黒褐	シルト	粘土粒、焼土粒を含む
9	10YR2/3 黒褐	シルト	粘土ブロックを多量に、焼土を含む　カマド崩落土
10	5YR3/6 暗褐	シルト	焼土粒を多量に含む　カマド崩落土
11	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を含む
12	10YR2/1 黒	シルト	
13	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む
14	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を含む
15	10YR2/1 黒	シルト	焼土粒を少量含む
16	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
17	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を多量に含む　カマド天井崩落土
18	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　固くしまる　住居貼床
19	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土

SI601竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	粘質シルト	白色粘土粒を少量含む　被熱により赤色化 カマド側壁構築土

SI601竪穴住居跡貯蔵穴（K1）

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR 2/3 極暗褐	シルト	焼土粒を多量に含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を少量、黄褐色ローム粒を含む

SI601竪穴住居跡貯蔵穴(K2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を含む　人為的埋土

SI601竪穴住居跡住居内土坑（K3）

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土を含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	焼土を多量に含む

第 18 図　SI601 竪穴住居跡 (1)

化層が形成されており、貼床と考えられる。

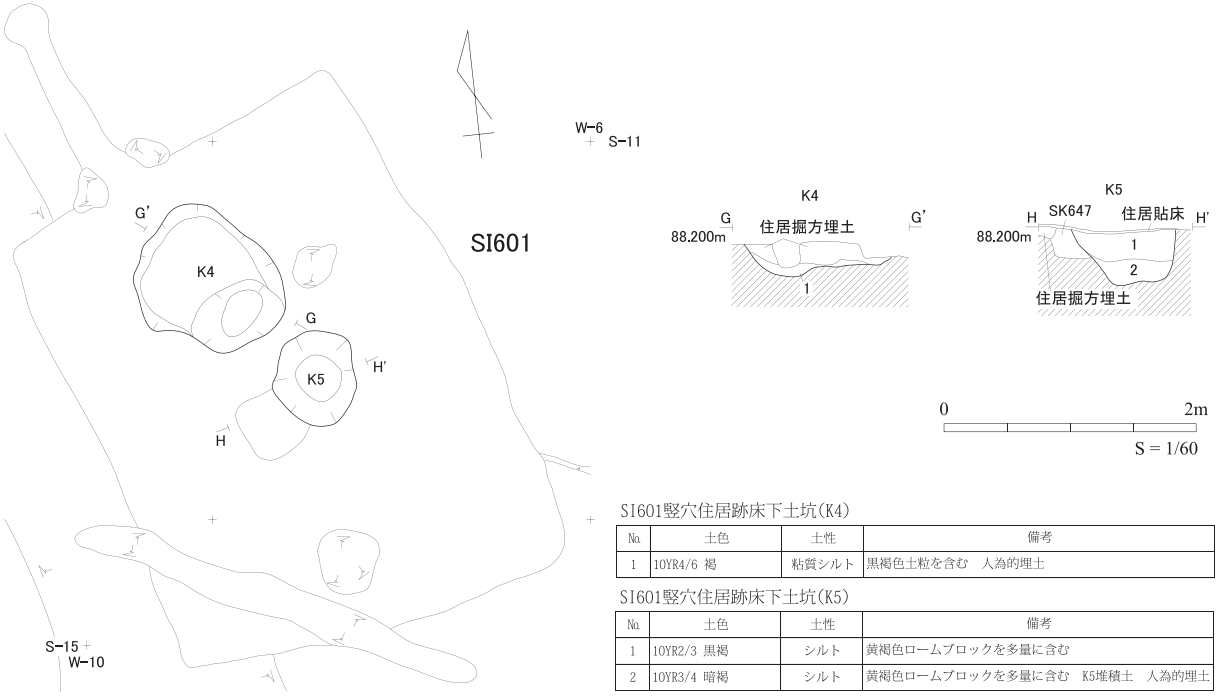
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居北壁中央やや西寄りに設置されている。燃焼部と煙道、煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ 120cm、幅 93cm で、焚口幅は側壁先端間で 70cm である。燃焼部底面は幅 48cm、奥行 84cm で、床面より 10cm ほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化はみられない。側壁は左側壁で長さ 65cm、幅 26cm、高さ 14cm、右側壁で長さ 58cm、幅 20cm、高さ 25cm が残存する。黄褐色ロームで構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁上部には山形の天井部が原形を留めたまま落ち込んでいる状況が確認された。奥壁は住居の北壁より 15cm ほど張り出し、奥壁から北側へ延びる煙道は長さ 140cm で、幅 20 ～ 30cm、深さ約 2 ～ 9cm が残存する。底面は奥壁との接続部からスロープ状に立ち上がり、中ほどから先はほぼ平坦である。煙道の先端部には長軸 38cm、短軸 30cm、深さ 32cm の煙出しピットが確認された。

〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑 2 基 (K1、K2) が確認された。K1 は長軸 50cm、短軸 44cm、深さ 12cm、K2 は長軸 50cm、短軸 40cm、深さ 17cm である。いずれも平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。いずれも床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。K1 の堆積土は 2 層に細分され、黄褐色ローム・焼土粒を含む暗褐色・極暗褐色シルトで自然堆積土と考えられる。K2 の堆積土は 1 層で黄褐色ロームブロックと焼土粒を含む暗褐色シルトである。K2 の堆積土は人為的埋土の可能性が高く、住居廃絶時には K1 のみが開口していたと考えられる。

〔その他〕住居西壁際中央部の床面で土坑 1 基 (K3) を確認した。径 40cm の不整円形を呈し、深さ 18cm で断面形は逆台形を呈する。

〔床下土坑〕住居貼床の直下で土坑 2 基 (K4、K5) を確認した。K4 は住居北側中央部で確認された。平面形は長軸 120cm、短軸 90cm の不整楕円形を呈する。断面形は底面に段をもつ逆台形を呈し、



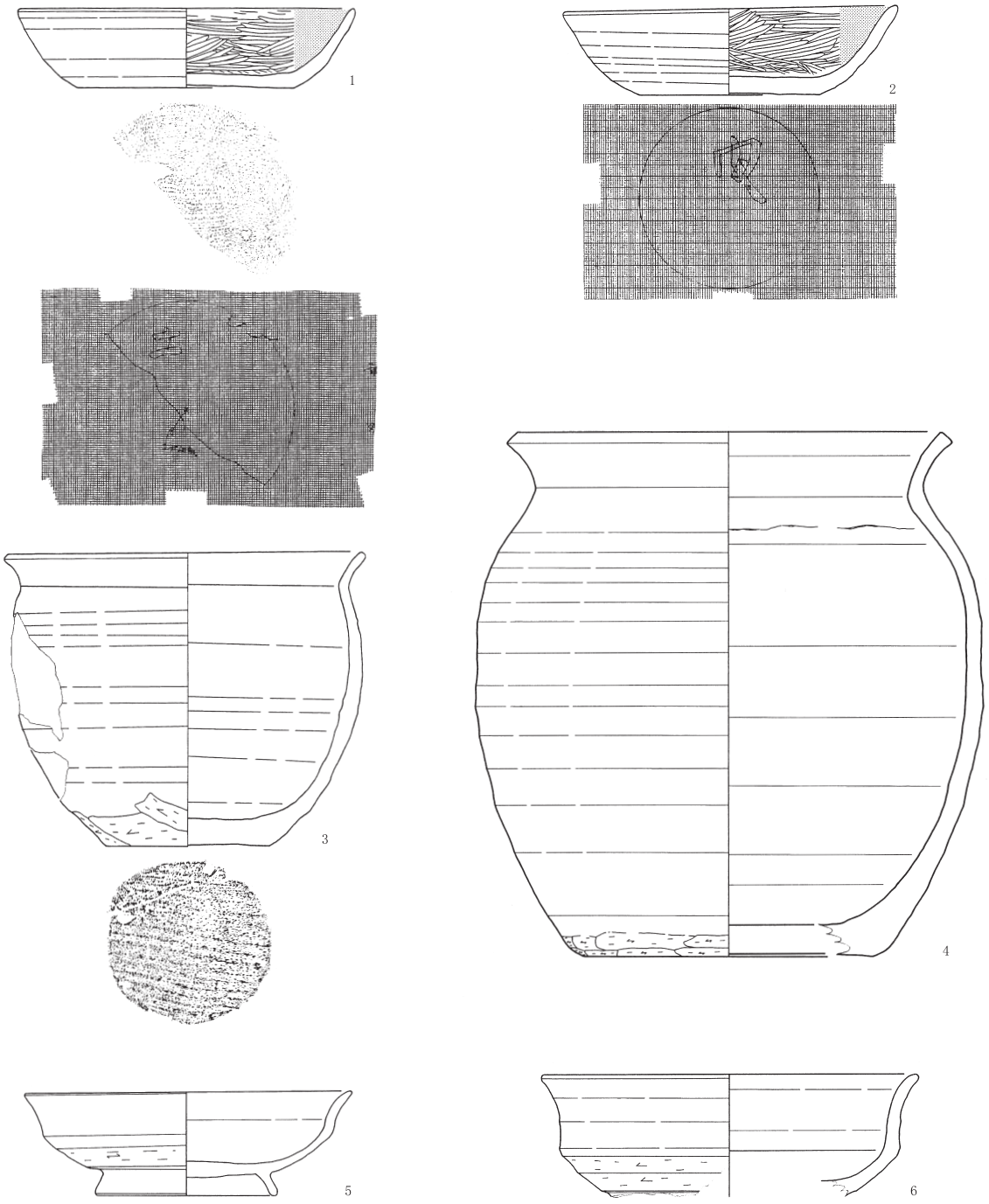
SI601竪穴住居跡床下土坑(K4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐	粘質シルト	黒褐色土粒を含む　人為的埋土

SI601竪穴住居跡床下土坑(K5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　K5堆積土　人為的埋土

第 19 図　SI601 竪穴住居跡 (2)



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆	ﾛｸﾛ土師器	坏	D	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (底面) 静止糸切→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理 外底面に墨書「土」	(15.2)	(9.7)	(3.65)	1/4	06013	29-2
2	堆	ﾛｸﾛ土師器	坏	E	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (底面) 切り離し不明→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理　外底面に墨書「内」	15.0	8.1	3.9	5/6	06010	29-1
3	ｶﾏﾄﾞ崩	ﾛｸﾛ土師器	甕	A	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 切り離し不明→ (底面) 網代痕？　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	15.4	7.0	12.55	2/3	06099	29-4
4	堆下層	ﾛｸﾛ土師器	甕	B	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 切り離し不明→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	(18.0)	(13.0)	23.7	1/3	06096	29-3
5	ｶﾏﾄﾞ崩	須恵器	高台坏	A	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 切り離し不明→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	14.65	8.2	4.65	9/10	06008	29-5
6	堆	須恵器	高台坏	A	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	(16.8)	—	(5.5)	一部	06097	—

第 20 図　SI601 竪穴住居跡出土遺物

深さ 31cm である。K5 は住居中央部で確認された。平面形が長軸 72cm、短軸 60cm の楕円形で、断面形は深さ 40cm の U 字状を呈する。埋土はいずれも住居掘方埋土に類似する人為堆積土である。K5 の上面に床面の沈下が観察される。

〔堆積土〕住居内堆積土は 20 層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕カマド内堆積土より須恵器高台坏（第 20 図５）、ロクロ調整の土師器甕（第 20 図３）が、堆積土より須恵器高台坏（第 20 図６）、ロクロ調整の土師器坏（第 20 図１・２）・甕（第 20 図４）・砥石（第 188 図１）が出土した。３・４はいずれも外底面に回転ヘラケズリ調整が施されている。１・２はいずれも内面に黒色処理が施されており、１は外底面に静止糸切痕がみられる。また、外底面に１は「土」、２は「内」の墨書がみられる。５は外底面に網代痕がみられる。

このほか、カマド崩落土よりロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。外面に回転ハケメ調整が施されている。内外面とも強い被熱による剥落がみられ、カマドの構築材であった可能性がある。また、堆積土より土師器甕の破片と須恵器坏・甕の破片が出土した。土師器甕は外底面に木葉痕が、須恵器甕は内面に同心円状押さえ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。

【SI602 竪穴住居跡】（第 21・22 図、図版４- ８、５- １・２）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層およびⅣ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西約 2.6m、南北 2.2m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：E - 2° - N

〔壁面〕Ⅲ層およびⅣ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から 8cm である。

〔床面〕残存範囲の全面に黒色粘質シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。ほぼ平坦で、このうちカマド焚口から住居中央部にかけての東西約 2.0m、南北約 1.2m の範囲では、より顕著な硬化面が形成されている。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居東壁に設置されており、燃焼部のみが残存する。燃焼部は長さ 86cm、幅 80cm で、焚口幅は側壁先端間で 66cm である。燃焼部底面は幅 62cm、奥行 74cm で、床面より 7cm ほど皿状に窪んでいる。底面は被熱による若干の赤色化がみられる。側壁は住居東壁に設けられた張り出し部の内側に取り付けられており、左側壁で長さ 44cm、幅 16cm、高さ 12cm、右側壁で長さ 38cm、幅 13cm、高さ 6cm が残存する。白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁は住居の東壁より 25cm ほど張り出す。

〔貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は 4 層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より須恵器坏（第 22 図３）が、カマド内堆積土より非ロクロ調整の土師器鉢（第 22 図１）が、堆積土よりロクロ調整の土師器甕（第 22 図２）が出土した。１は外底面に木葉痕が、２は回転糸切痕がみられる。

このほか、住居掘方埋土・カマド内堆積土・住居内堆積土より土師器坏・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、土師器坏は外面に段を有し、内面に黒色処理が施されている。土師器甕は体部に縦位のハケメがみられ、頸部に段を有さないものである。

【SI603 竪穴住居跡】（第 23・24 図、図版 5 - 3 ・ 4 ）

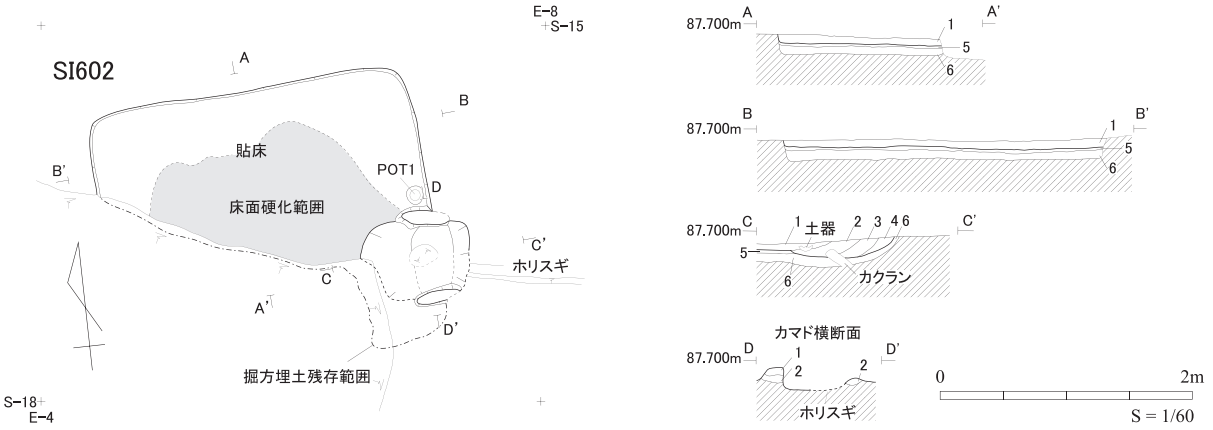
〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層およびⅣ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕残存状況が良好でないため全体の形状は不明であるが、南北約 3.3m、東西 3.4m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N - 0° - E

〔壁面〕南壁の一部のみ残存し、Ⅳ層を壁とする。残存壁高は床面から 4cm である。



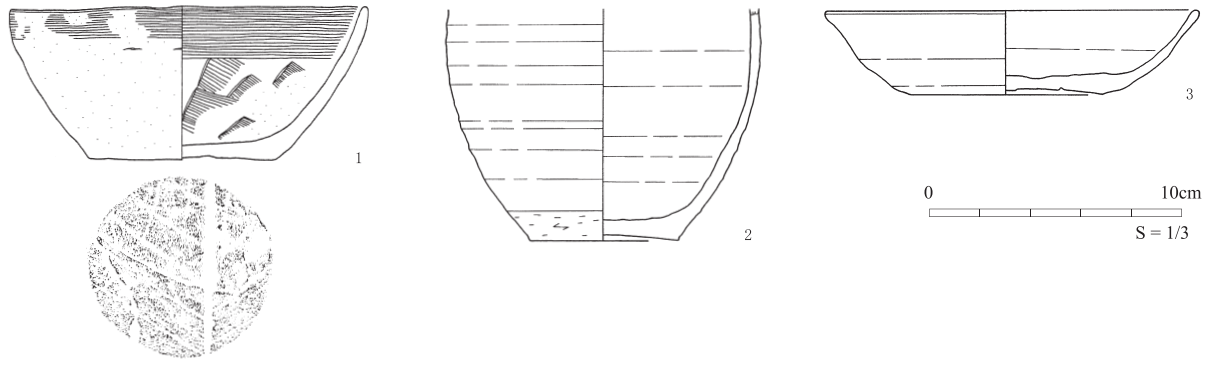
SI602竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	
2	7.5YR4/6 褐	粘質シルト	焼土ブロック・粒、炭化物粒を多量に、白色粘土を少量含む
3	7.5YR3/4 暗褐	粘質シルト	焼土ブロック・粒、炭化物粒を多量に含む
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	焼土ブロックを少量含む
5	10YR2/1 黒	粘質シルト	白色粘土粒を少量含む　住居貼床
6	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	住居掘方埋土

SI602竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR6/4 にぶい黄橙	粘土	焼土粒を少量含む　被熱により赤色化　カマド側壁構築土
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	白色粘土粒を少量、焼土粒を含む　カマド側壁構築土

第 21 図　SI602 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	ｶﾏﾄﾞ内堆	土師器	鉢	B	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (底面) 木葉痕　内：(体) ﾍﾗﾅﾃﾞ→(口) ﾖｺﾅﾃﾞ	(14.0)	7.4	7.5	2/3	06084	30-1
2	堆	ﾛｸﾛ土師器	甕	D	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 回転糸切→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	—	7.8	(9.1)	一部	06085	30-2
3	床	須恵器	坏	A	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (底面) ﾍﾗｷﾘ無調整　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	14.7	7.6	3.15	9/10	06001	30-3

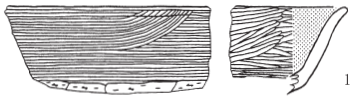
第 22 図　SI602 竪穴住居跡出土遺物



SI603竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	白色粘土粒を多量に含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を多量に含む
4	10YR3/2 黒褐	シルト	白色粘土粒を含む
5	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を多量に含む
6	10YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土ブロックを多量に、炭化物を少量含む　K1堆積土
7	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを含む　K1堆積土
8	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、 炭化物粒を多量に含む　カマド側壁構築土
9	10YR3/3 暗褐	シルト	住居貼床
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土

第 23 図　SI603 竪穴住居跡





No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆	土師器	坏	D 2	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	—	—	(2.95)	一部	06192	—

第 24 図　SI603 竪穴住居跡出土遺物

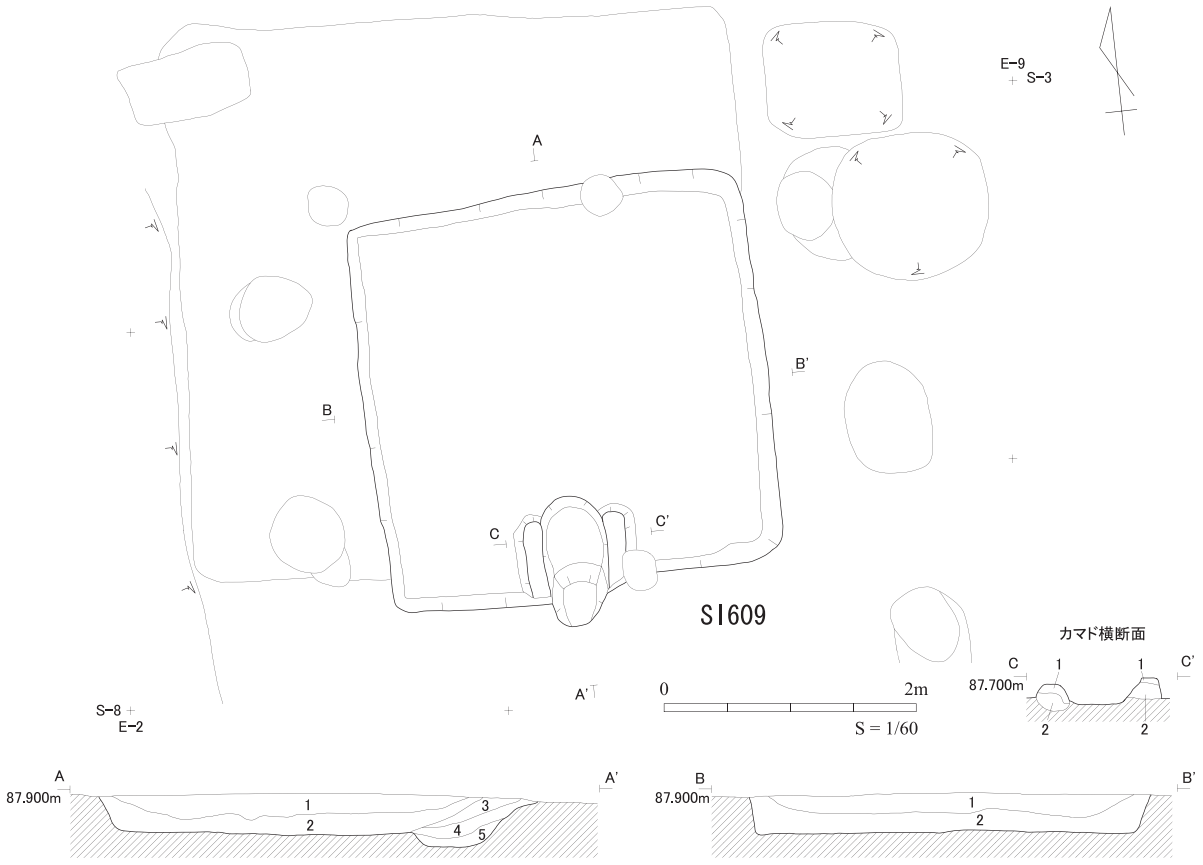
〔床面〕Ⅴ層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、中央部に黒褐色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし
〔カマド〕住居北壁の東寄りに設置されている。燃焼部底面と右側壁の基部、煙道の煙出しピットが残存する。燃焼部底面は幅 38cm、奥行 30cm の範囲で残存し、床面より 6cm ほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は右側の基部のみ残存する。掘方埋土を掘り込んで構築されており、床面より下の長さ 24cm、幅 10cm、深さ 8cm が残存する。構築土には白色粘土と黄褐色ロームを含む。奥壁および煙道は残存しないため不明であるが、燃焼部の北側 125cm の位置に長軸 45cm、短軸 34cm、深さ 27cm のピットが確認された。位置関係と埋土に白色粘土粒と黄褐色ロームブロックを多量に含むことから煙道ピットと考えられる。
〔貯蔵穴〕カマド右側の住居北東コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。南半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 45cm 以上、短軸 45cm の楕円形を呈していたとみられる。底面は皿状を呈し、深さ 15cm である。床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 2 層に細分され、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土と考えられる。
〔堆積土〕住居内堆積土は 7 層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。
〔出土遺物〕住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏の破片（第 24 図）が出土した。体部外面に稜を持ち、内面に黒色処理が施されている。
　このほか、貯蔵穴堆積土・住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

【SI609 竪穴住居跡】（第 25・26 図、図版 5 - 5 ・ 6 ）
〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。
〔重複〕SI645 →《SI609》→ SB643 → SB615
〔規模・形状〕東西約 3.1m、南北約 3.0m の方形を呈する。
〔方向〕カマド中軸線：S - 1° - E
〔壁面〕Ⅲ層およびⅣ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から 33cm である。
〔床面〕Ⅳ層およびⅤ層を床面とし、ほぼ平坦である。
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし
〔カマド〕住居南壁中央に設置されている。燃焼部のみ残存する。燃焼部は長さ 103cm、幅 96cm で、焚口幅は側壁先端間で 65cm である。燃焼部底面は幅 49cm、奥行 53cm で、床面より 10cm ほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化は認められない。側壁は左側壁で長さ 62cm、幅 27cm、高さ 21cm、右側壁で長さ 66cm、幅 27cm、高さ 18cm が残存する。白色粘土と黄褐色ロームで構築されており、内側は被熱による若干の赤色化がみられる。奥壁は住居南壁より 20cm ほど張り出す。なお、燃焼部底面の窪みに 7 ～ 10cm の厚さで焼土を主体とする堆積層がみられ、カマド機能時の堆積土と考えられる。
〔貯蔵穴〕なし
〔堆積土〕住居内堆積土は 5 層に細分される。1 ～ 4 層は住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆

積土、５層はカマド機能時の堆積土である。

〔出土遺物〕住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器鉢（第 26 図）が出土した。内面にヘラミガキが施され、外底面に木葉痕がみられる。

このほか、床面・カマド構築土・住居掘方埋土・住居内堆積土よりロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。土師器坏は内面に黒色処理が施され、外底面に回転ヘラ切痕がみられる。土師器甕は外底面に回転糸切痕がみられる。



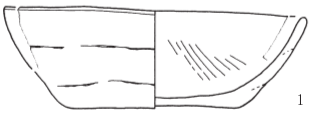
SI609竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土ブロック・粒、炭化物粒を少量含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック・粒を含む カマド崩落土
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック・粒を多量に含む カマド崩落土
5	2.5YR5/4 にぶい赤褐	シルト	焼土を主体とする　黒褐色土ブロックを含む カマド機能時堆積土

SI609竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を少量、黄褐色ロームブロックを含む 被熱により赤色化　カマド側壁構築土
2	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土	黄褐色ロームを主体とする　焼土粒を少量含む カマド側壁構築土

第 25 図　SI609 竪穴住居跡





No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	堆２層	土師器	鉢	B	外：ﾅﾃﾞ（底面）木葉痕　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ	11.8	6.6	4.0	2/3	06098	30-4

第 26 図　SI609 竪穴住居跡出土遺物

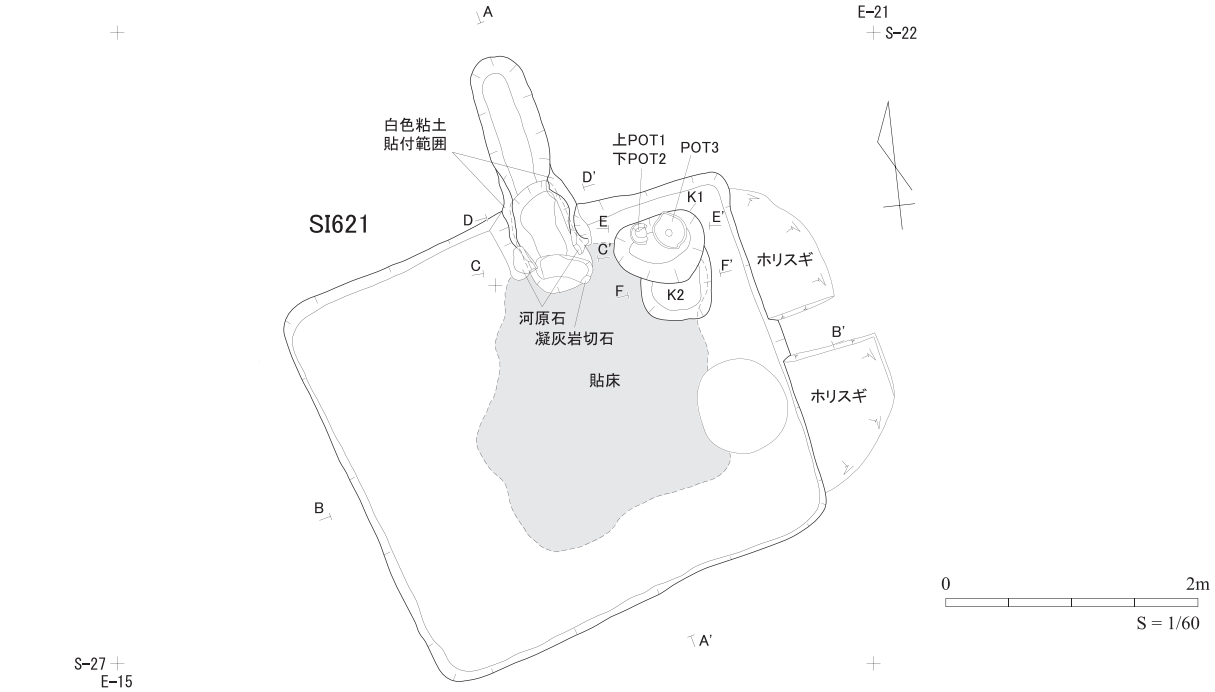
【SI621 竪穴住居跡】（第 27・28 図、図版 5 - 7 ・ 8 、 6 - 1 ）

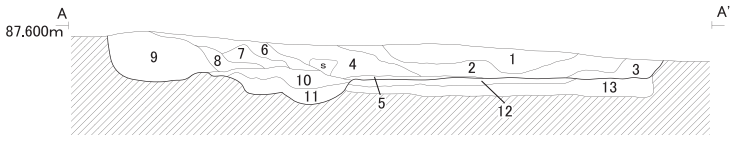
〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層およびⅣ層で確認した。

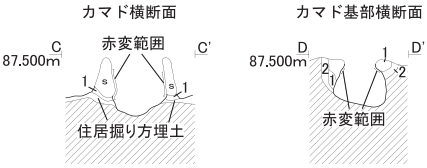
〔重複〕《SI621》→ SK651

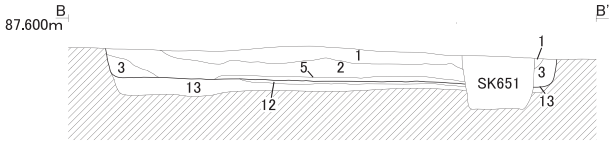
〔規模・形状〕東西 3.6m、南北 3.1m の方形を呈する。

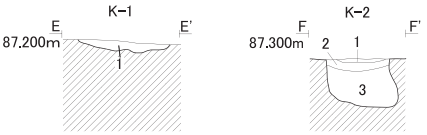
〔方向〕カマド中軸線：N - 13° - W











SI621竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む
2	5YR3/6 暗褐	シルト	焼土粒を少量含む
3	7.5YR2/1 黒	シルト	
4	10YR2/1 黒	シルト	白色粘土粒、焼土粒を含む
5	10YR2/1 黒	シルト	焼土ブロックを多量に含む
6	7.5YR3/4 暗褐	シルト	白色粘土ブロック、焼土粒を多量に含む
7	5YR2/4 極暗赤褐	シルト	白色粘土ブロック、焼土粒を多量に含む。
8	7.5YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土粒、焼土粒を多量に含む
9	5YR3/6 暗赤褐	シルト	焼土主体　白色粘土ブロック、暗褐色土ブロックを含む
10	7.5YR2/2 黒褐	シルト	焼土を多量に含む
11	7.5YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む
12	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　住居貼床
13	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　住居掘方埋土

SI621竪穴住居跡カマド横断面(C - C')

No.	土色	土性	備考
1	5YR3/6 暗褐	シルト	白色粘土、焼土を多量に含む

SI621竪穴住居跡カマド基部横断面(D - D')

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土	焼土粒を少量含む　カマド側壁構築土
2	10YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロックを多量に含む カマド側壁構築土

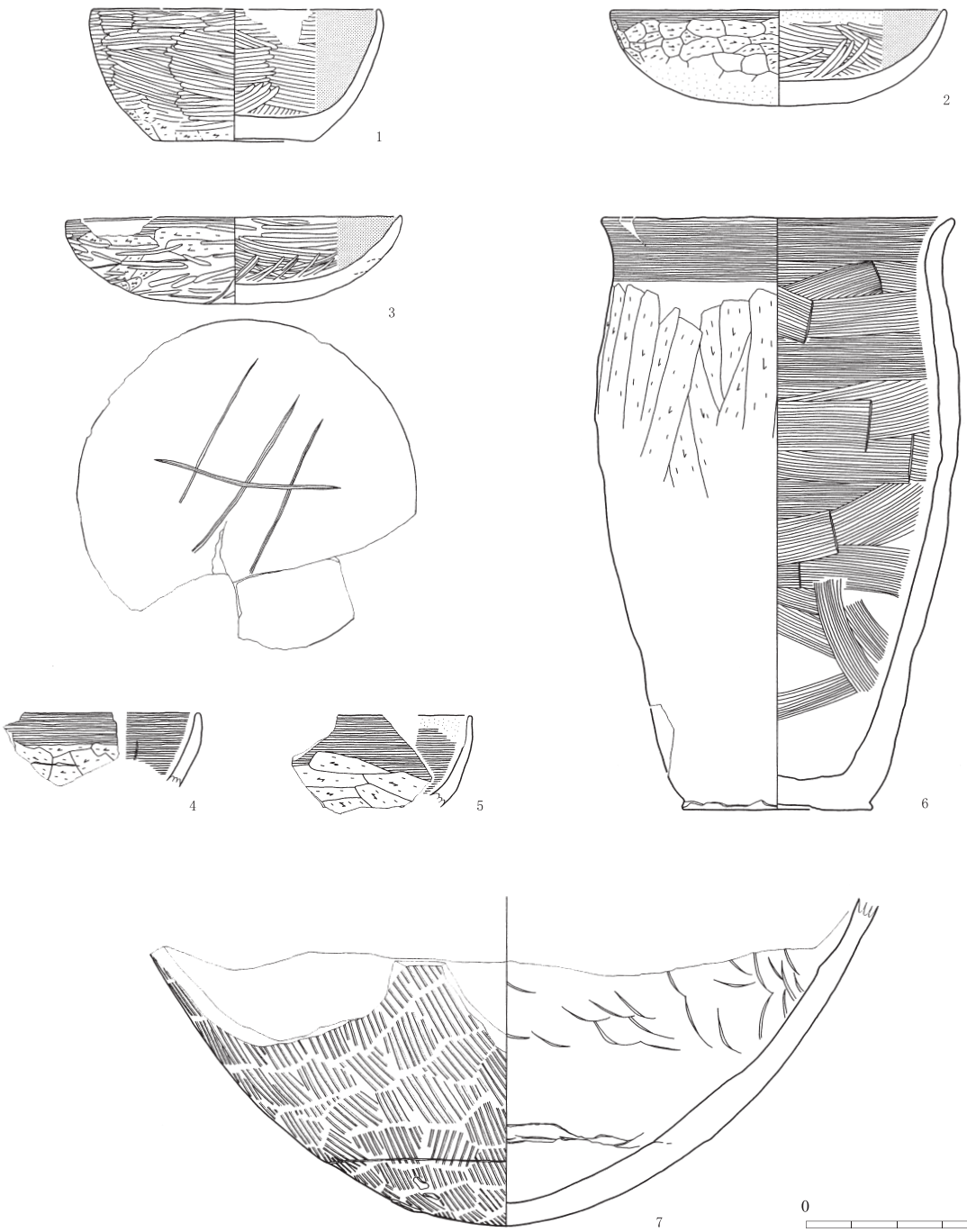
SI621竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロックを多量に含む　人為的埋土

SI621竪穴住居跡(K2)

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR1.7/1 黒	シルト	暗褐色土ブロックを少量含む　人為的埋土
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　人為的埋土
3	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　人為的埋土

第 27 図　SI621 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	床	土師器	坏	F	外：(体下部) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→(口～体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ (底面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理 (底面井桁状)	(12.9)	7.0	5.8	2/5	06016	30-5
2	床 POT1	土師器	坏	E 1	外：(口～体) ﾖｺﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理　外面摩滅、内面口縁部磨滅	14.6	4.2	—	3/5	06015	30-6
3	床	土師器	坏	E 2	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(口～底) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理　外底面にﾍﾗ書	14.7	—	3.8	4/5	06011	30-7
4	堆	土師器	坏	I ?	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ	—	—	(3.2)	一部	06081	—
5	堆	土師器	坏	I ?	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ	—	—	(4.3)	一部	06082	—
6	床	土師器	甕	D 2	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ｹｽﾞﾘ (底面) 木葉痕　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ	(14.5)	8.3	26.0	1/3	06077	30-8
7	床	須恵器	甕	C	外：平行ﾀﾀｷ　内：無文ｵｻｴ具痕　内外面に接合痕	—	—	(31.85)	一部	06014	31-1

第 28 図　SI621 竪穴住居跡出土遺物

〔壁面〕Ⅲ層およびⅣ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から 27cm である。
〔床面〕黄褐色ロームをわずかに粒状に含む掘方埋土を床面としている。西側に向かってわずかに傾斜し、カマド焚口から中央部にかけての東西約 2.0m、南北約 2.2m の範囲に黒色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし
〔カマド〕住居北壁の中央やや東寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存する。燃焼部は長さ 90cm、幅 72cm で、焚口幅は 35cm である。燃焼部底面は幅 45cm、奥行 88cm で、床面より 10cm ほど皿状に窪んでいる。底面に被熱による赤色化はみられない。南半部では燃焼部底面を切ってさらに 10cm ほど皿状に窪んでおり、住居廃絶時にカマド内の機能時堆積土を取り去った際の痕跡と考えられる。側壁は左側壁で長さ 53cm、幅 21cm、高さ 24cm、右側壁で 38cm、15cm、高さ 33cm が残存する。白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。側壁先端には扁平な河原石が据えつけられており、焚口部では長さ 45cm、幅 18cm、厚さ 10cm の角柱状の凝灰岩切石が確認された。凝灰岩切石は左右側壁先端の河原石の上に据えられ、焚口部を構成していたと考えられる。奥壁はカマド左側の住居北壁より 10cm、右側の住居北壁より 30cm ほど張り出し、奥壁から北側へ延びる煙道は 105cm で、幅 48cm、深さ 26 ～ 30cm が残存する。底面は奥壁との接続部からスロープ状に立ち上がり、中ほどで浅く落ち込む。煙道の先端部に煙出しピットは確認されない。
〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑 2 基 (K1、K2) が切り合い関係を持って確認された。いずれも床面から掘り込まれているが、K1 は K2 の埋め戻し後に掘り込まれている。K1 は長軸 75cm、短軸 55cm、深さ 8cm、K2 は長軸 70cm、短軸 56cm、深さ 38cm である。いずれも平面形は楕円形で、断面形は K1 が浅い皿状、K2 が U 字状を呈する。K1 の埋土は 1 層、K2 の埋土は 3 層に細分され、いずれも人為的埋土と考えられる。位置と形状からこれらの土坑は貯蔵穴と考えられるが、床面と同一面を形成する K1 埋土の上面には土師器坏と須恵器坏、須恵器甕が置かれた状態で確認されたことから、住居廃絶直前には K1・K2 とも機能していなかったと考えられる。
〔堆積土〕住居内堆積土は 11 層に細分される。いずれも住居廃絶時以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。
〔出土遺物〕床面より須恵器甕（第 28 図 7）、非ロクロ調整の土師器坏（第 28 図 1・2・3）・甕（第 28 図 6）が、住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏（第 28 図 4 ・ 5）が出土した。1 ・ 3 はカマド右脇の床面に重ね置かれた状態で、7 はその右側に置かれた状態で出土した。1 ～ 3 は丸底で体部外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。2 は内底面に井桁状のヘラミガキが施されている。4・5 は口縁部破片であるが、内外面とも横ナデ調整で内面に黒色処理が施されていない。6 は胴部にケズリ調整が施され、外底面に木葉痕がみられる。7 は内面に無文押さえ具痕、外面に平行タタキ目がみられる。

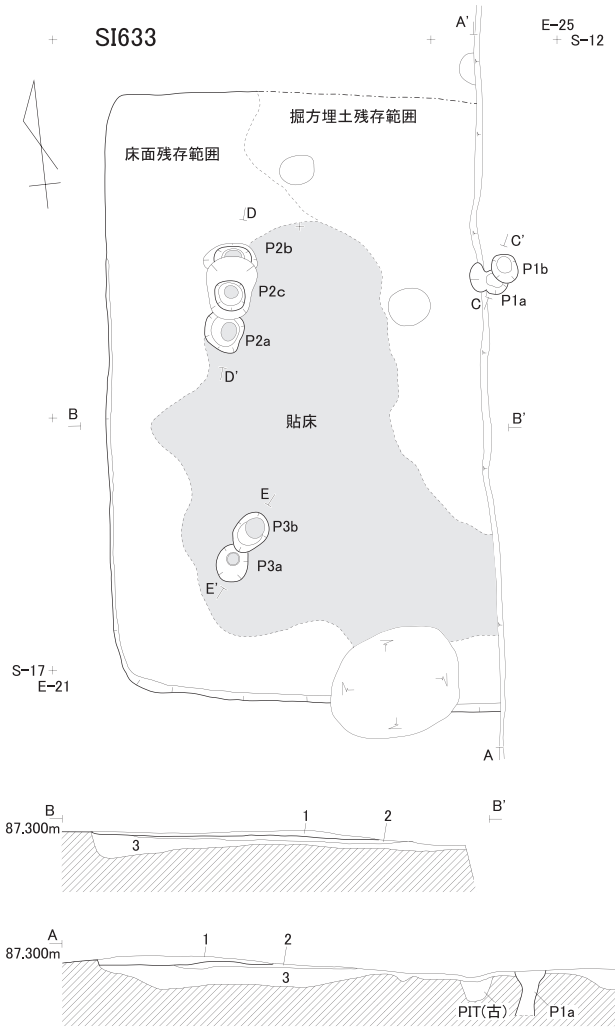
【SI633 竪穴住居跡】（第 29・30 図、図版 6 - 2）
〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。
〔重複〕なし

〔規模・形状〕東半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 3.8m 以上、南北約 4.6m の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N－5°－E

〔壁面〕Ⅲ層を壁とする。床面からやや外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南壁で床面から 9cm である。

〔床面〕黄褐色ロームをわずかに粒状に含む掘方埋土を床面としている。東側に向かってわずかに傾



SI633竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロックを多量に含む
2	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　住居貼床
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　住居掘方埋土

SI633竪穴住居跡(P1a・b)

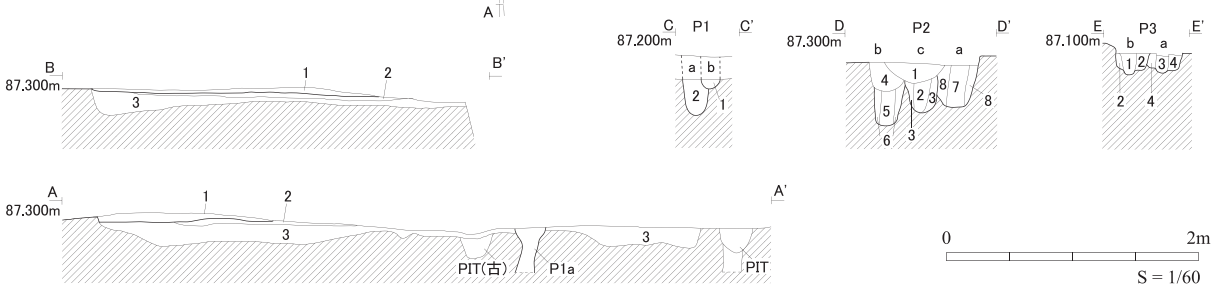
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	P1b柱抜き取り痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P1a柱抜き取り痕跡

SI633竪穴住居跡(P2a・b・c)

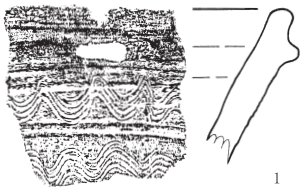
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	にぶい黄褐色土ブロック多量に含む　P2c柱抜き取り痕跡
2	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　P2c柱痕跡
3	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　P2c柱穴掘方埋土
4	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　P2b柱抜き取り痕跡
5	10YR1.7/1 黒	シルト	P2b柱痕跡
6	7.5YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P2b柱穴掘方埋土
7	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　P2a柱痕跡
8	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P2a柱穴掘方埋土

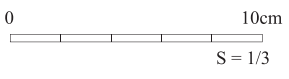
SI633竪穴住居跡(P3a・b)

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR1.7/1 黒	シルト	P3b柱痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	P3b柱穴掘方埋土
3	10YR1.7/1 黒	シルト	焼土粒を少量含む　P3a柱痕跡
4	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P3a柱穴掘方埋土



第 29 図　SI633 竪穴住居跡





No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	P4b 堆	須恵器	甕	A 1	外：櫛描波状文　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	—	—	(6.2)	一部	06080	31-2

第 30 図　SI633 竪穴住居跡出土遺物

斜し、中央部の東西 2.6m 以上、南北約 3.4m の範囲に黒色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕住居コーナー部より内側に 120 ～ 150cm の位置で柱穴 3 基 (P1a・b、P2a・b・c、P3a・b) を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。柱穴の切り合い関係から 2 ～ 3 時期の変遷がみとめられるが、対応関係については明らかにできなかった。柱穴の掘方の平面形は長軸 32 ～ 36cm、短軸 20 ～ 32cm の隅丸方形ないしは楕円形で、床面からの深さは 16 ～ 50cm である。P2・P3 ではいずれも平面形が直径 10 ～ 16cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは 16 ～ 50cm で、いずれも掘方底面に達する。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉・貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は 1 層で、住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕P2c 掘方埋土より須恵器甕の破片 (第 30 図) が出土した。外面に櫛描波状文がみられる。

このほか、P2c 抜き取り痕跡よりロクロ・非ロクロ調整の土師器坏の破片、P2a 掘方埋土より内外面にハケメのみられる土師器甕の破片、住居掘方埋土・住居内堆積土よりロクロ・非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。いずれも小破片であるが、非ロクロ調整の土師器坏は体部外面に段を持ち、内面に黒色処理が施されている。

【SI634 竪穴住居跡】(第 31・32・33 図、図版 6 - 3 ・ 4)

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SK644 →《SI634》

〔規模・形状〕東西約 4.7m、南北約 4.5m の方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N - 11° - W

〔壁面〕Ⅳ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から 12cm である。

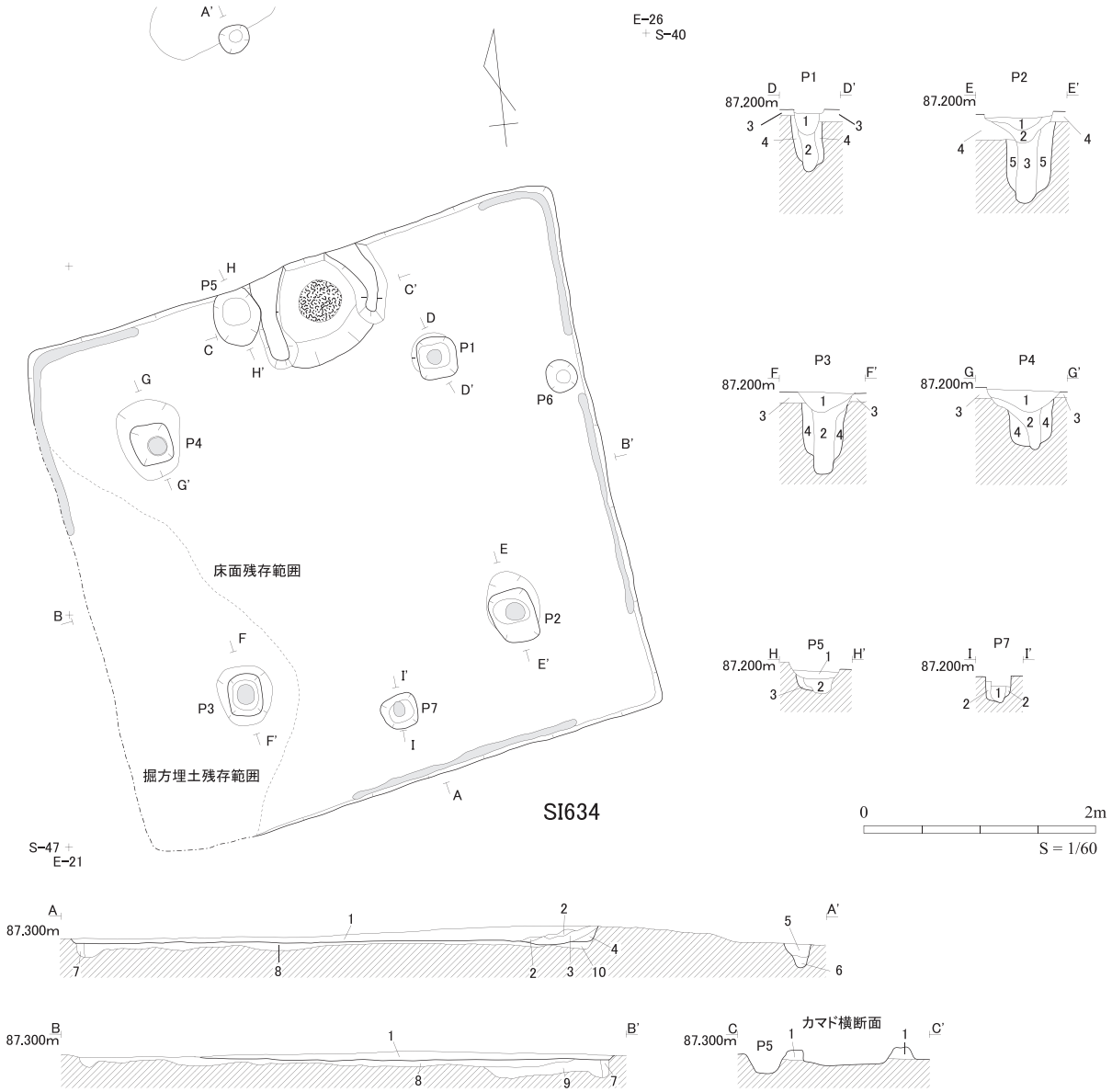
〔床面〕Ⅴ層起源の黄褐色ロームを多く含む掘方埋土を床としている。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕住居平面形の推定対角線上でコーナー部より内側に 100 ～ 150cm の位置で柱穴 4 基 (P1 ～ 4) を確認した。掘方の平面形は長軸 38 ～ 48cm、短軸 30 ～ 38cm の隅丸方形を呈し、床面からの深さは 48 ～ 72cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認し、抜き取り痕跡の底面で平面形が直径 13 ～ 18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の床面からの深さは 50 ～ 78cm で、掘方底面より 3 ～ 13cm ほど深く落ち込んでいる。

〔壁柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 22cm、下端幅 10cm、床面からの深さ 10cm で断面形が U 字形を呈する周溝がカマド部分と住居南東・南西コーナー部をのぞいて全周し、部分的に幅 8cm、深さ 12cm 程度の壁材痕跡が認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土と同一であることから、壁材の設置と床面の構築が同時に行なわれたと考えられる。

〔カマド〕住居北壁中央に設置されている。燃焼部と煙出しピットが残存する。燃焼部は 120cm、奥行 90cm が残存し、焚口幅は側壁先端間で 90cm である。燃焼部底面は幅 70cm、奥行 90cm が残存し、床面より 3cm ほど皿状に窪んでいる。側壁は左側壁で長さ 80cm、幅 18cm、高さ 8cm、右側壁で



SI634竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土、炭化物粒を少量、黄褐色ロームブロック・粒を含む
2	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土	被熱により赤色化　カマド天井崩落土
3	7.5YR3/2　黒褐	シルト	焼土ブロック・粒を多量に含む
4	7.5YR3/1 黒褐	シルト	焼土ブロック・粒を多量に含む
5	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
6	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
7	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　住居壁材痕跡
8	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土
9	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　住居掘方埋土

SI634竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土	焼土を少量含む　被熱により赤色化　カマド側壁構築土

SI634竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱抜き取り痕跡
3			住居掘方埋土
4	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI634竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱抜き取り痕跡
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱抜き取り痕跡
4			住居掘方埋土
5	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI634竪穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱抜き取り痕跡
3			住居掘方埋土
4	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI634竪穴住居跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱抜き取り痕跡
3			住居掘方埋土
4	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 31 図　SI634 竪穴住居跡 (1)

長さ 73cm、幅 30cm、高さ 10cm が残存する。白色粘土で構築されており、内側は被熱による赤色化がみられる。奥壁は住居北壁に一致する。煙道部は残存しないが、奥壁の北側 164cm の位置に長軸 25cm、短軸 20cm、深さ 22cm のピットが確認された。位置関係と埋土の特徴が住居内堆積土と類似することから煙道ピットと考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

〔その他〕カマド左側 (P5)、住居東壁やや北寄り (P6)、住居南側中央 (P7) で柱穴 3 基が確認された。P5 はカマド左側壁外側と住居北壁に接し、柱材の抜き取り痕跡が認められる。掘方の平面形は不明であるが、長軸 50cm、短軸 40cm の楕円形を呈する抜き取り痕跡の範囲に収まる。掘方の床面からの深さは 23cm である。柱痕跡は確認されない。P6 は住居東壁に接し、P6 の周囲で壁材痕跡が途切れる。掘方の平面形は直径 28cm の円形を呈し、床面からの深さは 22cm である。柱痕跡は確認されない。P7 は南側主柱穴 P2・3 の中間やや南寄りに立地する。掘方の平面形は一辺が 30cm の隅丸方形を呈し、床面からの深さは 22cm である。平面形が直径 13cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。いずれも床面から掘り込まれており、住居に伴うものと考えられるが、性格は不明である。

〔堆積土〕住居内堆積土は 6 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕カマド内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏（第 33 図）が出土した。体部外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

　このほか、住居掘方埋土・カマド内堆積土・住居内堆積土より土師器坏・甕、須恵器甕の破片が出土した。いずれも小破片であるが、土師器甕は外面にハケメがみられる。

【SI635 竪穴住居跡】（第 34 図、図版 6 - 5）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕残存状況が良好でないため全体の形状は不明だが、南北 4.4m 以上、東西 3.0m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕東辺：N － 12° － W

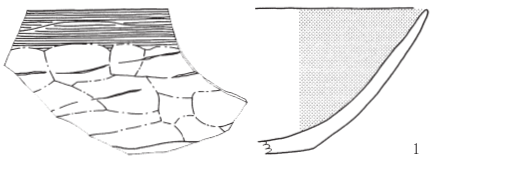
〔壁面・床面〕残存しない。

SI634竪穴住居跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き取り痕跡
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SI634竪穴住居跡(P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土



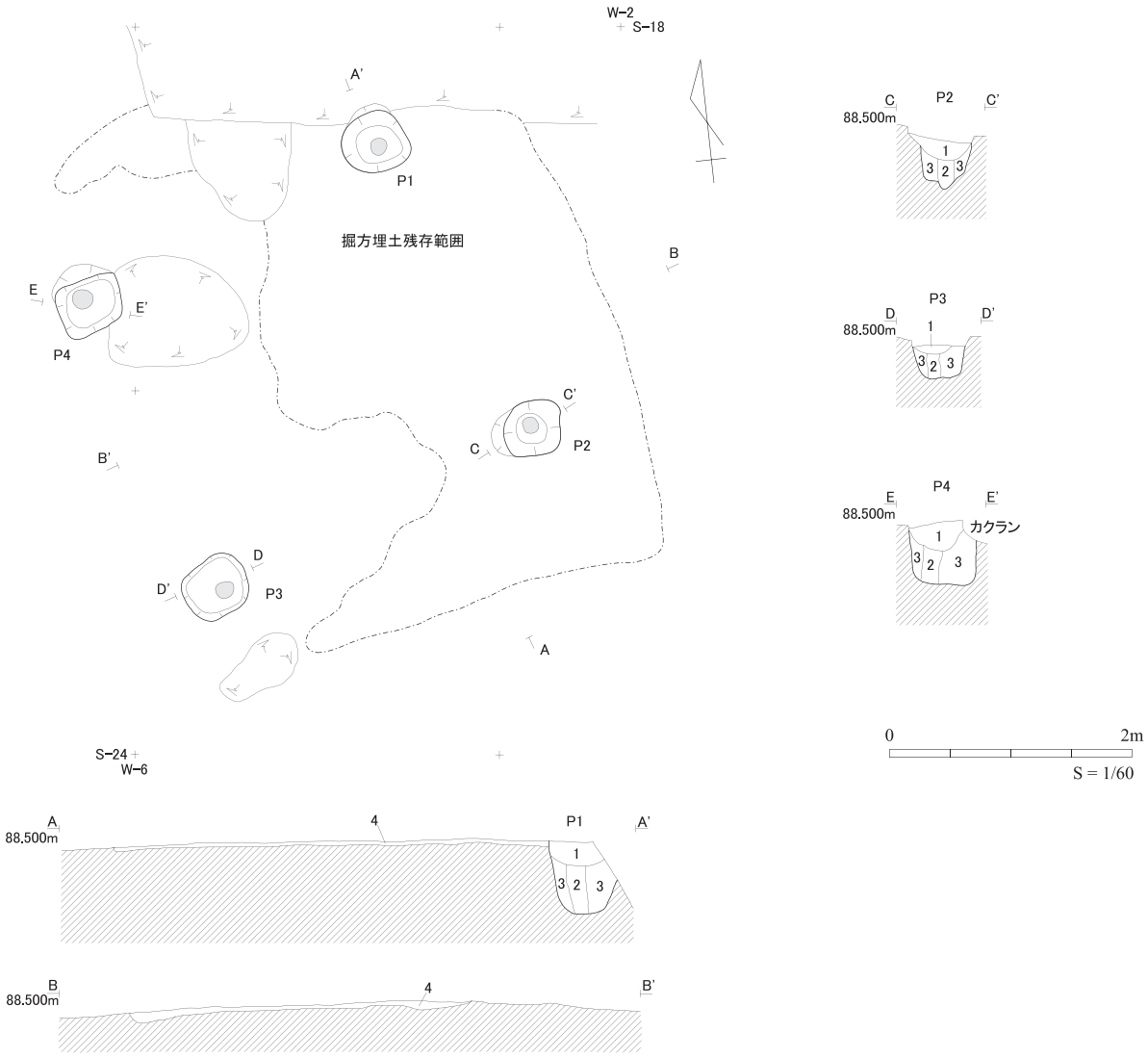
第 32 図　SI634 竪穴住居跡 (2)

No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	ｶﾏﾄﾞ内堆	土師器	坏	Ｅ３	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ｹｽﾞﾘ　内：(口～体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	—	—	(5.7)	一部	06190	—

第 33 図　SI634 竪穴住居跡出土遺物

〔主柱穴〕住居平面形の推定対角線上でコーナー部より内側に 100cm 程度の位置で柱穴 4 基 (P1 ～ P4) を確認した。掘方の平面形は長軸 45 ～ 50cm、短軸 40 ～ 45cm の隅丸方形を呈し、確認面からの深さは 30 ～ 55cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認し、抜き取り痕跡の底面で平面形が直径 10 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の床面からの深さは 30 ～ 55cm で、いずれも掘方底面に達する。P3 では柱痕跡直下の掘方底面に 10cm ほどの凝灰岩が据えられていた。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし



0 2m

S = 1/60

SI635竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を多量に含む P1柱抜き取り痕跡
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P1柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　P1柱穴掘方埋土
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む 住居掘方埋土

SI635竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック少量含む　柱穴掘方埋土

SI635竪穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を多量に含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
3	10YR4/6 褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SI635竪穴住居跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を多量に含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR4/6 褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

第 34 図　SI635 竪穴住居跡

〔カマド・炉・貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。いずれも小破片であるが、土師器坏は内面に黒色処理が施されている。土師器甕は体部にハケメがみられる。

【SI645 竪穴住居跡】（第 35 図、図版６- ６）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕《SI645》→ SI609 → SB643 → SB615

〔規模・形状〕SI609 との重複により南東部が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西約 4.2m、南北約 4.4m の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N - 2° - E

〔壁面〕Ⅲ層およびⅣ層を壁面とし、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から 8cm である。

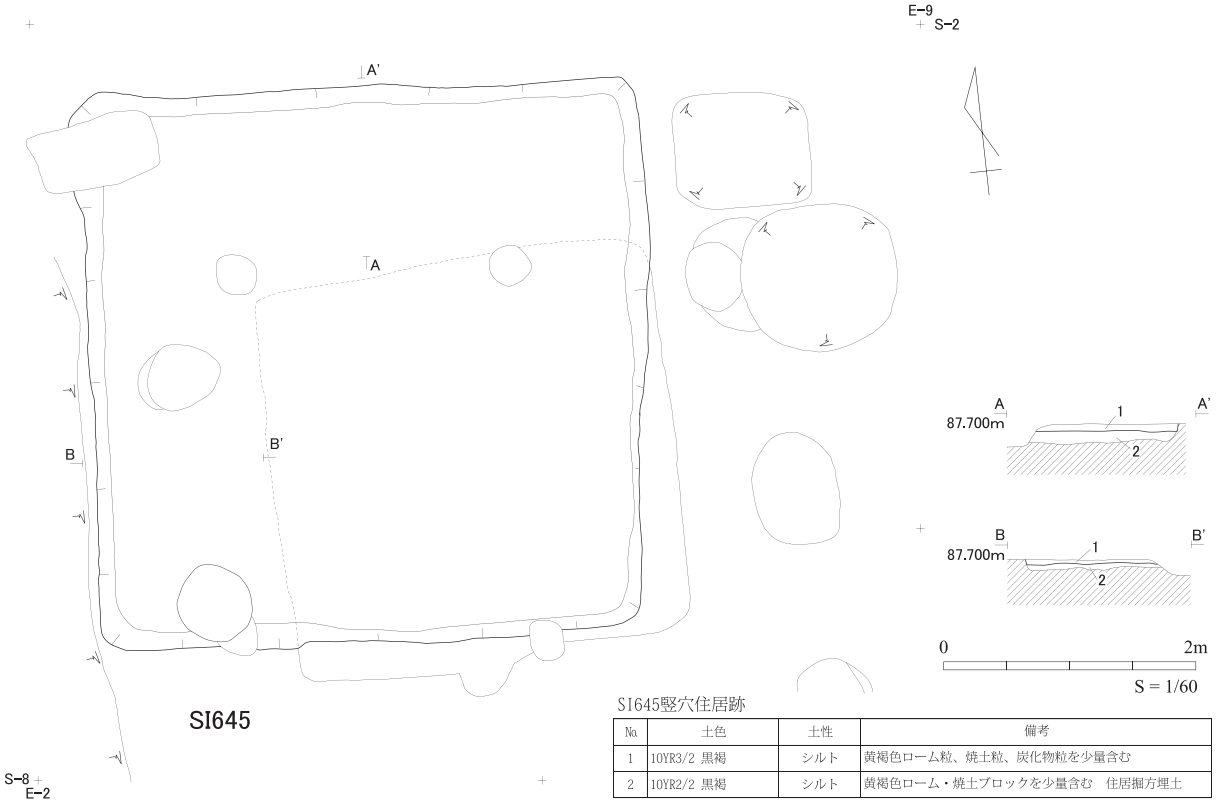
〔床面〕黄褐色ロームをブロック状に若干含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉・貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は 1 層で、住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居掘方埋土・住居内堆積土よりロクロ調整の土師器破片、非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。いずれも小破片であるが、土師器坏は体部に屈曲を持ち、内面に黒色処理が施されている。



SI645竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム・焼土ブロックを少量含む　住居掘方埋土

第 35 図　SI645 竪穴住居跡

B．掘立柱建物跡

【SB11 掘立柱建物跡】（第 36 図、図版 6 - 7 ）

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南西部の一部が調査区外に延びているが、南北 2 間 (桁行総長 3.95m)、東西 1 間 (梁行総長 2.95m) の南北棟である。

〔柱穴〕5 基確認した。掘方の平面形は長軸 20 ～ 38cm、短軸 15 ～ 35cm の楕円形ないしは隅丸方形を呈し、深さは 18 ～ 48cm である。いずれも平面形が直径 10 ～ 15cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列で北から 195 - 200cm、北側柱列で 295cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 13° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

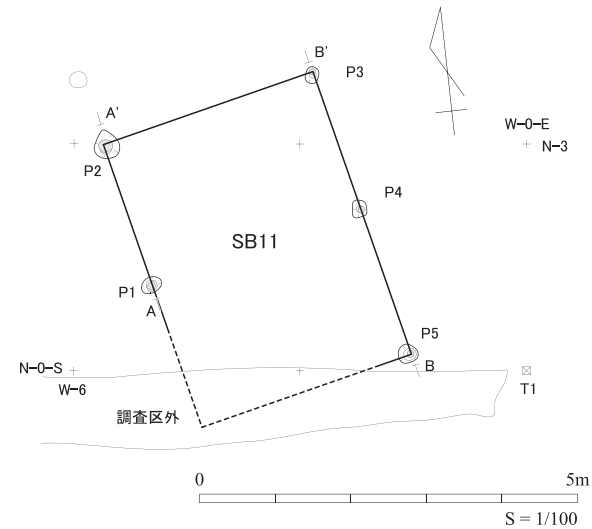
【SB12 掘立柱建物跡】（第 37 図、図版 6 - 8 ）

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間 (桁行総長 2.7m)、南北 1 間 (梁行総長 2.3m) の東西棟である。

〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 23 ～ 35cm、短軸 20 ～ 30cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 13 ～ 25cm である。いずれも平面形が直径 12 ～ 18cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。また、1 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。



SB11掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB11掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱穴掘方埋土

SB11掘立柱建物跡(P3)

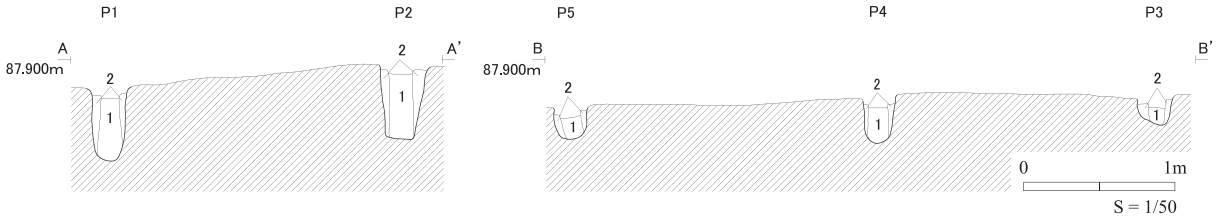
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱穴掘方埋土

SB11掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB11掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土



第 36 図　SB11 掘立柱建物跡

〔柱間寸法〕南側柱列で東から 130 - 140cm、西側柱列で 230cm である。

〔方向〕南側柱列：E - 30° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB615 掘立柱建物跡】（第 38 図、図版 5 - 5）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕SI645 → SI609 → SB643 →《SB615》

〔規模・形状〕南北 4 間 (桁行総長 7.2m)、東西 1 間 (梁行総長 4.5m) の南北棟である。

〔柱穴〕10 基確認した。掘方の平面形は長軸 60 ～ 100cm、短軸 50 ～ 65cm の隅丸方形ないしは楕円形を呈し、深さは 15 ～ 45cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡はすべて掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で北から 200 - 200 - 160 - 160cm、南側柱列で 4.5m である。

〔方向〕西側柱列：N - 4° - W

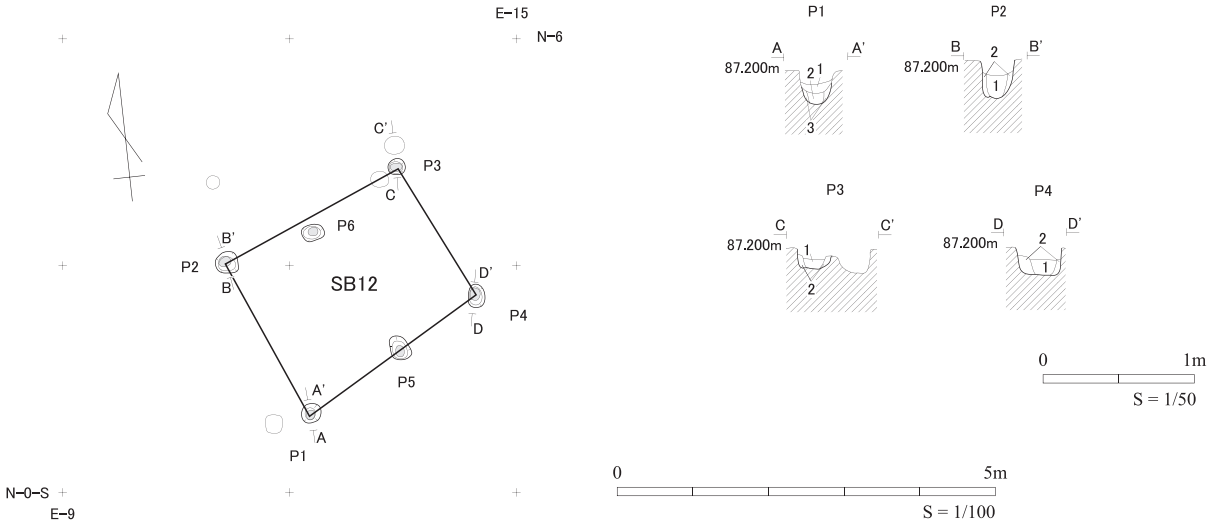
〔出土遺物〕柱穴掘方埋土より近世陶磁器、ロクロ・非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が、抜き取り痕跡より須恵器高台坏・土師器坏の破片が出土した。

【SB616 掘立柱建物跡】（第 39 図、図版 7 - 1）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南東部の一部が調査区外に延びているが、南北 3 間 (桁行総長 5.2m)、東西 2 間 (梁行総長 3.9m) の南北棟である。



SB12掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
3	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB12掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SB12掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱痕跡
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む　柱穴掘方埋土

SB12掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	柱穴掘方埋土

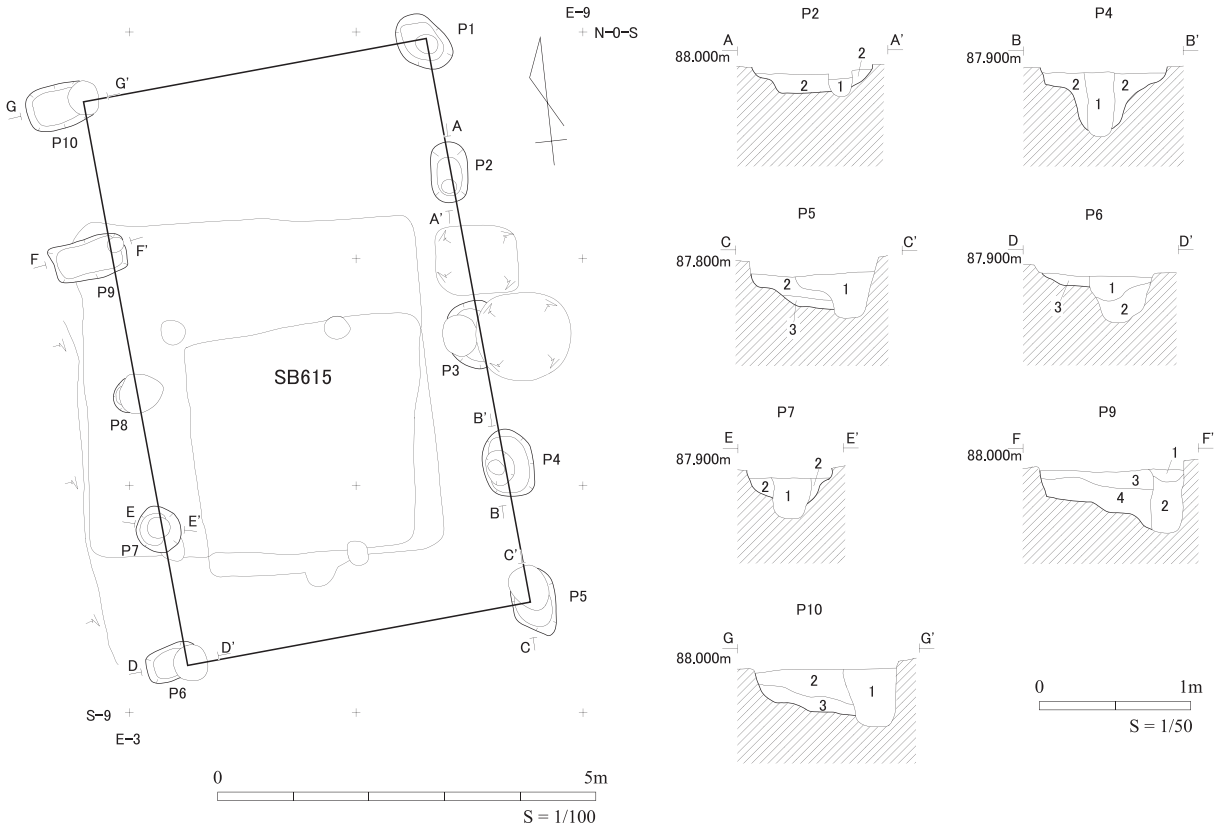
第 37 図　SB12 掘立柱建物跡

〔柱穴〕8 基確認した。掘方の平面形は長軸 18 ～ 38cm、短軸 17 ～ 22cm の隅丸方形ないしは楕円形を呈し、深さは 5 ～ 26cm である。北東コーナー部の P1 では柱材の抜き取り痕跡を確認し、抜き取り痕跡の底面で平面形が直径 12cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 26cm で、掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕西側柱列で北から 180 - 170 - 170cm、北側柱列で西から 210 - 180cm である。

〔方向〕西側柱列：N - 16° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB615掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/3 にぶい黄褐	シルト	小礫を多量に、黒褐色土ブロックを少量含む 柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SB615掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/3 にぶい黄褐	シルト	小礫を多量に、黒褐色土ブロックを含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB615掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土
3	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB615掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB615掘立柱建物跡(P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB615掘立柱建物跡(P9)

No.	土色	土性	備考
1	10YR5/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームを主体とする　小礫を含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱穴掘方埋土
4	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB615掘立柱建物跡(P10)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む　柱穴掘方埋土
3	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

第 38 図　SB615 掘立柱建物跡

【SB636 掘立柱建物跡】（第 40 図、図版 7 - 2）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SK629 →《SB636》

〔規模・形状〕南北 1 間 (総長 2.7m)、東西 1 間 (総長 2.6m) の建物跡である。規模・方向などからみて竪穴住居跡の主柱穴の可能性がある。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 33 ～ 47cm、短軸 26 ～ 40cm の隅丸方形を呈し、深さは 28 ～ 38cm である。P1・2・4 では平面形が直径 14 ～ 20cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。P3 では柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡は掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で 270cm、北側柱列で 260cm である。

〔方向〕西側柱列：N - 5° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB643 掘立柱建物跡】（第 41 図、図版 6 - 6）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕SI645 → SI609 →《SB643》→ SB615

〔規模・形状〕東西 1 間 (総長 2.1m)、南北 1 間 (総長 3.0m) の建物跡である。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 30 ～ 38cm、短軸 27 ～ 32cm の不整円形を呈し、深さは 60 ～ 70cm である。P1・2・4 では平面形が直径 12 ～ 14cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。P3 では柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡は掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で 150cm、北側柱列で 110cm である。

〔方向〕西側柱列：N - 8° - W

〔出土遺物〕柱材の抜き取り痕跡より土師器鉢の小破片が出土した。

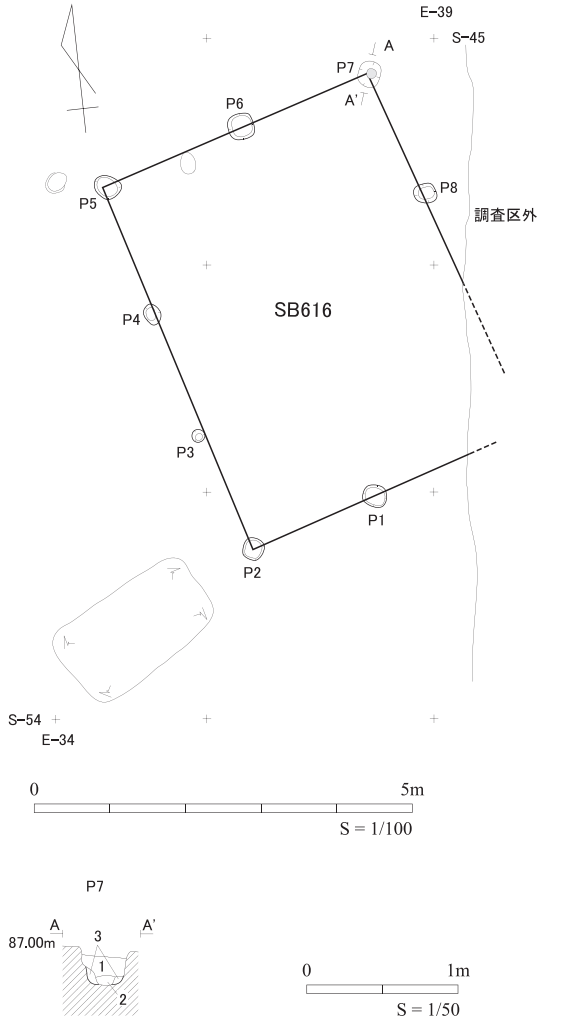
【SB650 掘立柱建物跡】（第 42 図、図版 7 - 3）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕《SB650》— SB657 → SX623

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 4.2m)、南北 2 間 (総長 4.7m) の建物跡である。

〔柱穴〕8 基確認した。掘方の平面形は長軸 58



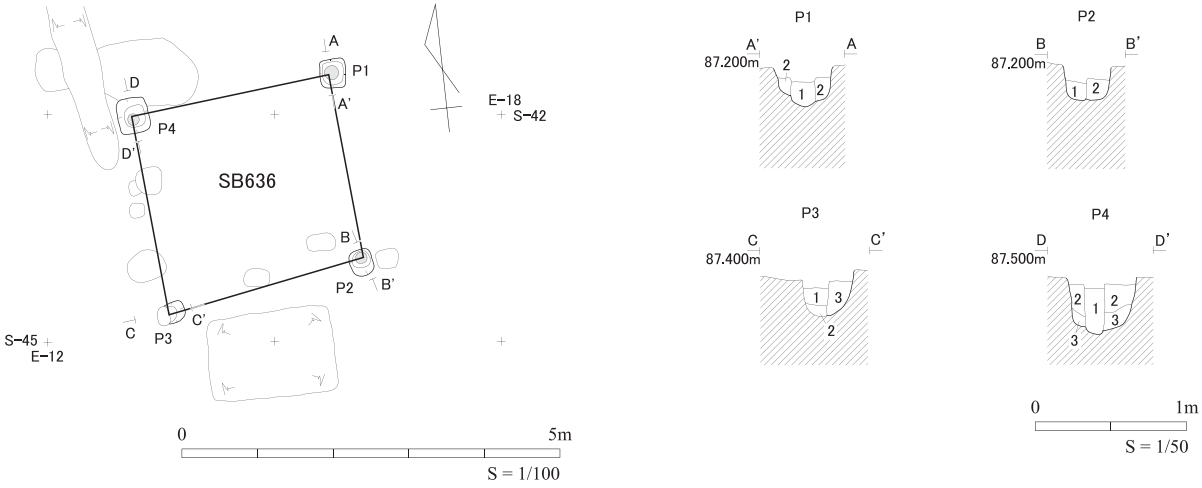
SB616掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
3	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 39 図　SB616 掘立柱建物跡

～ 66cm、短軸 46 ～ 62cm の楕円形ないしは不整円形を呈し、深さは 24 ～ 50cm である。このうち 3 基で平面形が直径 14 ～ 20cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 40cm で、いずれも掘方底面に達する。このほかの 5 基では柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡はいずれも掘方底面に達し、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で北から 230 - 240cm、北側柱列で西から 210 - 210cm である。



SB636掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB636掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

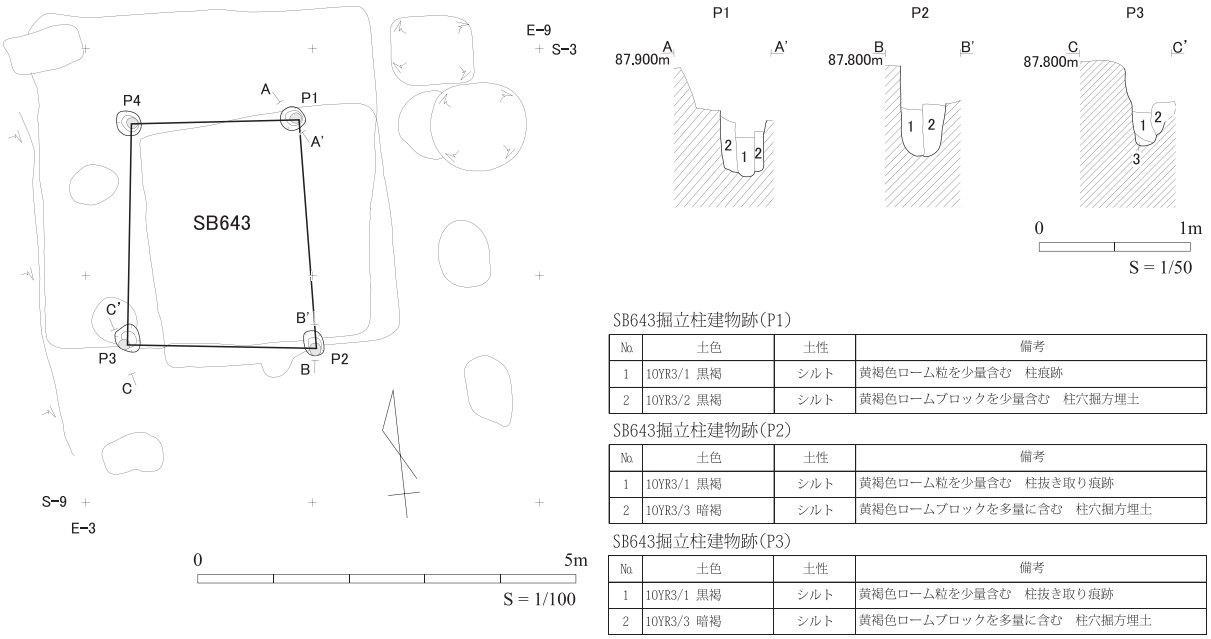
SB636掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き取り痕跡
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB636掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、焼土を少量含む 柱穴掘方埋土
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

第 40 図　SB636 掘立柱建物跡



SB643掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SB643掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB643掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 41 図　SB643 掘立柱建物跡

〔方向〕東側柱列：N－2°－W

〔出土遺物〕柱穴堆積土および抜き取り痕跡より須恵器甕の破片と非ロクロ調整の土師器甕の小破片が出土した。須恵器甕は外面に平行タタキ目が、土師器甕は外面にハケメがみられる。

【SB655 掘立柱建物跡】（第 43 図、図版 7 - 4 ）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SK656 →《SB655》

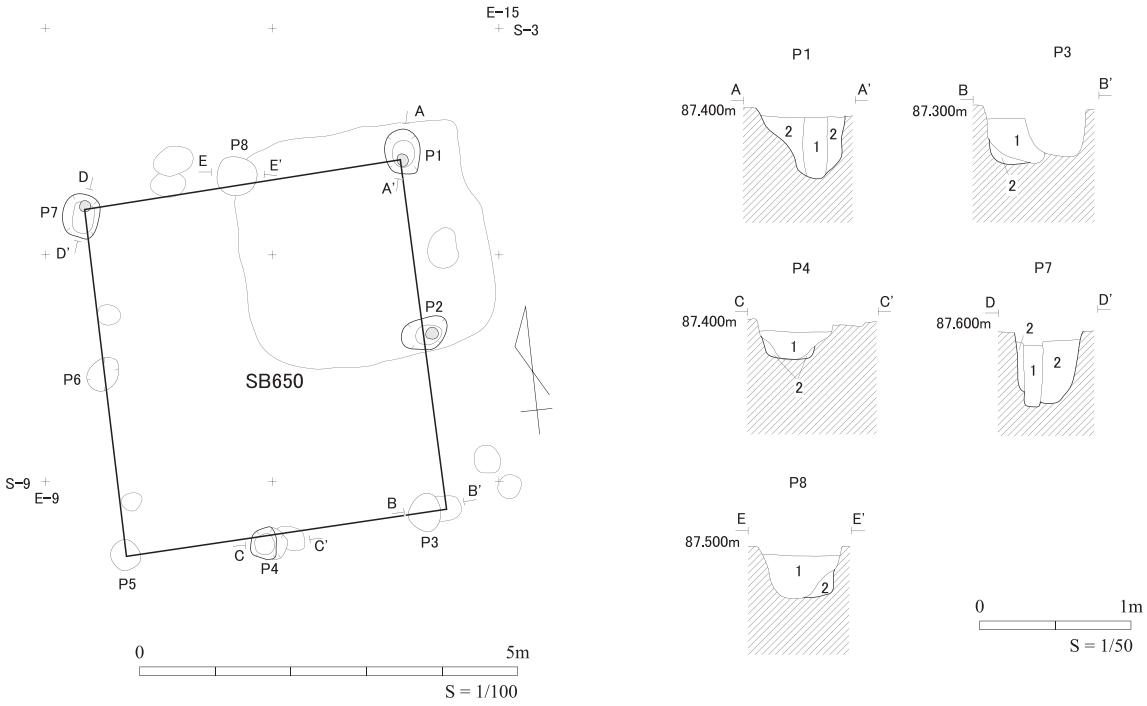
〔規模・形状〕東西 3 間 (桁行総長 6.5m)、南北 1 間 (梁行総長 4.5m) の東西棟である。

〔柱穴〕7 基確認した。掘方の平面形は長軸 36 ～ 50cm、短軸 28 ～ 40cm の不整円形ないしは楕円形を呈し、深さは 9 ～ 28cm である。このうち 5 基で平面形が直径 10 ～ 14cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。また、3 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列で西から 200 - 250 - 200cm、東側柱列で 450cm である。

〔方向〕北側柱列：E－5°－N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB650掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SB650掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む。柱抜き取り痕跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB650掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土
3	10YR2/1 黒	シルト	
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

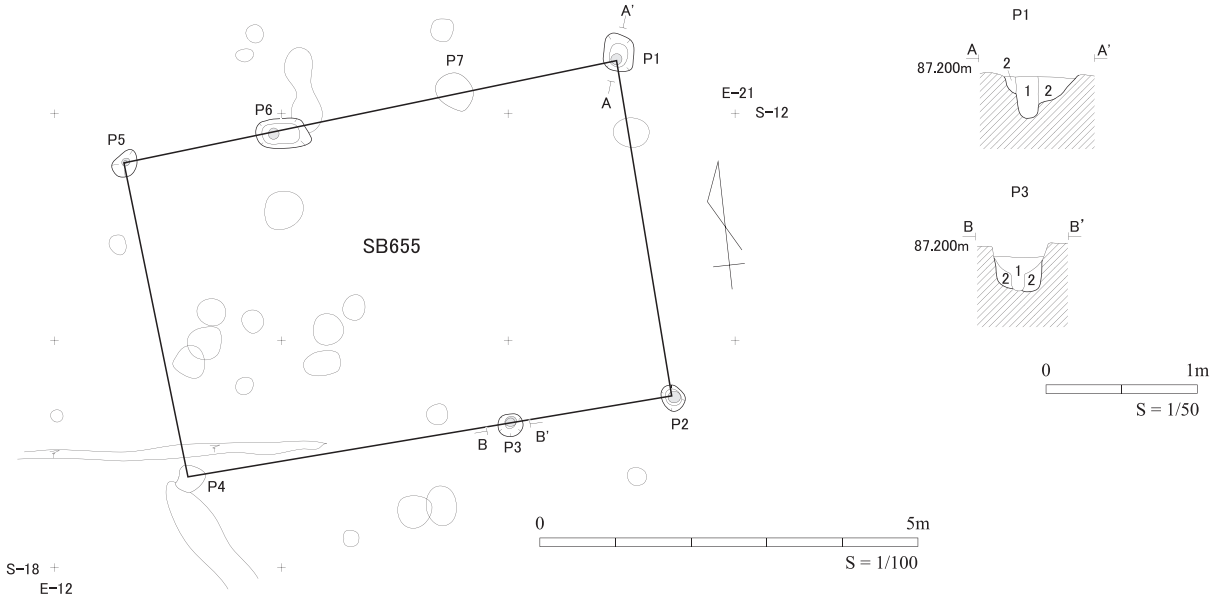
SB650掘立柱建物跡(P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SB650掘立柱建物跡(P8)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

第 42 図　SB650 掘立柱建物跡



SB655掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SB655掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

第 43 図　SB655 掘立柱建物跡

【SB657 掘立柱建物跡】（第 44 図、図版 7 - 3 ）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SB650 ―《SB657》→ SX623

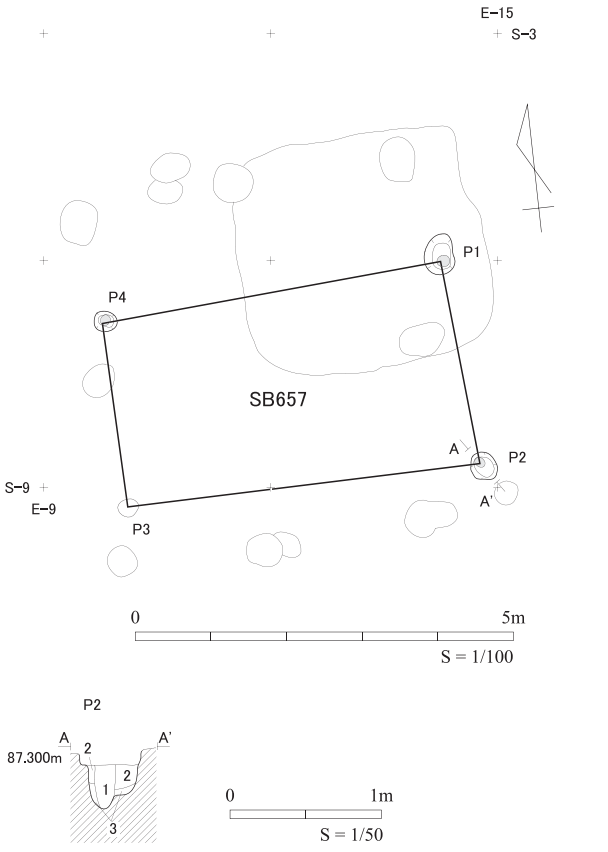
〔規模・形状〕東西 1 間 (総長 4.6m)、南北 1 間 (総長 2.7m) の建物跡である。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 26 ～ 55cm、短軸 24 ～ 48cm の楕円形を呈し、深さは 33 ～ 47cm である。このうち 3 基で平面形が直径 14 ～ 16cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。また、1 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列で 460cm、西側柱列で 270cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 2° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB657掘立柱建物跡(P2)

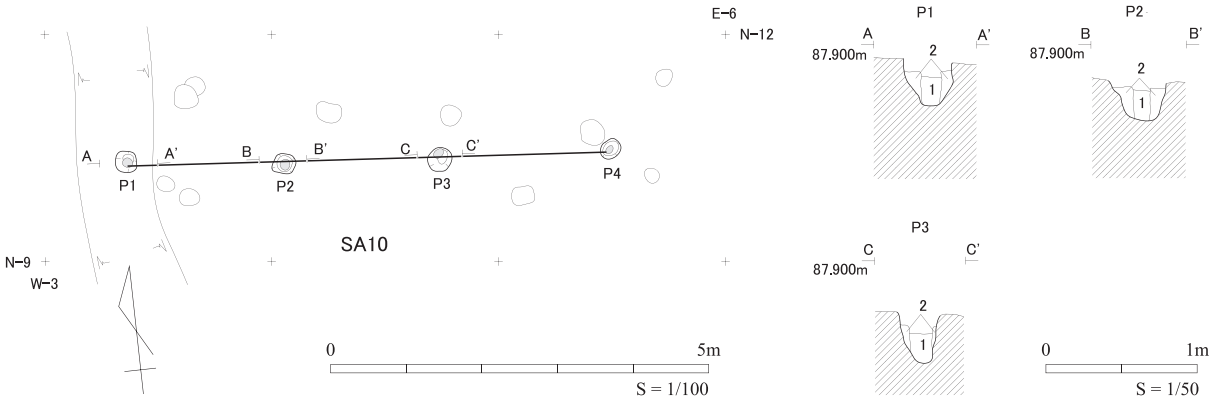
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土
3	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 44 図　SB657 掘立柱建物跡

C．柱列跡

【SA10 柱列跡】（第 45 図）

〔位置・確認面〕S1 西区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。



SA10柱穴列跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	ほぼ均質　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SA10柱穴列跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	ほぼ均質　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SA10柱穴列跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

第 45 図　SA10 柱列跡

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 3 間 (総長 6.2m) 以上の柱列跡である。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 28 ～ 33cm、短軸 23 ～ 30cm の不整円形を呈し、深さは 26 ～ 33cm である。いずれも平面形が直径 10 ～ 14cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。柱痕跡は南寄りのものと北寄りのものが交互にみられる。

〔柱間寸法〕東から 230 - 200 - 210cm である。

〔方向〕E - 4° - S

〔出土遺物〕柱穴堆積土より非ロクロ調整の土師器甕の小破片が出土した。

D．落し穴状土坑

落し穴状土坑は 14 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 6 表に特徴を示す。

【SK29 落し穴状土坑】（第 46 図、図版 7 - 5 ）

〔位置・確認面〕S1 西区の丘陵頂部に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 320cm、短軸 27cm の溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 110cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

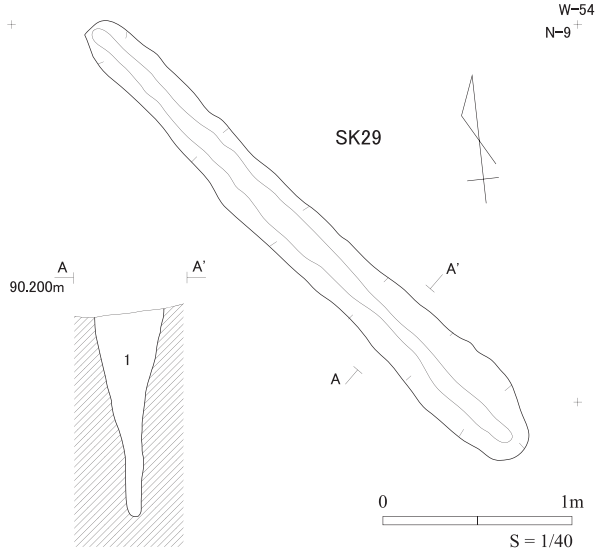
〔方向〕南東 - 北西方向

〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックを多く含む褐色シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK30 落し穴状土坑】（第 47 図、図版 7 - 6 ）

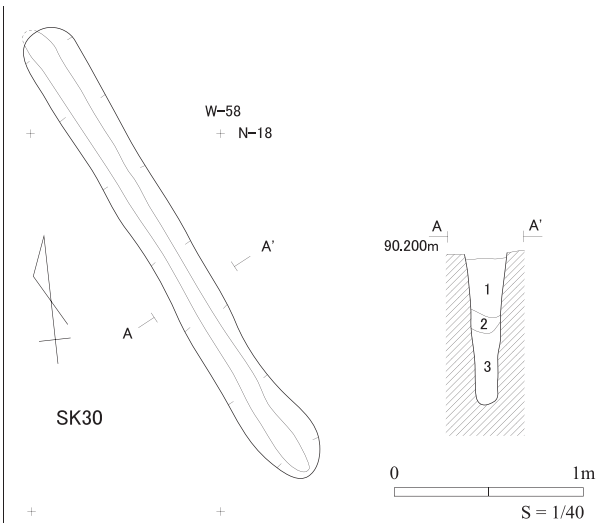
〔位置・確認面〕S1 西区の丘陵頂部に立地する。Ⅴ層で確認した。



SK29落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む

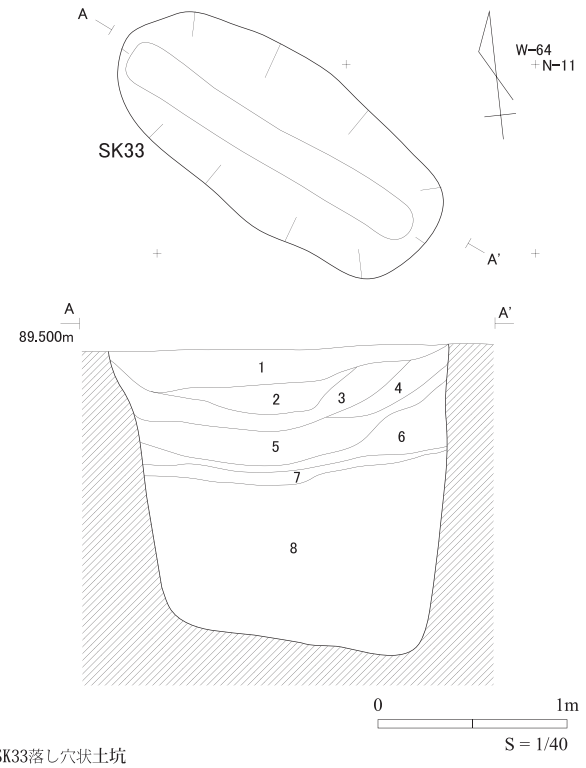
第 46 図　SK29 落し穴状土坑



SK30落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐	シルト	下層に暗褐色土ブロックを含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	
3	10YR5/6 黄褐	粘質シルト	まだら状に暗褐色土ブロックを含む

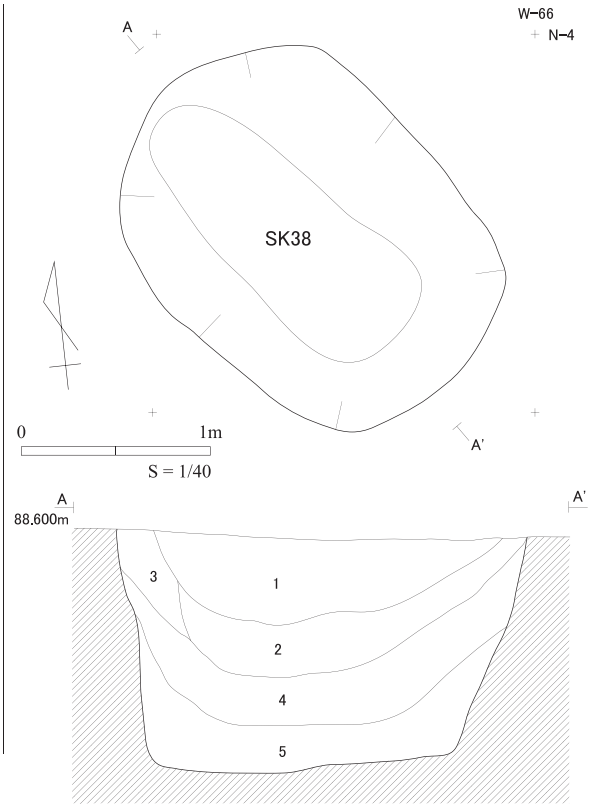
第 47 図　SK30 落し穴状土坑



SK33落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
4	10YR4/4 褐	シルト	小礫を含む
5	10YR3/4 暗褐	シルト	ほぼ均質
6	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
8	10YR4/4 褐	シルト	ほぼ均質

第 48 図　SK33 落し穴状土坑



SK38落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を少量含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む
4	10YR4/4 褐	粘質シルト	
5	10YR4/3 にぶい黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、炭化物粒を少量含む

第 49 図　SK38 落し穴状土坑

〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 276cm、短軸 24cm の溝状を呈する。横断面形はＶ字状を呈し、深さは 78cm である。
〔底面〕ほぼ平坦である。
〔方向〕南東 - 北西方向
〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。1 層は下部に暗褐色シルトをブロック状に含む褐色シルト、2 層は均質な暗褐色シルト、3 層は暗褐色シルトをブロック状に含む黄褐色粘質シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK33 落し穴状土坑】（第 48 図、図版 8 - 1 ）
〔位置・確認面〕S1 西区の西斜面に立地する。Ｖ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 190cm、短軸 90cm の楕円形を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 164cm である。
〔底面〕南東側に向かって傾斜する。
〔方向〕南東 - 北西方向
〔堆積土〕堆積土は 8 層に細分される。黄褐色ロームブロックと小礫を含む褐色･暗褐色シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK38 落し穴状土坑】（第 49 図、図版 8 - 2 ）
〔位置・確認面〕S1 西区の西斜面に立地する。Ｖ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 236cm、短軸 155cm の楕円形を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 128cm である。
〔底面〕北西側に向かって緩やかに傾斜する。
〔方向〕南東 - 北西方向
〔堆積土〕堆積土は 5 層に細分される。炭化物粒と黄褐色ロームブロックを含む暗褐色シルトと黒褐色・褐色・黄褐色の粘質シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

Ｅ．土坑

土坑は 22 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 7・8 表に特徴を示す。

【SK36 土坑】（第 50 図）
〔位置・確認面〕S1 西区の西斜面に立地する。Ｖ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕北側が調査区外に延びるため全体の形状は不明だが、平面形は東西 325cm、南北 75cm 以上の隅丸方形を呈するとみられる。断面形状は箱形を呈し、深さは 67cm である。
〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は８層に細分される。黄褐色ローム粒・ブロックと小礫を含む褐色・暗褐色シルトである。１～４層は自然堆積土、５層は壁際の自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK610 土坑】（第 51・53 図、図版８- ３・４）

〔位置・確認面〕S1 南区の南斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 70cm、短軸 30cm の楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは 30cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は２層に細分される。１層は黄褐色ロームブロックと焼土ブロックを含む灰黄褐色シルト、２層は黄褐色ロームブロックを多量に含む灰黄褐色シルトで、いずれも人為的埋土の可能性がある。SK611 の堆積土と類似する。

〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器坏（第 53 図）が出土した。外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

【SK619 土坑】（第 54 図、図版８- ５）

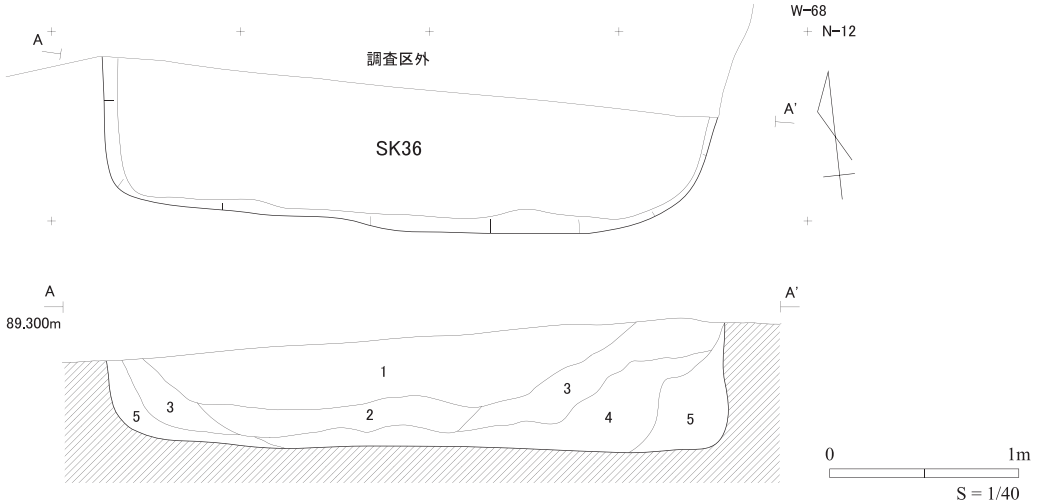
〔位置・確認面〕S1 南区の南斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 268cm、短軸 160cm の不整楕円形を呈する。断面形は不整な逆台形を呈し、深さは 52cm である。

〔底面〕中央部に段を持ち、西側が一段低い。東側は平坦だが、西側は凹凸がみられる。

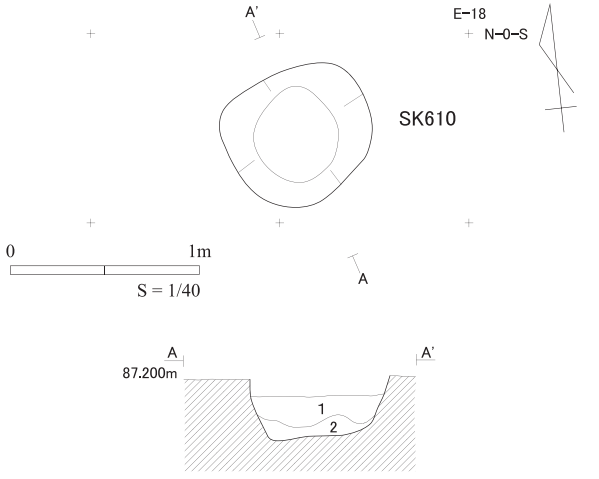
〔堆積土〕堆積土は３層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒色・黒褐色シルトで、人為的埋土の可能性がある。



SK36土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、小礫を含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黒褐色土ブロックを含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	ほぼ均質
4	10YR4/4 褐	シルト	ほぼ均質
5	10YR4/6 褐	粘質シルト	小礫を含む

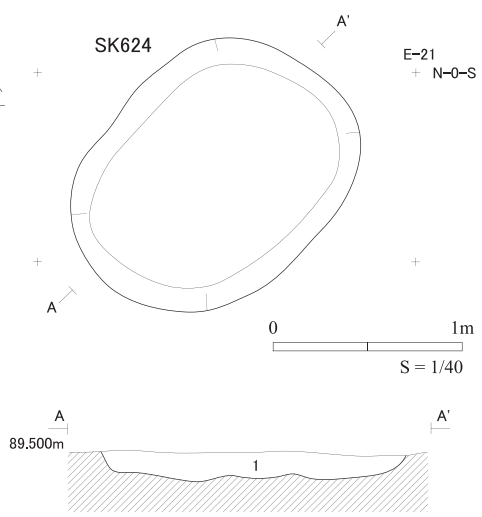
第 50 図　SK36 土坑



SK610土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物粒を少量、焼土ブロック、白色粘土ブロックを含む　人為的埋土
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

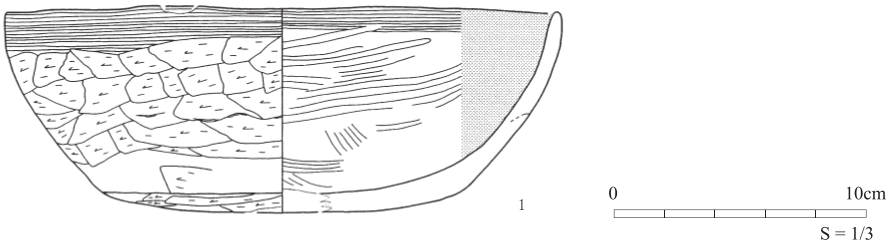
第 51 図　SK610 土坑



SK624土坑

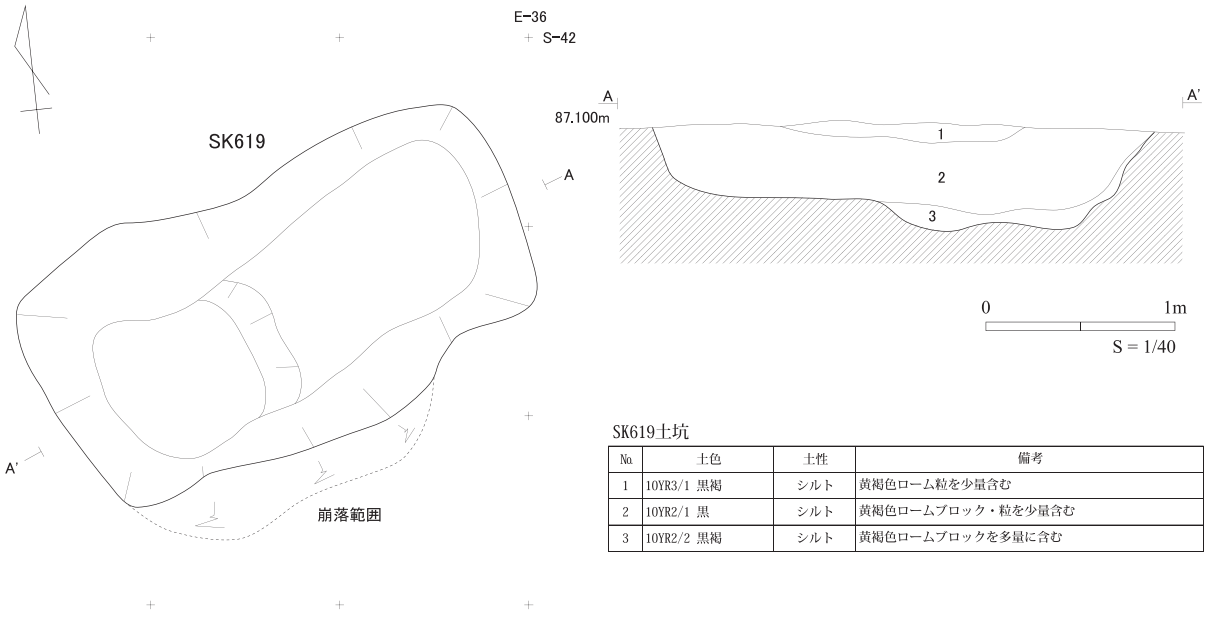
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む

第 52 図　SK624 土坑



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆	土師器	大型坏	A	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	21.7	—	(8.1)	2/5	06100	31-3

第 53 図　SK610 土坑出土遺物



SK619土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 54 図　SK619 土坑

〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器鉢・甕の破片が出土した。いずれも外面にハケメがみられ、土師器甕は内外面にハケメがみられるもの、外底面に木葉痕がみられるものがある。

【SK624 土坑】（第 52 図、図版 8 - 6）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 160cm、短軸 110cm の楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは 25cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 1 層で、少量の焼土粒を含む黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕堆積土より内面に黒色処理が施された土師器坏の小破片と鉄滓が出土した。

【SK625 土坑】（第 55 図、図版 9 - 1）

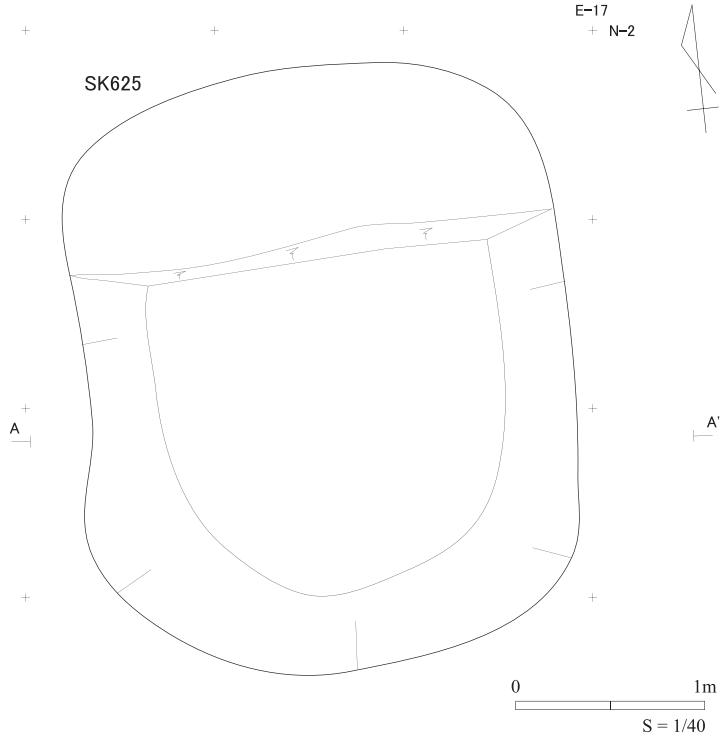
〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は東西 270cm、南北 240cm 以上の楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは 36cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

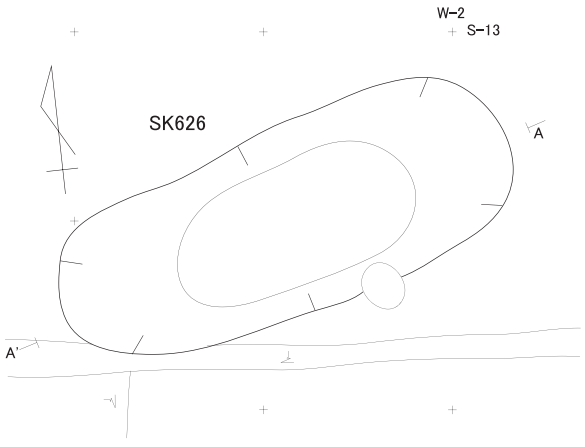
〔堆積土〕堆積土は 1 層で少量の焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルトである。

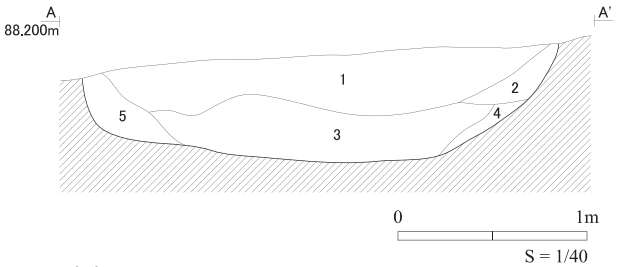


SK625土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土・炭化物粒を含む

第 55 図　SK625 土坑





SK626土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR6/4 にぶい黄橙	粘土	黒褐色土を少量含む　人為的埋土
2	10YR4/6 褐	粘土	白色粘土ブロックを少量含む　崩落土
3	10YR7/3 にぶい黄橙	粘土	砂を多量に、黒褐色土を少量含む　人為的埋土
4	10YR7/4 にぶい黄橙	粘土	崩落土
5	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土	砂を多量に、白色粘土ブロックを含む　崩落土

第 56 図　SK626 土坑

〔出土遺物〕堆積土よりロクロ・非ロクロ調整の土師器坏の破片、須恵器坏・甕の破片、青磁碗の破片が出土した。非ロクロ調整の土師器坏は内面に黒色処理が施されている。須恵器甕は外面に平行タタキ目がみられる。青磁碗は内面に櫛描文がみられる。

【SK626 土坑】（第 56 図、図版 8 - 8）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 250cm、短軸 30cm の楕円形を呈する。横断面形は不整な台形状を呈し、深さは 56cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 5 層に細分され、砂と白色粘土ブロックを含む褐色・にぶい黄橙色粘土で、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK628 土坑】（第 57・58 図、図版 9 - 2）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

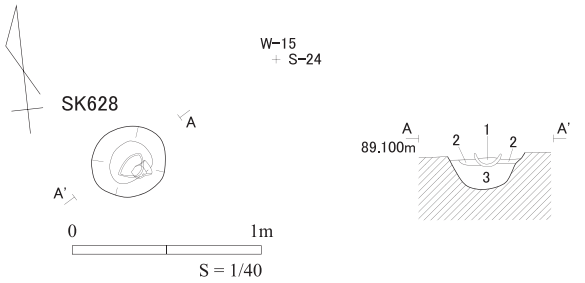
〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は直径 37 ～ 40cm の円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さは 17cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分され、1 層は黄褐色ロームと焼土粒を含む褐灰色シルト、2 層は黄褐色ローム粒を多く含む灰黄褐色シルト、3 層は若干の黄褐色ロームブロックと少量の炭化物粒を含む暗褐色シルトである。1 層は自然堆積土、2・3 層は人為的埋土の可能性がある。

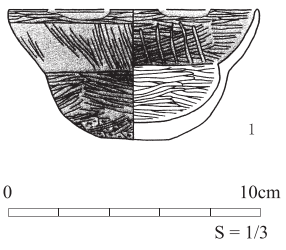
〔出土遺物〕堆積土 3 層上面で非ロクロ調整の

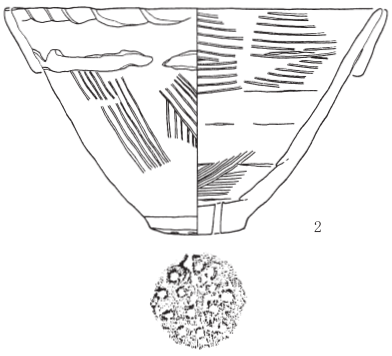


SK628

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を含む
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　人為的埋土？
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を少量含む

第 57 図　SK628 土坑





No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆 1 層	土師器	坏	A 1	外：(口～底) ｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→ (口～頸) 赤彩	9.8	2.7	5.1	1/2	06078	31-4
2	堆 1 層	土師器	甑	A 1	外：(口) 指ｵｻｴ (体) ﾊｹﾒ (底面) ｹｽﾞﾘ→穿孔　内：(口～体) ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ 多孔式、穿孔 15 ヶ所	(14.6)	3.7	8.95	3/5	06079	31-5

第 58 図　SK628 土坑出土遺物

土師器坏（第 58 図 1）と甑（第 58 図 2）が重なった状態で出土した。1 は内外面にヘラミガキが、外面と内面口縁部に赤彩が施されている。2 は内外面にハケメがみられ、底部に 15 個の小孔が穿たれている。

このほか、堆積土 1 層より非ロクロ調整の土師器壷の破片が出土した。内面に指押さえ痕がみられ、外面にヘラミガキが、外面と内面口縁部に赤彩が施されている。

F．溝跡

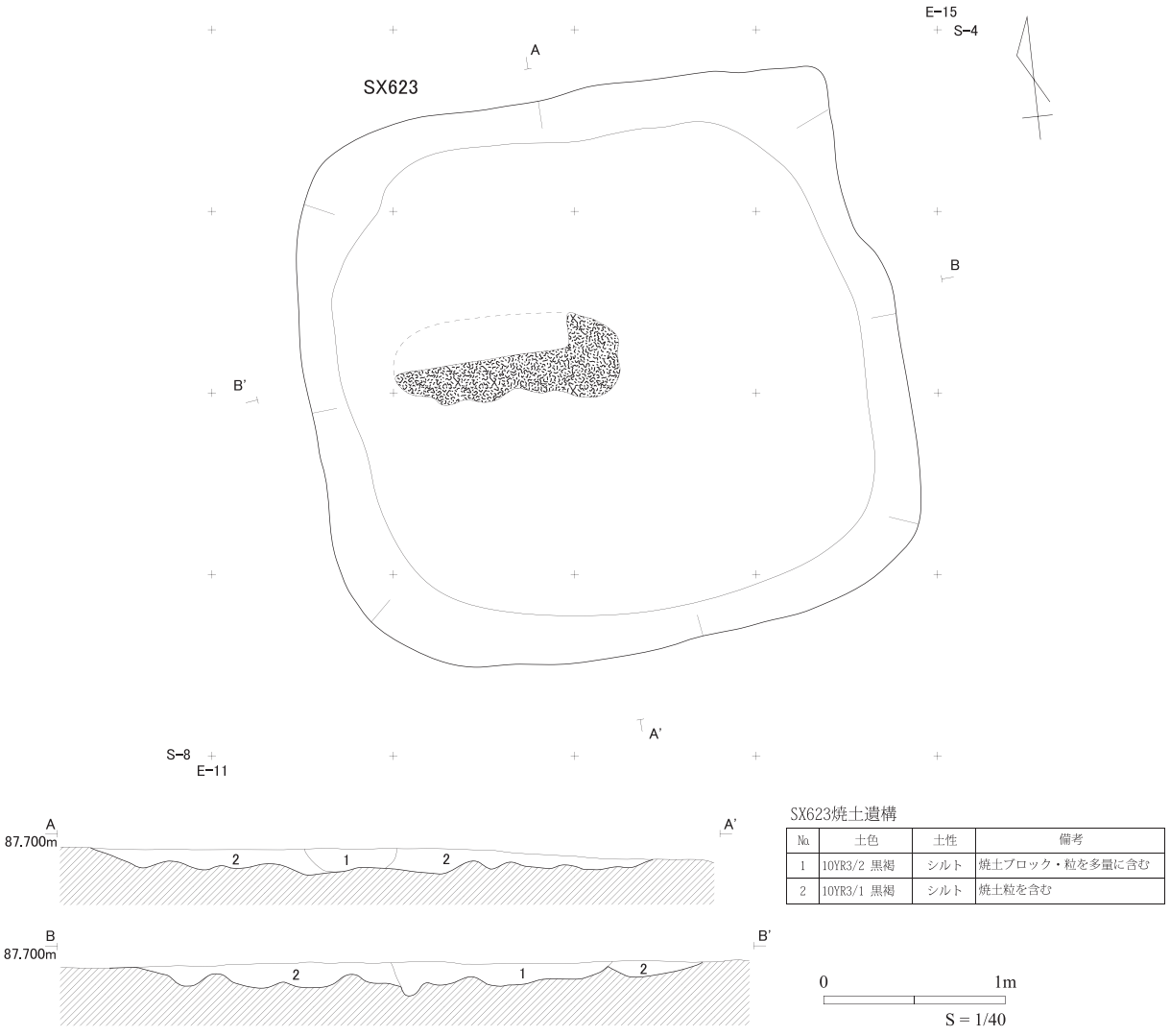
溝跡は 5 条が確認された。S1 中区東側から S1 東区西側にかけて南北方向の溝跡が 4 条確認されている。第 10 表にその特徴を示す。

G．性格不明遺構

【SX623 性格不明遺構】（第 59 図、図版 9 - 3）

〔位置・確認面〕S1 南区の東斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕SB650 ― SB657 →《SX623》



SX623焼土遺構

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	焼土ブロック・粒を多量に含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土粒を含む

第 59 図　SX623 性格不明遺構

〔規模・形状〕平面形は一辺が 3.0 ～ 3.3m の隅丸方形を呈する。断面形は浅い皿状を呈し、深さは 13cm である。
〔底面〕凹凸がみられる。
〔堆積土〕堆積土は 2 層に細分に細分され、1 層は焼土ブロックをきわめて多量に含む黒褐色シルト、2 層は焼土粒を含む黒褐色シルトである。
〔出土遺物〕堆積土より鉄滓が出土した。このほか、いずれも小破片であるが、堆積土 1 層より須恵器甕、ロクロ調整の土師器甕、非ロクロ調整の土師器坏、高杯が出土した。土師器坏は内面に黒色処理が施されている。また、堆積土 2 層より須恵器蓋、ロクロ調整の土師器甕、非ロクロ調整の土師器甕が出土した。ロクロ調整の土師器甕には内面に黒色処理が施されているものがある。

（2）S2区

遺跡の立地する丘陵中腹部の尾根筋にあたる。黒ボク土および漸移層は残存せず、黄褐色ローム層が露出している。北区、南区を設定して調査を行なった。南区は西側斜面に接する落ち際にあたる。後世の削平が著しく、遺構は確認されなかった。北区は S3 中区に南東方向から入る沢に向かって緩やかに傾斜する北東向きの緩斜面である（第 60 図）。やはり後世の削平が著しく、遺構は落し穴状土坑 1 基のみが確認された。第 6 表にその特徴を示す。

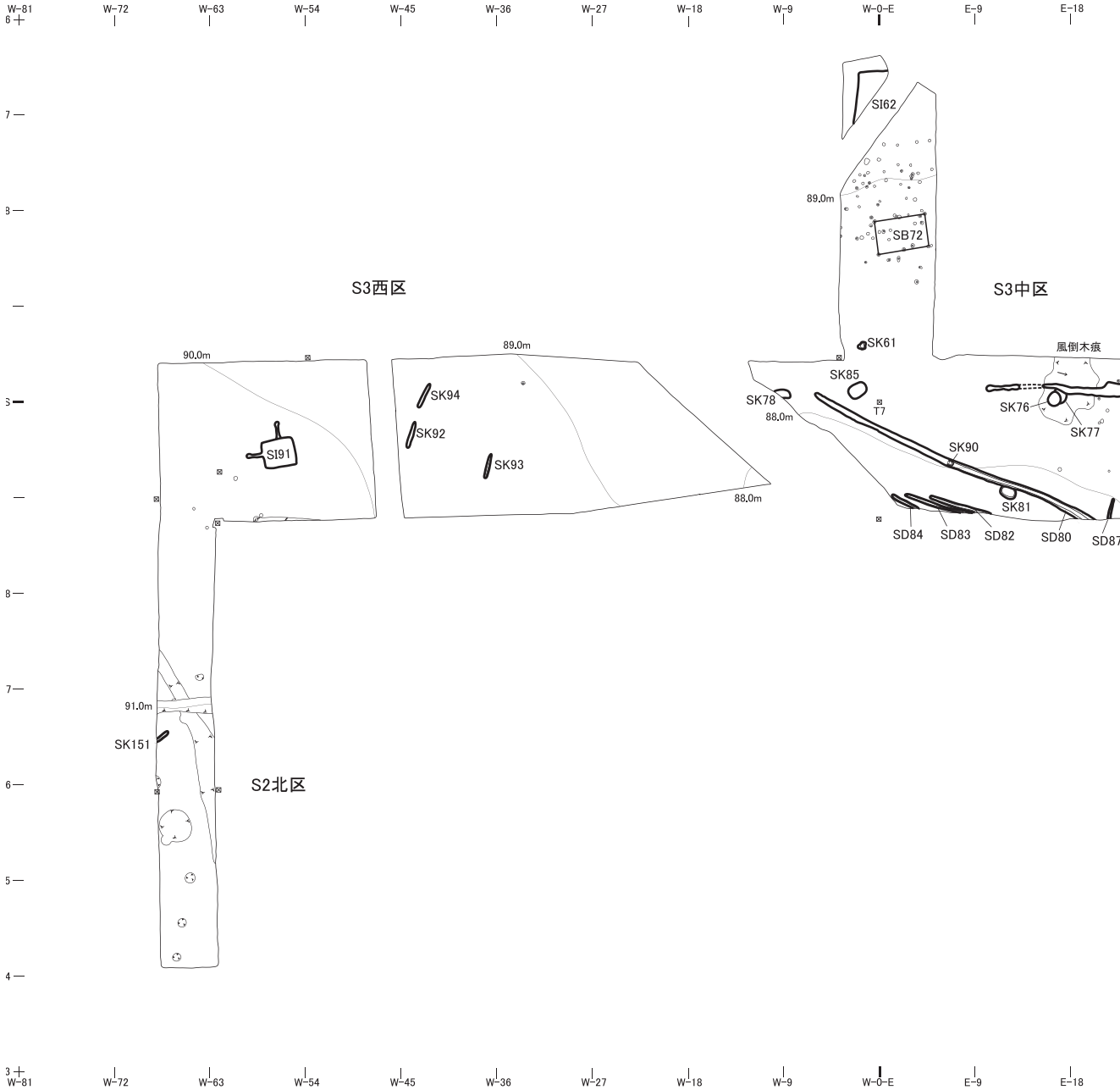
（3）S3区

遺跡の立地する丘陵を東西に横断する。西区、中区、東区を設定して調査を行なった（第 60 図）。丘陵中腹部の尾根筋にあたる西区は S2 区と同様に黒ボク土および漸移層は残存せず、黄褐色ローム層が露出している。西区と中区の間には南東方向から沢状の地形が入り、中区と東区は東向きの緩斜面である。遺構は竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 5 軒、落し穴状土坑 3 基、土坑 14 基、溝跡 15 条、柱穴多数が確認された。以下、主要な遺構について述べる。

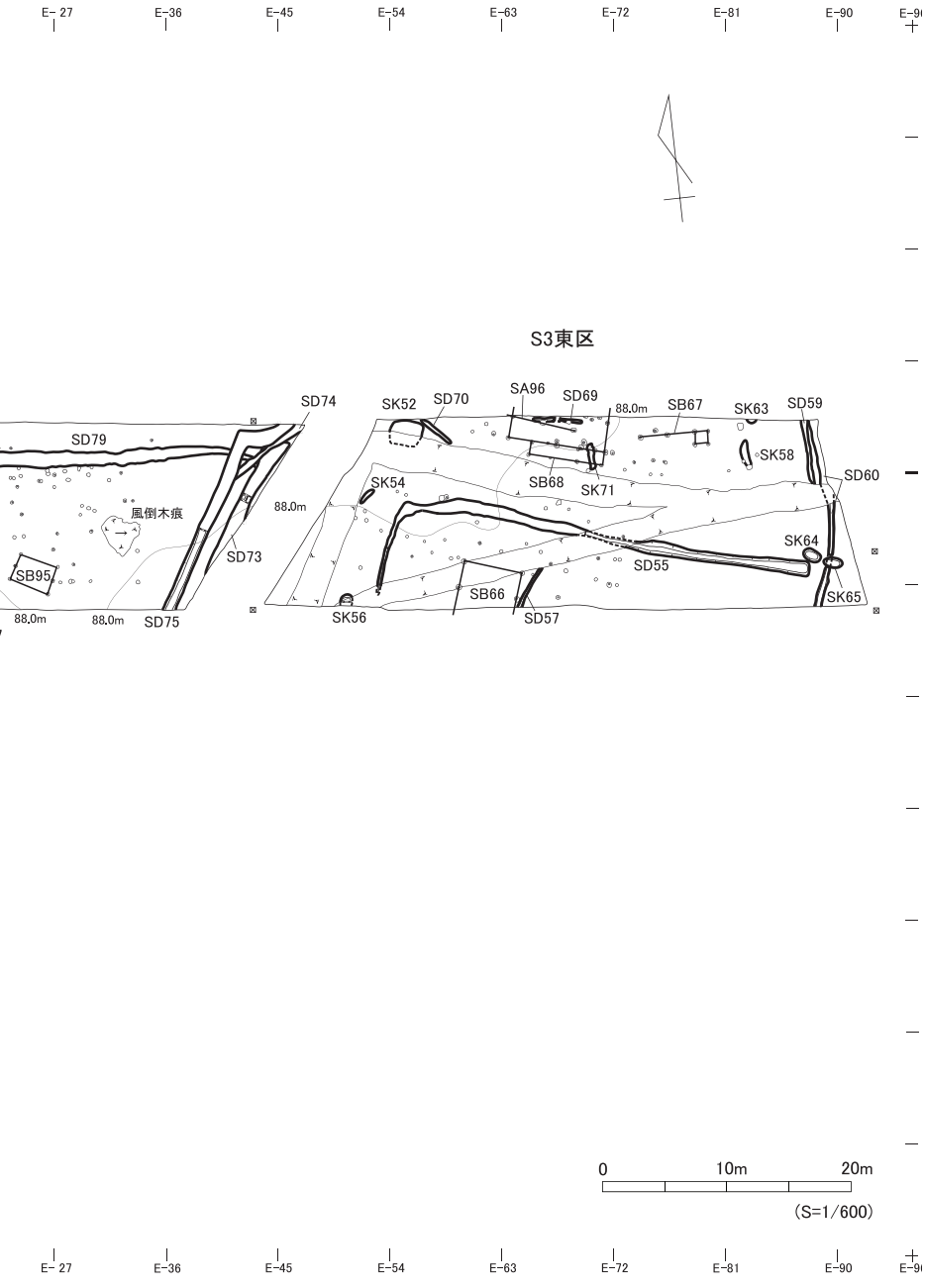
A．竪穴住居跡

竪穴住居跡は S 3 中区北側の南斜面で 1 軒、S 3 西区の東斜面で 1 軒が確認された。ここでは S 3 西区で確認した SI91 について述べる。S 3 中区で確認した SI62 については平面プランのみの確認であるため、第 3 表にその特徴を示す。

【SI91 竪穴住居跡】（第 61・62 図、図版 10- 4 ・ 5）
〔位置・確認面〕S3 西区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕東西約 2.9m、南北約 2.6m の方形を呈する。
〔方向〕旧カマド中軸線：N - 1° - E、新カマド中軸線：W - 1° - S
〔壁面〕Ⅳ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南壁で床面から 40cm である。



第 60 図　Ｓ２北・Ｓ３西・中・東区遺構配置図


E-27
E-36
E-45
E-54
E-63
E-72
E-81
E-90
S3東区
SD74
SD79
SK52
SD70
SA96
SD69
88.0m
SB67
SK63
SD59
SK58
SD60
SK54
SB68
SK71
88.0m
風倒木痕
SD73
SK64
SD55
SB95
SB66
SK65
SK56
SD57
88.0m
88.0m
SD75
0
10m
20m
(S=1/600)

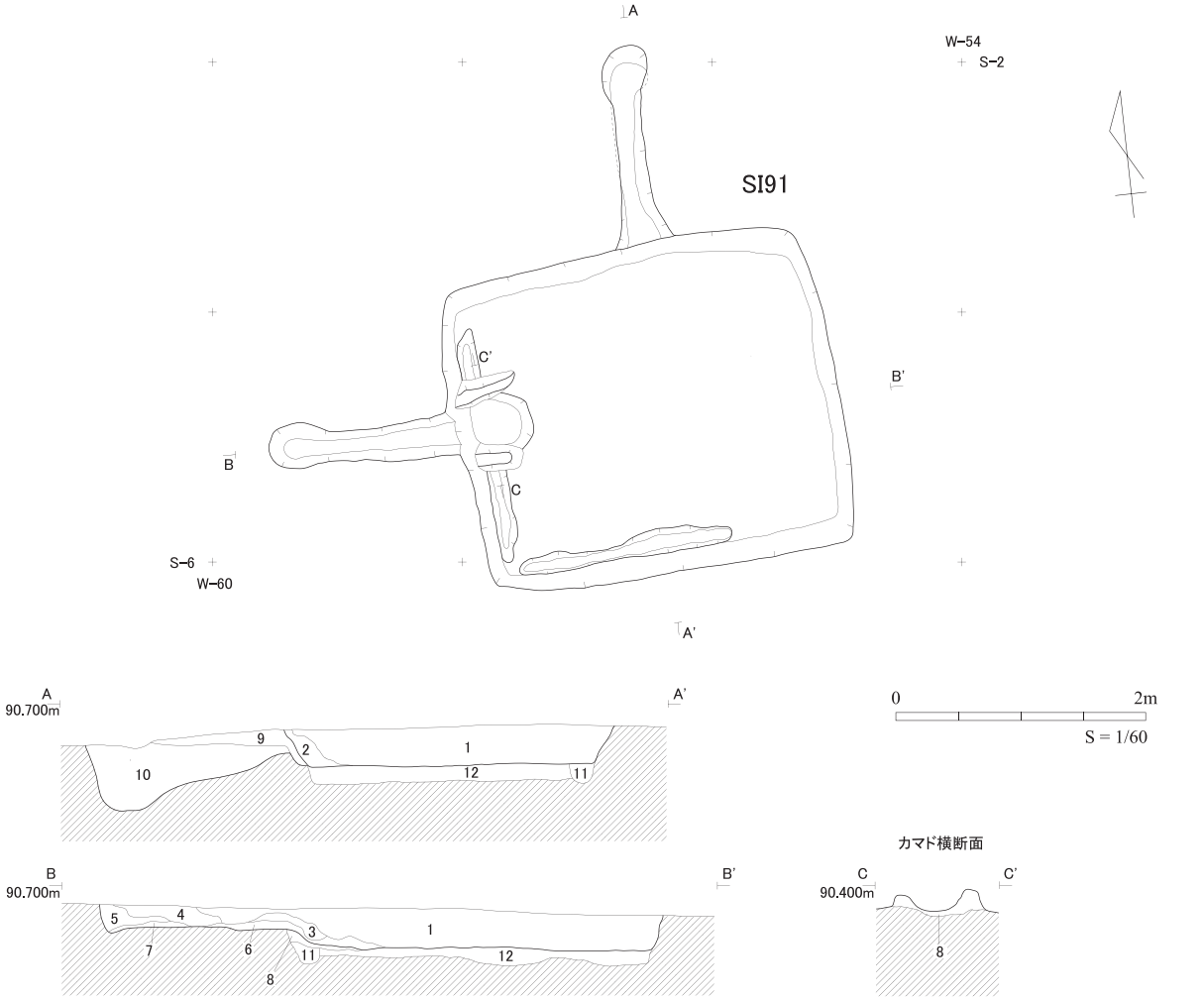
〔床面〕掘方埋土を床面とし、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 10 ～ 18cm、下端幅 7 ～ 15cm、床面からの深さ 7 ～ 15cm で断面形が U 字形を呈する周溝が西壁と南壁に巡る。新カマド構築時に埋め戻されており、壁材痕跡の有無は確認できない。

〔カマド〕新旧二時期あり、旧カマドは住居北壁中央やや東寄りに、新カマドは住居西壁やや北寄りに設置されている。旧カマドは燃焼部の一部と煙道部、新カマドは燃焼部と煙道部が残存する。

旧カマドの燃焼部は底面と奥壁が残存する。奥壁は住居北壁より 10 ～ 20cm ほど張り出し、奥壁の前面約 60cm の範囲に被熱により赤色化した燃焼部底面の痕跡がみられる。奥壁から北側へ延びる煙道は長さ 164cm で、幅 22 ～ 35cm、深さ 20 ～ 53cm が残存する。煙道底面は奥壁との接続



SI91竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土ブロックを含む
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	褐色粘土ブロックを含む
4	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を含む
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
6	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	焼土ブロック、炭化物粒を含む

No.	土色	土性	備考
7	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土ブロックを含む
8	10YR4/6 褐	粘質シルト	焼土ブロックを含む　カマド側壁構築土
9	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む
10	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土ブロックを少量含む
11	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　周溝埋土
12	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む　住居掘方埋土

第 61 図　SI91 竪穴住居跡

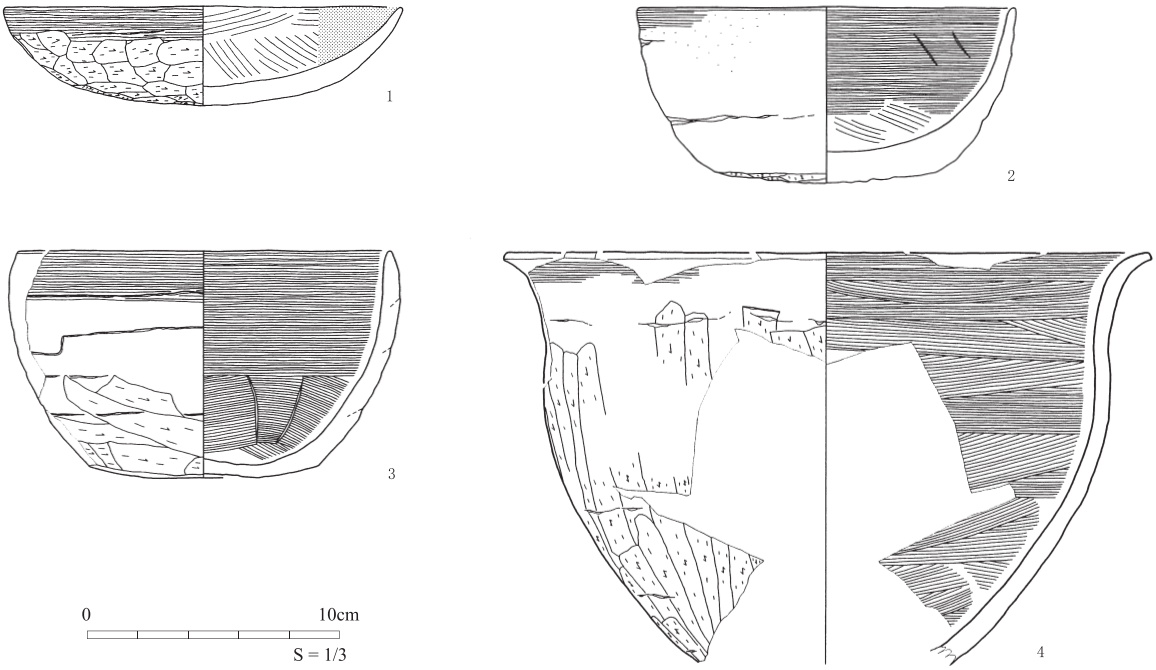
部から先端部に向かって傾斜し、先端部に幅 35cm、奥行 45cm、深さ 53cm の煙出しピット状の窪みを持つ。埋土は旧カマドの機能時堆積と考えられる少量の焼土ブロックを含む黒褐色シルトが厚く堆積し、さらに燃焼部奥壁から煙道上部にかけては旧カマド廃絶時に黄褐色ロームブロックと焼土ブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトにより人為的に埋め戻されたと考えられる。

新カマドの燃焼部は長さ 64cm、幅 78cm で、焚口幅は側壁先端間で 65cm である。燃焼部底面は住居周溝を埋め戻した後に焼土ブロックを含む褐色粘質シルトで構築されており、幅 35cm、奥行 50cm で、底面より 3cm ほど皿状に窪み、奥壁に向かって緩やかに立ち上がる。底面には被熱による赤色化がみられる。側壁は左側壁で長さ 38cm、幅 22cm、高さ 18cm、右側壁で長さ 50cm、幅 24cm、高さ 17cm が残存する。焼土ブロックを含む褐色粘質シルトで構築されており、内側は被熱により赤色化している。右側壁先端には長さ 20cm の凝灰岩切石が据えつけられており、焚口部を構成している。奥壁は住居西壁に一致し、奥壁から西側へ延びる煙道は長さ 150cm で、幅 24 ～ 36cm、深さ 14 ～ 23cm が残存する。煙道底面はほぼ平坦で、先端部に幅 36cm、奥行 20cm、深さ 23cm の煙出しピット状の窪みを持つ。

〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕新カマド構築後の住居内堆積土は 7 層に細分され、いずれも住居廃絶後の自然崩落土ないしは自然堆積土である。旧カマドの堆積土は 3 層に細分され、機能時の堆積土と廃絶時の人為的埋土である。

〔出土遺物〕床面より非ロクロ調整の土師器坏（第 62 図 2）が、住居内堆積土より非ロクロ調整の



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆 1 層	土師器	坏	E 1	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	15.4	—	3.9	9/10	06004	31-6
2	床	土師器	坏	H	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (底面) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	(14.8)	—	6.9	3/5	06083	31-7
3	堆 1 層	土師器	坏	H	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体下部～底) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗﾅﾃﾞ	(15.4)	9.0	8.9	2/3	06076	31-8
4	堆 1 層	土師器	甕	A 2	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	(25.4)	—	(16.1)	1/5	06088	—

第 62 図　SI91 竪穴住居跡出土遺物

土師器坏（第 62 図 1 ・ 3）・甕（第 62 図 4）が出土した。1 は丸底で外面は口縁部横ナデの後に体部にヘラケズリ、内面はヘラミガキの後に黒色処理が施されている。2・3 は平底風丸底で、外面は口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ調整が施されている。内面は 2 が口縁部ヘラナデの後に横ナデ、体部はその後にヘラミガキ、3 は体部ヘラナデの後に口縁部横ナデ調整が施されている。内面は黒色処理が施されていない。4 は口縁部に横ナデ、体部外面にケズリ調整が施されている。

このほか、住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器甕の破片、須恵器坏の破片が、住居内堆積土よりロクロ・非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片と焼成を受けたスサ入り粘土塊が出土した。土師器坏はいずれも内面が黒色処理されている。土師器甕は頸部に段を持ち、口縁部に横ナデ、下半部にケズリ調整が施されているものがある。粘土塊は稲藁状の植物繊維の痕跡がみられた。

B．掘立柱建物跡

【SB66 掘立柱建物跡】（第 63 図、図版 10- 6 ）

〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

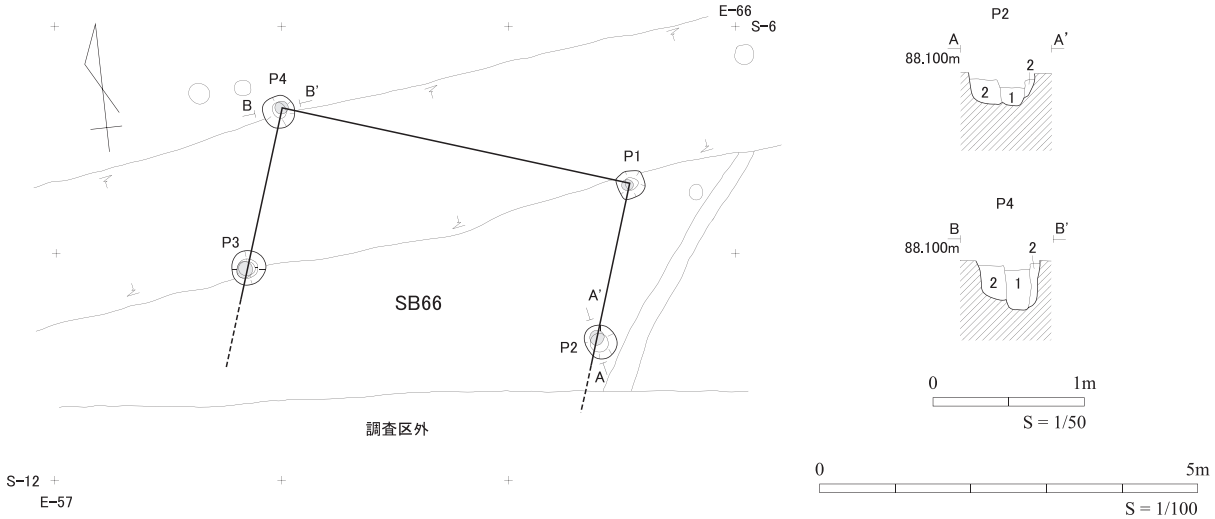
〔規模・形状〕東西 1 間 (総長 4.7m)、南北 1 間 (総長 2.2m) 以上の建物跡で、調査区外の南側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 40 ～ 44cm、短軸 40cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 10 ～ 30cm である。いずれも平面形が直径 12 ～ 20cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列で 220cm、北側柱列で 470cm である。

〔方向〕西側柱列：N - 19° - E

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB66掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SB66掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 63 図　SB66 掘立柱建物跡

【SB67 掘立柱建物跡】（第 64 図、図版 10- 7 ）

〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間の柱列の東側に東西 1 間、南北 1 間の張り出しが付く。調査区外北側に展開する東廂付き建物跡の可能性がある。

〔柱穴〕身舎とみられる部分で 3 基、廂と見られる部分で 3 基確認し、このうち身舎の 2 基 (P4・6)、廂部の 2 基 (P1・3) を調査した。身舎の柱穴掘方は長軸 32 ～ 40cm、短軸 32 ～ 34cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 24 ～ 32cm である。いずれも平面形が 14 ～ 15cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。廂部の柱穴掘方は平面形が長軸 28 ～ 40cm、短軸 24 ～ 28cm の楕円形を呈し、深さは 15cm である。いずれも平面形が 12 ～ 14cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕身舎東西柱列で西から 220-210cm、廂の出は 110cm、廂部の東側柱列で 100cm である。

〔方向〕身舎東西柱列：E - 3° - S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

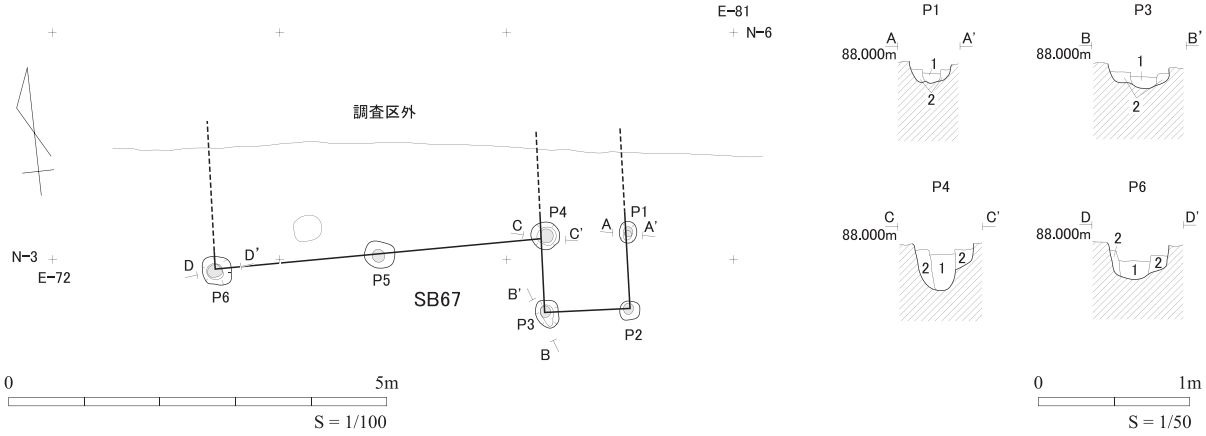
【SB68 掘立柱建物跡】（第 65 図、図版 10- 8 ）

〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SD69 ― SA96 ―《SB68》― SK71

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びているため全体の形状は不明だが、東西 4 間 (総長 7.8m)、南北 1 間 (総長 2.4m) 以上の南廂付建物跡である。

〔柱穴〕身舎で 6 基、廂部で 3 基確認し、このうち身舎の柱穴 4 基 (P1・2・5・6) を調査した。身舎の柱穴掘方は平面形が長軸 32 ～ 41cm、短軸 27 ～ 38cm の楕円形ないしは隅丸方形を呈し、深さは 27 ～ 36cm である。いずれも平面形が 14 ～ 20cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡



SB67掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SB67掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB67掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SB67掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

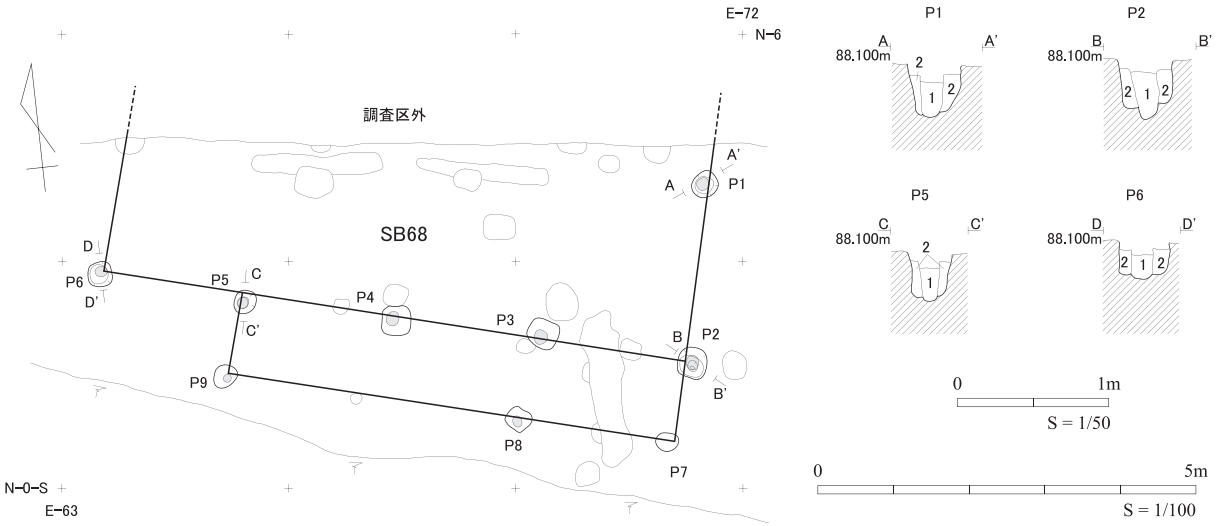
第 64 図　SB67 掘立柱建物跡

の深さは 27 ～ 40cm で、掘方底面に接するものと 3 ～ 10cm 程度沈み込んでいるものとがある。廂部の柱穴掘方は平面形が長軸 30 ～ 32cm、短軸 20 ～ 22cm の楕円形ないしは隅丸方形を呈し、身舎の柱穴掘方よりも規模は小さい。2 基で平面形が 10 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕身舎南側柱列で東から 190 - 200 - 200 - 190cm、東側柱列で 235cm である。廂の出は 100 ～ 110cm である。

〔方向〕南側柱列：E - 15° - S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB68掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB68掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

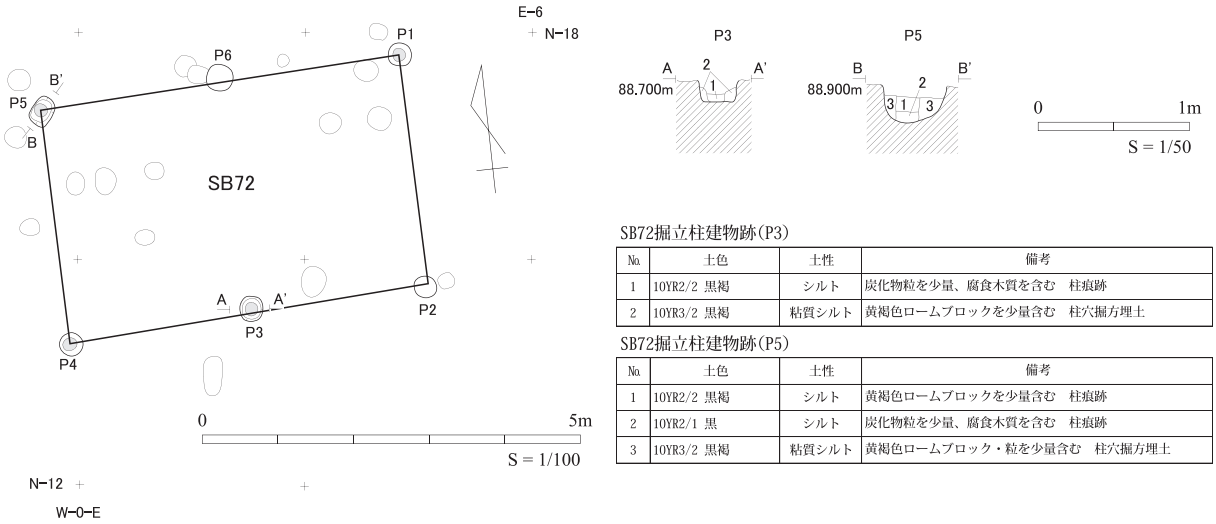
SB68掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB68掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

第 65 図　SB68 掘立柱建物跡



SB72掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	炭化物粒を少量、腐食木質を含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SB72掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	炭化物粒を少量、腐食木質を含む　柱痕跡
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱穴掘方埋土

第 66 図　SB72 掘立柱建物跡

【SB72 掘立柱建物跡】（第 66 図、図版 11- 1 ）

〔位置・確認面〕S3 中区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間 (桁行総長 4.8m)、南北 1 間 (梁行総長 3.0m) の東西棟建物跡である。

〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は直径 28 ～ 38cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 14 ～ 24cm である。このうち 4 基で平面形が直径 14 ～ 20cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北側柱列で 240 - 240cm、西側柱列で 300cm である。

〔方向〕北側柱列：E - 3° - N

〔出土遺物〕柱痕跡より土師器の小破片が出土した。

【SB95 掘立柱建物跡】（第 67 図）

〔位置・確認面〕S3 中区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

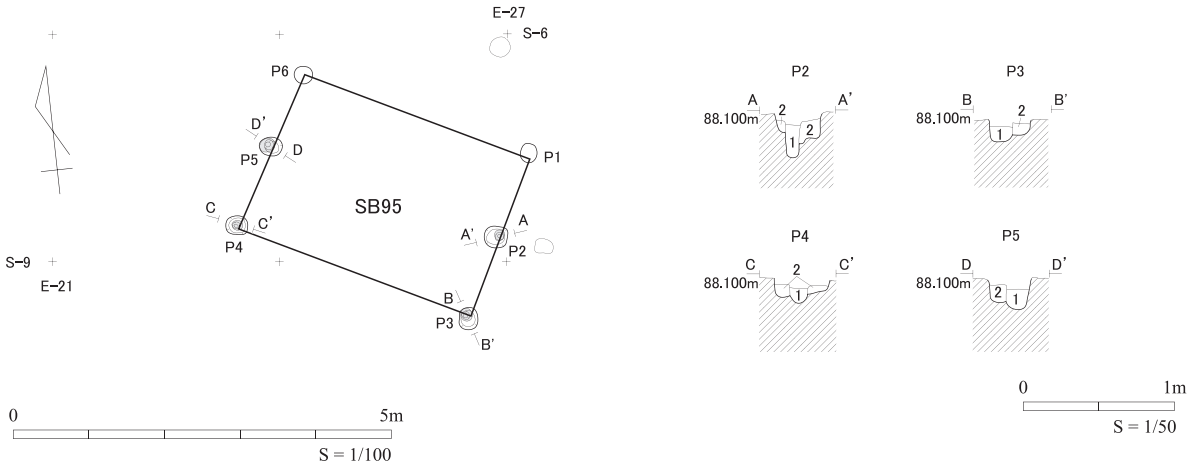
〔規模・形状〕東西 1 間 (梁行総長 3.2m)、南北 2 間 (桁行総長 2.2m) の東西棟建物跡である。

〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は直径 28 ～ 36cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 12 ～ 24cm である。このうち 4 基で平面形が直径 10 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 15 ～ 28cm で、掘方底面より深く沈みこむ。

〔柱間寸法〕北側柱列で 320cm、西側柱列で 110 - 110cm である。

〔方向〕E - 27° - S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB95掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB95掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB95掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SB95掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 67 図　SB95 掘立柱建物跡

C．柱列跡

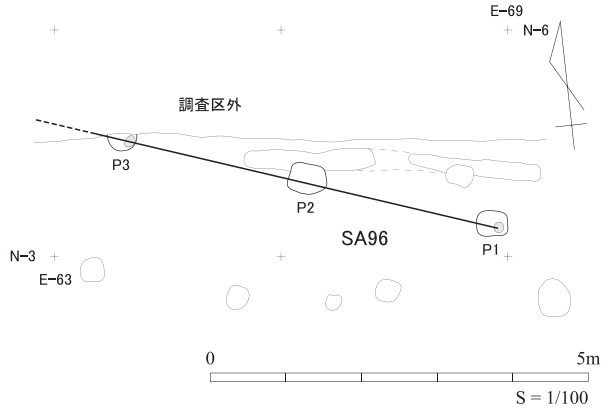
【SA96 柱列跡】（第 68 図）

〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SD69 →《SA96》— SB68 — SK71

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 5.0m) 以上の柱列跡で、調査区外の西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方の平面形は長軸 40 ～ 50cm、短軸 34 ～ 40cm の隅丸方形を呈する。2 基で平面形が直径 12 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。



第 68 図　SA96 柱列跡

〔柱間寸法〕東から 260 ‐ 240cm である。

〔方向〕E ‐ 19° ‐ S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

D．落し穴状土坑

落し穴状土坑は S3 西区の東斜面で 3 基確認された。第 6 表に特徴を示す。

E．土坑

土坑は 14 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 7・8 表に特徴を示す。

【SK56 土坑】（第 69 図、図版 11- 2）

〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南側が調査区外に延びるため全体の形状は不明だが、平面形は東西 100cm、南北 100cm 以上の楕円形を呈するとみられる。断面形は U 字状を呈し、深さは 20cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 2 層に細分される。1 層は黄褐色ロームブロックを少量含む黒色シルト、2 層は黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルトで、1 層は自然堆積土、2 層は壁際の崩落土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK61 土坑】（第 70 図、図版 11- 3・4）

〔位置・確認面〕S3 中区の南緩斜面に立地する。Ⅲ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 84cm、短軸 58cm の不整形である。断面形は浅い皿状を呈し、深さは 20cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 4 層に細分される。1 層は焼土ブロックを若干含む黒褐色シルト、2 層は焼土ブロッ

クを多く含む黒色シルト、3層は焼土粒を少量含む灰層を主体とする黄灰色シルト、4層は均質な焼土層を主体とする明赤褐色シルトである。底面と壁面に被熱による赤色化はみられない。

〔出土遺物〕堆積土4層より鉄製の短刀が出土した。

【SK64土坑】（第71図、図版11- 5）

〔位置・確認面〕S3東区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

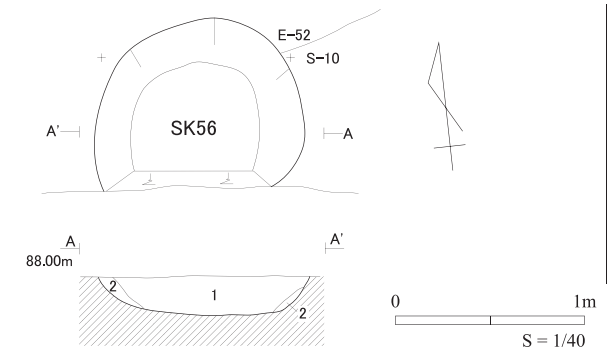
〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸140cm、短軸90cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形状を呈し、深さは20cmである。

〔底面〕底面は平坦である。

〔堆積土〕堆積土は1層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色シルトである。

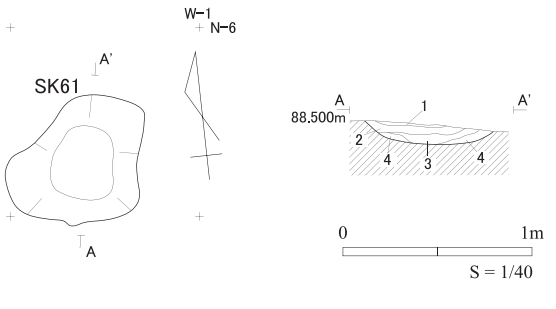
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SK56土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む

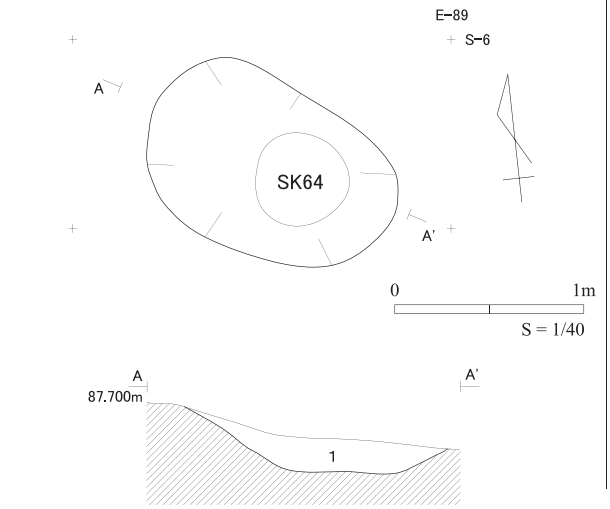
第69図　SK56土坑



SK61

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土ブロックを少量含む
2	10YR2/1 黒	シルト	焼土ブロックを多量に含む
3	2.5Y4/1 黄灰	シルト	ワラ状の灰層　焼土粒を少量含む
4	5YR5/6 明赤褐	シルト	均質な焼土層

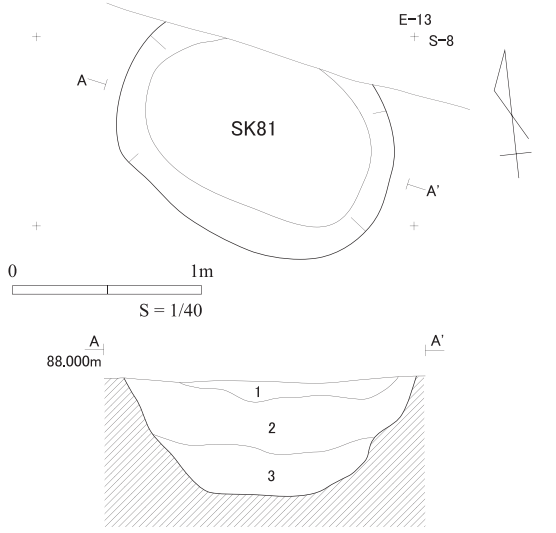
第70図　SK61土坑



SK64土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む

第71図　SK64土坑



SK81土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
2	2.5Y3/1 黒褐	粘質シルト	グライ化した黄褐色ロームブロックを少量含む
3	2.5Y3/2 黒褐	粘土	グライ化した黄褐色ロームブロックを含む

第72図　SK81土坑

【SK81 土坑】（第 72 図、図版 11- 6）
〔位置・確認面〕S3 中区東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。
〔重複〕《SK81》・SK90 → SD80
〔規模・形状〕北東側の一部が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 155cm、短軸 100cm 以上の楕円形を呈していたとみられる。
〔底面〕皿状を呈する。
〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。1 層は黄褐色ロームブロックを含む暗褐色シルト、2 層はグライ化した黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色粘質シルト、3 層はグライ化した黄褐色ロームブロックを含む黒褐色粘土である。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

Ｆ．溝跡

溝跡は 15 条が確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

【SD55 溝跡】（第 73 図、図版 11- 7）
〔位置・確認面〕S3 東区の東緩斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕長さ 42.5m の東西・南北方向の溝跡で、西側でほぼ直角に南に折れる。一部途切れるが、調査区外の東側と南側へ延びている可能性が高い。東西の長さ 35m、南北の長さ 7.5m である。上端幅 20 ～ 30cm、下端幅 15cm で断面形は浅い皿状を呈し、深さは 4 ～ 10cm である。
〔方向〕東西・南北方向
〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒色シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
【SD73 溝跡】（第 74 図、図版 11- 8）
〔位置・確認面〕S3 中区の東緩斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕SK77 → SD79 →《SD73》→ SD74 → SD75
〔規模・形状〕長さ 12m 以上の南北溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅 90 ～ 120cm、下端幅 30cm で断面形は東側に段の付く逆台形状を呈し、深さは 30cm である。
〔方向〕北東 - 南西方向（SD75 と方向を揃える）
〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色粘質シルトである。
〔出土遺物〕堆積土より土師器の小破片が出土した。頸部に屈曲を持つ口縁部破片で、内外面にナデ調整が施されている。
【SD74 溝跡】（第 74 図、図版 11- 8）
〔位置・確認面〕S3 中区の東緩斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。
〔重複〕SK77 → SD79 → SD73 →《SD74》→ SD75
〔規模・形状〕長さ 6.7m 以上の南北溝跡で、上端幅 30 ～ 90cm である。
〔方向〕北東 - 南西方向

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色(10YR3/1)シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SD75 溝跡】（第 74 図、図版 11- 8）

〔位置・確認面〕S3 中区の東緩斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SK77 → SD79 → SD73 → SD74 →《SD75》

〔規模・形状〕長さ 19m 以上の南北溝跡で、調査区外の南北へ延びている。調査区北端部で東に 50° 屈曲する。上端幅 80 ～ 140cm、下端幅 30 ～ 50cm で断面形は西側が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈し、深さは 15cm である。

〔方向〕北東 - 南西方向（SD73 と方向を揃える）

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色(10YR3/1)シルトである。

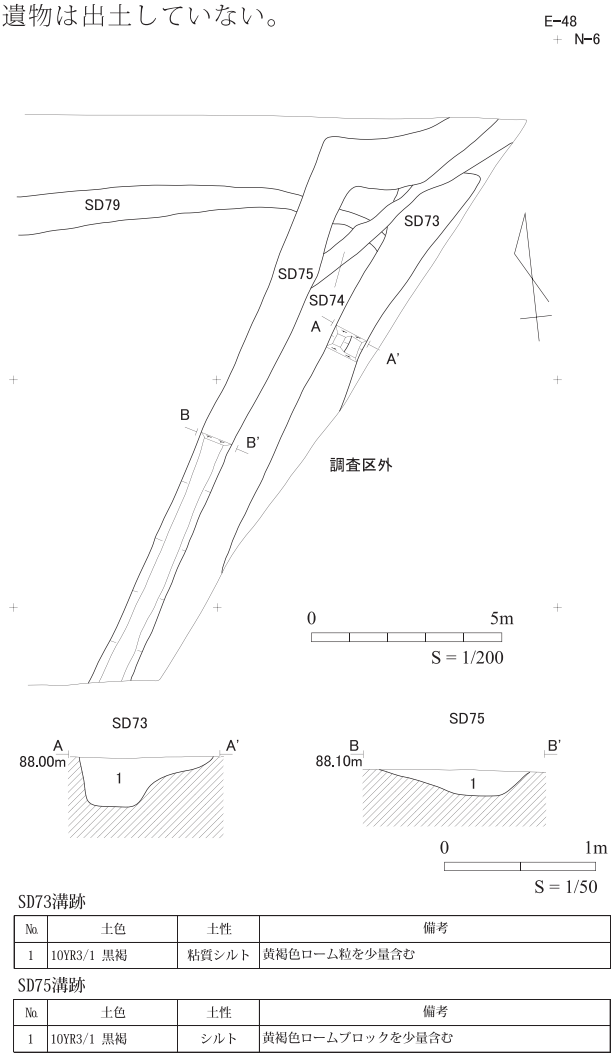
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SD55溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む

第 73 図　SD55 溝跡



SD73溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

SD75溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む

第 74 図　SD73・SD74・SD75 溝跡

（4）N 1区

遺跡の立地する丘陵東斜面の中腹部を南北に横断する。北区、南区を設定して調査を行なった（第75図）。南区は後世の切土により黄褐色ロームが露出し、遺構は確認されない。北側は黒ボク土が堆積する南向き斜面で、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、落し穴状土坑1基、土坑1基、溝跡1条が確認された。いずれも平面プランのみの確認である。

A．竪穴住居跡

【SI301 竪穴住居跡】（第75図、図版12- 3）

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕一部調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、南北4.2m、東西4.3m以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N－3°－E

〔カマド〕住居北壁やや東寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存し、煙道は調査区外の北側へ延びている。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトである。

〔出土遺物〕確認面より非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。土師器坏は丸底風平底で内面に黒色処理が施されているものと、内外面にミガキ調整と赤彩が施されているものがある。土師器甕は外面にハケメがみられるものがある。

【SI302 竪穴住居跡】（第75図、図版12- 3）

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西3.5m、南北4.5mの方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E－4°－S

〔カマド〕住居東壁の南寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム・炭化物粒と小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI303 竪穴住居跡】（第75図、図版12- 5）

〔位置・確認面〕N1北区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕SI304 →《SI303》― SB306 → SD307

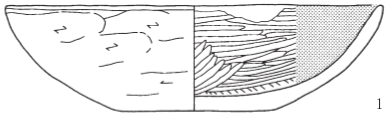
〔規模・形状〕東西4.8m、南北4.3mの方形を呈する。

〔方向〕西辺：N－2°－E

〔カマド〕不明

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム・炭化物粒と小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルトである。

〔出土遺物〕確認面より非ロクロ調整の土師器高杯・壺・甕、ミニチュア土器の破片が出土した。高杯と壺は内外面にミガキ調整と赤彩が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されている。



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	煙出ピット	土師器	坏	E３	外：(体～底) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	(14.8)	(6.4)	(4.2)	1/5	06023	—

第 76 図　SI305 竪穴住居跡出土遺物

【SI304 竪穴住居跡】（第 75 図、図版 12- 5）

〔位置・確認面〕N1 北区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI304》→ SI303 ― SB306 ― SD307

〔規模・形状〕重複により一部残存しないが、東西 5.2m、南北 5.2m の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕東辺：N - 35° - W

〔カマド〕住居西壁の南寄りに設置されている。燃焼部と煙道が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は小礫を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。

〔出土遺物〕確認面より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。球胴を呈し、外面にミガキ調整が施されているものと、ハケメが見られるものとがある。

【SI305 竪穴住居跡】（第 75・76 図、図版 12- 2）

〔位置・確認面〕N1 北区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI305》→ SK309

〔規模・形状〕東側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 2.0m 以上、南北 4.5m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕西辺：N - 10° - W

〔カマド〕住居北壁に設置されている。燃焼部と煙道が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒と小礫を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。

〔出土遺物〕煙道煙出しピット部の確認面より非ロクロ調整の土師器坏（第 76 図）が出土した。外面はヘラケズリ調整が施され、内面は黒色処理が施されている。

B．掘立柱建物跡

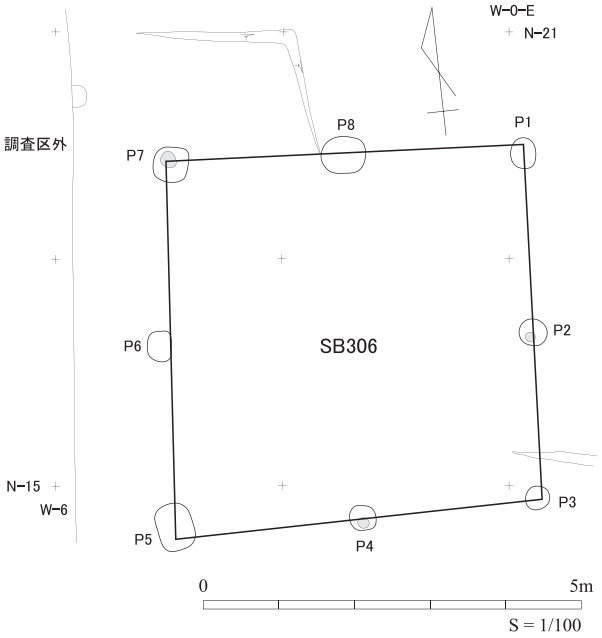
【SB306 掘立柱建物跡】（第 77 図、図版 12- 4）

〔位置・確認面〕N1 北区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。平面プランのみの確認である。

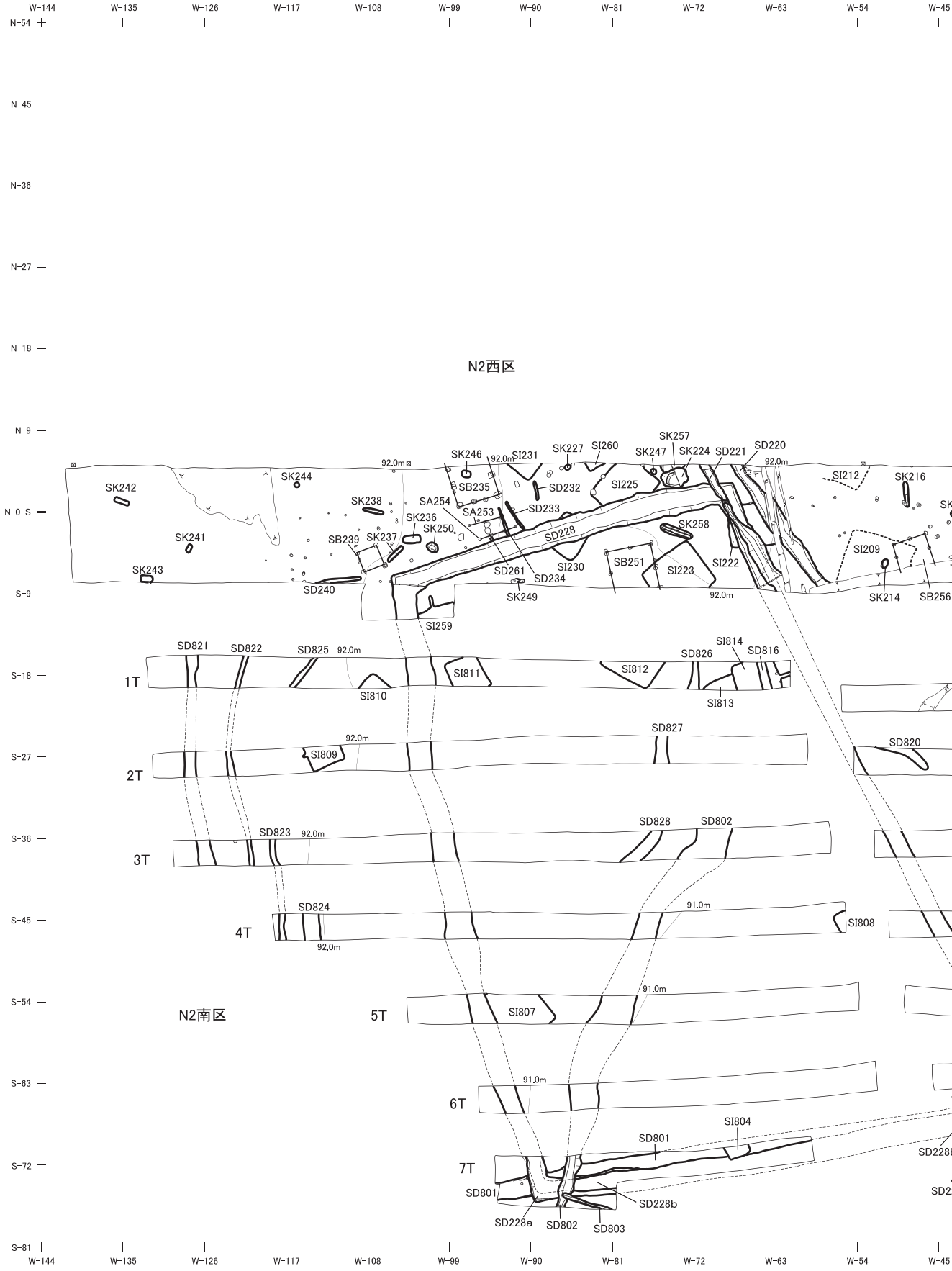
〔重複〕SI304 → SI303 ―《SB306》― SD307

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 4.6m)、南北 2 間 (総長 4.9m) の建物跡である。

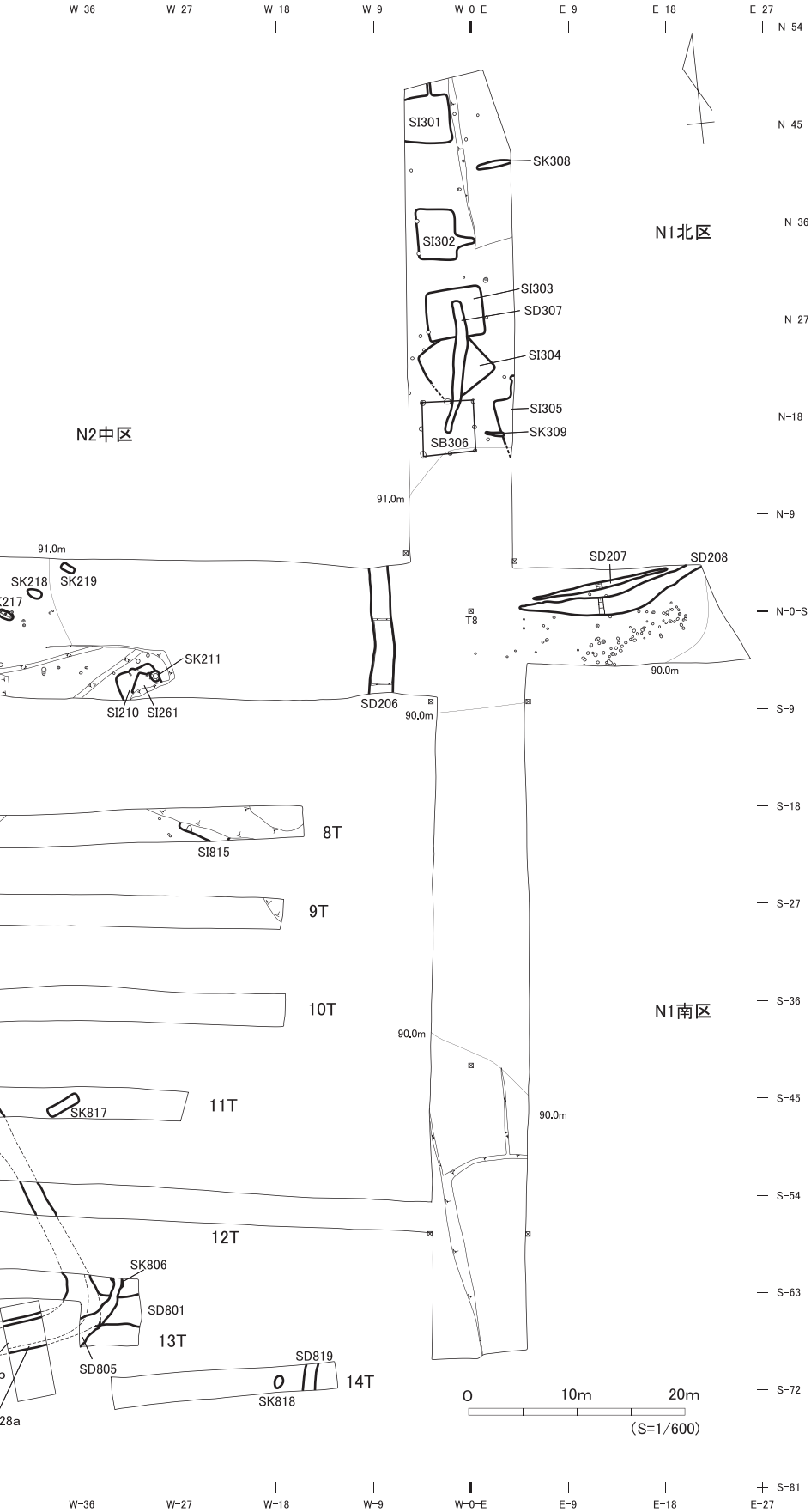
〔柱穴〕8 基確認した。掘方の平面形は直径 34 ～ 60cm の円形ないしは楕円形を呈し、このう



第 77 図　SB306 掘立柱建物跡



第 75 図　N 1 北・南、N 2 西・中・南区遺構配置図


W-36
W-27
W-18
W-9
W-0-E
E-9
E-18
E-27
N-54
N-45
N-36
N-27
N-18
N-9
N-0-S
S-9
S-18
S-27
S-36
S-45
S-54
S-63
S-72
S-81
N1北区
N2中区
N1南区
SI301
SK308
SI302
SI303
SD307
SI304
SI305
SB306
SK309
91.0m
SK218
SK219
SK211
SI210
SI261
SD206
90.0m
SD207
SD208
T8
8T
SI815
9T
10T
SK817
11T
12T
SK806
SD801
13T
SD805
SD819
14T
SK818
28a
0
10m
20m
(S=1/600)

ち３基で平面形が直径９～ 12cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。
〔柱間寸法〕東側柱列で北から 240 - 220cm、南側柱列で西から 250 - 240cm である。
〔方向〕東側柱列：N - 3° - E
〔出土遺物〕P4 確認面より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

C．落し穴状土坑

【SK308 落し穴状土坑】（第 75 図、図版 12- ３）
〔位置・確認面〕N1 北区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 310cm 以上、短軸 60cm の溝状を呈する。
〔方向〕東西方向
〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

D．土坑

【SK309 土坑】（第 75 図、図版 12- ２）
〔位置・確認面〕N1 北区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。平面プランのみの確認である。
〔重複〕SI305 →《SK309》
〔規模・形状〕平面形は長軸 160cm 以上、短軸 30cm の溝状を呈する。
〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロックを含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

E．溝跡

【SD307 溝跡】（第 75 図、図版 12- ５）
〔位置・確認面〕N1 北区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。平面プランのみの確認である。
〔重複〕SI304 → SI303 ― SB306 →《SD307》
〔規模・形状〕長さ約 12.1m の南北溝跡である。上端幅 45 ～ 110cm である。
〔方向〕南北方向
〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロック、焼土・炭化物粒を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

（５）Ｎ２区

遺跡の立地する丘陵中腹を東西に横断する。西区、中区、東区、南区を設定して調査を行なった（第 75・78 図）。西区は丘陵頂部の平坦面にあたり、西部は削平により黄褐色ロームが露出しているが、東部は黒ボク土と漸移層が良好に残存する。中区、東区は東向きの緩傾斜地で、黒ボク土が厚く堆積

する。遺構は西区東部の平坦面を中心として中区、東区にも若干分布し、竪穴住居跡 12 軒、掘立柱建物跡 6 棟、柱列跡 3 条、落し穴状土坑 8 基、土坑 14 基、大溝跡 4 条、溝跡 11 条が確認された。以下、主要な遺構について述べる。

A．竪穴住居跡

【SI201a 竪穴住居跡】（第 79 図、図版 13- 5）

〔位置・確認面〕N2 東区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SD205・《SI201a》→ SI201b

〔規模・形状〕東西 4.7m、南北 3.9m の方形を呈する。

〔方向〕西辺：N - 2° - W

〔壁面〕残存しない。

〔床面〕SI201b との重複によりほとんど残存しないが、北東部の東西 120cm、南北 120cm の範囲に黄褐色ロームブロックを含む硬化層が形成されており、貼床の痕跡の可能性がある。

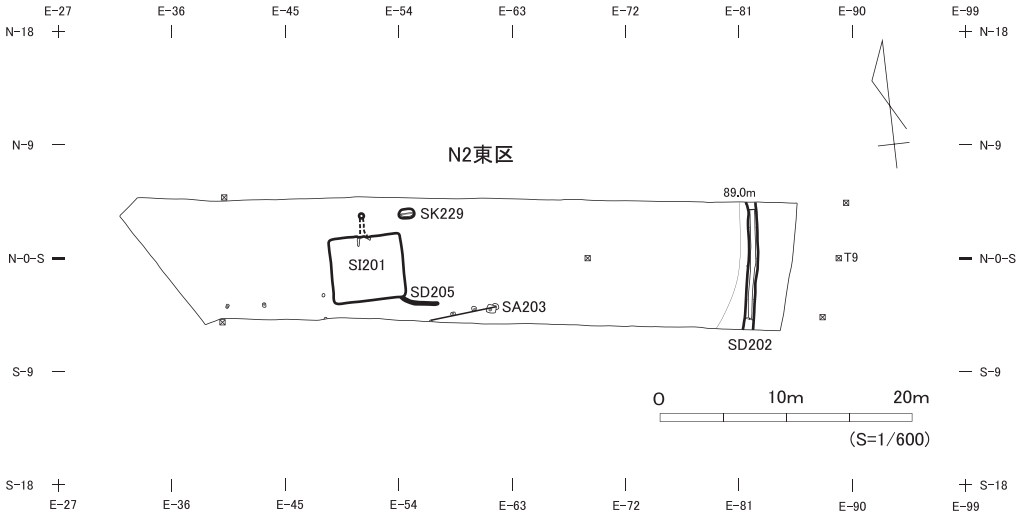
〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に 120 ～ 150cm の位置で柱穴 4 基 (P11 ～ 14) を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は長軸 26 ～ 40cm、短軸 28 ～ 38cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 22 ～ 30cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、柱痕跡は残存しない。

〔壁柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 12 ～ 32cm、下端幅 10 ～ 28cm、確認面からの深さ 12cm で断面形が U 字形を呈する周溝がほぼ全周する。西辺と南辺の底面に平面形が直径 10 ～ 18cm の円形を呈する壁材痕跡が点在して確認されることから、SI201b 構築時に壁材の抜き取りが行なわれたと考えられる。

〔カマド・炉・貯蔵穴〕不明

〔その他〕SI201b との重複により確認できないが、住居南東コーナー部から東に延びる SD205 は SI201a に伴う外延溝であった可能性がある。



第 78 図　Ｎ２東区遺構配置図

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕床面より非ロクロ調整の土師器坏の破片が出土した。外面に横ナデとケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

【SI201b 竪穴住居跡】（第 80・81・82・83 図、図版 13- 6 ～ 8 ）

〔位置・確認面〕N2 東区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SD205・SI201a →《SI201b》

〔規模・形状〕東西 5.6m、南北 5.0m の方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：N - 2° - W

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南壁で床面から 14cm である。



SI201a竪穴住居跡(P12)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き穴
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き穴

SI201a竪穴住居跡(P13)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き穴
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	柱痕跡
3	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SI201a竪穴住居跡(P15)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き穴

SI201a竪穴住居跡(P14)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き穴
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き穴
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SD205溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む

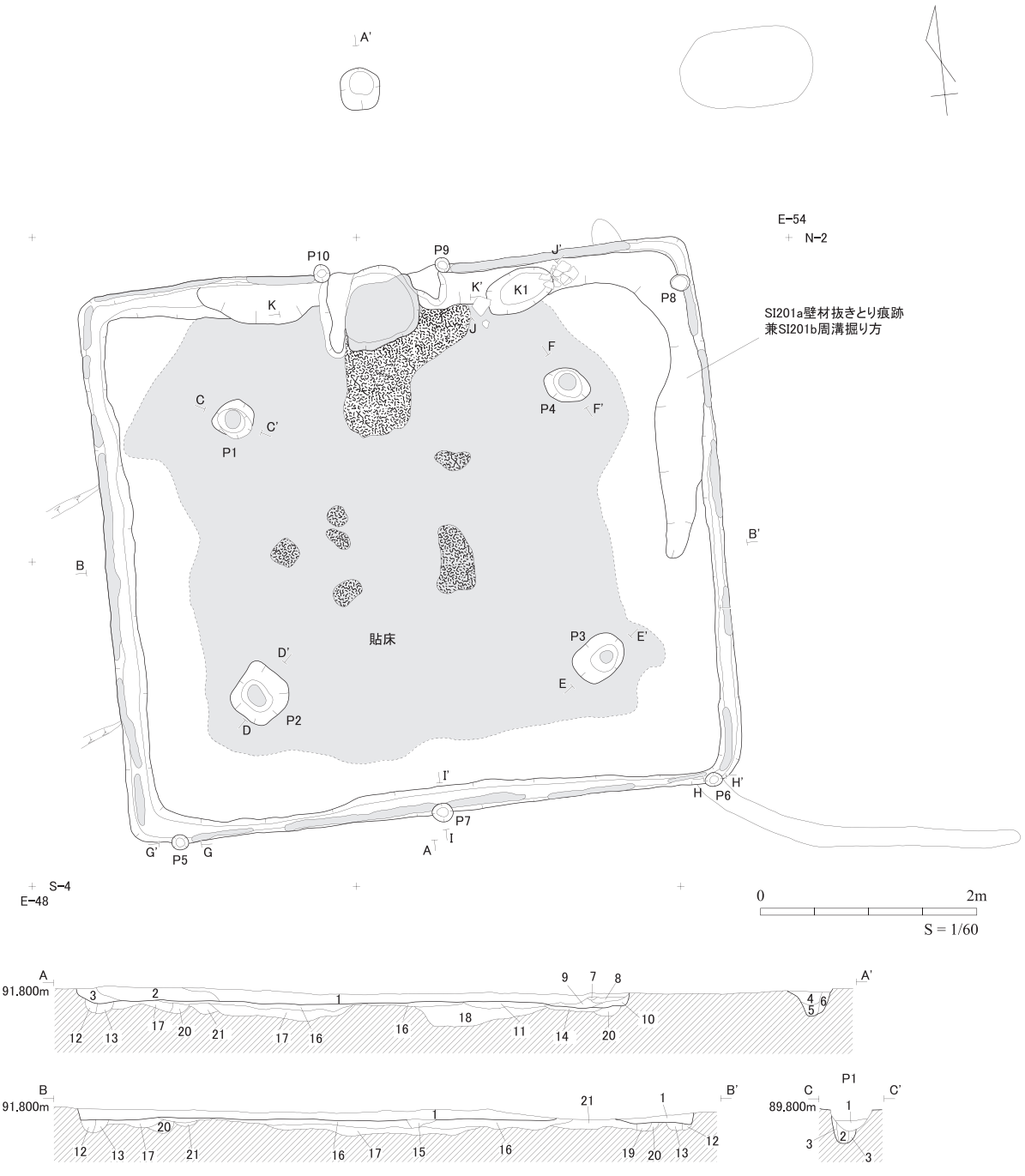
0　2m

S = 1/60

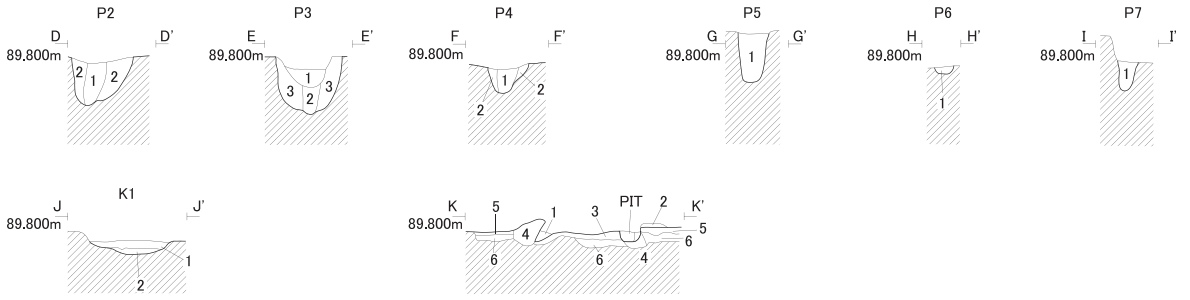
第 79 図　SI201a 竪穴住居跡・SD205 溝跡

〔床面〕黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床としている。ほぼ平坦である。中央部の東西 4m、南北約 4m の範囲に黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色砂質シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に 150 ～ 160cm の位置で柱穴 4 基 (P1 ～ 4) を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は長軸 35 ～ 48cm、短軸 30 ～ 40cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 23 ～ 45cm である。いずれも平面形が直径 15cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。また、このうち 2 基では柱材の抜き取り痕跡が確認された。



第 80 図　SI201b 竪穴住居跡 (1)



SI201b竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI201b竪穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI201b竪穴住居跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む　柱穴掘方埋土

SI201b竪穴住居跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色粘土ブロックを含む　柱抜き取り痕跡

SI201b竪穴住居跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色粘土ブロックを含む　柱抜き取り痕跡

SI201b竪穴住居跡)(P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色粘土ブロックを含む　柱抜き取り痕跡

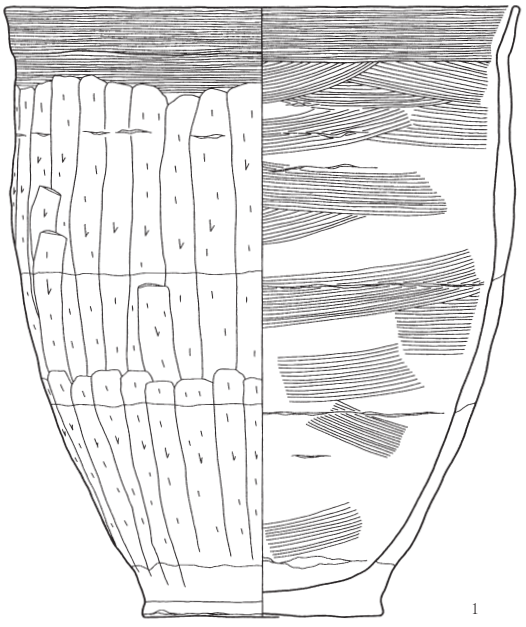
SI201b竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む
2	7.5YR3/4 暗褐	粘質シルト	焼土ブロックを多量に、黄色粘土ブロックを含む

SI201b竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR4/6 褐	粘質シルト	焼土粒を少量含む　カマド崩落土
3	5YR4/6 赤褐	シルト	焼土ブロック・粒を多量に含む
4	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色粘土を主体とする　カマド側壁構築土
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒、焼土粒を含む　住居貼床
6	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む　SI201a周溝埋土

第 81 図　SI201b 竪穴住居跡 (2)



0　10cm

S = 1/3

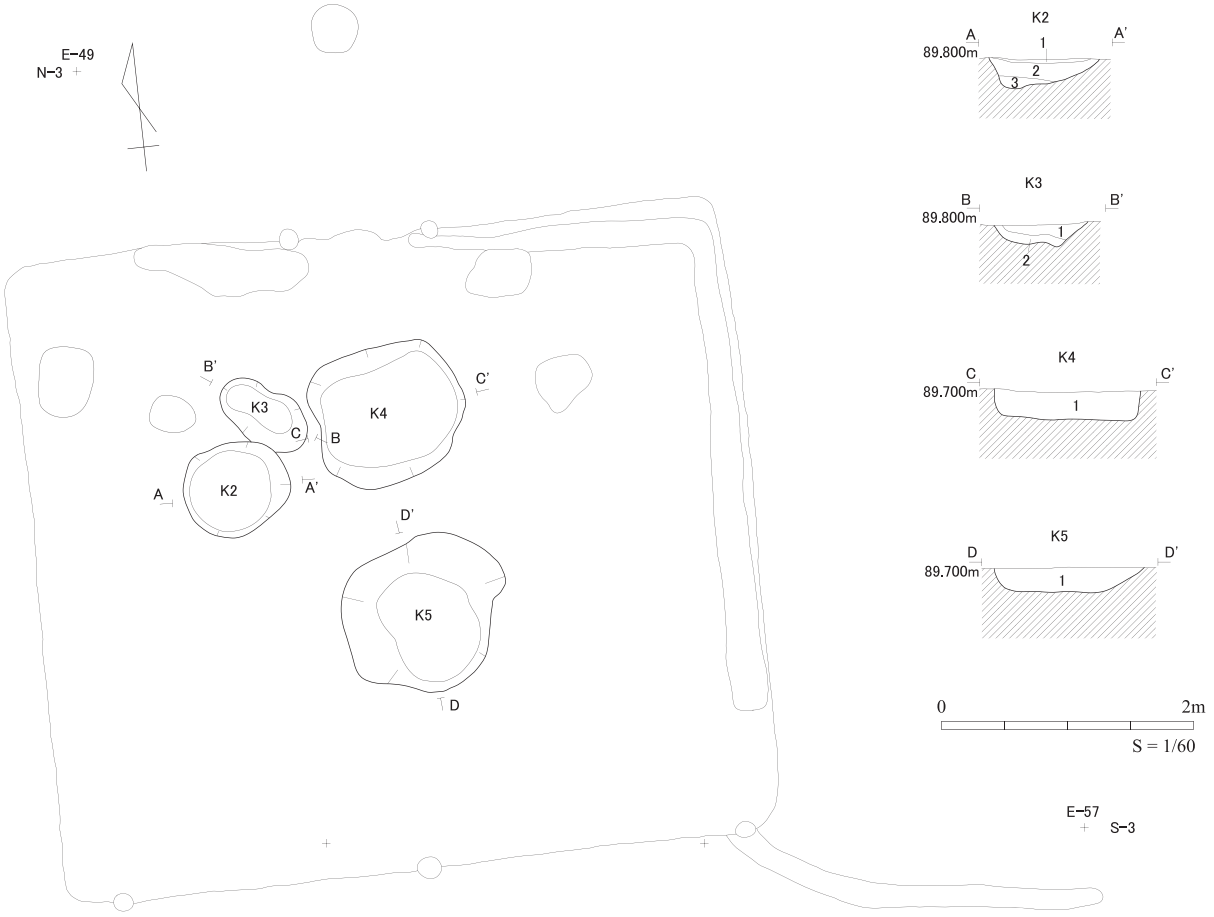
No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	床	土師器	甕	D	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(胴) ｹｽﾞﾘ (底面) 木葉痕→ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾅﾃﾞ	(20.2)	9.4	24.05	3/5	06043	32-1

第 82 図　SI201b 竪穴住居跡出土遺物

〔壁柱穴〕住居北壁のカマド両側壁との接続部で２基、北東コーナー部で１基、南壁で３基の柱穴を確認した (P5 ～ 10)。掘方の平面形は直径 15 ～ 18cm の円形を呈し、住居確認面からの深さは 30 ～ 50cm である。位置と形状、規模から壁柱穴と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 14 ～ 20cm、下端幅８～ 16cm、確認面からの深さ８～ 12cm で断面形が U 字形を呈する周溝が全周する。北辺と東辺の一部では SI201a の壁材抜き取り溝が周溝を兼ねている。幅８～ 10cm、深さ８～ 12cm の壁材痕跡が断続的に確認される。周溝の堆積土は黄褐色ロームブロックを含む黒色・黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔カマド〕住居北壁中央に設置されている。燃焼部と煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ 80cm、幅 114cm で、焚口幅は側壁先端間で 95cm である。燃焼部底面は幅 65cm、奥行 72cm で、床面より 4cm ほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左側壁で長さ 78cm、幅 25cm、高さ 20cm、右側壁で長さ 37cm、幅 32cm、高さ 13cm が残存する。黄褐色ロー



SI201b竪穴住居跡(K2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む SI201b住居貼床
2	7.5YR4/4 褐	粘質シルト	焼土ブロック、炭化物粒を多量に、黄褐色ロームブロックを含む　人為的埋土
3	10YR2/1 黒	砂質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　人為的埋土

SI201b竪穴住居跡(K3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	焼土ブロックを多量に、黄褐色ロームブロック、炭化物粒を含む　人為的埋土
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む人為的埋土

SI201b竪穴住居跡(K4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

SI201b竪穴住居跡(K5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 83 図　SI201b 竪穴住居跡 (3)

ムで構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁は住居北壁とほぼ一致する。煙道部は残存しないが、奥壁の北側 145cm の位置に長軸 38cm、短軸 35cm、深さ 24cm のピットが確認された。位置関係から煙出しピットと考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑 1 基 (K1) が確認された。平面形は長軸 65cm、短軸 38cm の楕円形を呈している。深さ 18cm で底面は皿状を呈する。床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は焼土ブロックを多く含む自然堆積土である。

〔床下土坑〕住居掘方底面で土坑 4 基 (K2 ～ K5) を確認した。K2・K3 は住居北西部で確認した。K1 は平面形が長軸 83cm、短軸 73cm の楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ 21cm である。K2 は平面形が長軸 75cm、短軸 45cm の楕円形を呈する。断面形は U 字形を呈し、深さ 15cm である。K3 は住居中央部北寄りで確認した。平面形は長軸 125cm、短軸 110cm の楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ 25cm である。K4 は住居中央部南寄りで確認した。平面形は長軸 140cm、短軸 120cm の不整楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ 20cm である。埋土はいずれも黄褐色ロームブロックと焼土ブロックを含む人為的埋土で、住居掘方埋土に類似する。

〔堆積土〕住居内堆積土は 10 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕貯蔵穴脇の床面より非ロクロ調整の土師器甕（第 82 図）が出土した。口縁部に横ナデ、胴部にケズリ調整が施されている。外底面には木葉痕がみられる。

　このほか、床面・住居掘方埋土・貯蔵穴堆積土・カマド崩落土・燃焼部底面より土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にケズリ調整が施され、底面に木葉痕がみられるものと、外面の頸部に沈線がめぐり、ハケメ調整が施されているものとがある。須恵器甕は外面に平行タタキ目が、内面に同心円状押さえ具痕がみられる。

【SI209 竪穴住居跡】（第 84 図、図版 14- 1 ）

〔位置・確認面〕N2 中区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SK214 ―《SI209》― SB256

〔規模・形状〕南側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 7.0m、南北 6.0m 以上の方形を呈していたとみられる。掘方埋土のみが残存する。

〔方向〕西辺：N‐24°‐E

〔壁面・床面〕残存しない。

〔主柱穴〕住居平面形の推定対角線上でコーナー部より内側に 150 ～ 170cm の位置で柱穴 2 基 (P1・2) を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。いずれも柱材の抜き取り痕跡が認められ、P1 は掘方が残存しない。P2 の掘方の平面形は長軸 45cm、短軸 30cm の隅丸方形を呈し、確認面からの深さは 73cm である。平面形が直径 15cm の円形を呈し、掘方底面より 15cm ほど沈み込む柱痕跡が確認された。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔炉〕住居北西部の黄褐色ロームが長軸 23cm、短軸 18cm の範囲で皿状に窪み、被熱による赤色硬化がみられる。炉底面と考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕掘方埋土より土師器破片が、遺構確認面より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

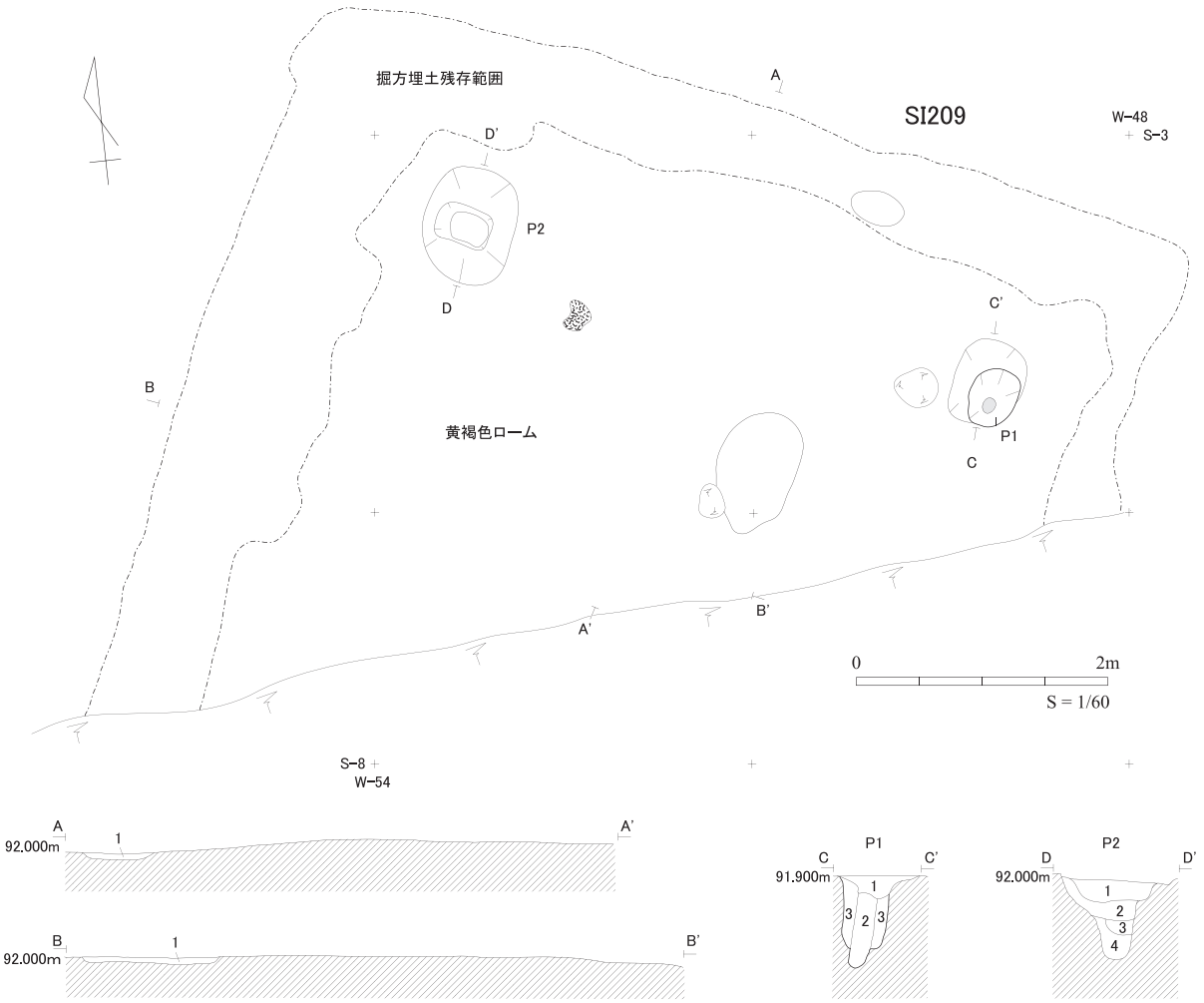
【SI210 竪穴住居跡】（第 85・86 図、図版 14- 2 ・ 3）

〔位置・確認面〕N2 中区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕《SI210》→ SI261 → SK211

〔規模・形状〕南側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 3.2m、南北 2.2m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N - 14° - W



SI209竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を均質に含む　住居掘方埋土

SI209竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱切り取り穴
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
3	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロック多量に含む　柱穴掘方埋土

SI209竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱抜き穴
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱抜き穴
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き穴
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱抜き穴

第 84 図　SI209 竪穴住居跡

〔壁面〕Ⅳ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な西壁で床面から 13cm である。

〔床面〕白色粘土・黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床とする。南東に向かってわずかに傾斜する。

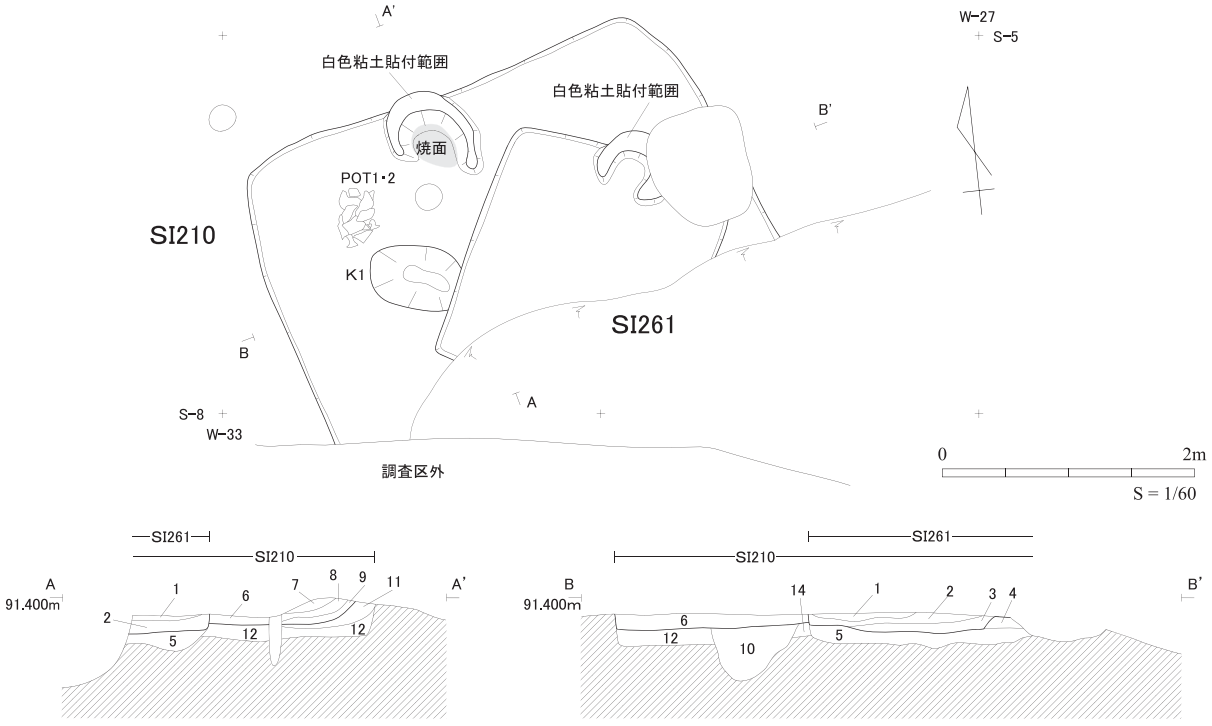
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕北壁中央に設置されており、燃焼部が残存する。燃焼部は長さ 56cm、幅 110cm で、焚口幅は側壁先端間で 75cm である。燃焼部底面は残存しない。側壁は左側壁で長さ 52cm、右側壁で長さ 30cm が残存する。掘方埋土を掘り込んで黄褐色ロームブロックを含む黒褐色粘質シルトにより構築されている。奥壁は住居北壁より 15cm ほど張り出す。

〔貯蔵穴〕なし

〔その他〕住居中央やや西寄りの床面で土坑 1 基 (K1) を確認した。平面形は長軸 60cm、短軸 30cm の楕円形を呈する。断面形はＶ字形を呈し、深さ 42cm である。堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックと炭化物粒を含む黒褐色シルトである。人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は 4 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。



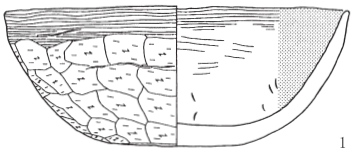
SI210・261竪穴住居跡

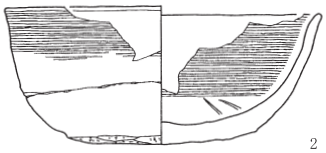
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　SI261堆積土
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、焼土粒、炭化物粒を少量含む　SI261堆積土
3	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	焼土粒、炭化物粒を少量、白色粘土を含む　SI261堆積土
4	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	白色粘土を多量に、焼土粒、炭化物粒を少量含む SI261カマド側壁構築土
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　SI261住居掘方埋土
6	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SI210堆積土

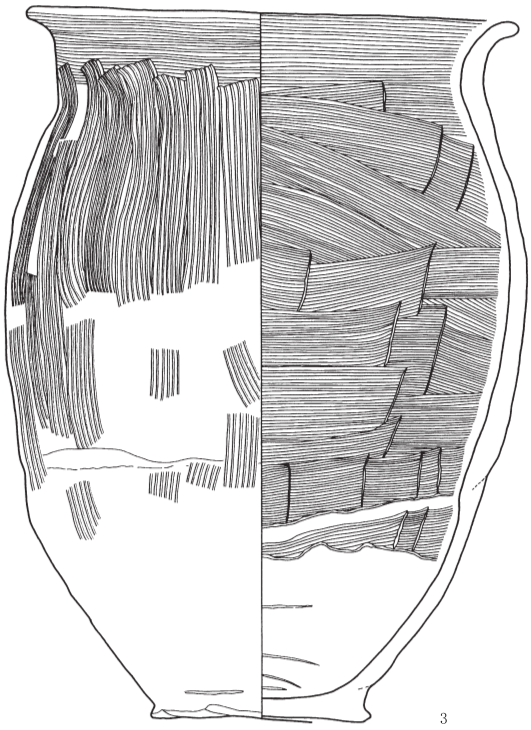
No.	土色	土性	備考
7	10YR2/3 黒褐	シルト	白色粘土ブロックを多量、焼土粒、炭化物粒を少量含む SI210堆積土
8	7.5YR3/4 暗褐	シルト	焼土ブロック・粒を多量に含む　SI210堆積土
9	10YR3/1 黒褐	シルト	粘土ブロックを少量、炭化物粒を含む　SI210堆積土
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物粒を少量含む SI210 K1堆積土
11	10YR2/2 黒褐	シルト	白色粘土、黄褐色ロームブロックを多量に含む SI210カマド側壁構築土
12	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	SI210住居掘方埋土

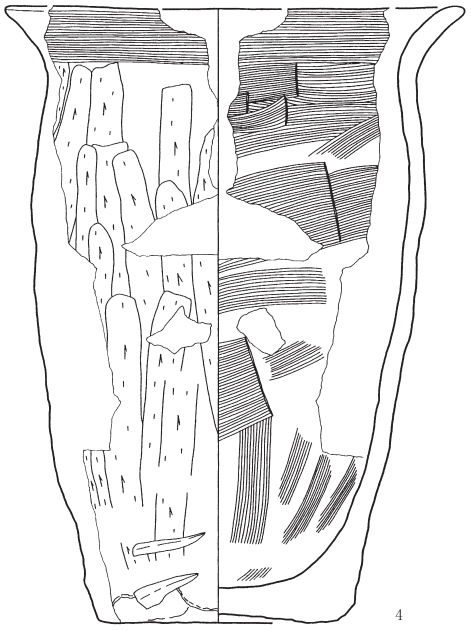
第 85 図　SI210・SI261 竪穴住居跡

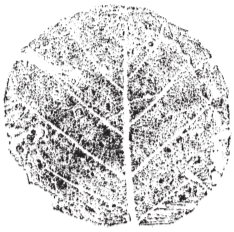
〔出土遺物〕カマド焚口付近の床面より土師器甕（第 86 図３）が、カマド内堆積土より土師器坏（第 86 図１）が、住居内堆積土より土師器坏（第 86 図２）・甕（第 86 図４）・鉄鏃（第 186 図１）が出土した。いずれも非ロクロ調整である。１は外面の口縁部に横ナデの後に体部にヘラケズリ調整が施され、内面に黒色処理が施されている。２は外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリが施され、内面は口縁部横ナデ、体部にヘラナデ調整が施され、黒色処理が施されていない。３は外面の口縁部













No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	ｶﾏﾄﾞ内堆	土師器	坏	E３	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	13.6	—	5.5	完形	06006	32-2
2	堆 POT3	土師器	坏	H	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗﾅﾃﾞ	12.4	7.4	5.45	4/5	06005	32-3
3	床	土師器	甕	C	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(胴) ﾊｹﾒ (底面) 木葉痕　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ 外面胴部に炭化物付着	19.2	8.6	28.1	完形	06044	32-5
4	堆	土師器	甕	D	外：(胴) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→(口) ﾖｺﾅﾃﾞ　内：(胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ→(口) ﾖｺﾅﾃﾞ	(18.0)	9.4	24.2	2/5	06049	32-4

第 86 図　SI210 竪穴住居跡出土遺物

に横ナデの後に胴部にハケメ調整が、外底面に木葉痕がみられる。4 は外面の胴部にヘラケズリの後に口縁部に横ナデ調整が施されている。

このほか、床面・住居掘方埋土・カマド内堆積土・住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏・壺・甕、須恵器坏・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にケズリ調整またはハケメ調整が施されている。須恵器甕は外面に平行タタキ目が、内面に無文押さえ具痕がみられる。

【SI212 竪穴住居跡】（第 87 図、図版 14- 4 ）

〔位置・確認面〕N2 中区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びており、西側は残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 3.8m 以上、南北 2.8m 以上の方形を呈するとみられる。掘方埋土のみが残存する。床面が残存しないため住居に伴うものかどうか判断できないが、柱穴 2 基と土坑 1 基が確認された。

〔方向〕東辺：N‐35°‐E

〔壁面・床面〕残存しない。

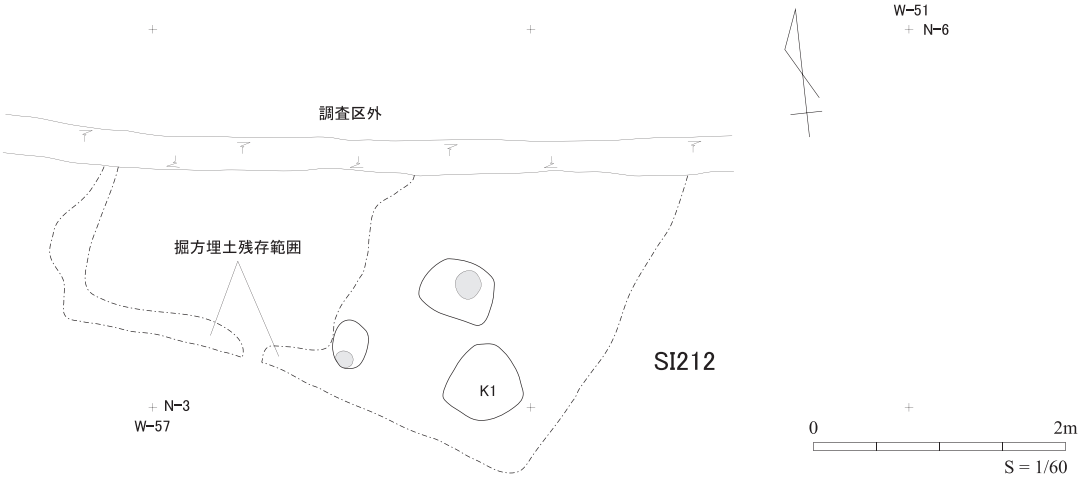
〔主柱穴〕住居推定対角線上の南東コーナー部より内側に 120cm の位置で柱穴 1 基 (P1) を確認した。掘方の平面形は長軸 56cm、短軸 44cm の楕円形を呈し、平面形が直径 22cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。位置と形状、規模から主柱穴の可能性が考えられる。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉〕不明

〔貯蔵穴〕住居南東コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。平面形は長軸 63cm、短軸 60cm の楕円形を呈し、確認面の堆積土は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。位置と形状、規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。

〔その他〕住居南側で柱穴 1 基 (P2) を確認した。掘方の平面形は長軸 40cm、短軸 24cm の楕円形を呈し、平面形が直径 15cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。



第 87 図　SI212 竪穴住居跡

〔堆積土〕残存しない。
〔出土遺物〕貯蔵穴堆積土より非ロクロ調整の土師器壺・甕の破片が出土した。土師器壺は口縁部破片で内外面にミガキ調整と赤彩が施されている。土師器甕は外面にハケメ調整が施されている。
【SI222 竪穴住居跡】（第 88・89 図、図版 14- 5）
〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕《SI222》→ SD228 → SD221 ― SD220
〔規模・形状〕重複のため全体の形状は不明であるが、東西 4.8m 以上、南北 3.5m の方形を呈していたとみられる。
〔方向〕西辺：N - 1° - W
〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南壁で床面から 14cm である。
〔床面〕黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床とする。中央部の東西 3.0m 以上、南北 3.2m の範囲に褐色粘質シルトの硬化層が形成されており、貼床と考えられる。
〔主柱穴〕床面で柱穴 5 基を確認したが、主柱穴として対応関係にあるものは確認できなかった。
〔壁柱穴〕なし
〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 20cm、下端幅 6cm、確認面からの深さ 16cm で断面形が U 字形を呈する周溝がほぼ全周する。堆積土は住居掘方埋土と同じである。
〔炉〕住居北東部の床面の長軸 64cm、短軸 52cm の範囲が皿状に 6cm ほど窪み、被熱による著しい赤色化がみられる。底面は貼床と同じ褐色粘質シルトで構築されており、炉跡と考えられる。
〔貯蔵穴〕住居南西コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。東側が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 84cm 以上、短軸 80cm の楕円形を呈していたとみられる。断面形は西側に段を持つ皿状を呈し、深さ 22cm である。位置と形状、規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。
〔その他〕住居床面の中央やや北東寄りで 1 基 (P2)、南東部で 4 基 (P1、P3 ～ P5) の柱穴を確認した。P2 は掘方の平面形が一辺 30cm の方形を呈し、深さ 56cm である。P1 は掘方の平面形が長軸 56cm、短軸 44cm の楕円形を呈し、深さ 52cm である。P3 は掘方の平面形が長軸 32cm、短軸 24cm の楕円形を呈し、深さ 28cm である。P4 は掘方の平面形が長軸 44cm、短軸 37cm の隅丸方形を呈し、深さ 40cm である。P5 は掘方の平面形が長軸 30cm、短軸 26cm の隅丸方形を呈し、深さ 22cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、P4・P5 では平面形が直径 10 ～ 15cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。
〔堆積土〕住居内堆積土は 5 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。
〔出土遺物〕貯蔵穴堆積土より非ロクロ調整の土師器高杯の脚部（第 89 図）が出土した。内外面にハケメ調整の後に外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。
　このほか、床面・住居掘方埋土・貯蔵穴堆積土、主柱穴掘方埋土・主柱穴抜き取り穴・住居内堆積土より土師器坏・高杯・壺・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は口縁部が直立または外反するものと、頸部に屈曲をもち口縁部が短く外反するもの、頸部に屈曲をもち口縁部が長く外反するものとがあり、いずれも内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。高杯は脚部



SI222竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを少量含む
6	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　炉
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P3柱抜き穴
8	10YR4/6 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P3柱痕跡
9	10YR4/6 褐	シルト	P3柱穴掘方埋土
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　P4柱抜き穴
11	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P4柱穴掘方埋土
12	10YR4/6 褐	粘質シルト	黒褐色シルトを含む　住居貼床
13	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土
14	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　住居掘方埋土

SI222竪穴住居跡炉

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　炉

SI222竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

SI222竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱抜き穴
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む　柱穴掘方埋土

SI222竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き穴
2	10YR3/3 暗褐	シルト	柱痕跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	赤色土粒、黄色土粒を少量含む　柱穴掘方埋土

SI222竪穴住居跡周溝

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 88 図　SI222 竪穴住居跡

が円錐台状を呈し、透かし孔をもつものと、脚部が円柱状を呈し末端が開くものとがあり、前者は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は単純口縁で内外面に横ナデ調整が施されているものと、二重口縁で外面にハケメ調整が施されているものとがある。

【SI223 竪穴住居跡】（第 90・91 図、図版 14- 6）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SI223》→ SB251a → SB251b

〔規模・形状〕南側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 6.3m、南北 5.5m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕東辺：N - 31° - W

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から 38cm である。

〔床面〕黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床とする。中央部の東西 4.0m、南北 3.8m 以上の範囲で床面の硬化がみられる。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に 110 ～ 140cm の位置で柱穴 3 基 (P1 ～ 3) を確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は長軸 52 ～ 56cm、短軸 44 ～ 52cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 30 ～ 42cm である。いずれも平面形が直径 20cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。また、このうち 1 基では柱材の抜き取り痕跡が確認された。

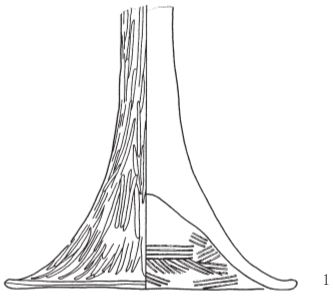
〔壁柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 16 ～ 36cm、下端幅 8 ～ 12cm、確認面からの深さ 5 ～ 12cm で断面形が U 字形を呈する周溝がほぼ全周する。堆積土は黄褐色ローム粒を少量含む砂質シルトである。

〔炉〕住居中央部やや西寄りの床面の長軸 60cm、短軸 44cm の範囲が皿状に 4cm ほど窪み、被熱による著しい赤色化がみられる。炉跡と考えられる。

〔貯蔵穴〕なし

〔その他〕住居北東部の床面で柱穴 1 基 (P4) を確認した。掘方の平面形は長軸 36cm、短軸 30cm の楕円形を呈し、深さ 50cm である。柱痕跡は確認されない。



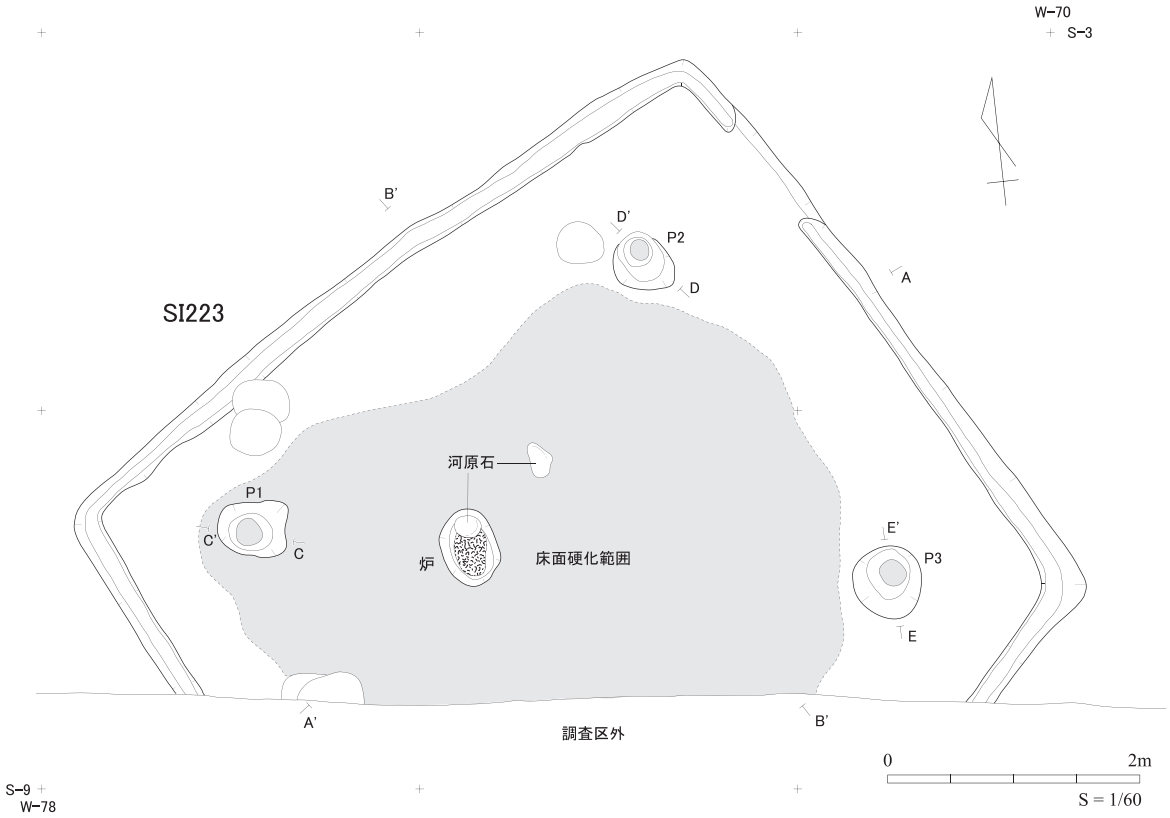
1

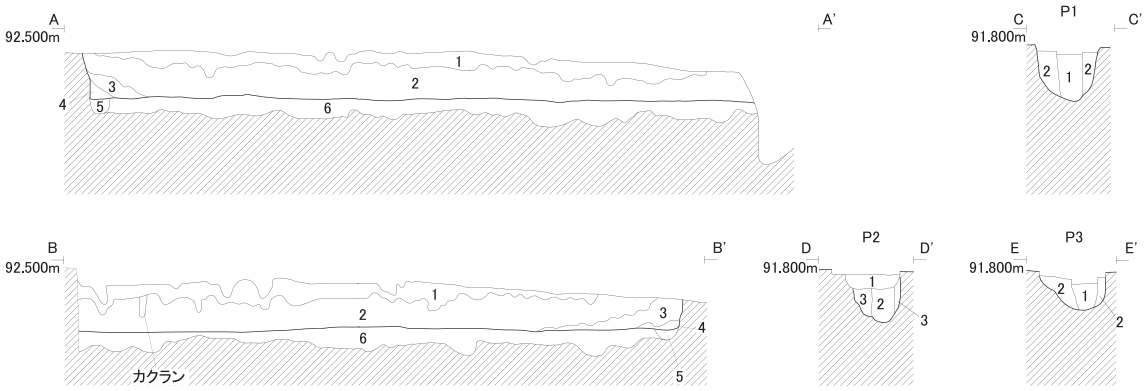


S = 1/3

No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	貯蔵穴堆	土師器	高杯	B	外：ﾊｹﾒ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　内：ﾊｹﾒ→（裾端）ﾖｺﾅﾃﾞ　（底径＝裾径）	—	(11.5)	(11.2)	一部	06042	33-1

第 89 図　SI222 竪穴住居跡出土遺物





SI223竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
4	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　周溝埋土
6	10YR5/4 にぶい黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土

SI223竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/4 暗褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI223竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱切り取り穴
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱痕跡
3	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI223竪穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/4 暗褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 90 図　SI223 竪穴住居跡

〔堆積土〕住居内堆積土は 4 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居掘方埋土よりミニチュア土器（第 91 図 1）が、住居内堆積土より非ロクロ調整の土師器坏（第 91 図 2）・壺（第 91 図 3）が出土した。1 は内外面にナデ調整が施されている。2 は丸底で内外面に赤彩が施されている。3 は内外面に赤彩が施されている。

このほか、住居掘方埋土・住居内堆積土より土師器坏・高杯・壺・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。高杯は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されており、透かし孔をもつ。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にミガキ調整が施されているものと、ハケメ調整が施されているものがある。このうち、内面に黒色処理の施された土師器坏は上層からの混入と考えられる。

【SI225 竪穴住居跡】（第 75・92 図、図版 14- 7 ・ 8）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI225》→ SD228

〔規模・形状〕南側が残存せず、北側の一部が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 6.1m、南北 5.1m の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N － 40° － W

〔炉〕住居中央やや北西寄りに焼面 3 か所が確認され、炉跡の可能性がある。

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。

〔出土遺物〕遺構確認面よりミニチュア土器（第 95 図 1）、非ロクロ調整の土師器坏（第 95 図 2）・甕（第 95 図 3 ・ 4）が出土した。1 は内外面とも指ナデとみられる調整が施されている。2 は丸底で内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。3 ・ 4 は平底で球胴を呈し、3 は胴部外面にヘラケズリの後にヘラミガキが、4 は胴部外面にハケメの後にヘラケズリが施されている。

このほか、遺構確認面より土師器坏・壺・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、坏は内外面にミガキ調整の後に赤彩が、壺は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は二重口縁で外面にミガキ調整が施されているものと、外面にハケメ調整が施されているものとがある。

【SI230 竪穴住居跡】（第 93・94 図、図版 15- 1 ・ 2）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕《SI230》→ SD228

〔規模・形状〕重複により北側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 3.7m、南北 4.3m の方形を呈していたとみられる。

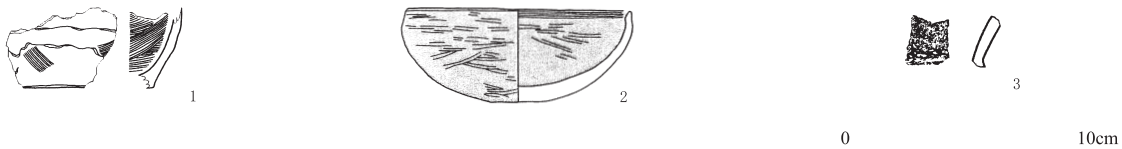
〔方向〕東辺：N － 38° － E

〔壁面〕Ⅳ層を壁としている。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な西壁で 12cm である。

〔床面〕黄褐色ロームブロックと焼土粒を含む掘方埋土を床としている。南側の 160cm 四方の範囲で床面の硬化がみられる。

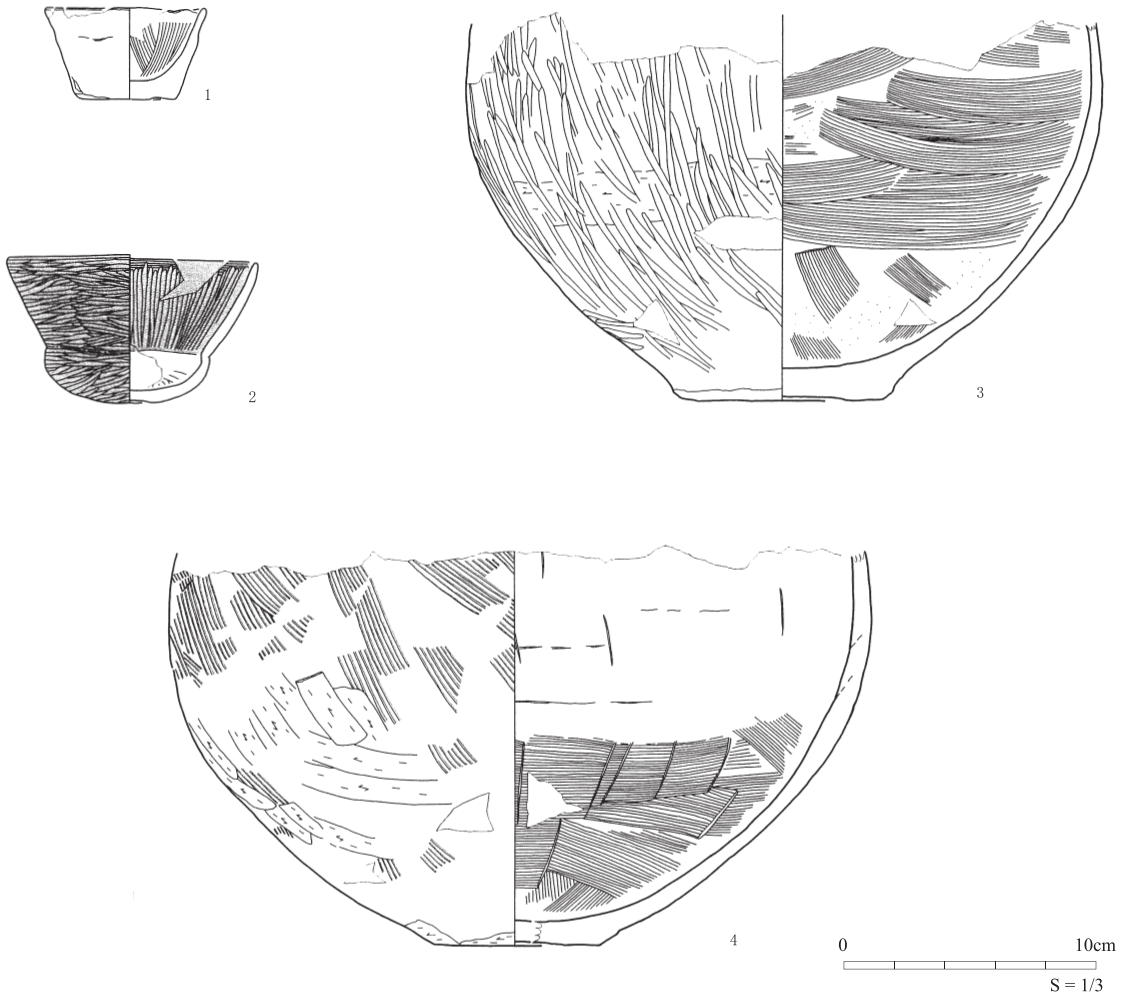
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉〕不明



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	住居掘方埋土	ミニチュア土器	—	—	外：ﾅﾃﾞ　内：ﾅﾃﾞ	—	—	(3.1)	一部	06051	33-2
2	堆２層	土師器	坏	C	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ赤彩　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ赤彩	8.85	2.3	3.65	2/3	06050	33-3
3	堆２層	土師器	壺	—	外：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩	—	—	(2.0)	一部	06102	33-4

第 91 図　SI223 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	確認面	ミニチュア土器	—	—	外：指ﾅﾃﾞ？(底面) ｹｽﾞﾘ？　内：指ﾅﾃﾞ	(6.3)	3.6	3.6	3/4	06075	33-5
2	確認面	土師器	坏	A 1	外：(口～体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩 (底面) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　内：(口～頸) ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩	9.8	1.8	5.8	完形	06074	33-6
3	確認面	土師器	甕	F？	外：(胴) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ (底面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ	—	8.6	(15.3)	一部	06105	33-7
4	確認面	土師器	甕	F？	外：(胴) ﾊｹﾒ→ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ	—	6.4	(15.5)	一部	06106	33-8

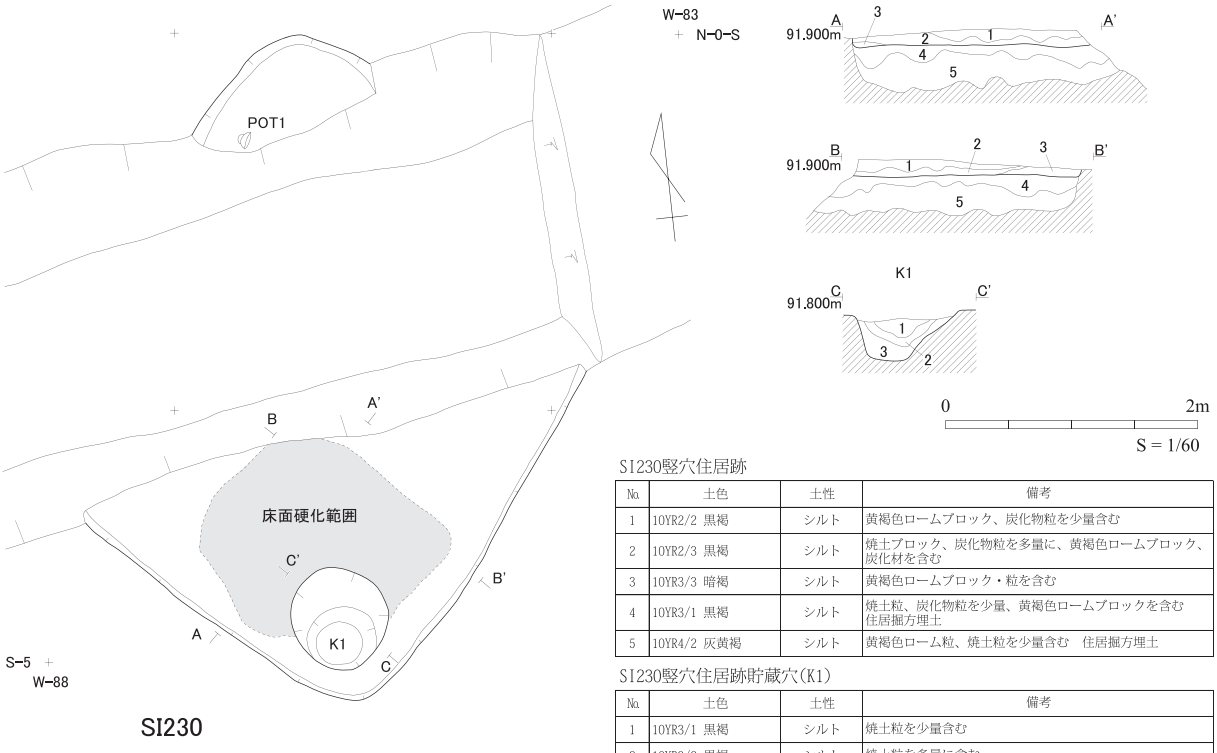
第 92 図　SI225 竪穴住居跡出土遺物

〔貯蔵穴〕南側コーナー部で土坑１基(K1)を確認した。平面形は長軸88cm、短軸72cmの楕円形を呈する。断面形は北側が開く逆台形を呈し、深さ40cmである。堆積土は３層に細分され、焼土・黄褐色ロームブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトである。自然堆積と考えられる。

〔堆積土〕住居内堆積土は３層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕北側コーナー部の床面より土師器坏（第94図１）が、貯蔵穴堆積土より土師器坏（第94図２)が出土した。いずれも非ロクロ調整で丸底を呈し、１は内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が、２は体部外面にハケメの後にやや粗いヘラミガキが施されている。

このほか、床面・住居掘方埋土・貯蔵穴堆積土・住居内堆積土より土師器坏・高杯・壺・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。



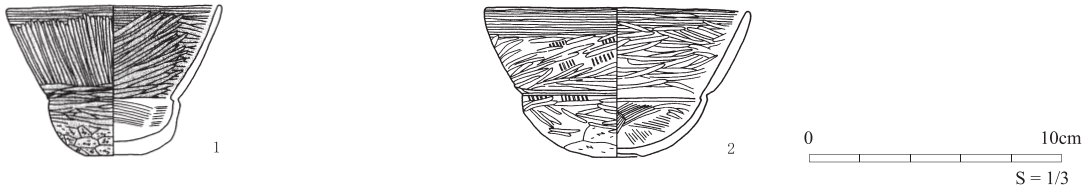
SI230竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を少量含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	焼土ブロック、炭化物粒を多量に、黄褐色ロームブロック、炭化材を含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む
4	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を少量、黄褐色ロームブロックを含む 住居掘方埋土
5	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む　住居掘方埋土

SI230竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	焼土粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	焼土粒を多量に含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む

第93図　SI230竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量(cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	床	土師器	坏	A 1	外：(口～頸) ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→ (頸) 沈線 (体) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ (底面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ 赤彩 内：(口～頸) ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ (体) ﾅﾃﾞ 口縁・頸部赤彩	8.5	2.2	5.9	完形	06007	33-9
2	貯蔵穴 堆３層	土師器	坏	A 1	外：(体上) ﾊｹﾒ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→ (口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体下) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ 内：ﾍﾗﾅﾃﾞ→ (口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10.4	—	5.85	完形	06045	33-10

第94図　SI230竪穴住居跡出土遺物

高杯は坏部と脚部の接合部の破片で、外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されているものがある。甕は外面にハケメ調整が施されているものと、ミガキ調整が施されているものとがある。

【SI231 竪穴住居跡】（第 95・96・97 図、図版 15- 3～6）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。床面までの精査を行なった。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、長軸 3.0m 以上、短軸 2.5m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕東辺：N‐42°‐E

〔壁面〕Ⅳ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は残存状況の良好な南壁で 12cm である。

〔床面〕黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床としている。中央部の東西 1.6m 以上、南北 0.6m 以上の範囲で床面の硬化がみられる。

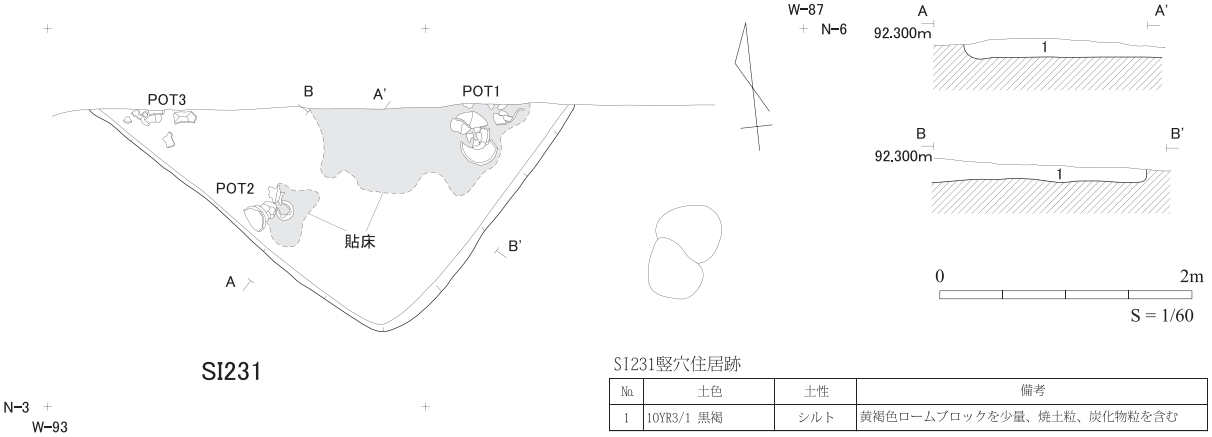
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド・炉・貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は 1 層で、住居廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より非ロクロ調整の壺（第 96 図 1・2）・甑（第 96 図 3）・土師器甕（第 96 図 4・5、第 97 図）が出土した。第 96 図 3 の土師器甑は第 96 図 4 の土師器甕のうえに乗った状態で横位に出土した。第 96 図 1・2 は口径と胴部最大径がほぼ同じで、内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。第 96 図 3 は単孔式の甑で体部外面はケズリ調整が施されている。第 96 図 4 は胴部外面にヘラケズリが施され、口縁部に指押さえ痕がみられる。第 96 図 5 は平底で球胴を呈し、胴部外面にケズリ、内外面にミガキ調整が施されている。第 97 図は球胴を呈し、胴部外面はハケメの後にヘラミガキ、内面はヘラナデとヘラケズリの後にヘラミガキが施されている。

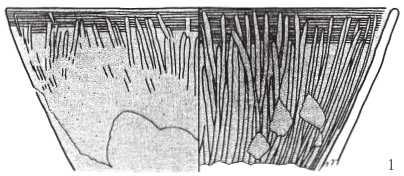
このほか、堆積土・確認面より土師器坏・壺・甕・甑、ミニチュア土器、須恵器坏・蓋・高台坏・甕、近世陶器の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されているものと、外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されているものとがある。壺は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されており、外底面に木葉痕

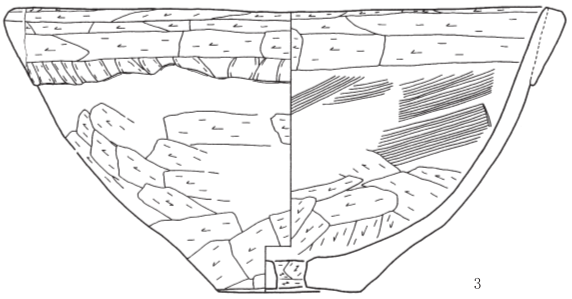


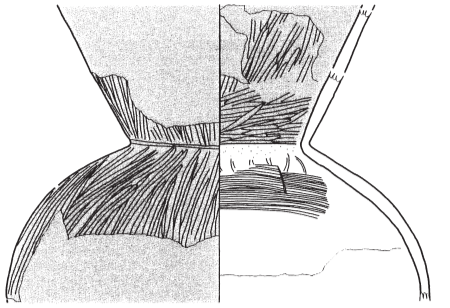
SI231竪穴住居跡

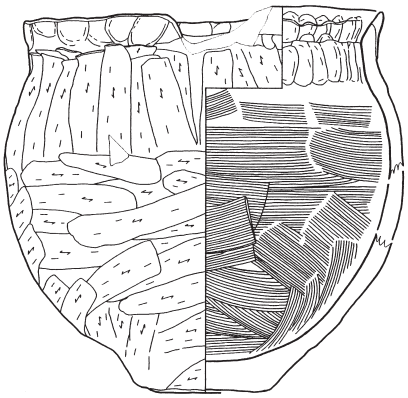
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量、焼土粒、炭化物粒を含む

第 95 図　SI231 竪穴住居跡









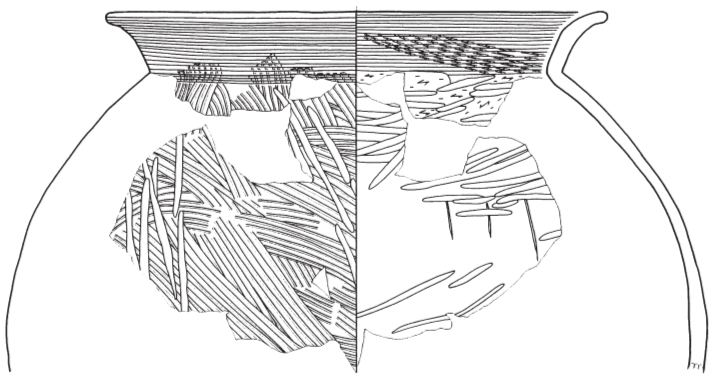


0 10cm

S = 1/3

No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	床 POT2	土師器	壺	B	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　06063b と同一個体	15.3	—	(6.4)	一部	06063a	34-1
2	床 POT2	土師器	壺	B	外：(口) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩 (体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内：(口) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩 (体) 指ｵｻｴ→ﾍﾗﾅﾃﾞ 06063a と同一個体	—	—	(11.7)	一部	06063b	34-2
3	床 POT2	土師器	甑	A 2	外：(口) 指ｵｻｴ→ｹｽﾞﾘ (体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ｹｽﾞﾘ (体) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾍﾗｹｽﾞﾘ　単孔 孔径 1.05	(20.0)	5.5	11.0	3/4	06061	34-3
4	床 POT2	土師器	甕	A 1	外：(口) 指ｵｻｴ→ (胴) ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底) ｹｽﾞﾘ　内：(口) 指ｵｻｴ (胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ　片口	14.0	5.1	14.8	5/6	06062	34-4
5	床 POT1	土師器	甕	F	外:(口) ﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内:(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ (胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ 外面口～胴上部に炭化物付着	(21.0)	9.0	29.1	2/3	06064	34-5

第 96 図　SI231 竪穴住居跡出土遺物 (1)



1　0　10cm

S = 1/3

No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	床 POT3	土師器	甕	F	外：(口) ﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾊｹﾒ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内：(口) ﾊｹﾒ→ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	(19.6)	—	(14.2)	一部	06065	—

第 97 図　SI231 竪穴住居跡出土遺物 (2)

がみられる。甑は無底式のものである。ミニチュア土器は口縁部破片で内外面に指オサエ痕がみられる。須恵器坏は底面に回転ヘラケズリが施されている。このうち、土師器坏の内面に黒色処理が施されているものと、須恵器坏・蓋・高台坏、近世陶器は上層からの混入と考えられる。

【SI259 竪穴住居跡】（第 75 図、図版 15- 7 ）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI259》→ SD228

〔規模・形状〕西側が残存せず、南側と東側は調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 4.2m 以上、南北 1.6m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕カマド中軸線：N - 6° - W

〔カマド〕住居北壁に設置されている。燃焼部と煙道部が残存する。

〔堆積土〕確認面の堆積土は焼土・炭化物粒を含む黒褐色 (10YR3/1) シルトである。

〔出土遺物〕確認面・住居内堆積土より土師器坏・甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は、外面の頸部に段を有しハケメ調整が施されるものがある。

【SI260 竪穴住居跡】（第 75 図、図版 15- 8 ）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。

〔重複〕《SI260》→ Pit

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、長軸 2.0m 以上、短軸 1.2m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕西辺：N - 25° - W

〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ロームブロックと炭化物粒をわずかに含む黒褐色 (10YR2/1) シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI261 竪穴住居跡】（第 85 図）

〔位置・確認面〕N2 中区の東斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SI210 →《SI261》→ SK211
〔規模・形状〕SI210 の精査の過程で確認したことと、南東側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 1.8m、南北 1.9m 以上の方形を呈していたとみられる。
〔方向〕カマド中軸線：N‐35°‐E
〔壁面〕SI210 の住居内堆積土を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高はで床面から 13cm である。
〔床面〕黄褐色ロームブロックを含む掘方埋土を床とする。南東に向かってわずかに傾斜する。
〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし
〔カマド〕北壁中央に設置されており、燃焼部が残存する。燃焼部は長さ 36cm、幅 60cm で、焚口幅は側壁先端間で 50cm である。側壁は左側壁で長さ 30cm が残存する。白色粘土を多量に含む黒褐色粘質シルトにより構築されている。奥壁は住居北壁に一致する。
〔貯蔵穴〕なし
〔堆積土〕住居内堆積土は 3 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。
〔出土遺物〕カマド燃焼部底面より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

B．掘立柱建物跡

【SB235a 掘立柱建物跡】（第 98 図、図版 16- 1 ・ 2）
〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。
〔重複〕《SB235a》→ SB235b
〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 3 間 (総長 4.3m)、南北 2 間 (総長 4.4m) 以上の建物跡である。
〔柱穴〕7 基 (P1 ～ P7) 確認し、P2 のみ調査を行なった。SB235b との重複により掘方の平面形が分かるものは少ないが、P4 は長軸 56cm、短軸 40cm の隅丸方形を呈し、深さ 55cm である。P4 を除く 6 基では柱材の抜き取り痕跡が確認される。
〔柱間寸法・方向〕柱痕跡が残存しないため不明であるが、ほぼ同規模で SB235b に建て替えられたと考えられる。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
【SB235b 掘立柱建物跡】（第 98 図、図版 16- 1 ・ 2）
〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。
〔重複〕SB235a →《SB235b》
〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 3 間 (総長 4.3m)、南北 2 間 (総長 4.4m) 以上の建物跡である。
〔柱穴〕7 基 (P1 ～ P7) 確認し、P2 のみ調査を行なった。掘方の平面形は長軸 32 ～ 64cm、短軸 28 ～ 40cm の楕円形を呈し、深さは P2 で 60cm である。いずれも平面形が直径 12cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。
〔柱間寸法〕南側柱列で東から 160‐130‐180cm、西側柱列で南から 220‐220cm である。

〔方向〕西側柱列：N－13°－W

〔出土遺物〕P2・P6 の掘方埋土、P2 抜き取り穴、P7 確認面より土師器坏・甕の破片が出土した。土師器坏は外面にケズリ調整、内面に黒色処理が施されている。

【SB239 掘立柱建物跡】（第 99 図、図版 16- 3）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 1 間 (総長 2.3m)、南北 1 間 (総長 2.3m) の建物跡である。周辺に分布する竪穴住居跡と方位、柱穴の規模などが類似しており、竪穴住居の主柱穴であった可能性がある。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は一辺 44 ～ 52cm の隅丸方形を呈し、深さ 24 ～ 32cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、このうち 1 基で平面形が直径 20cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が残存する。

〔柱間寸法〕南側柱列で 230cm、東側柱列で 230cm である。

〔方向〕東側柱列：N－13°－W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB251a 掘立柱建物跡】（第 100 図、図版 16- 4）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

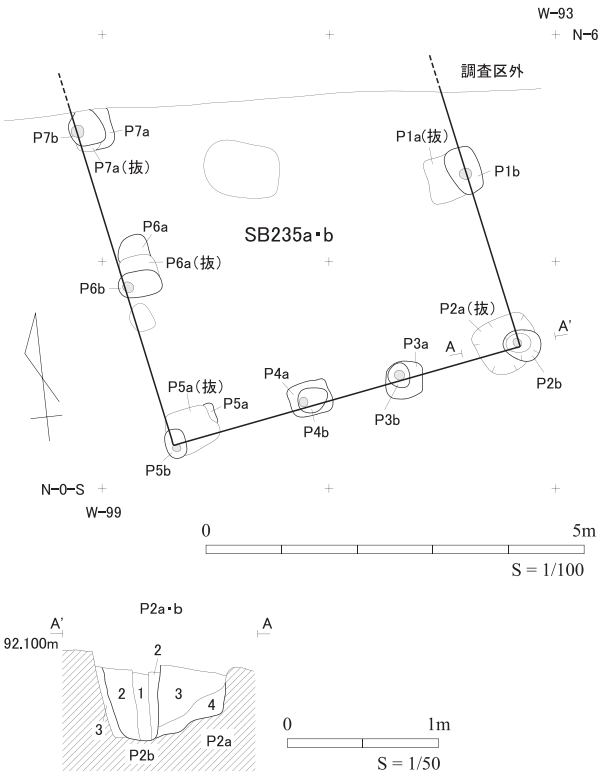
〔重複〕SI223 →《SB251a》→ SB251b

〔規模・形状〕南側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 2 間 (総長 5.0m)、南北 2 間 (総長 4.9m) 以上の建物跡である。

〔柱穴〕5 基確認した。掘方の平面形は長軸 45 ～ 50cm、短軸 35 ～ 45cm の隅丸方形ないしは楕円形を呈し、深さ 32 ～ 55cm である。SB251b との重複により柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法・方向〕柱痕跡が残存しないため不明であるが、ほぼ同規模で SB251b に建て替えられたと考えられる。

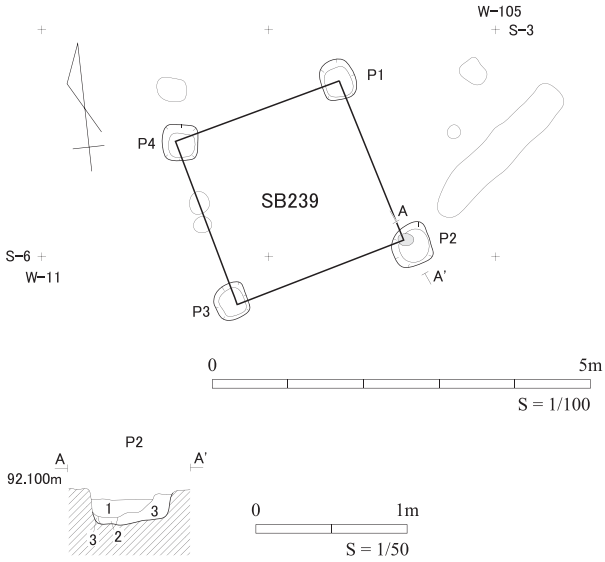
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB235a・b掘立柱建物跡(P2a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P2b柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　P2b柱穴掘方埋土
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量、黒褐色シルトブロックを含む P2a柱抜き取り痕跡
4	10YR4/6 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを主体とする　P2a柱穴掘方埋土

第 98 図　SB235a・b 掘立柱建物跡



SB239掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
3	10YR4/6 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを主体とする　柱穴掘方埋土

第 99 図　SB239 掘立柱建物跡

【SB251b 掘立柱建物跡】（第 100 図、図版 16- 4 ）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SI223 → SB251a →《SB251b》

〔規模・形状〕南側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 2 間 (総長 5.0m)、南北 2 間 (総長 4.9m) 以上の建物跡である。

〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 35 ～ 47cm、短軸 20 ～ 40cm の楕円形を呈し、深さ 40 ～ 67cm である。このうち 5 基で平面形が直径 10 ～ 18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 40 ～ 72cm で、掘方底面に接するものと 5cm 程深く沈みこむものとがある。

〔柱間寸法〕北側柱列で西から 280 - 220cm、東側柱列で北から 270 - 220cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 5° - W

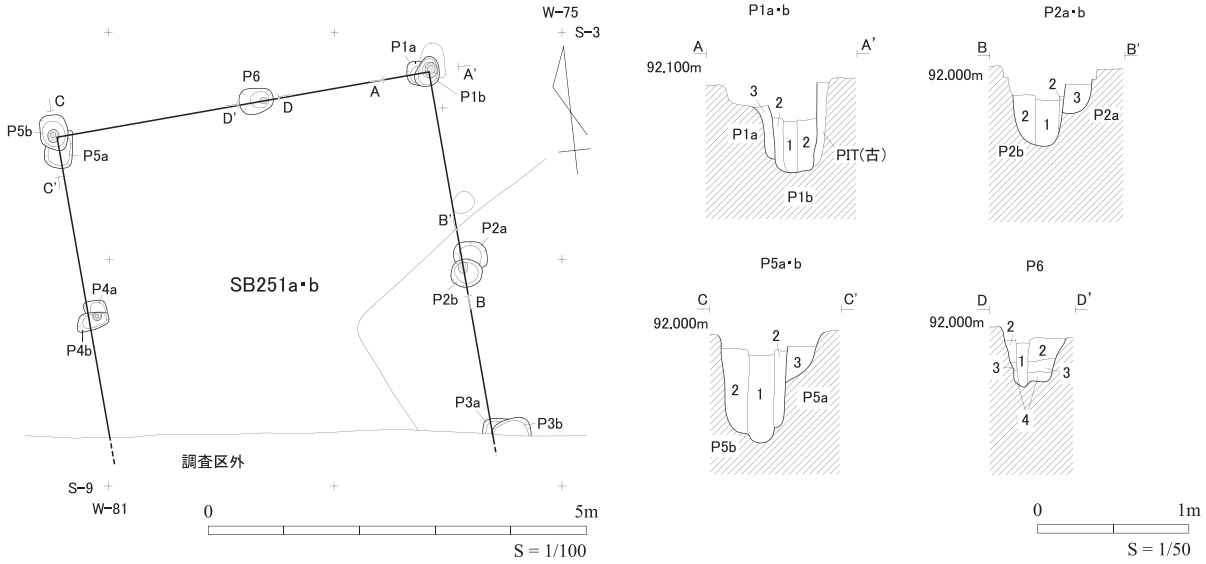
〔出土遺物〕P4 掘方埋土、P3・P5a 堆積土より非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。土師器坏は外面にミガキ調整、内面に黒色処理が施されている。土師器甕は有段で外面にハケメ調整が施されている。

【SB256 掘立柱建物跡】（第 101 図、図版 16- 5 ）

〔位置・確認面〕N2 中区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SK214 ― SI209 ―《SB256》

〔規模・形状〕南側が残存しないため全体の形状は不明であるが、東西 2 間 (総長 3.8m)、南北 1 間 (総



SB251a・b掘立柱建物跡(P1a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P1b柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・炭化物粒を少量、黄褐色ローム粒を含む　P1b柱穴掘方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P1a柱穴掘方埋土

SB251a・b掘立柱建物跡(P5a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P5b柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒、炭化物を少量含む P5b柱穴掘方埋土
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P5a柱穴掘方埋土

SB251a・b掘立柱建物跡(P2a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	P2b柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	黄褐色ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む P2b柱穴掘方埋土
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P2a柱穴掘方埋土

SB251a・b掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
4	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

第 100 図　SB251a・b 掘立柱建物跡

長 1.6m) 以上の建物跡である。

〔柱穴〕5 基確認した。掘方の平面形は長軸 36 ～ 48cm、短軸 28 ～ 38cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さ 14 ～ 34cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、このうち 1 基で平面形が直径 22cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が残存する。

〔柱間寸法〕北側柱列で西から 200 - 180cm、東側柱列で 160cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 12° - W

〔出土遺物〕P1 抜き取り穴より土師器坏の破片が、P4 抜き取り穴より土師器甕の破片が出土した。いずれも非ロクロ調整で土師器坏は外面にケズリ調整、内面に黒色処理が施されている。

C．柱列跡

【SA203 柱列跡】（第 102 図）

〔位置・確認面〕N2 東区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SA203》→ Pit

〔規模・形状〕東西 3 間 (総長 5.1m) 以上の柱列跡である。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 36 ～ 40cm、短軸 28 ～ 37cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さ 23 ～ 28cm である。3 基で平面形が直径 15 ～ 18cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

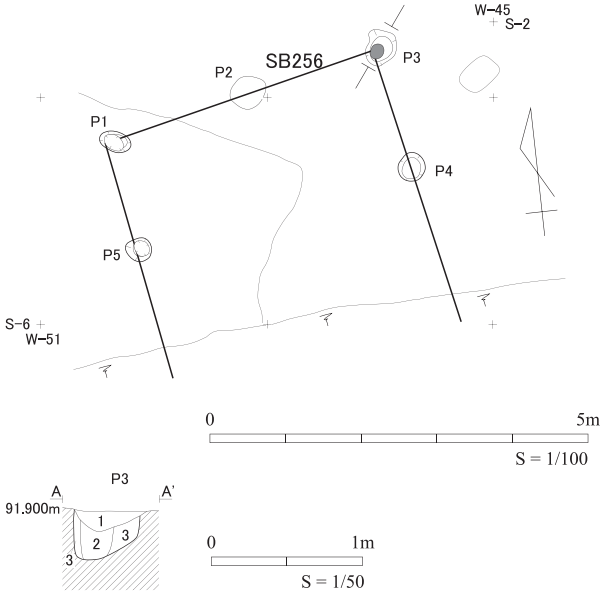
〔柱間寸法〕東から 170 - 170 - 170cm である。

〔方向〕E - 7° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SA253 柱列跡】（第 103 図）

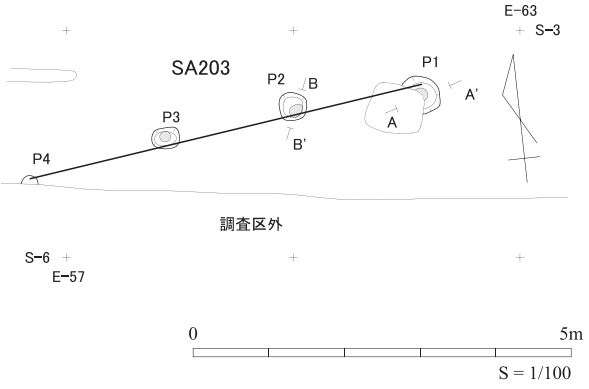
〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

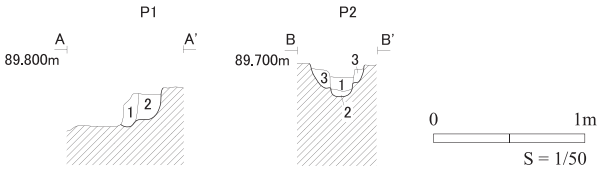


SB256掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 101 図　SB256 掘立柱建物跡





SA203柱列跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SA203柱列跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

第 102 図　SA203 柱列跡

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 3.5m) の柱列跡である。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方の平面形は長軸 28 ～ 30cm、短軸 23 ～ 27cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さ 15 ～ 25cm である。2 基で平面形が直径 10cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕東から 170 - 180cm である。

〔方向〕E - 9° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SA254 柱列跡】（第 104 図）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕SD252 →《SA254》— SD234

〔規模・形状〕東西 3 間 (総長 4.0m) の柱列跡である。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 28 ～ 35cm、短軸 25 ～ 33cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さ 47 ～ 64cm である。いずれも平面形が直径 10cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

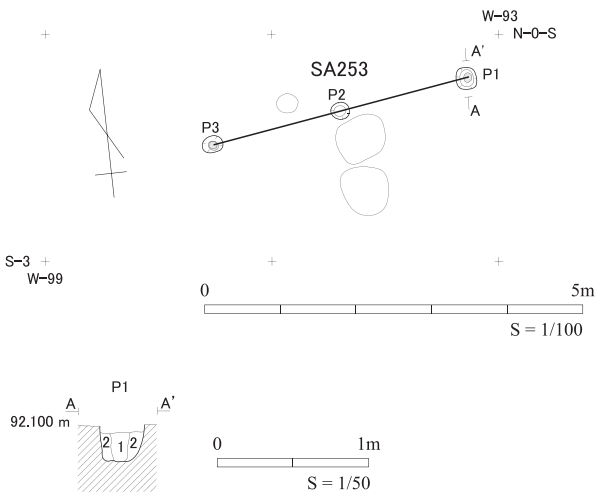
〔柱間寸法〕東から 140 - 130 - 130cm である。

〔方向〕E - 14° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

D．落し穴状土坑

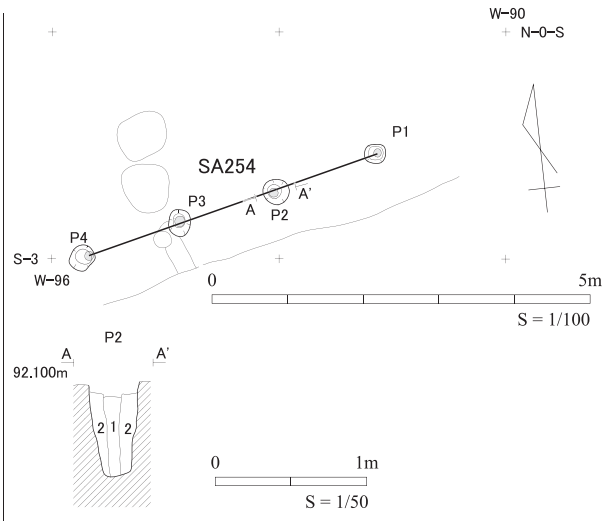
落し穴状土坑は 8 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 6 表に特徴を示す。



SA253柱列跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	柱穴掘方埋土

第 103 図　SA253 柱列跡



SA254柱列跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

第 104 図　SA254 柱列跡

【SK216 落し穴状土坑】（第 105 図）

〔位置・確認面〕N2 中区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 260cm、短軸 48cm の溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さ 104cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔方向〕南北方向

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK217 落し穴状土坑】（第 106 図、図版 16- 6）

〔位置・確認面〕N2 中区の東斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 140cm、短軸 74cm の楕円形を呈する。横断面形は逆台形を呈し、深さ 70cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。底面中央で平面形が直径 18cm の円形を呈するピット 1 基を確認した。ピットは深さ 10cm 以上で、湧水のため図化できなかった。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

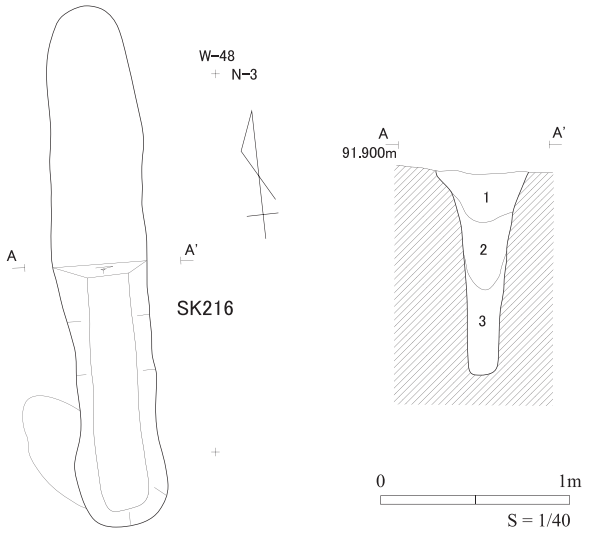
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK258 落し穴状土坑】（第 107 図）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕なし

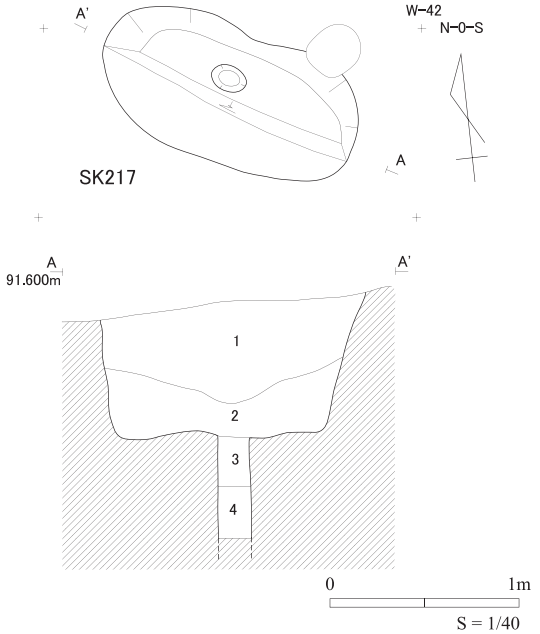
〔規模・形状〕平面形は長軸 370cm、短軸 90cm の溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さ



SK216落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 105 図　SK216 落し穴状土坑



SK217落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
4	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	礫を多量に含む

第 106 図　SK217 落し穴状土坑

100cm である。

〔底面〕西に向かってわずかに傾斜する。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は 4 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色の砂質シルトおよび褐色の砂質粘土で、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

E．土坑

土坑は 14 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 7・8 表に特徴を示す。

【SK224 土坑】（第 108・109 図、図版 16- 7）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SK257 →《SK224》

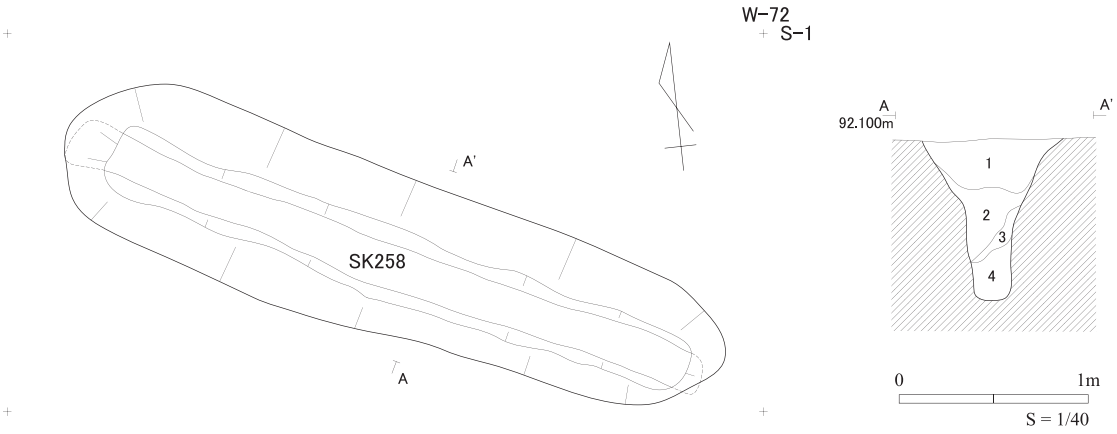
〔規模・形状〕平面形は長軸 280cm、短軸 220cm の不整楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、深さ 43cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒、焼土・炭化物粒を含む黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器甑（第 109 図 1）と須恵器高台坏（第 109 図 2）が出土した。1 は底部破片で、単孔式の甑である。内外面にヘラミガキ調整が施されている。2 は外底面に回転ヘラケズリが施されている。

このほか、堆積土より土師器坏・壺・甕、須恵器坏・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は体部外面に段を有し、口縁部横ナデ、下半部にケズリ調整が、内面に黒色処理が施



SK258落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む
3	10YR4/4 褐	砂質粘土	黄褐色ロームブロックを多量に含む
4	10YR3/4 暗褐	砂質シルト	黄褐色ローム岩片を少量含む

第 107 図　SK258 落し穴状土坑

されている。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は頸部外面に段を有し、ハケメ調整が施されている。須恵器坏は外面に回転ヘラケズリが施されている。甕は外面に平行タタキ目が見られる。

【SK236 土坑】（第 110 図、図版 16- 8）

〔位置・確認面〕N2 西区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

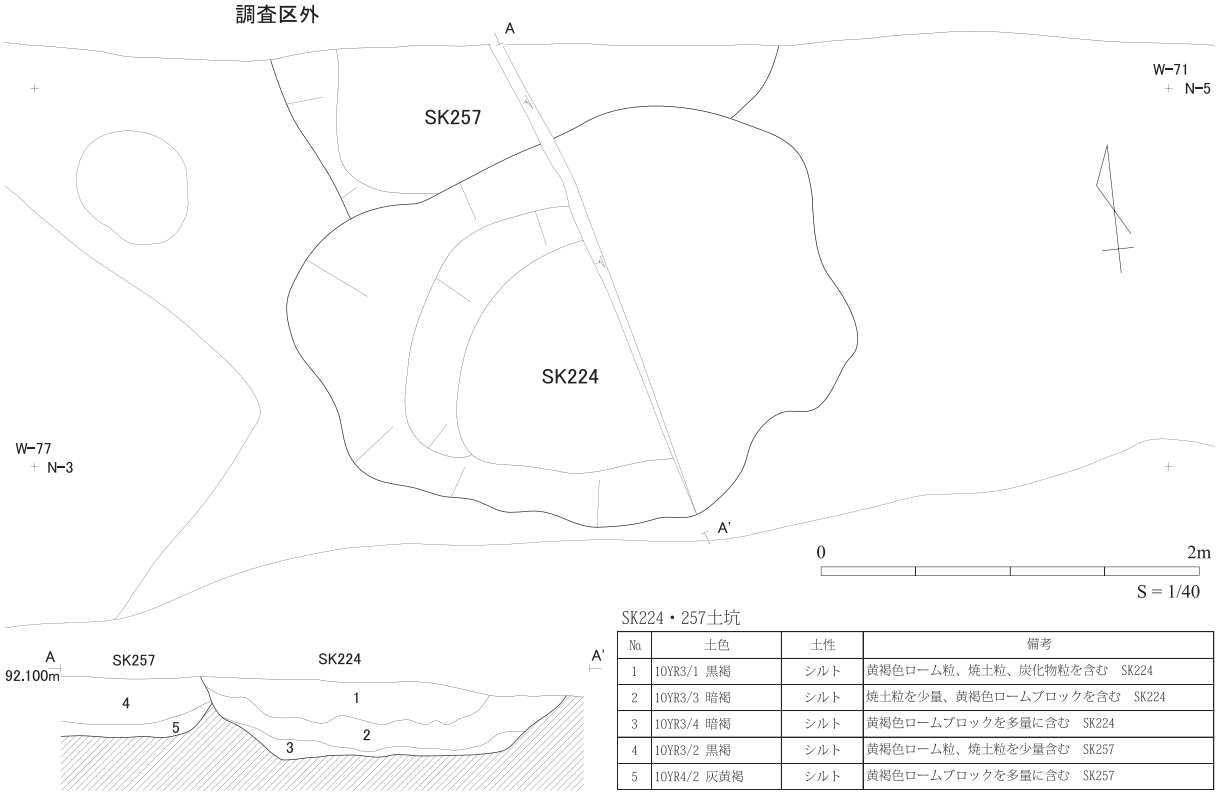
〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 190cm、短軸 90cm の長方形を呈する。断面形は箱形を呈し、深さ 33cm である。

〔底面〕平坦である。

〔堆積土〕堆積土は 2 層に細分され、黄褐色ローム粒を少量含む黒色・黒褐色シルトである。

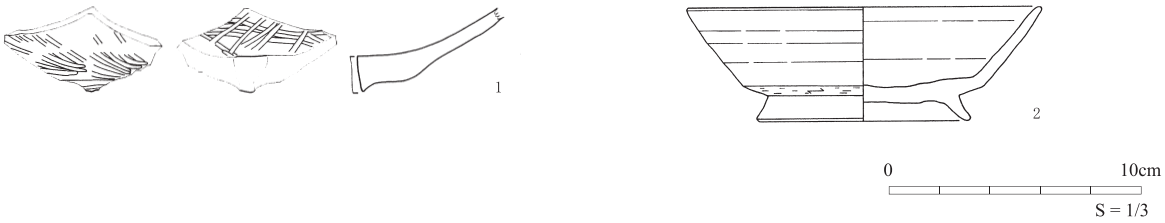
〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。



SK224・257土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む　SK224
2	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を少量、黄褐色ロームブロックを含む　SK224
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　SK224
4	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む　SK257
5	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　SK257

第 108 図　SK224 土坑



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆２層	土師器	甑	A２？	外：ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ	—	—	(3.3)	一部	06189	—
2	堆１～２層	須恵器	高台坏	B	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾍﾗｹｽﾞﾘ→高台接合→ﾛｸﾛﾅﾃﾞ（底面）切り離し不明→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	(14.0)	(8.4)	4.45	3/5	06046	35-3

第 109 図　SK224 土坑出土遺物

【SK243 土坑】（第 111 図、図版 17- 1 ）

〔位置・確認面〕N2 西区の丘陵頂部に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 133cm、短軸 70cm の不整長方形を呈する。断面形は箱形を呈し、深さ 80cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は 6 層に細分され、黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・暗褐色シルトとにぶい黄褐色粘土で、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土より土師器甕の破片が出土した。

Ｆ．溝跡

溝跡は 15 条確認された。このうち大溝跡が 4 条である。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

【SD202 溝跡】（第 112 図、図版 17- 2 ）

〔位置・確認面〕N2 東区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

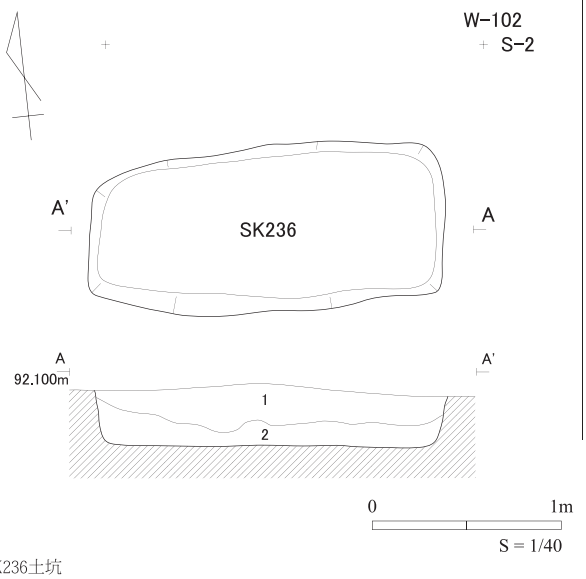
〔重複〕なし

〔規模・形状〕長さ約 10.5m 以上の南北溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅 65 ～ 75cm、下端幅 30 ～ 45cm で断面形は逆台形を呈し、深さ 17 ～ 20cm である。

〔方向〕南北方向

〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒色粘質シルトの自然堆積土である。

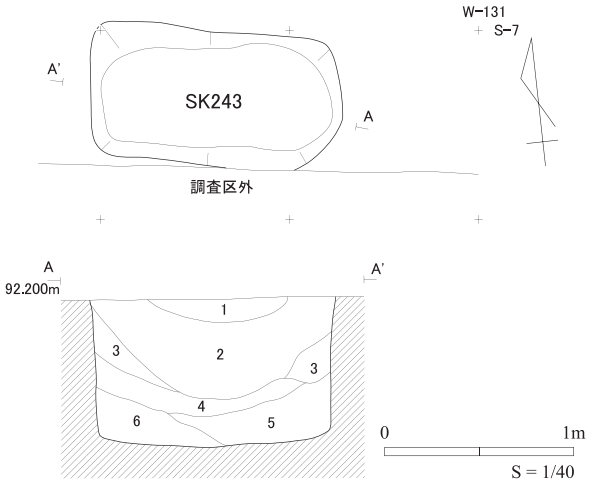
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SK236土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む

第 110 図　SK236 土坑



SK243土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む
3	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土	黄褐色ローム土主体の崩落土
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
5	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
6	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土	黄褐色ローム土主体の崩落土

第 111 図　SK243 土坑

【SD205 溝跡】（第 79 図）

〔位置・確認面〕N2 東区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SD205》― SI201a → SI201b

〔規模・形状〕長さ約 3.0m 以上の東西溝跡である。上端幅 14 ～ 22cm、下端幅 7 ～ 9cm で断面形は皿状を呈し、深さ 12 ～ 21cm である。SI201b との重複により確認できないが、SI201a の南東コーナー部付近から延びており、SI201a に伴う外延溝であった可能性がある。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ローム粒を含む黒色シルトの自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土より不明鉄製品が出土した。

【SD206 大溝跡】（第 113・114 図、図版 17- 3 ・ 4 ）

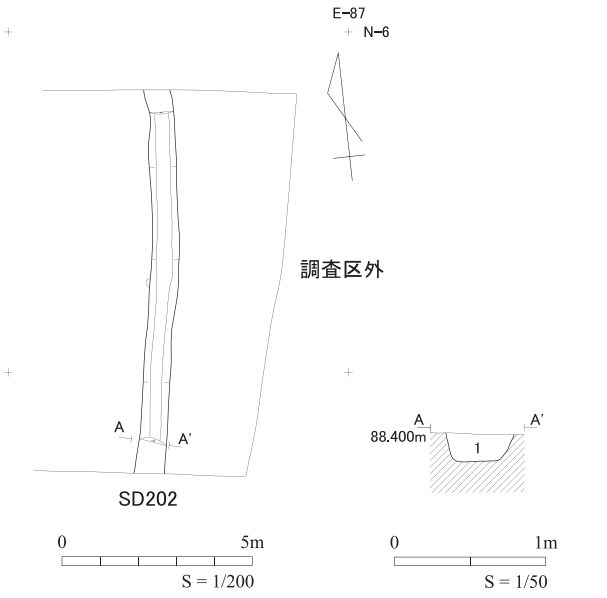
〔位置・確認面〕N2 中区の低位部に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕長さ約 11.6m 以上の南北大溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅 1.9 ～ 2.2m、下端幅 1.6 ～ 1.9m で断面形は逆台形を呈し、深さ 20 ～ 33cm である。位置関係と断面形状から、N5 区で検出した SD354 大溝跡と接続すると考えられ、延長は約 87m 以上に及ぶ。

〔方向〕南北方向

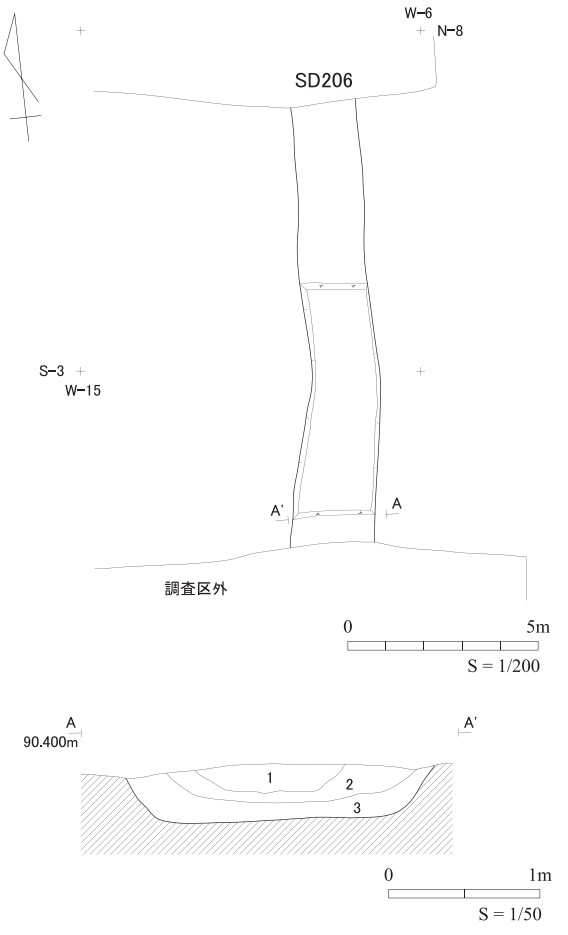
〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色のシルト・粘質シルトである。自然堆積土と考えられる。



SD202溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む

第 112 図　SD202 溝跡



SD206大溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む

第 113 図　SD206 大溝跡

〔出土遺物〕堆積土１層より非ロクロ調整の土師器甕（第 114 図２）、確認面より土師器坏（第 114 図１）が出土した。１は体部から口縁部にかけての外面に横ナデの後にヘラケズリ、内面に横ナデ調整が施されている。２は平底で球胴を呈し、口縁部横ナデ、体部外面にヘラケズリ調整が施され、外底面に木葉痕がみられる。

このほか、確認面より土師器壺・甕・甑、須恵器甕の破片が、堆積土１～２層より土師器坏・甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、土師器坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。土師器甕は外面にハケメ調整が施され、底部に木葉痕がみられるものと、外面にケズリ調整が施されるものがある。須恵器甕は内面に無文・同心円状押さえ具痕が、外面に平行タタキ目がみられる。

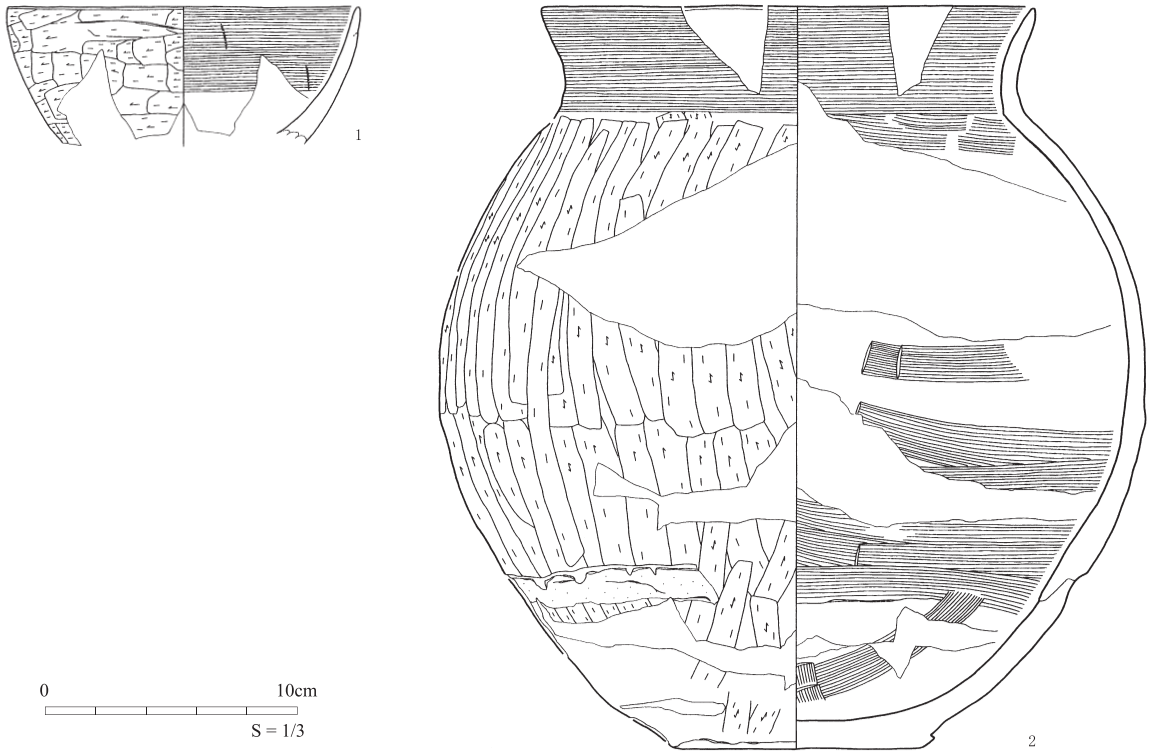
【SD228a・b 大溝跡】（第 75・115 ～ 120 図、図版 17- ５～７、18- １・２）

〔位置・確認面〕N2 西～南区の平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕(SI222・SI225・SI230・SI259・SI807・SD234・SD252・SD801) →《SD228a → b》→ (SI804・SD221・SD802・SD803・SD805)

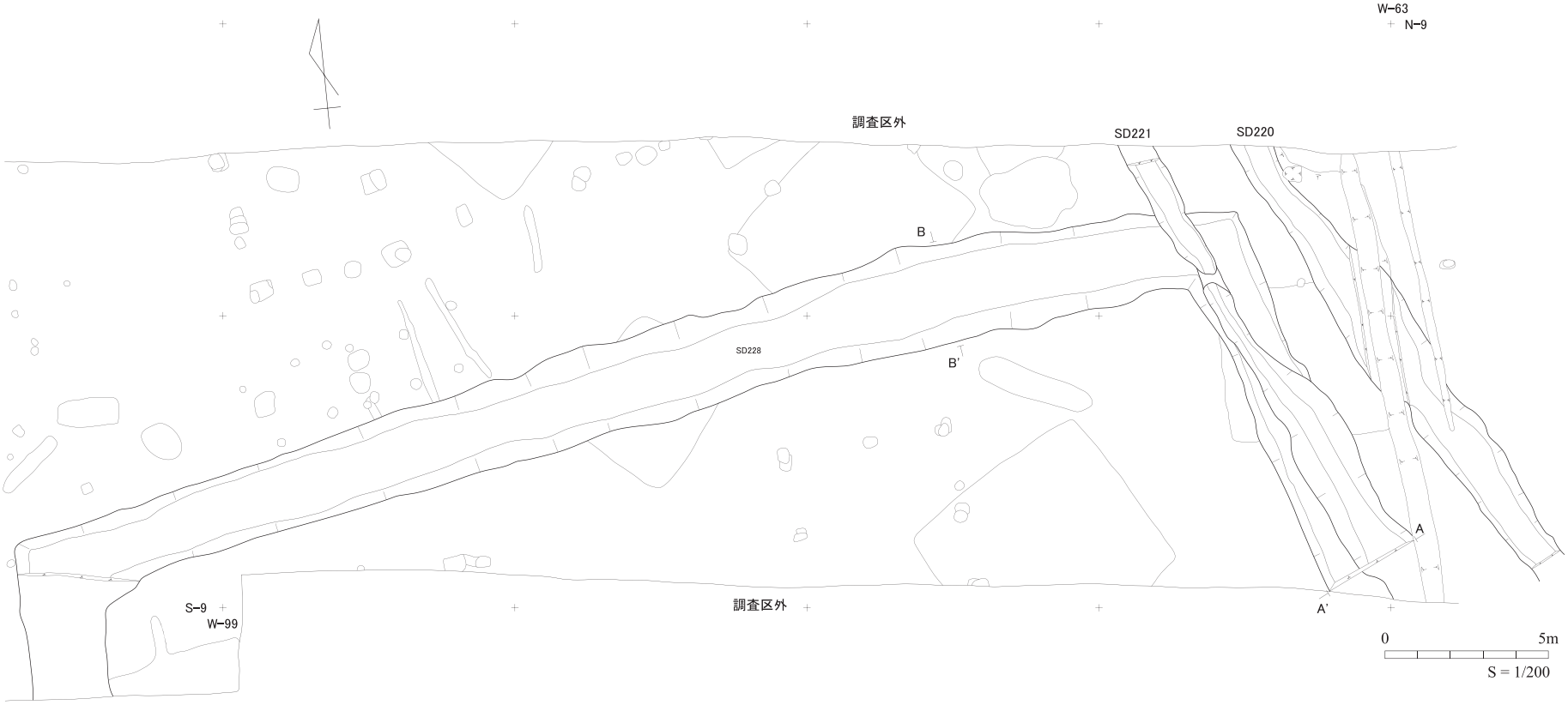
〔規模・形状〕大溝による東西約 57m、南北約 72m の不整方形の区画である。大溝の総延長は約 233m である。SD228a の埋没後にほぼ同一のプランで SD228b が掘り直されている。

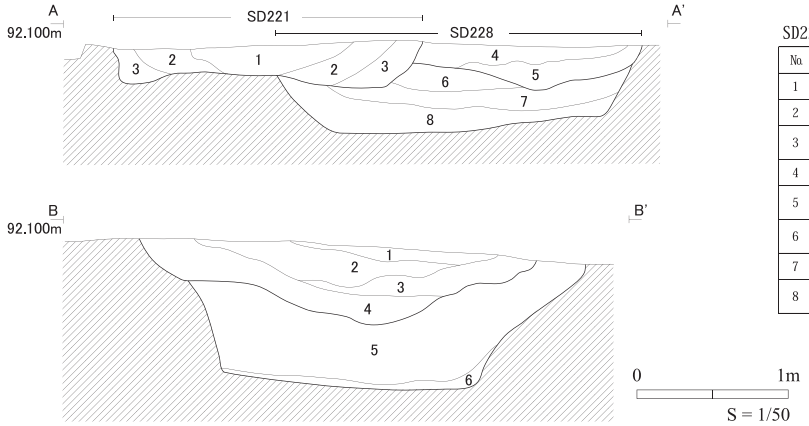
SD228a は上端幅 2.0 ～ 2.9m、下端幅 1.2 ～ 1.9m で断面形が逆台形を呈し、深さ 0.5 ～ 0.8m である。N2 西区では延長約 53m を確認した。東西方向に 40m 延び、東西両端でそれぞれ南側に約



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	確認面	土師器	坏	J	外：(口～体) ﾖｺﾅﾃﾞ →ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾖｺﾅﾃﾞ	(13.8)	—	(5.35)	一部	06072	—
2	堆上層	土師器	甕	G	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 木葉痕　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ	(19.3)	(9.8)	29.35	2/3	06071	35-1

第 114 図　SD206 大溝跡出土遺物





SD221溝跡・228a・b大溝跡（A－A’）

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　SD221
2	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　SD221
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に、黄褐色ロームブロックを少量含む　SD221
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　SD228b
5	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを均質に、炭化物粒を少量含む　SD228b
6	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物粒を少量含む　SD228a
7	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　SD228a
8	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を多量に、炭化物粒を少量、底面に岩盤の小片を含む　SD228a

SD228a・b大溝跡（B－B’）

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	炭化物粒を少量、黄褐色ローム粒を含む　SD228b
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　SD228b
3	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　SD228b 人為的埋土？
4	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　SD228b 人為的埋土？
5	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を均質に含む　SD228a
6	7.5YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SD228a

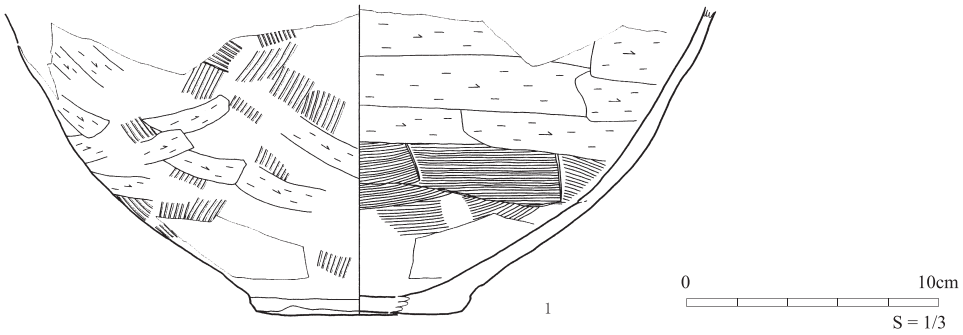
第 115 図　SD228 大溝跡

100°の角度で折れ曲がる。N2 南区では南北方向に延びる東辺・西辺の平面プランと、南東・南西コーナー部の平面プランと断面の状況、これを繋ぐ南辺の平面プランを確認した。北東・南東コーナー部間は約 75m あり、ほぼ直線的に延びている。北西・南西コーナー部間は約 70m あり、やや蛇行しながら延びている。南辺はほぼ直線的に延びており、南西コーナー部は約 90 度、南東コーナー部は約 70°の角度を持つ。両コーナー部間の距離は約 57m である。

また、SD228a の埋没後にほぼ同一プランで溝の掘り直しが行なわれている（SD228b）。SD228b は上端幅 2.1 ～ 2.7m、下端幅 0.5 ～ 1.5m で断面形が皿状を呈し、深さ 0.3 ～ 0.5m である。

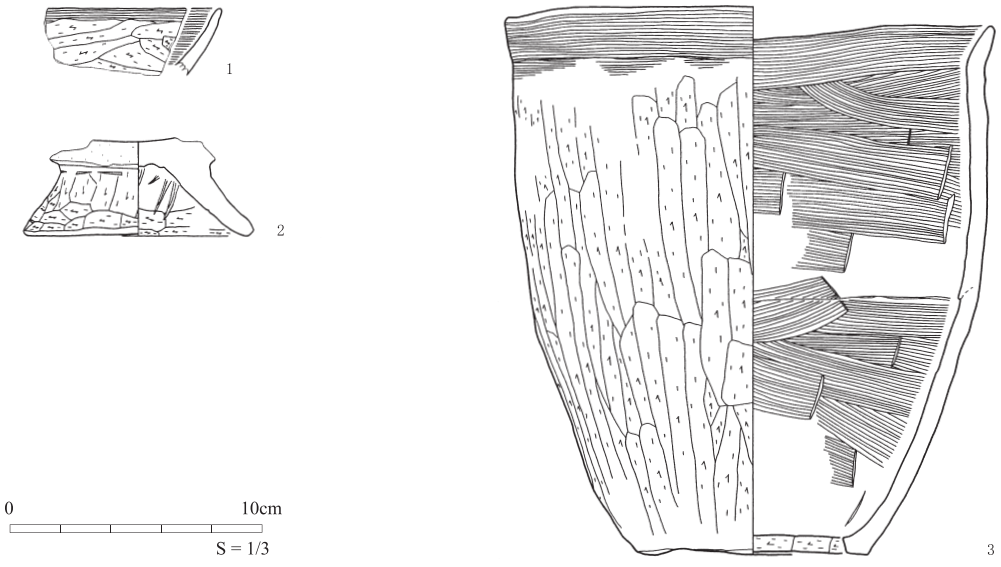
〔方向〕南北方向の不整方形

〔堆積土〕SD228a の堆積土は 4 層に細分される（N2 南区 T7・D 断面 7 ～ 10 層）。7 層は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルト、8 層は黄褐色ロームブロックを含む黒褐色シルト、9 層は黄褐



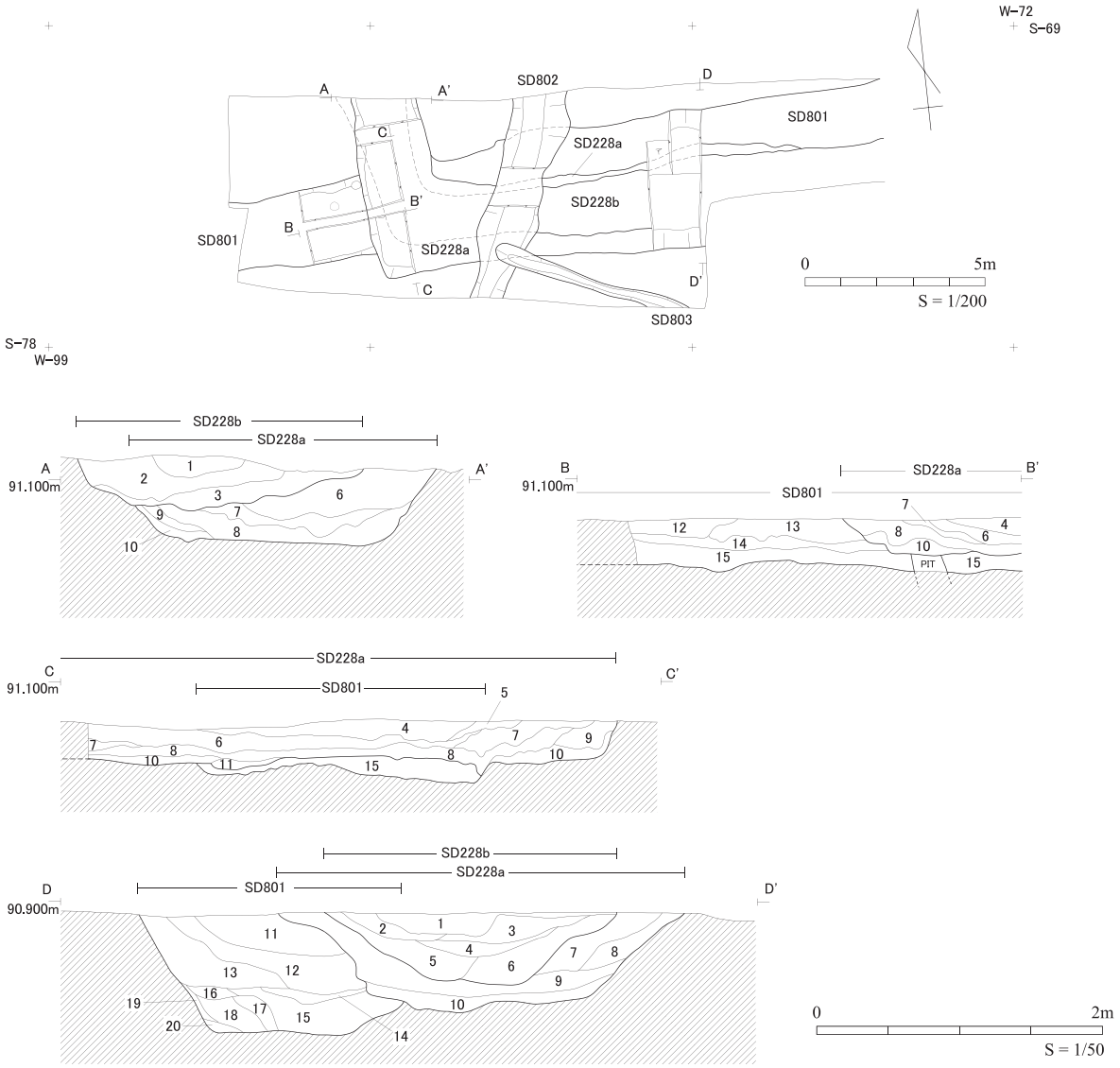
No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆	土師器	甕	F？	外：(胴) ﾊｹﾒ→ｹｽﾞﾘ (底面) ｹｽﾞﾘ　内：(胴下部) ﾅﾃﾞ (胴上部) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ	—	8.1	(12.05)	一部	06104	35-2

第 116 図　SD228a 大溝跡出土遺物



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆	土師器	坏	Ⅰ？	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ	—	—	1.65	一部	06060	—
2	堆	土師器	高杯	C	外：(脚) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理 (脚) ﾍﾗ状工具痕→ﾍﾗｹｽﾞﾘ 高台内面に墨書「人」	—	9.3	(3.7)	一部	06012	35-4
3	堆	土師器	甑	B	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ　無底	19.1	9.0	21.75	完形	06059	35-5

第 117 図　SD228b 大溝跡出土遺物



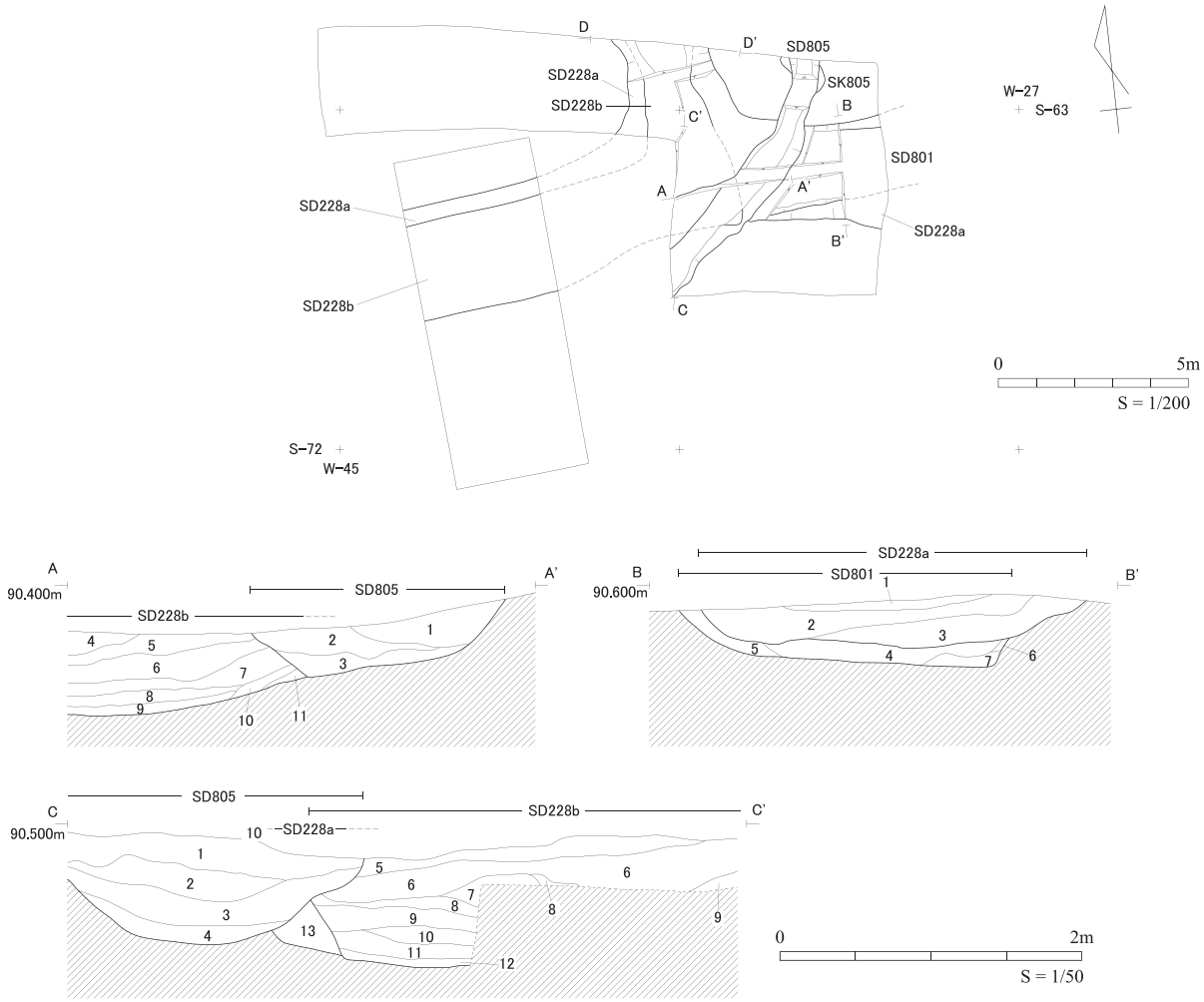
SD228a・b、801大溝跡(N2確認調査区T7 A-A'・B-B'・C-C')

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
2	2.5Y3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む SD228b
3	2.5Y3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む 水成堆積 SD228b
4	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む SD228a
5	10YR2/2 黒褐	シルト	ほぼ均質 SD228a
6	7.5YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む 水成堆積 SD228a
7	10YR2/1 黒	シルト	ほぼ均質 SD228a
8	10YR3/1 黒褐	砂質シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む 水成堆積 SD228a
9	2.5Y2/1 黒	砂質シルト	ほぼ均質 水成堆積 SD228a
10	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む SD228a
11	7.5YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む SD228a
12	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む SD801
13	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む SD801
14	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む 水成堆積 SD801
15	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む 人為的埋土 SD801

SD228a・b、801大溝跡(N2確認調査区T7 D-D')

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	SD228b
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
3	10YR2/1 黒	シルト	SD228b
4	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む SD228b
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
6	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む SD228b
7	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む SD228a
8	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む SD228a
9	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 水成堆積 SD228a
10	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む 水成堆積 SD228a
11	10YR1.7/1 黒	シルト	SD801
12	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD801
13	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む SD801
14	10YR2/2 黒褐	シルト	水成堆積 SD801
15	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 水成堆積 SD801
16	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む SD801
17	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む SD801
18	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む SD801
19	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む SD801
20	10YR4/4 褐	シルト	黒褐色シルト粒を含む SD801

第 118 図　SD228a・b 大溝跡、SD801 大溝跡 (1)



SD228b、805大溝跡(N2確認調査区T13 A-A')

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む SD805
2	10YR3/3 暗褐	シルト	炭化物粒を少量、黄褐色ロームを含む SD805
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を少量含む SD805
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む SD228b
5	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を少量、黄褐色ローム粒を含む SD228b
6	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む SD228b
7	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量、小礫を含む SD228b
8	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	炭化物粒を少量、小礫を含む SD228b
9	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	砂を少量、白色粘土ブロックを含む SD228b
10	10YR4/6 褐	砂質シルト	SD228b
11	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	砂を少量含む SD228b

SD228a、801大溝跡(N2確認調査区T13 B-B')

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む SD228a
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む SD228a
3	10YR2/3 黒褐	シルト	炭化物粒を少量、黄褐色ローム粒を均質に含む SD228a
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を少量含む SD801
5	10YR4/4 褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含む SD801
6	10YR4/6 褐	粘質シルト	SD801
7	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を多量に含む 人為的埋土 SD801

SD228a・b、805大溝跡(N2確認調査区T13 C-C')

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を少量含む SD805
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD805
3	10YR3/3 暗褐	シルト	白色粘土粒を少量、黄褐色ローム粒、小礫を含む SD805
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒をラミネ状に、黄褐色ロームブロックを含む SD805
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む SD228b
6	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を多量に含む SD228b
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む SD228b
8	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む SD228b
9	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む SD228b
10	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
11	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	SD228b
12	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む SD228b
13	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む SD228a

第 119 図　SD228a・b 大溝跡、SD801 大溝跡 (2)

色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、10層は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトである。９・10層は水成堆積層である。SD228bの堆積土は６層に細分される（N2南区T7・D断面１～６層）。１層は均質な黒褐色シルト、２層は粒を少量含む黒褐色シルト、３層は均質な黒色シルト、４層は粒を含む黒褐色シルト、５層は粒を少量含む黒褐色シルト、６層は黄褐色ロームブロックを含む黒色シルトである。２～６層は黄褐色ローム・黒色土ブロックの混入状況から人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕SD228a：堆積土より非ロクロ調整の土師器甕（第116図）が出土した。平底で球胴を呈し、胴部外面にハケメの後にケズリ調整が施されている。

このほか、堆積土より土師器坏・高杯・壺・甕・甑、須恵器坏・高台坏・蓋・甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。高杯は脚部が円錐台状を呈し、外面にミガキ調整が施され円形の透かし孔を３か所に持つものと、円柱状を呈し、外面にハケメ調整が見られるものとがある。壺は内外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にミガキ調整またはハケメ調整が施されている。甑は無底式のものである。須恵器坏は底部がヘラキリのもの、回転ヘラケズリが施されるもの、手持ちヘラケズリが施されているものがある。甕は外面に平行タタキ目が、内面に無文オサエ具痕が見られる。

SD228b：堆積土より非ロクロ調整の土師器坏（第117図１）・高杯（第117図２）・甑（第117図３）が出土した。１は外面が口縁部横ナデの後に体部にケズリ、内面に横ナデ調整が施されており、黒色処理が施されていない。２は内面に黒色処理が施されており、高台内面に「人」の墨書がみられる。３は無底で口縁部横ナデの後に体部にケズリ調整が施されている。

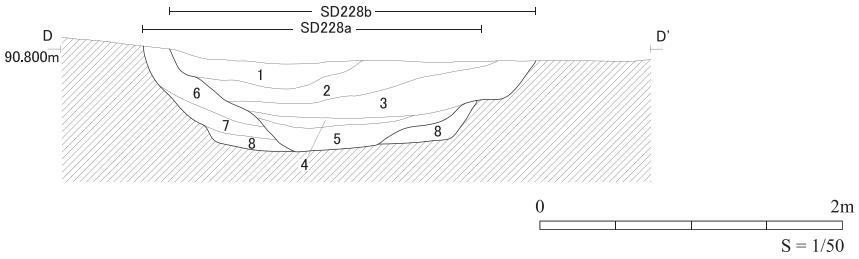
このほか、堆積土より非ロクロ調整の土師器坏・壺・甕・甑、須恵器甕の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。壺は外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されている。甑は二重口縁で外面にハケメ調整が施されている。

【SD801大溝跡】（第118・119図、図版18-１・２）

〔位置・確認面〕N2南区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SD801》→ SD228 →（SI804・SI221・SD802・SD803・SD805）

〔規模・形状〕長さ約64m以上の東西大溝跡で、調査区外の東西へ延びている。上端幅1.9～2.2m、下端幅1.0～1.8mで断面形は逆台形を呈し、深さ30～80cmである。位置関係と断面形状などから、



SD228a・b大溝跡（N2確認調査区T13 D-D'）

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SD228b
2	10YR3/4 暗褐	シルト	白色粘土ブロックを多量に含む　SD228b
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黒褐色シルトブロックを多量に、黄褐色ロームブロック・粒を含む　SD228b
4	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量に、暗褐色土がラミネ状に含む　水成堆積　SD228b
5	10YR3/3 暗褐	シルト	砂を少量に含む　水成堆積　SD228b

No.	土色	土性	備考
6	10YR3/3 暗褐	シルト	炭化物粒を少量に、黄褐色ローム粒を均質に含む　SD228a
7	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量、黄褐色ローム粒を均質に含む　SD228a
8	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、黒褐色土粒を含む　SD228a

第120図　SD228a・b大溝跡

N2 南区 14T の東側で北へ折れ曲がって N2 中区の SD206 および N5 区の SD354 と接続していた可能性がある。N2 南区 12T 東部はこの推定線上にあたるが、削平により遺構は残存しない。

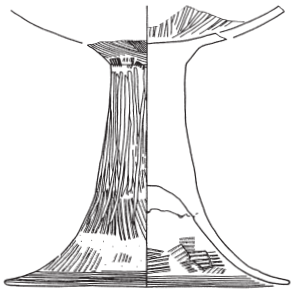
〔方向〕東西方向

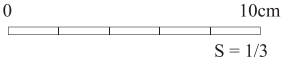
〔堆積土〕堆積土は 10 層に細分される（N2 南区 T7・D 断面 11 ～ 20 層）。11 層は黒色シルト、12 層は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、13 層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、14 層は黒褐色シルト、15 層は黄褐色ロームブロックをマーブル状に含む黒褐色シルト、16 ～ 20 層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルトである。11 ～ 13 層は自然堆積、14・15 層は水成堆積、16 ～ 20 層は壁際の自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕N2 南区 7 トレンチの堆積土より非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が出土した。土師器坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にケズリ調整が施されている。

G．N２南区の遺構確認調査

N2 南区の遺構確認調査区 (1 ～ 14 トレンチ) では、上述した SD228 大溝跡と SD801 大溝跡のほか、竪穴住居跡 10 棟、溝跡 13 条などが確認された（第 75 図）。SD228 大溝跡は方形の区画となることが確認された。竪穴住居跡とそのほかの溝跡については平面プランのみの確認のため詳細は不明であるが、竪穴住居跡のうち SI809 竪穴住居跡と SI814 竪穴住居跡については煙道が伴っている。また、SI811 竪穴住居跡では確認面より土師器高杯の脚部（第 121 図）が出土した。非ロクロ調整で、外面にハケメ調整の後にヘラミガキ調整が施されている。





No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	確認面	土師器	高杯	B	外：(体) ﾅﾃﾞ (脚) ﾊｹﾒ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ→ (裾) ﾖｺﾅﾃﾞ　内：(体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ (脚) ﾊｹﾒ→ (裾) ﾖｺﾅﾃﾞ (底径＝裾径)、脚部のみ 4/5	—	(11.2)	(6.1)	一部	06066	36-1

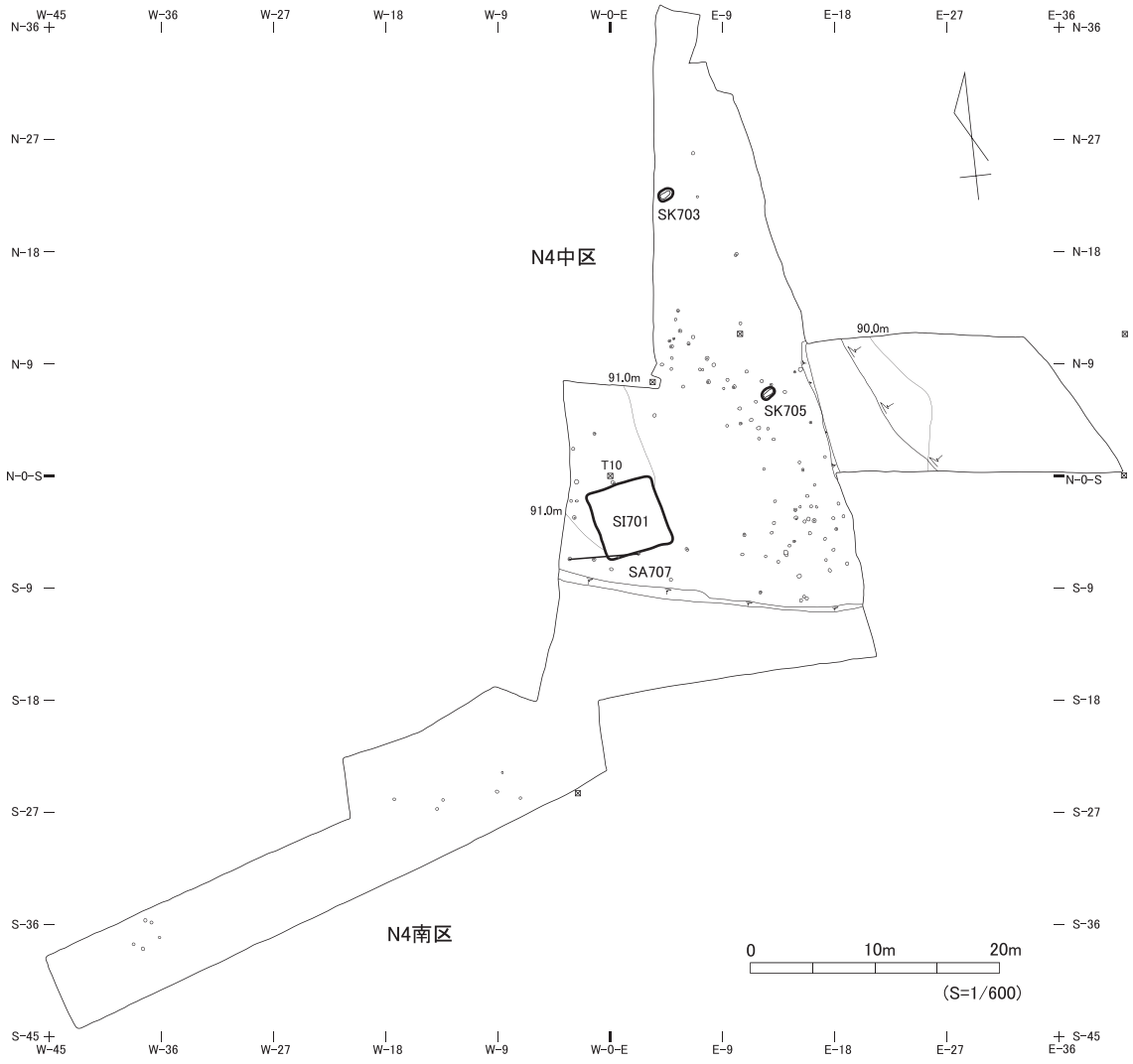
第 121 図　SI811 出土遺物

（6）N３区

遺跡の立地する丘陵中腹の西縁部にあたる（第 10 図）。試掘調査の結果、後世の削平により黄褐色ロームおよび白色粘土層が露出していることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。

（7）N４区

遺跡の立地する丘陵の東縁部で、北区、中区、南区を設定して調査を行なった（第 10・122 図）。北区と中区の間に南東方向から入る小規模な沢と、南区の西半部に東から入る小規模な沢により開析



第 122 図　Ｎ４中・南区遺構配置図

され、その後埋没している。中区は二つの沢に挟まれた小規模な舌状丘陵の先端部に位置し、竪穴住居跡 1 軒、柱穴列 1 条、落し穴状土坑 2 基が確認された。また、丘陵先端部の東向き斜面で柱穴多数が確認されたが、建物などは確認できない。北区と南区の東半部は削平を受けており、遺構は確認されなかった。以下、主要な遺構について述べる。

Ａ．竪穴住居跡

【SI701 竪穴住居跡】（第 123 ～ 125 図、図版 19- 1 ～ 3）

〔位置・確認面〕N4 中区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

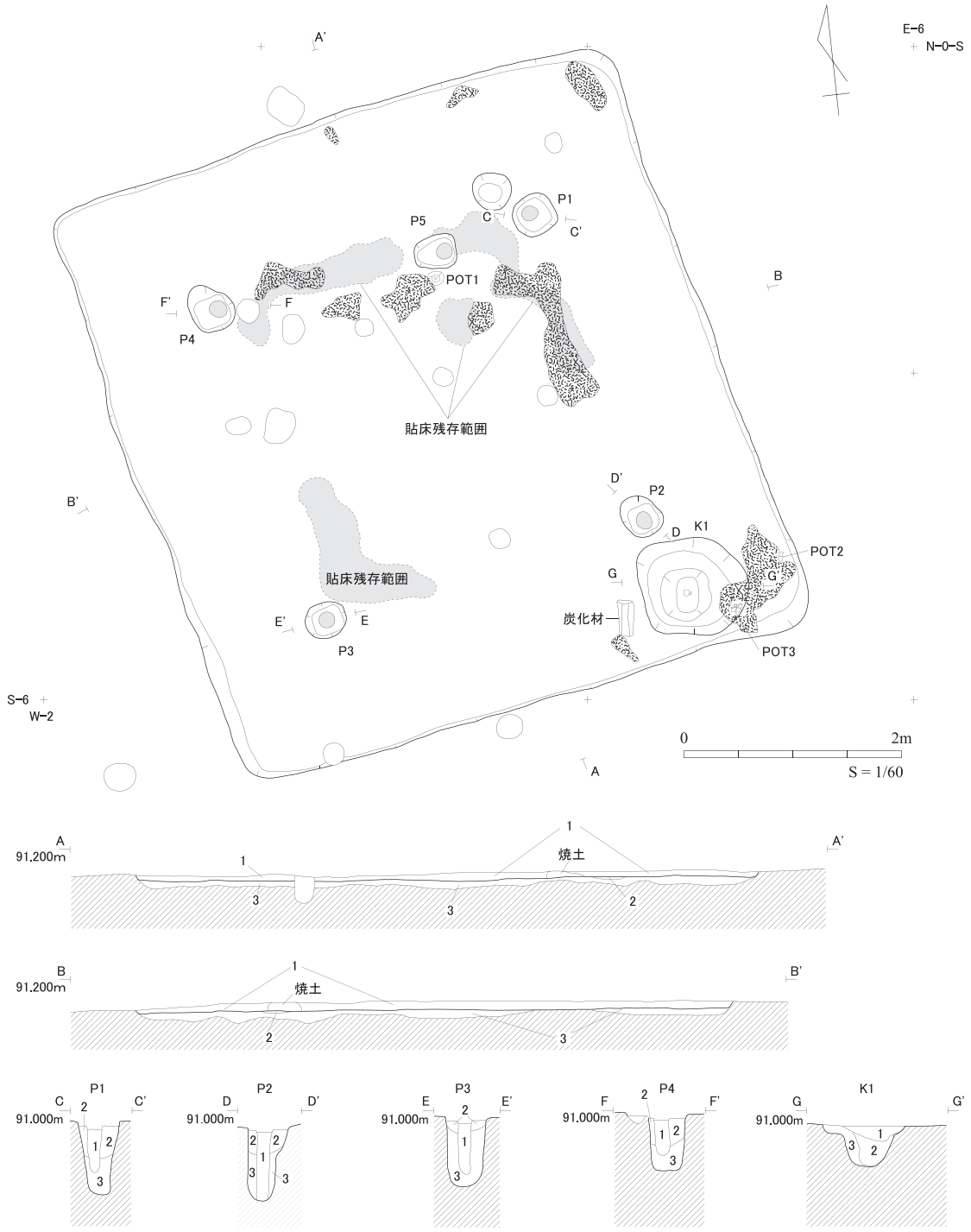
〔重複〕《SI701》→ SA707

〔規模・形状〕東西 5.3m、南北 5.5m の正方形を呈する。

〔方向〕東辺：N － 14° － W

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。残存壁高は最も残存状況の良好な西壁で床面から 5cm である。

〔床面〕Ⅴ層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、主柱穴の内側に暗褐色シルト主体の顕著な硬化層が形成されており、貼床と考えられる。



SI701竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に、黄褐色ローム粒を少量、焼土ブロックを含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を少量含む　住居貼床
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土

SI701竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土ブロック・粒、炭化物粒を多量に含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む

SI701竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む　柱痕跡
2	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SI701竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴痕跡
3	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

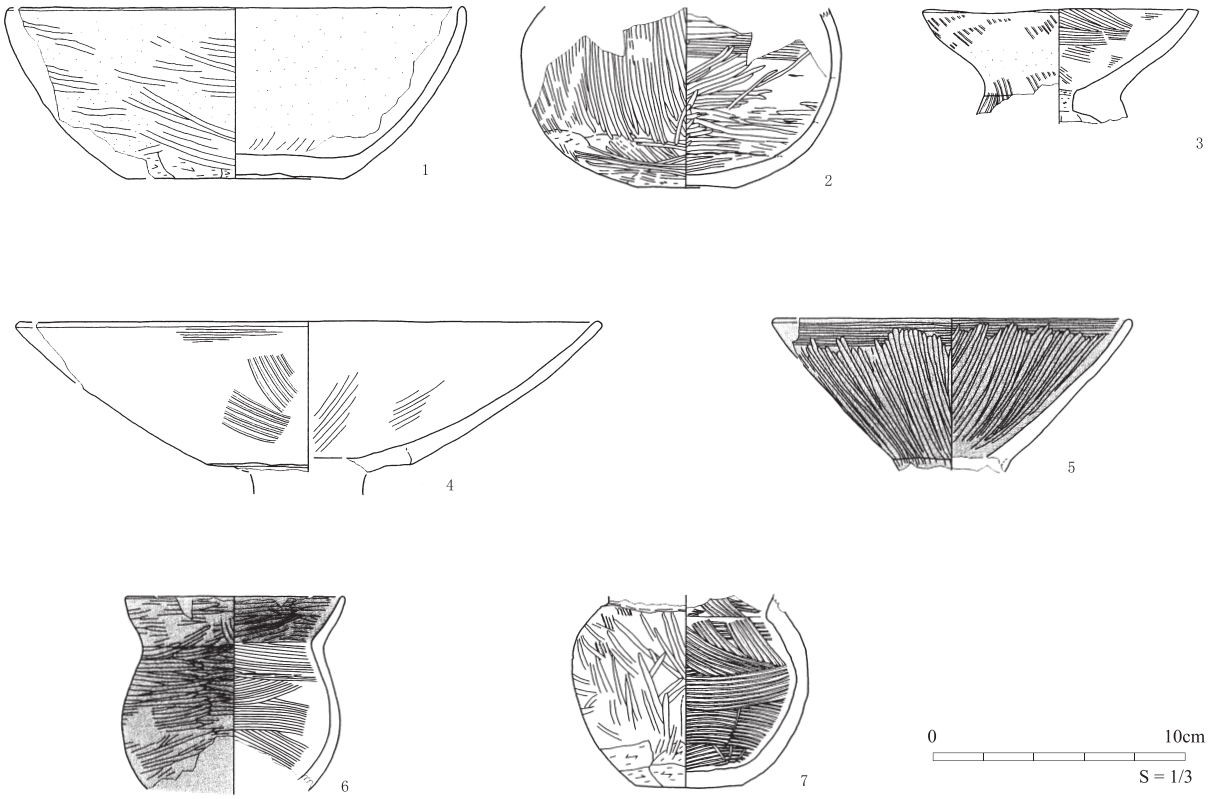
第 123 図　SI701 竪穴住居跡 (1)

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に 150 ～ 160cm の位置で柱穴 4 基を確認した (P1 ～ 4)。掘方の平面形は長軸 38 ～ 40cm、短軸 32 ～ 36cm の正方形ないしはそれを基調とする不整円形で、床面からの深さは 66 ～ 77cm である。いずれも平面形が直径 13 ～ 14cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは 38 ～ 65cm で、掘方底面に達するものと達しないものとがある。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。

〔壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔炉〕住居中央やや北東寄りの位置で、被熱による赤色硬化範囲が確認された。平面形は長軸 45cm、短軸 38cm の不整円形を呈する。床面と同一面上にあり、炉跡と考えられる。

〔貯蔵穴〕住居南東コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。平面形は長軸 100cm、短軸 90cm の不整円形を呈する。断面形は底面に段をもつ逆台形を呈し、深さ 40cm である。床面から掘り込ま



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	確認面	土師器	坏	B	外：ｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内外面摩滅	(18.2)	8.6	6.75	3/5	06052	36-2
2	堆 1 層	土師器	坏	A1？	外：(体) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内：(体) ﾅﾃﾞ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ	—	3.8	(7.8)	2/3	06055	36-3
3	床	土師器	器台	A	外：(脚) ﾊｹﾒ　内：(受) ﾅﾃﾞ (脚) ﾍﾗﾅﾃﾞ　外面摩滅	—	8.8	(4.65)	一部	06056	36-4
4	床 POT3	土師器	高杯	A 1	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾊｹﾒ　内：(体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ　坏部のみ 2/5	(23.0)	—	(5.9)	一部	06058	—
5	堆	土師器	高杯	A 2	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ (体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→ (体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩	(14.2)	—	(6.05)	一部	06054	—
6	床	土師器	壺	A	外：(口～体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩　内：(口～頸) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩 (体) ﾍﾗﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	(8.6)	—	(7.6)	1/5	06057	36-5
7	確認面	土師器	壺	A	外：(体) ﾊｹﾒ (体下～底) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ　内：(体) ﾊｹﾒ	—	4.1	6.6	一部	06053	36-6

第 124 図　SI701 竪穴住居跡出土遺物

SI701竪穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴痕跡
3	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI701竪穴住居跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土
3	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 125 図　SI701 竪穴住居跡 (2)

れており、貯蔵穴と考えられる。堆積土は３層に細分され、いずれも自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔堆積土〕住居内堆積土は１層で、焼土と炭化物粒を多量に含む自然堆積土である。床面直上に焼土ブロックと炭化材が分布しており、焼失住居の可能性がある。

〔出土遺物〕床面より土師器器台（第 124 図３）・高杯（第 124 図４）・壺（第 124 図６）が、住居内堆積土より土師器鉢（第 124 図１）・高杯（第 124 図５）が、確認面より土師器坏（第 124 図２）・壺（第 124 図７）が出土した。３は炉跡付近、４・６は貯蔵穴付近の床面で出土した。１・２は内外面にヘラミガキが施されている。３は受部外面にハケメ、内面にヘラナデ調整が施されている。４は坏部外面にハケメ、内面にヘラミガキ調整が施されている。５は坏部内外面にヘラミガキの後に赤彩が施されている。６は外面と内面の口縁部にヘラミガキの後に赤彩が施されている。７は外面にハケメとヘラケズリの後にヘラミガキが施されている。

Ｂ．柱列跡

【SA707 柱列跡】（第 126 図）

〔位置・確認面〕N4 中区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SI701 →《SA707》

〔規模・形状〕東西３間 (総長 2.8m) 以上の柱列跡で、調査区外の西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕４基確認した。掘方の平面形は長軸 20 ～ 30cm、短軸 20 ～ 25cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 37 ～ 47cm である。いずれも平面形が直径８～ 11cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。

〔柱間寸法〕東から 80 - 100 - 100cm である。

〔方向〕E - 3° - S

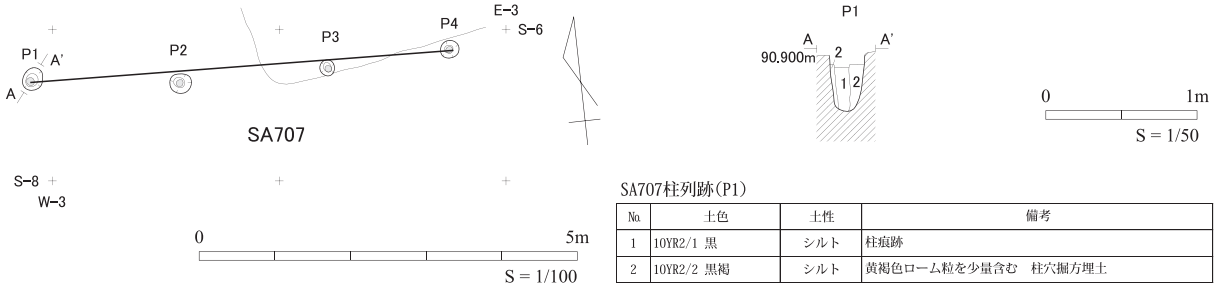
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

Ｃ．落し穴状土坑

落し穴状土坑は２基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第６表に特徴を示す。

【SK703 落し穴状土坑】（第 127 図、図版 19- ４）

〔位置・確認面〕N4 中央区の丘陵落ち際に立地する。Ⅴ層で確認した。

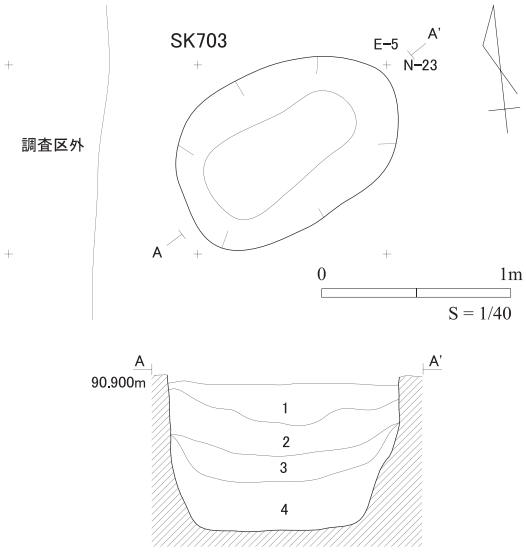


SA707柱列跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

第 126 図　SA707 柱列跡

〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 130cm、短軸 85cm の楕円形を呈する。横断面形は逆台形を呈し、深さは 85cm である。
〔底面〕ほぼ平坦である。
〔方向〕南西 - 北東方向
〔堆積土〕堆積土は 4 層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトと粘質シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SK703落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む

第 127 図　SK703 落し穴状土坑

（8）N 5 区

遺跡の立地する丘陵東斜面の中腹部にあたり、N4 南区に東から入る小規模な沢が北西方向に屈曲している。このため、N5 区の大半は埋没した沢地上に位置する。北区、南区を設定して調査を行なった(第 129 図)。遺構は落し穴状土坑 2 基、大溝跡 1 条、溝跡 1 条のほか、柱穴多数が確認されたが、建物などは確認できない。

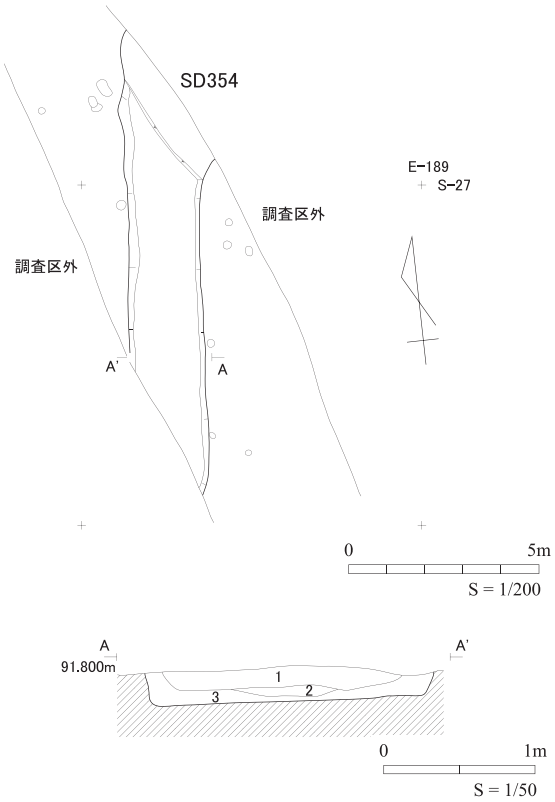
A．落とし穴状土坑

落とし穴状土坑は 2 基確認された。第 6 表に特徴を示す。

B．溝跡

大溝跡 1 条、溝跡 1 条が確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

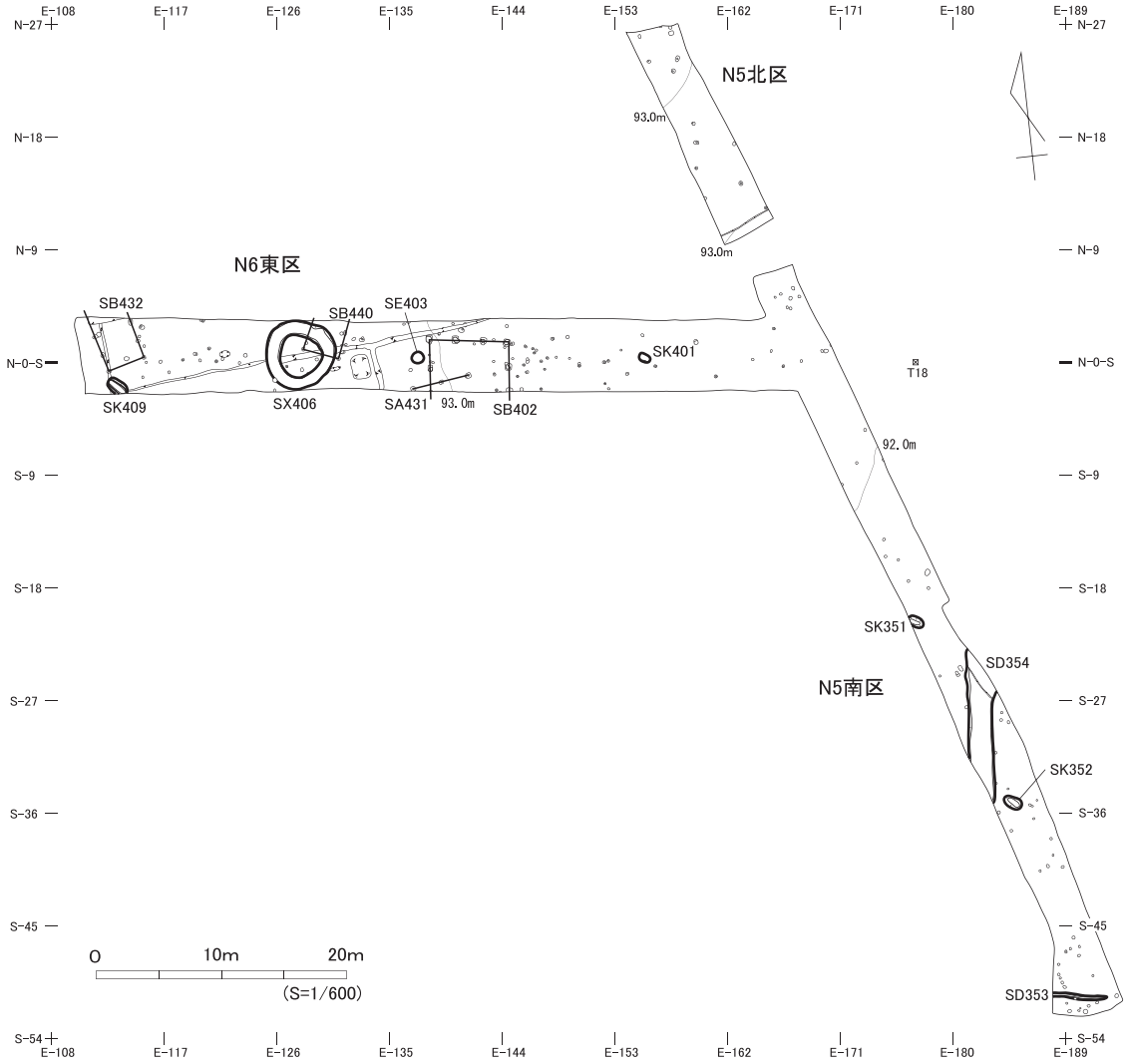
【SD354 大溝跡】（第 128 図、図版 19- 5）
〔位置・確認面〕N5 南区の沢地上に立地する。Ⅲ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕長さ約 8.7m 以上の大溝跡で、調査区外の南北へ延びている。上端幅 1.9 ～ 2.3m、下端幅 1.5 ～ 1.7m で断面形は逆台形を呈し、深さは 11 ～ 23cm である。位置関係と断面形状か



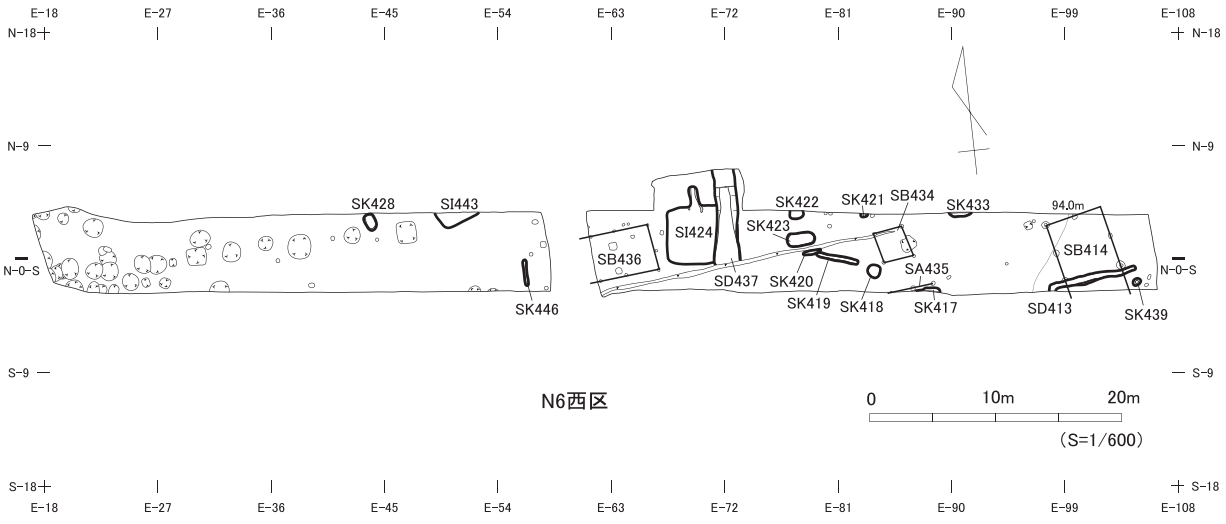
SD354大溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む

第 128 図　SD354 大溝跡



第 129 図　N 5 北・南区、N 6 東区遺構配置図



第 130 図　N 6 西区遺構配置図

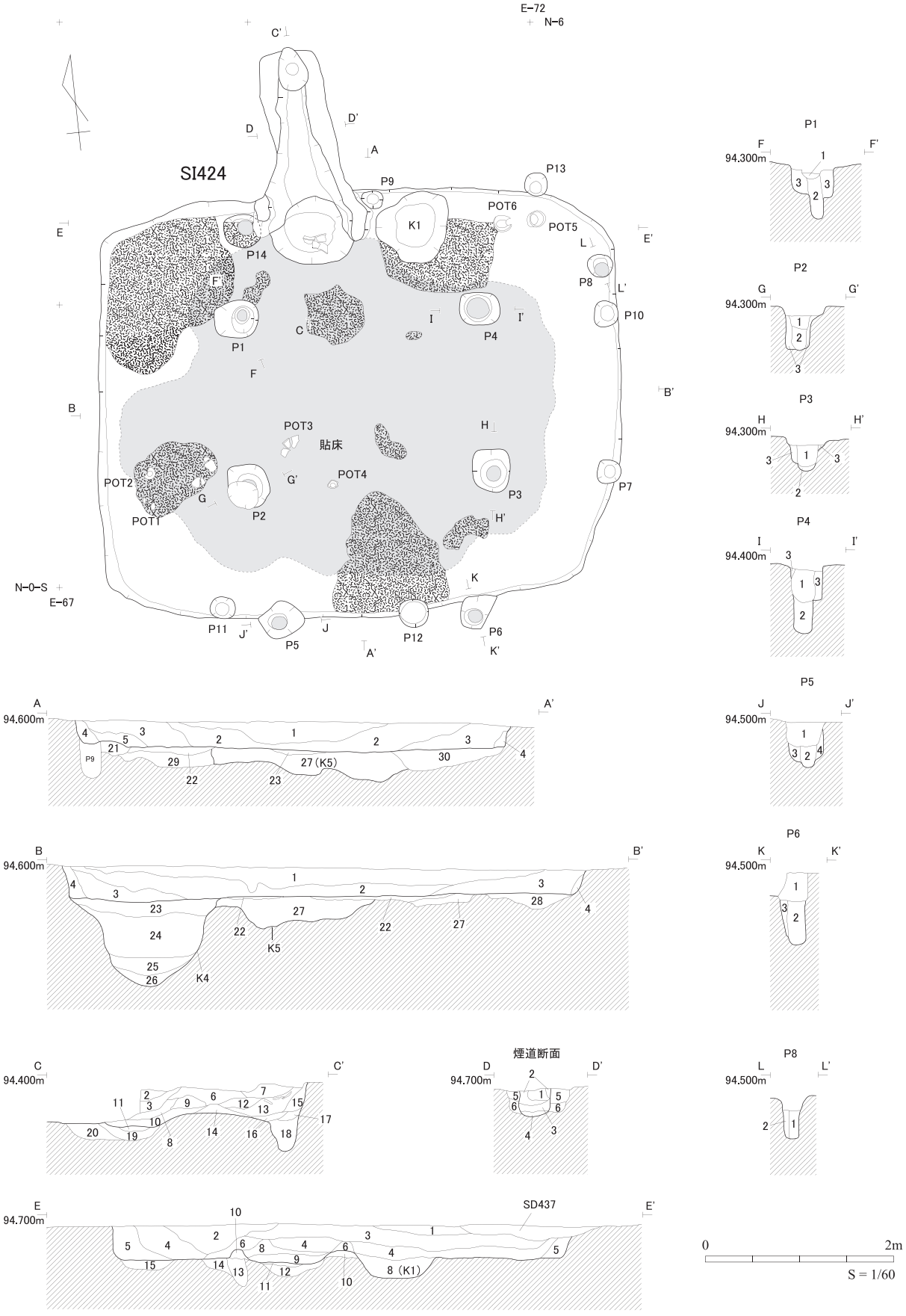
ら、Ｎ２中区で検出したSD206大溝跡と接続すると考えられ、延長は約87m以上に及ぶ。
〔方向〕南北方向
〔堆積土〕堆積土は３層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトである。
〔出土遺物〕堆積土より土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器甕は非ロクロ調整で、頸部外面に段を有し、胴部にハケメ調整が施されている。

（９）Ｎ６区

遺跡範囲の北部で、遺跡の立地する丘陵を東西に横断する。西区、東区を設定して調査を行なった（第129・130図）。西区はN8西区から続く六角丘陵頂部の平坦面にあたる。東区はN5区に南東から入る小規模な沢に向かって東に緩やかに傾斜している。遺構は西区の東半部から東区の西半部を中心に竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡６棟、柱列跡３条、井戸跡１基、落し穴状土坑２基、溝跡２条､円形周溝跡１基などが確認された。西区の西半部は削平が著しく遺構は確認されなかった。以下、主要な遺構について述べる。

Ａ．竪穴住居跡

【SI424竪穴住居跡】（第131～135図、図版20-４・５、21-１～３）
〔位置・確認面〕N6西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕《SI424》→ SD437 → SX459
〔規模・形状〕東西約5.6m、南北約4.5mの隅丸長方形を呈する。
〔方向〕カマド中軸線：N－1°－W
〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な北壁で床面から36cmである。
〔床面〕Ⅴ層起源の黄褐色ロームブロックと一部白色粘土ブロックと焼土、炭化物粒を含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、中央部の東西約4.0m、南北約3.5mの範囲に褐色シルトないしは黄褐色粘土を主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。
〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に110～160cmの位置で柱穴４基を確認した(P1～4)。掘方の平面形は長軸45～48cm、短軸35～45cmの隅丸方形ないしはそれを基調とする楕円形で、床面からの深さは40～74cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡が認められ、その底面で直径14～20cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは40～74cmで、掘方底面に達するものとさらに25～35cmほど深く落ち込むものとがある。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。
〔壁柱穴〕住居北壁のカマド両脇で２基、東壁で３基、南壁で２基の柱穴を確認した(P5～P11)。掘方の平面形は長軸25～50cm、短軸18～40cmの円形ないしは楕円形で、住居確認面からの深さは43～76cmである。このうちP5、P6、P8では柱材の抜き取り痕跡が認められ、その底面で直径10～18cmの円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の床面からの深さは46～52cmで、掘方底面に達するものとさらに10cmほど深く落ち込むものとがある。位置と形状、規模から壁柱



第 131 図　SI424 竪穴住居跡 (1)

穴と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕検出されなかった。

〔カマド〕住居北壁中央やや西寄りに設置されている。燃焼部と煙道、煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ 80cm、幅 128cm で、焚口幅は側壁先端間で 100cm である。燃焼部底面は幅 90cm、奥行 88cm で、床面より 5cm ほど皿状に窪んでいる。底面には被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は左側壁で長さ 45cm、幅 24cm、高さ 10cm、右側壁で長さ 53cm、幅 25cm、高さ 17cm が残存する。黄褐色ロームと白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。奥壁は住居北壁にほぼ一致し、奥壁から北側へ延びる煙道は長さ 160cm で、幅 30 ～ 80cm、深さ

SI424竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む
4	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む　カマド崩落土
6	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む 煙道天井崩落土
7	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物粒、灰を多量に含む　煙道天井崩落土
8	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を多量に含む　カマド崩落土
9	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む
10	5YR4/4 にぶい赤褐	シルト	焼土粒を多量に含む　カマド機能時の堆積
11	5YR4/6 赤褐	シルト	上面に硬化面　焼面
12	10YR3/3 暗褐	シルト	
13	10YR2/2 黒褐	シルト	炭化物粒を多量に、焼土粒を含む
14	7.5YR4/4 褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を含む　カマド機能時堆積
15	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、炭化物粒を多量に含む
16	10YR4/4 褐	シルト	炭化物粒を少量含む
17	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を含む
18	10YR3/3 暗褐	シルト	白色粘土ブロック、炭化物粒を少量含む　底面が焼けている
19	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物粒を含む カマド掘方埋土
20	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　カマド掘方埋土
21	10YR4/6 褐	シルト質粘土	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む　カマド側壁構築土
22	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居貼床
23	10YR5/8 黄褐	粘土	黄褐色ロームブロックを主体とする　暗褐色シルトを含む 住居貼床
24	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　人為的埋土
25	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　人為的埋土
26	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物粒を含む K4機能時の堆積？
27	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土
28	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　住居掘方埋土
29	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む　住居掘方埋土
30	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む　住居掘方埋土

SI424竪穴住居跡カマド付近東西断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	東西断面1層
2	10YR3/4 暗褐	シルト	
3	10YR3/2 黒褐	シルト	東西断面2層
4	10YR3/2 黒褐	シルト	東西断面3層
5	10YR2/3 黒褐	シルト	東西断面4層
6	10YR3/3 暗褐	シルト	南北断面5層　カマド崩落土
7	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	カマド南北断面8層　カマド崩落土
8	10YR4/6 褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロック、炭化物粒、灰を多量に含む　貯蔵穴(K1)堆積土
9	5YR4/4 にぶい赤褐	シルト	カマド南北断面10層　カマド機能時の堆積
10	10YR4/6 褐	シルト質粘土	南北断面21層　カマド側壁構築土
11	5YR4/6 赤褐	シルト	カマド南北断面11層　焼面
12	10YR3/3 暗褐	シルト	カマド南北19層　カマド掘方埋土
13	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P14柱抜き取り痕跡
14	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む P14柱穴掘方埋土
15	10YR3/4 暗褐	シルト	南北断面29層　住居掘方埋土

SI424竪穴住居跡煙道断面

No.	土色	土性	備考
1	2.5Y6/4 にぶい黄	粘土	黄褐色ロームブロックを主体とする　下面で焼けている
2	10YR3/4 暗褐	シルト	カマド南北断面6層　煙道天井崩落土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	カマド南北断面9層
4	5YR4/4 にぶい赤褐	シルト	カマド南北断面10層　カマド機能時堆積
5	10YR5/6 黄褐	粘土	黄褐色ローム土を主体とする　暗褐色シルトを含む 煙道側壁構築土
6	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む　煙道側壁構築土

SI424竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物を含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	柱痕跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に、黒色シルトブロックを含む 柱穴掘方埋土

SI424竪穴住居跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR4/6 褐色	シルト	炭化物粒を含む　柱痕跡
3	10YR4/6 褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SI424竪穴住居跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/6 褐色	シルト	黄褐色ロームブロック多量に含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR5/6 黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SI424竪穴住居跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物粒を含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR4/4 褐	シルト	柱痕跡
3	10YR4/6 褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI424竪穴住居跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱痕跡
3	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック、炭化物を含む　柱穴掘方埋土
4	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SI424竪穴住居跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含み　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
3	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック多量に含む　柱穴掘方埋土

SI424竪穴住居跡(P8)

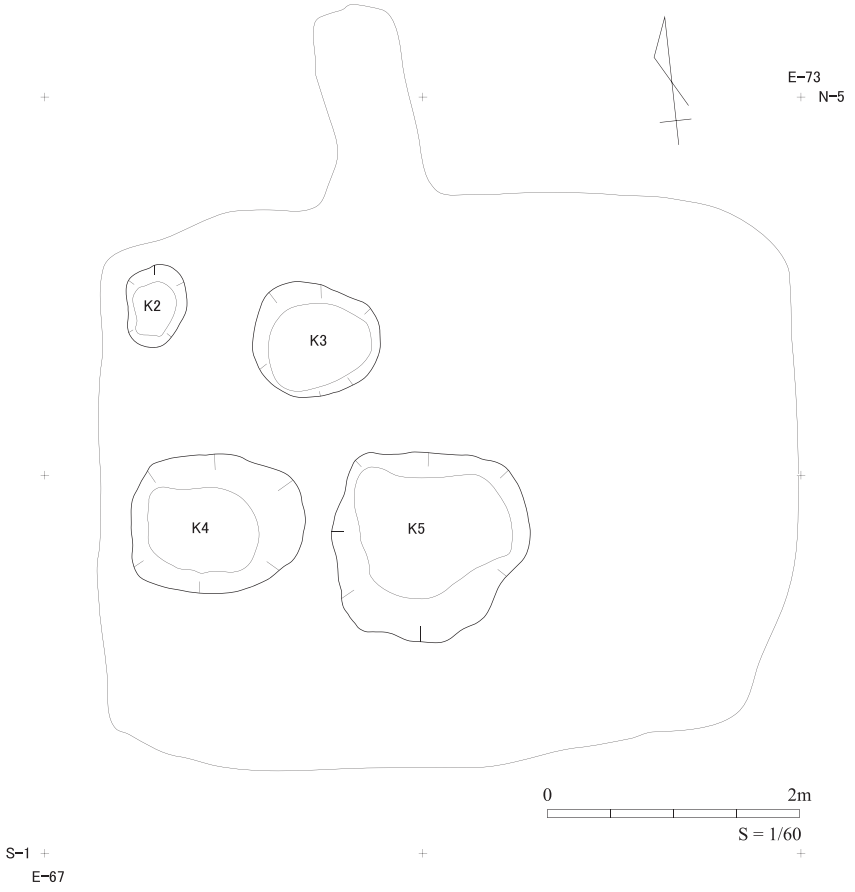
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

第 132 図　SI424 竪穴住居跡 (2)

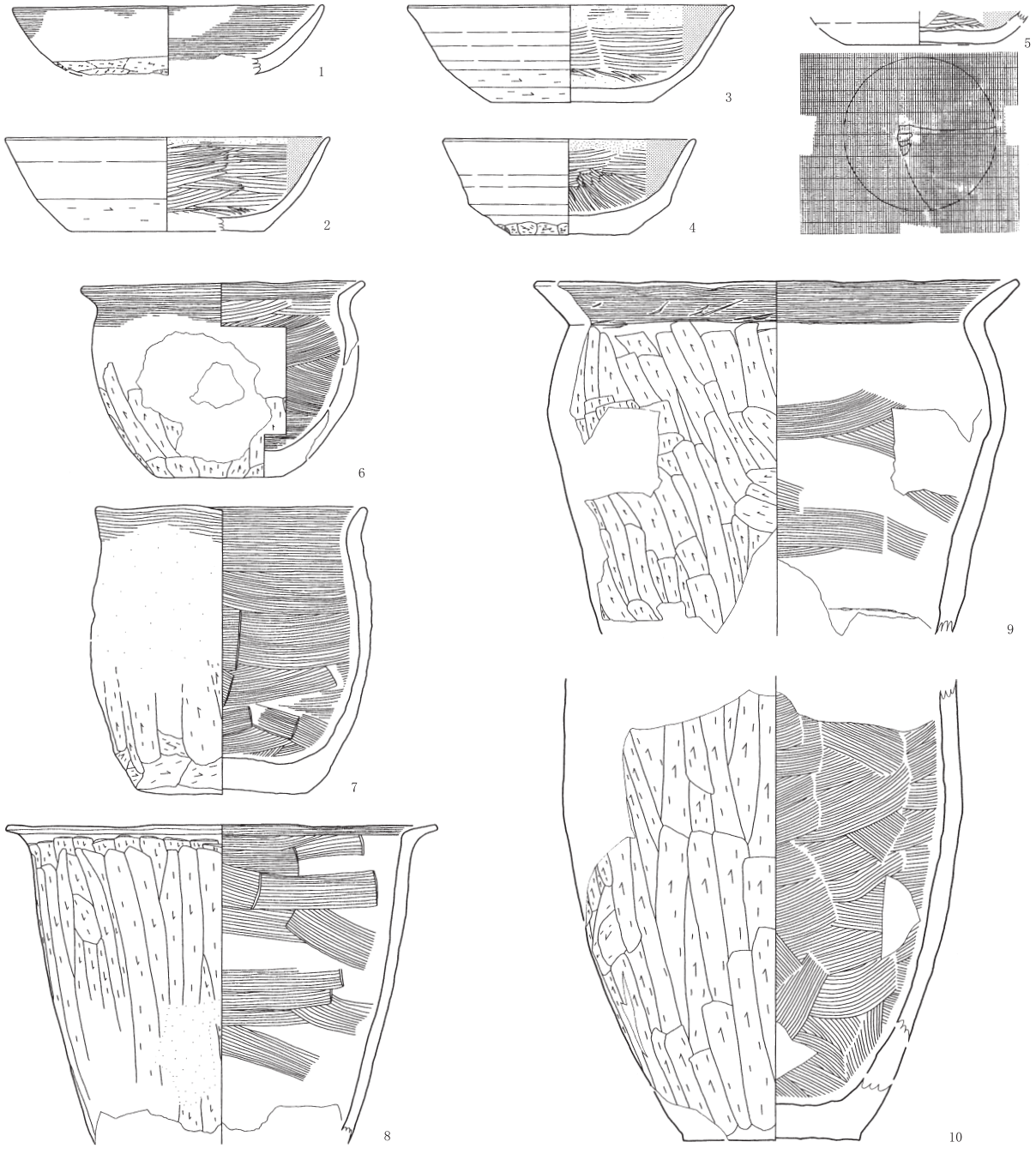
25 ～ 40cm が残存する。煙道の先端部には長軸 46cm、短軸 26cm、煙道底面からの深さ 33cm の煙出しピットが確認された。煙道は幅 65 ～ 90cm の掘方を持ち、カマド側壁と一連の構築土によって煙道側壁が構築されている。また、煙道内堆積土にも下面が被熱により赤色化した同様の構築土のブロックがみられ、煙道天井部が落ち込んだものと考えられる。煙道底面は奥壁との接続部から緩やかに立ち上がり、中ほどから先は煙道ピットに向かって緩やかに傾斜する。カマド奥壁と煙道側壁および煙出しピット南壁の一部は被熱により赤色化している。また、燃焼部底面から煙道底面の中ほどにかけては焼土を多量に含むにぶい赤褐色シルトが 5 ～ 12cm の厚さで堆積しており、カマド機能時の堆積土と考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側で土坑 1 基 (K1) が確認された。直径 75cm の不整円形を呈し、深さは 20cm で底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 1 層で、自然堆積土と考えられる。

〔床下土坑〕住居掘方底面で土坑 4 基 (K2、K3、K4、K5) を確認した。K2 は平面形が長軸 68cm、短軸 48cm の楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは 15cm である。K3 は平面形が直径 50cm の不整円形を呈する。断面形は不整な U 字状を呈し、深さ 90cm である。K4 は平面形が長軸 140cm、短軸 110cm の楕円形を呈する。断面形は不整な U 字状を呈し、深さ 90cm である。K5 は平面形が長軸 160cm、短軸 150cm の不整方形を呈する。断面形は逆台形状を呈し、深さは 40cm である。埋土はいずれも住居掘方埋土と一連の人為的埋土である。なお、K4 の底面には焼土と炭化



第 133 図　SI424 竪穴住居跡 (3)



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録	写真
						口径	底径	器高			
1	堆	土師器	坏	I	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ	(14.2)	—	(4.15)	1/5	06020	36-7
2	床	ﾛｸﾛ土師器	坏	C	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 切り離し不明→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理 (底面井桁状)　内面口唇部磨滅	(14.9)	(9.0)	4.35	1/3	06019	36-8
3	堆３層 POT2	ﾛｸﾛ土師器	坏	C	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ (底面) 切り離し不明→回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ 内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理　内面口唇部磨滅	(14.2)	(7.4)	4.5	3/4	06018	36-9
4	堆１層	ﾛｸﾛ土師器	坏	E	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　(底面) 切り離し不明→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ 内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理 (底面井桁状)	(11.6)	(5.4)	4.45	1/5	06017	—
5	堆２層	ﾛｸﾛ土師器	坏	D	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (底面) 静止糸切→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理 外底面に墨書「□」	—	(7.0)	(1.5)	一部	06021	36-10
6	床 POT5	土師器	甕	A２	外：(口～頸) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾅﾃﾞ　胴部内面から穿孔	13.1	5.8	5.0	完形	06009	37-1
7	住居掘方埋土	土師器	甕	B１	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴～底) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ	(12.4)	7.9	13.3	3/4	06022	37-2
8	ｶﾏﾄﾞ内堆	土師器	甕	E	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ→(体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾍﾗﾅﾃﾞ	(19.8)	—	(14.7)	一部	06038	—
9	堆３層	土師器	甕	D	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾅﾃﾞ	(22.2)	—	(16.2)	一部	06037	—
10	床 POT3	土師器	甕	D	外：(胴～底) ｹｽﾞﾘ　内：(胴) ﾍﾗﾅﾃﾞ　胎土が白色細粒を呈する	—	7.6	(21.2)	一部	06024	37-3

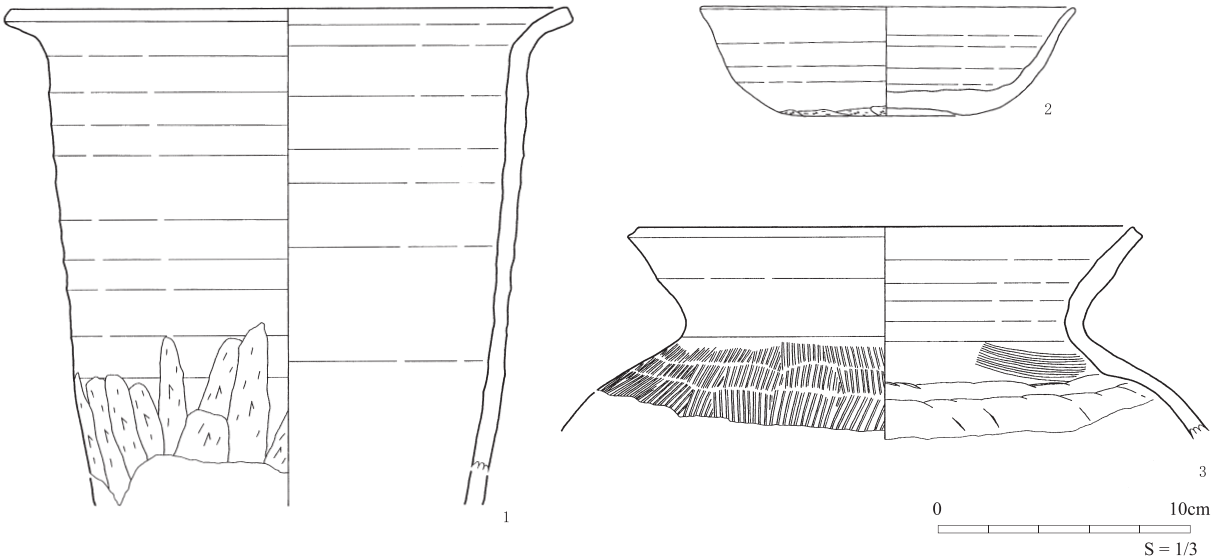
第 134 図　SI424 竪穴住居跡出土遺物 (1)

物粒を含む暗褐色シルトが 15cm の厚さで堆積しており、住居床面の構築以前に機能していた可能性がある。

〔堆積土〕住居内堆積土は 16 層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面よりロクロ調整の土師器坏（第 134 図２）・非ロクロ調整の土師器甕（第 134 図６・10）・須恵器坏（第 135 図２）が、住居掘方埋土よりロクロ調整の土師器甕（第 135 図１）・非ロクロ調整の土師器甕（第 134 図７）・砥石（第 187 図２）が、カマド内堆積土より非ロクロ調整の土師器甕（第 134 図８）が、住居内堆積土よりロクロ調整の土師器坏（第 134 図３・４・５）・非ロクロ調整の土師器坏（第 134 図１）・甕（第 134 図９）・須恵器甕（第 135 図３）・瓦片（第 185 図１）・刀子（第 186 図３）が、確認面より鉄釘（第 186 図６）が出土した。須恵器坏（第 135 図２）と土師器甕（第 134 図６）は住居北東コーナー部、ロクロ土師器坏（第 134 図２）と土師器甕（第 134 図 10）は住居中央やや南寄りの床面で出土した。第 134 図２は外底面に回転ヘラケズリ調整が施され、内面に井桁状のミガキ調整の後に黒色処理が施されている。第 134 図６は胴部外面にヘラケズリ調整が、内面にナデ調整が施され、胴部内面から穿孔されている。第 134 図 10 は外面胴部にケズリ調整が、内面にヘラナデ調整が施されている。

このほか、床面・住居掘方埋土・主柱穴掘方埋土・柱材の抜き取り痕跡・住居内堆積土よりロクロ調整の土師器坏・甕、非ロクロ調整の土師器坏・甕・壺、須恵器坏・蓋・甕の破片が出土した。ロクロ調整の土師器坏は外底面に回転糸切り痕が見られ、内面に井桁状のミガキ調整の後に黒色処理が施されているものと、外面底部に手持ちヘラケズリが施されているものとがある。非ロクロ調整の土師器坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面の頸部に段を有し、ハケメ調整が施されているものと、段をもたずにケズリ調整が施されているものとがある。壺は外面にミガキ



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	住居掘方埋土	ﾛｸﾛ土師器	甕	C	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	(22.3)	—	(19.65)	一部	06040	—
2	床 POT6	須恵器	坏	B	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ（底面）回転糸切り→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	14.4	6.6	4.3	4/5	06003	37-4
3	堆３層	須恵器	甕	B	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→平行ﾀﾀｷ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ→無文ｲﾀｴ	20.2	—	(8.3)	一部	06039	37-5

第 135 図　SI424 竪穴住居跡出土遺物 (2)

調整の後に赤彩が施され、内面に指の圧痕が見られる。須恵器坏は底部外面に回転糸切り痕が見られるものがある。甕は外面に平行タタキ目が、内面に無文押さえ具痕がみられる。

【SI443 竪穴住居跡】（第 136 図、図版 21- 4）

〔位置・確認面〕N6 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明だが、東西 2.5m 以上、南北 1.5m 以上の方形を呈するとみられる。

〔方向〕

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な南壁で床面から 24cm である。

〔床面〕Ⅴ層起源の黄褐色ロームブロックを多量に含む掘方埋土を床としており、ほぼ平坦である。

〔主柱穴・壁柱穴〕不明

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 18 ～ 20cm、下端幅 8 ～ 15cm で断面形が U 字形を呈し、床面からの深さ 12cm の周溝が南・西壁をめぐり、幅 5 ～ 10cm、深さ 10cm の壁材痕跡が断続的に認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土に類似し、黄褐色ロームブロックを多く含む人為的埋土である。

〔カマド・貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕住居内堆積土は 4 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

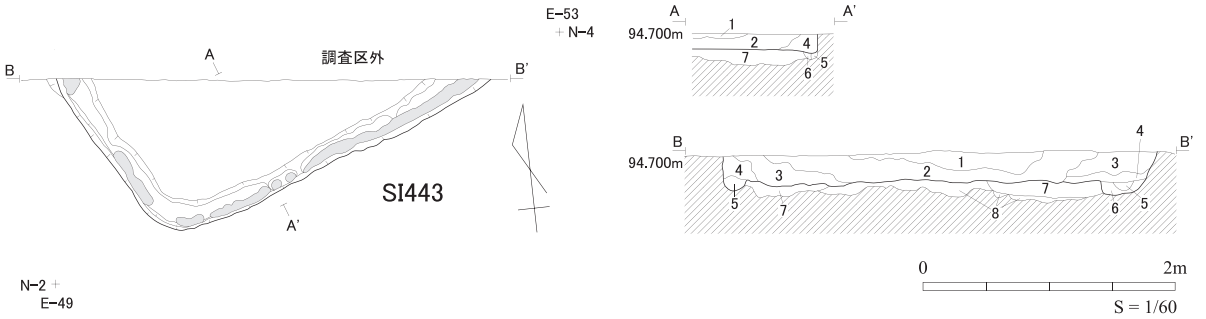
〔出土遺物〕住居内堆積土より土師器甕の破片が出土した。非ロクロ調整で、外面にハケメ調整が施されている。

B．掘立柱建物跡

【SB402 掘立柱建物跡】（第 137 図、図版 21- 5）

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SB402》― SA431



SI443竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に、炭化物粒を少量含む
5	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　住居壁材痕跡
6	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　住居壁材掘方埋土
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物粒を少量含む 住居掘方埋土
8	10YR5/8 黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　住居掘方埋土

第 136 図　SI443 竪穴住居跡

〔規模・形状〕東西３間 (総長 6.3m)、南北２間 (総長 4.0m) 以上の建物跡で、調査区外の南側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕８基確認した。掘方の平面形は長軸 45 ～ 59cm、短軸 37 ～ 50cm の隅丸方形を呈し、深さは 20 ～ 35cm である。７基で柱材の抜き取り痕跡を確認し、そのうち５基で抜き取り痕跡の底面に平面形が直径 15 ～ 18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。南西の P6 は大部分が調査区外の南側へ延びるため詳細は不明である。

〔柱間寸法〕北側柱列で西から 200 - 220 - 210cm、東側柱列で北から 210 - 190cm である。

〔方向〕北側柱列：E - 8° - S

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

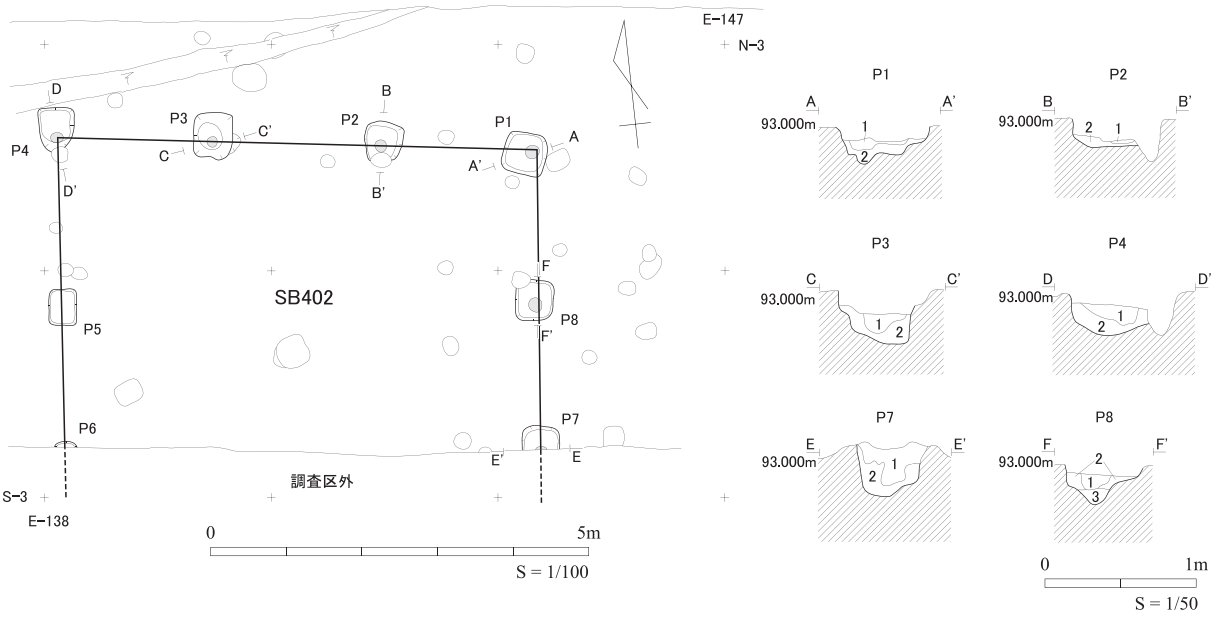
【SB414 掘立柱建物跡】（第 138 図、図版 21- ６）

〔位置・確認面〕N6 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SB414》→ SD413

〔規模・形状〕南北３間 (桁行総長 4.7m) 以上、東西２間 (梁行総長 4.6m) の南北棟建物跡で、調査区外の南側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕６基確認した。掘方の平面形は長軸 45 ～ 65cm、短軸 28 ～ 60cm の円形ないしは楕円形を



SB402掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB402掘立柱建物跡(P8)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 137 図　SB402 掘立柱建物跡

呈し、深さは 5 ～ 26cm である。1 基で平面形が直径 16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 20cm で、掘方底面に達する。また、3 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。抜き取り痕跡は掘方底面に達するものとさらに深く入るものとがあり、いずれも底面に柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕西側柱列で北から 240 - 230cm 程度、北側柱列で西から 230 - (230)cm である。

〔方向〕西側柱列：N - 12° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB432 掘立柱建物跡】（第 139 図、図版 22- 1 ）

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

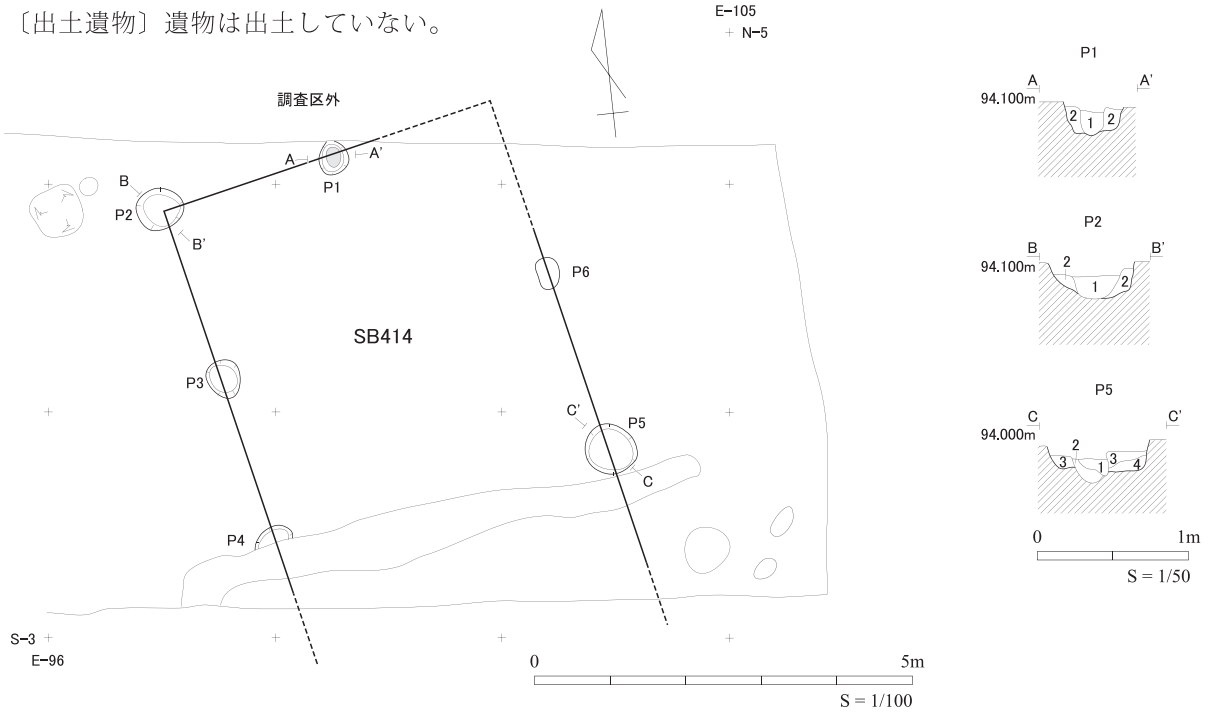
〔規模・形状〕南北 2 間 (桁行総長 3.1m) 以上、東西 1 間 (梁行総長 3.0m) の南北棟建物跡で、調査区外の北西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 32 ～ 40cm、短軸 25 ～ 28cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 10 ～ 15cm である。5 基で平面形が 10 ～ 12cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列で南から 140 - 170cm、南側柱列で 300cm である。

〔方向〕東側柱列：N - 16° - W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB414掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SB414掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SB414掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱抜き取り痕跡
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
4	10YR5/3 にぶい黄褐	粘質シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

第 138 図　SB414 掘立柱建物跡

【SB434 掘立柱建物跡】（第 140 図）

〔位置・確認面〕N6 西区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

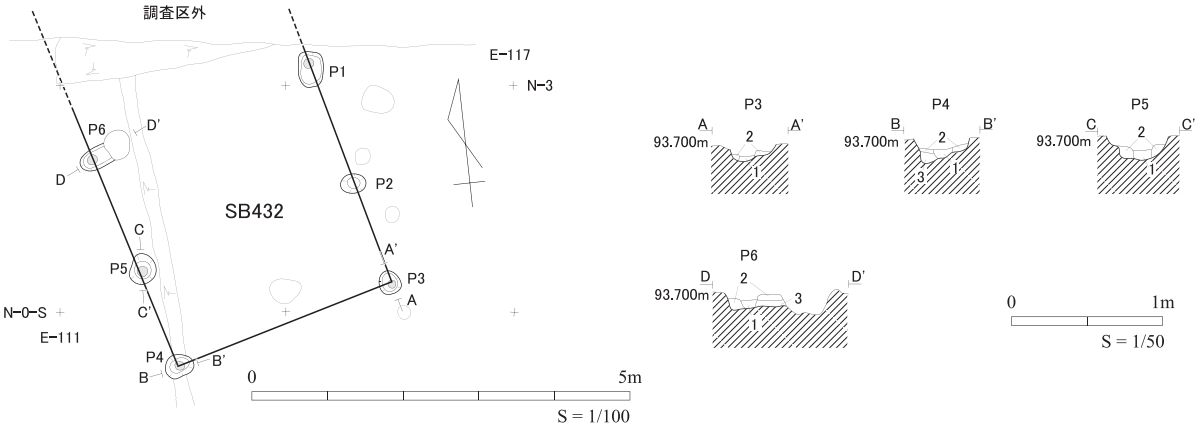
〔規模・形状〕東西 1 間 (総長 2.35m)、南北 1 間 (総長 2.45m) 以上の建物跡で、調査区外の北側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 25 ～ 35cm、短軸 23 ～ 30cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 12 ～ 20cm である。3 基で平面形が直径 8 ～ 10cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 14 ～ 16cm で、いずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕南側柱列で 235cm、西側柱列で 245cm である。

〔方向〕西側柱列：N － 15° － W

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



SB432掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SB432掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

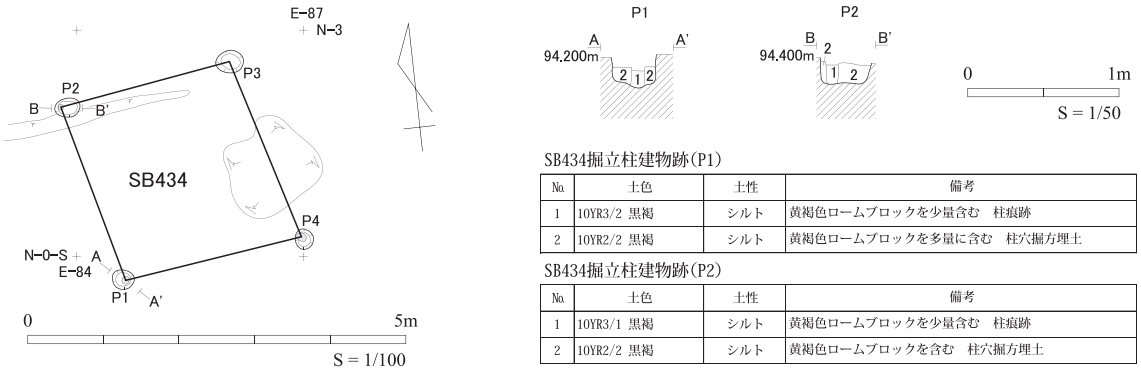
SB432掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む　柱穴掘方埋土

SB432掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱穴掘方埋土
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 139 図　SB432 掘立柱建物跡



SB434掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB434掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

第 140 図　SB434 掘立柱建物跡

【SB436 掘立柱建物跡】（第 142 図、図版 21- 7 ）

〔位置・確認面〕N6 西区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間 (桁行総長 4.7m) 以上、南北 1 間 (梁行総長 3.7m) の東西棟建物跡で、調査区外の西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 20 ～ 26cm、短軸 18 ～ 22cm の円形ないしは楕円形を呈し、深さは 24 ～ 38cm である。いずれも平面形が直径 8 ～ 15cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕南側柱列で東から 260 - 210cm、東側柱列で 370cm である。

〔方向〕南側柱列：E - 6° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SB440 掘立柱建物跡】（第 141 図）

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

〔重複〕《SB440》→ SX406

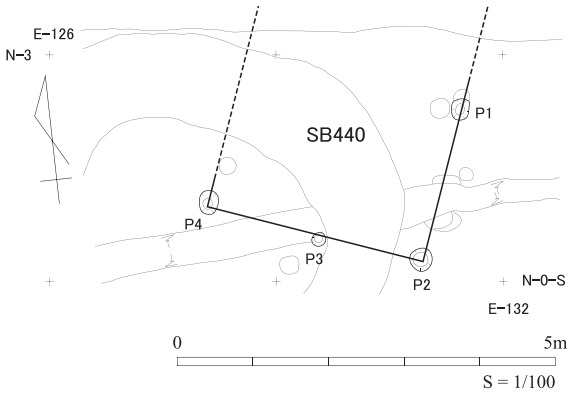
〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 3.0m)、南北 1 間 (総長 2.1m) 以上の建物跡で、調査区外の北東側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕4 基確認した。掘方の平面形は長軸 20 ～ 32cm、短軸 15 ～ 30cm の楕円形を呈し、深さは 10 ～ 33cm である。いずれも柱痕跡は確認できない。

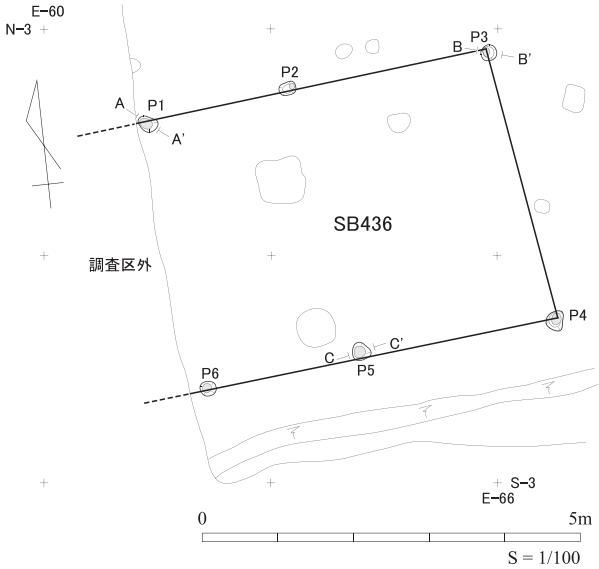
〔柱間寸法〕南側柱列で西から 160 - 140cm、東側柱列で 210cm である。

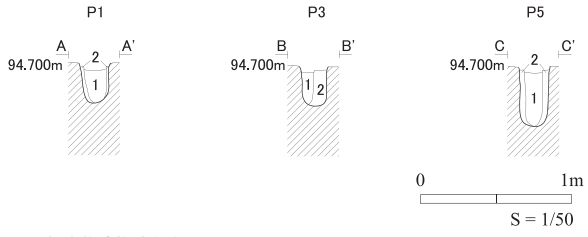
〔方向〕東側柱列：N - 20° - E

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



第 141 図　SB440 掘立柱建物跡





SB436掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SB436掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SB436掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

第 142 図　SB436 掘立柱建物跡

C．柱列跡

【SA431 柱列跡】（第 143 図、図版 22- 2）

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SA431》― SB402

〔規模・形状〕東西 2 間 (4.5m) 以上の柱列跡で、調査区外の南西側へ延びている可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方は平面形が長軸 35 ～ 40cm、短軸 30 ～ 40cm の隅丸方形を呈し、深さは 33 ～ 40cm である。いずれも平面形が直径 13 ～ 16cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の深さは 22 ～ 32cm で、掘方底面に達するものと達しないものがある。

〔柱間寸法〕東から 220 - 230cm である。

〔方向〕E - 8° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SA435 柱列跡】（第 144 図）

〔位置・確認面〕N6 西区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 3.4m) 以上の柱列跡で、調査区外の南西へ延びる可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方は平面形が長軸 35cm、短軸 30cm ほどの円形ないしは楕円形を呈し、深さは 33 ～ 46cm である。2 基で直径 12cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。柱痕跡の深さは 33 ～ 46cm で、いずれも掘方底面に達する。

〔柱間寸法〕東から 160 - (180)cm

〔方向〕E - 6° - N

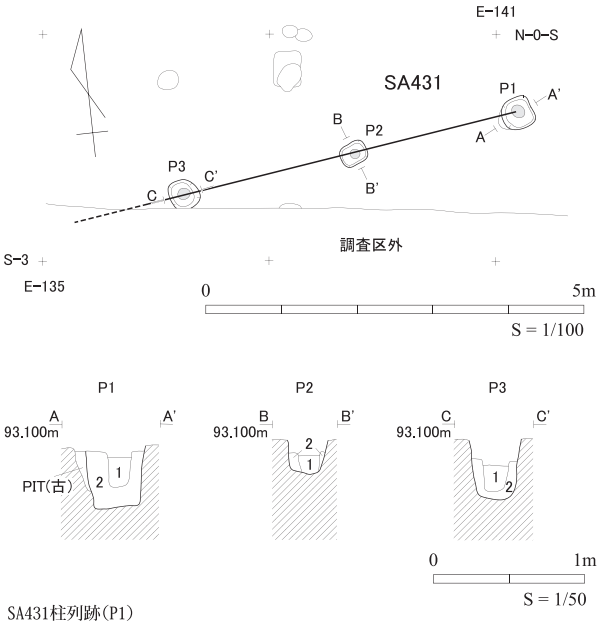
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

D．井戸跡

【SE403 井戸跡】（第 145 図、図版 22- 3）

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし



SA431柱列跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

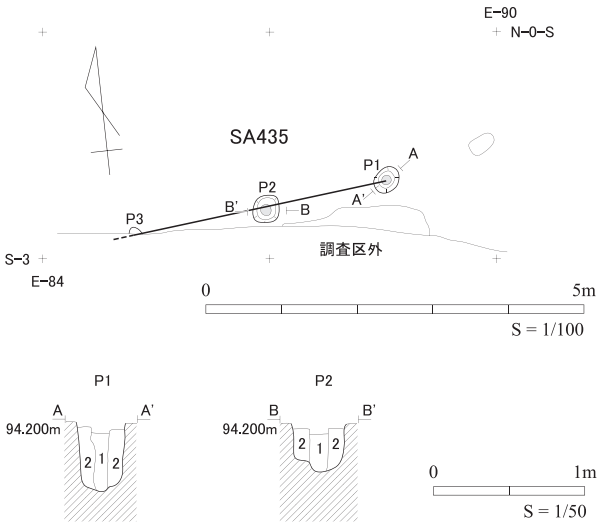
SA431柱列跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SA431柱列跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

第 143 図　SA431 柱列跡



SA435柱列跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

SA435柱列跡(P2)

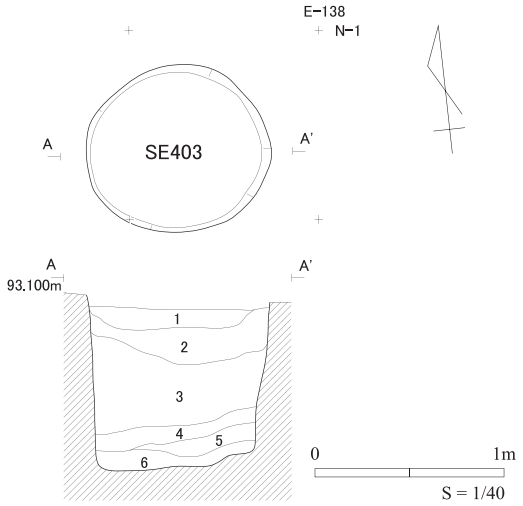
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む　柱痕跡
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土

第 144 図　SA435 柱列跡

〔規模・形状〕平面形は長軸 93cm、短軸 87cm の円形を基調とし、深さ 93cm の円筒形を呈する。底面は西側に傾斜している。

〔堆積土〕6 層に細分される。1 ～ 4 層は黄褐色ロームブロックを多く含む黒色・黒褐色シルトと黄橙色粘質シルト、5 層はにぶい黄褐色粘質シルト、6 層は黄褐色ローム粒を若干含む黒褐色シルトである。1 ～ 4 層は人為的埋土、5 層は壁際の自然崩落土、6 層は機能時の堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土より土師器坏、須恵器甕の破片が出土した。土師器坏はロクロ調整で内面に黒色処理が施されている。須恵器甕は外面に平行タタキ目が見られる。



SE403井戸跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　人為的埋土
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　人為的埋土
3	10YR6/4 にぶい黄橙	粘質シルト	黄褐色ローム土を主体とする　黒褐色シルトブロックを少量含む　人為的埋土
4	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
5	10YR6/4 にぶい黄橙	粘質シルト	
6	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　機能時の堆積

第 145 図　SE403 井戸跡

E．落し穴状土坑

落し穴状土坑は 3 基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 6 表に特徴を示す。

【SK409 落し穴状土坑】（第 146 図、図版 22- 4）

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南西端部が調査区外へ延びているため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 172cm 以上、短軸 106cm の楕円形を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 137cm である。

〔底面〕中央部がやや高く、両端部に向かって緩やかに傾斜する。

〔方向〕南西 - 北東方向

〔堆積土〕堆積土は 7 層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒色・黒褐色シルトと、黒褐色シルトをブロック状に含むにぶい黄橙色の粘質シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK419 落し穴状土坑】（第 146 図、図版 22- 5）

〔位置・確認面〕N6 西区の丘陵平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 330cm、短軸 43cm の溝状を呈する。横断面形は漏斗状を呈し、深さは 85cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は 5 層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む褐灰色・黒褐色シルト・粘質シルトと、にぶい黄橙色の粘質シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

F．土坑

土坑は８基確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第７・８表に特徴を示す。

【SK418 土坑】（第 147 図、図版 22- ６）

〔位置・確認面〕N6 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模･形状〕平面形は直径約 60cm の不整円形を呈する。断面形は箱形を呈し､深さは 20cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は１層で、黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルトである。人為的埋土の可能性がある。

〔出土遺物〕堆積土より土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器甕は非ロクロ調整で外面にヘラケズリ調整が施されている。須恵器甕は外面に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

【SK423 土坑】（第 148 図、図版 22- ７）

〔位置・確認面〕N6 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形は長軸 223cm、短軸 105cm の楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さは 15cm である。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は１層で、黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルトである。人為的埋土の可能性がある。

〔出土遺物〕堆積土よりロクロ調整の土師器甕､非ロクロ調整の土師器甕､須恵器甕の破片が出土した。須恵器甕は外面に平行タタキ目が、内面に無文押さえ具痕がみられる。

G．溝跡

溝跡は２条確認された。第 10 表に特徴を示す。

H．円形周溝跡

【SX406 円形周溝跡】（第 149 図、図版 23- １・２）

〔位置・確認面〕N6 東区の丘陵平坦面に立地する。Ⅳ層で確認した。

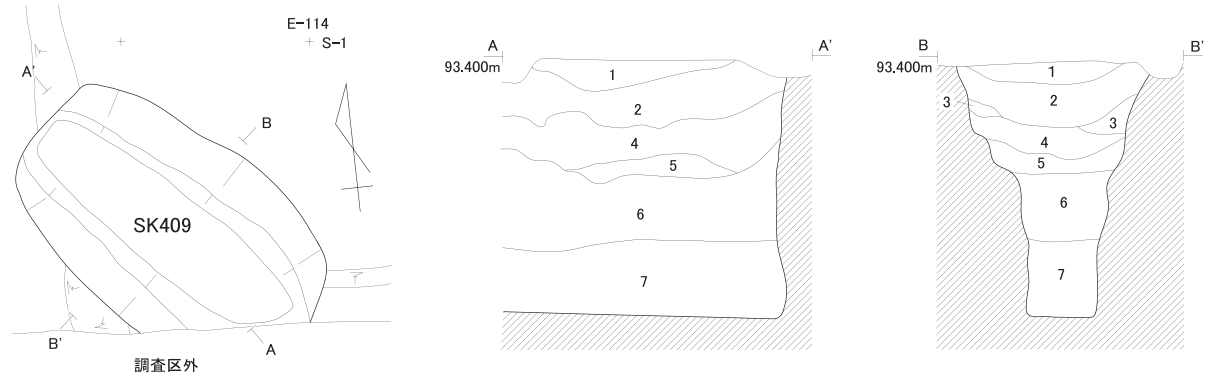
〔重複〕SB440 →《SX406》

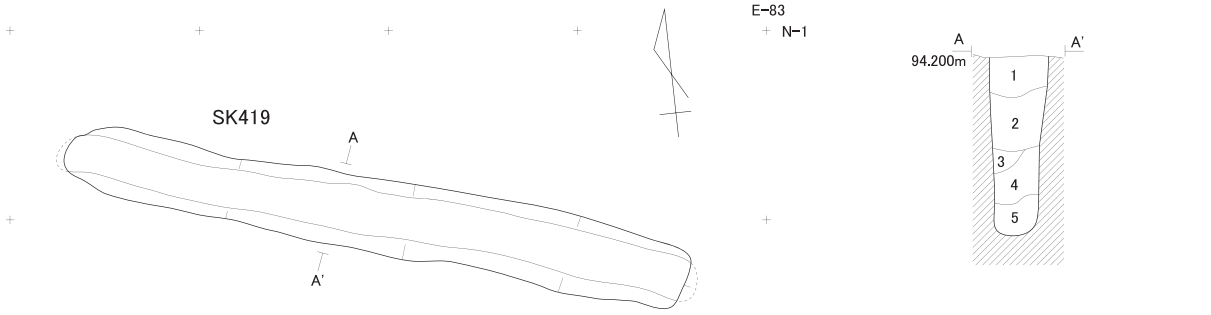
〔規模・形状〕平面形が外周で直径約 5.5m、内周で直径約 3.4m の円形を呈する周溝跡である。溝の上端幅は 85 ～ 120cm、下端幅は 75 ～ 100cm で、断面形は深さ 30 ～ 45cm の箱形を呈する。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は２層に細分される。黄褐色ロームブロックを含む黒色･黒褐色シルトである。また、底面の一部に黄褐色ロームブロックを多量に含む暗褐色シルトからなる厚さ 10cm 前後の硬化層が形成されており、掘削直後に底面を平坦に整えた掘方埋土と考えられる。

〔その他〕周溝で区画された内部ではこれに伴う建物跡等は確認されない。また、内部に盛土があっ





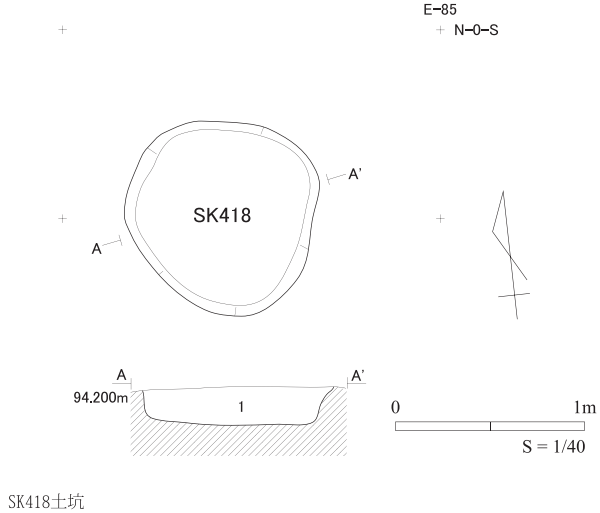
SK409落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
3	10YR6/4 にぶい黄橙	粘質シルト	黒褐色シルトブロックを含む
4	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
5	10YR6/4 にぶい黄橙	粘質シルト	褐灰色シルトブロックを含む
6	10YR2/2 黒褐	シルト	ほぼ均質
7	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

SK419落し穴状土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR5/4 にぶい黄褐	粘質シルト	暗褐色シルトブロックを少量含む
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
4	10YR5/4 にぶい黄褐	粘質シルト	黄褐色ローム土主体の崩落土
5	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを含む

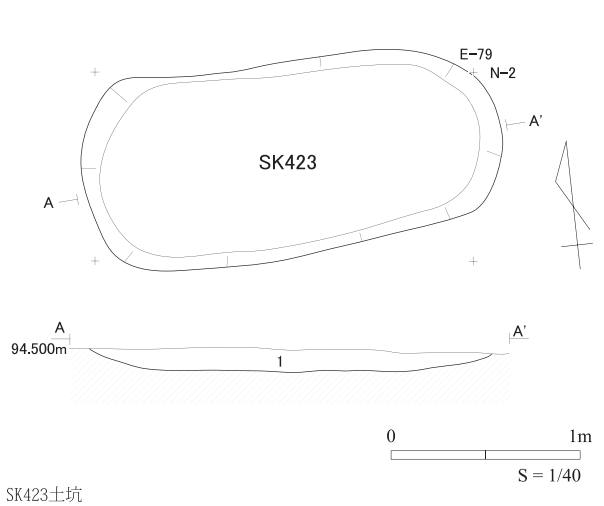
第 146 図　SK409・SK419 落し穴状土坑



SK418土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 147 図　SK418 土坑



SK423土坑

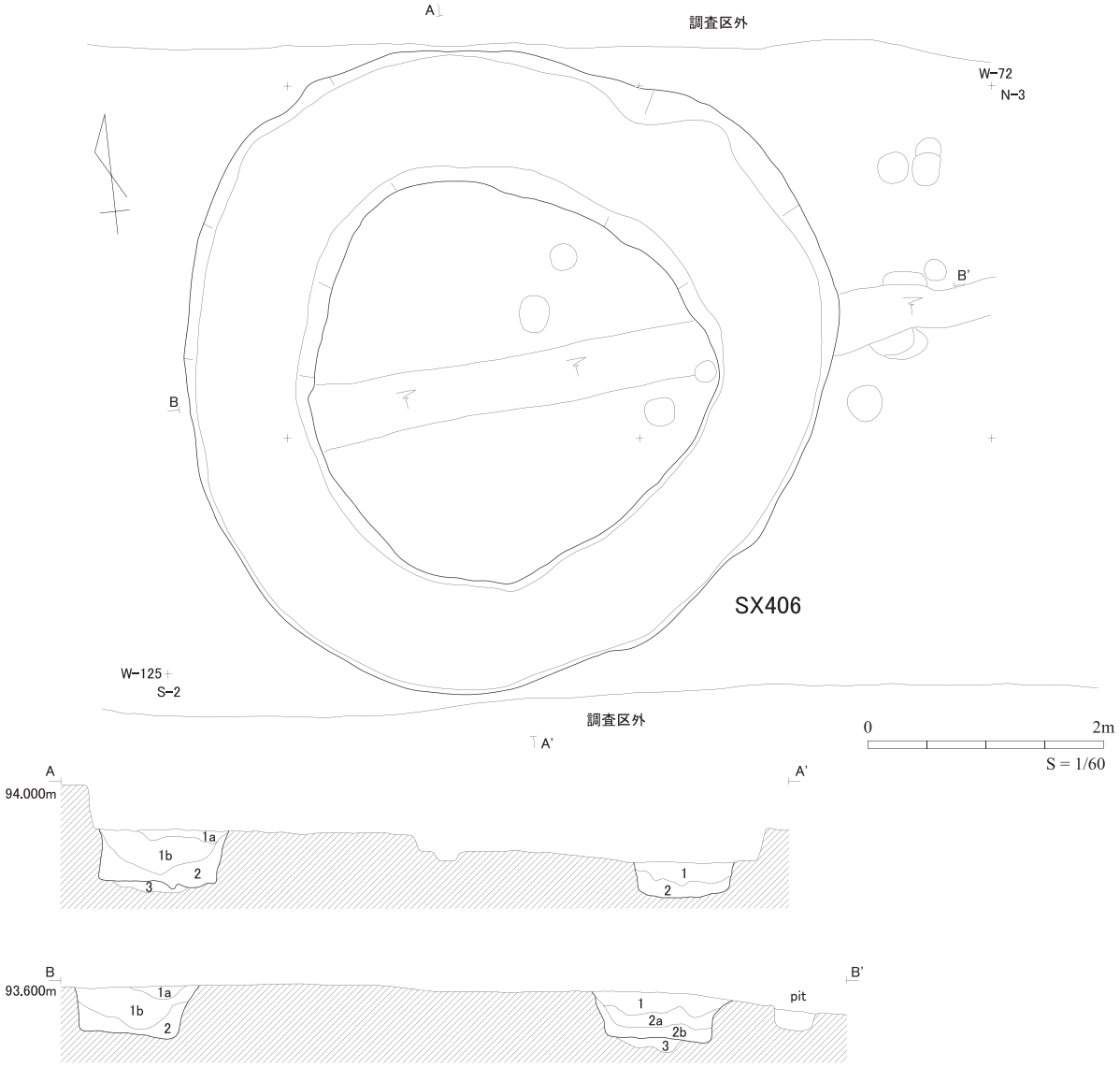
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 148 図　SK423 土坑

たことを示すような堆積状況は確認されない。
〔出土遺物〕堆積土より土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。土師器甕は非ロクロ調整で外面の頸部に段を有し、胴部にハケメ調整が施されているものと、内外面に横ナデ調整が施されているものとがある。

（10）Ｎ７区

遺跡の立地する丘陵の北東部で、南東向きの緩傾斜地に位置する（第 10 図）。試掘調査の結果、後世の削平により黄褐色ローム層が露出していることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。



SX406円形周溝跡

No.	土色	土性	備考
1a	10YR2/1 黒	シルト	ほぼ均質
1b	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
2a	10YR2/2 黒褐	シルト	ほぼ均質

No.	土色	土性	備考
2b	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　造成時の埋土

第 149 図　SX406 円形周溝跡

（11）Ｎ８区

遺跡範囲の北縁部で、遺跡の立地する丘陵を東西に横断する。西区、東区を設定して調査を行なった（第 150 図）。西区は N6 西区に続く六角丘陵頂部の平坦面にあたる。東区は N5 区に南東から入る沢の沢頭付近にあたり、東に緩やかに傾斜している。遺構は西区の東半部を中心に竪穴住居跡 3 軒、落し穴状土坑 4 基、土坑 1 基、大溝跡 1 条などが確認された。西区の西半部は削平が著しく、遺構は確認されなかった。以下、主要な遺構について述べる。

Ａ．竪穴住居跡

【SI751 竪穴住居跡】（第 151 図、図版 24- 1 ）

〔位置・確認面〕N8 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

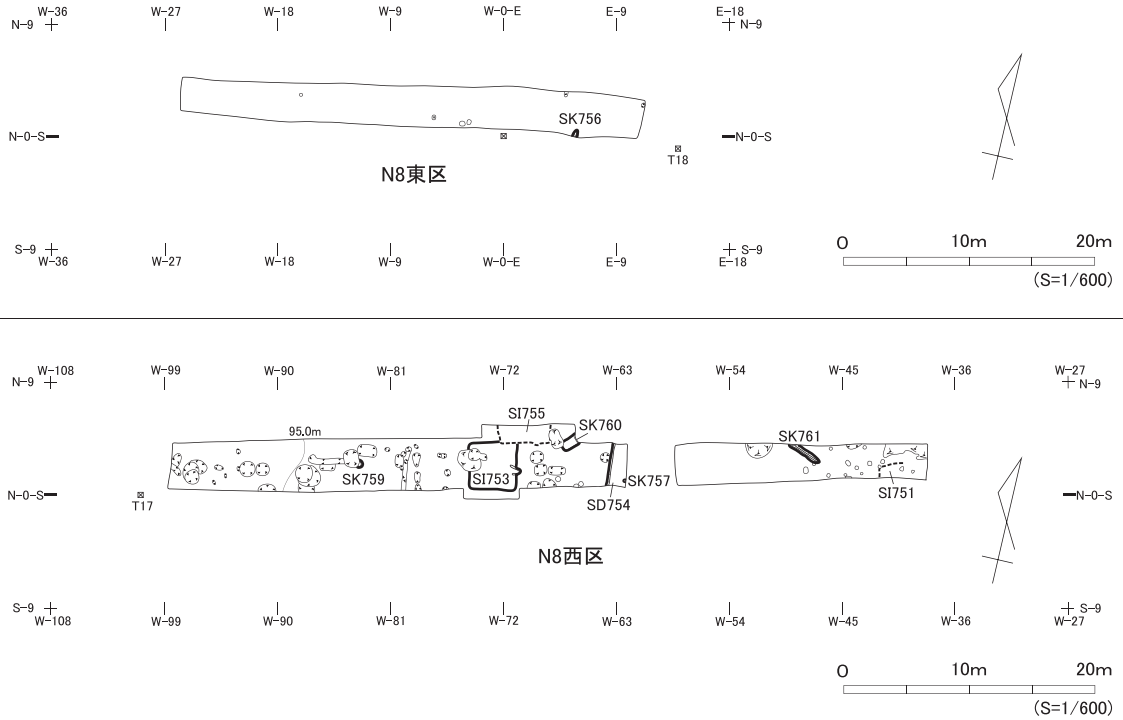
〔重複〕なし

〔規模・形状〕残存状況が良好でないこと、住居南半と東半は調査区外にのびていることから全体の形状は不明であるが、東西約 3.8m 以上、南北約 1.3m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N - 20° - W

〔壁面・床面〕残存しない。

〔主柱穴〕住居北西コーナー付近で柱穴 1 基を検出した (P755)。平面形は長軸 45cm、短軸 35cm の楕円形を呈し、床面からの深さは 35cm である。柱材の抜き取り痕跡が確認され、その底面に平面形が直径 14cm の円形で深さ 10cm の柱痕跡が確認された。位置と形状、規模から主柱穴の一つと考えられる。



第 150 図　Ｎ８東・西区遺構配置図

〔周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居西壁に設置されており、調査区南壁断面にカマド燃焼部の堆積土と崩落土が認められる。遺構検出時には確認できなかったため平面形は不明であるが、調査区外へ延びている。

〔貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI753 竪穴住居跡】（第 152・153 図、図版 24- 2 ・ 3）

〔位置・確認面〕N8 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SI755 →《SI753》

〔規模・形状〕東西約 3.7m、南北 4.0m の方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E - 14° - S

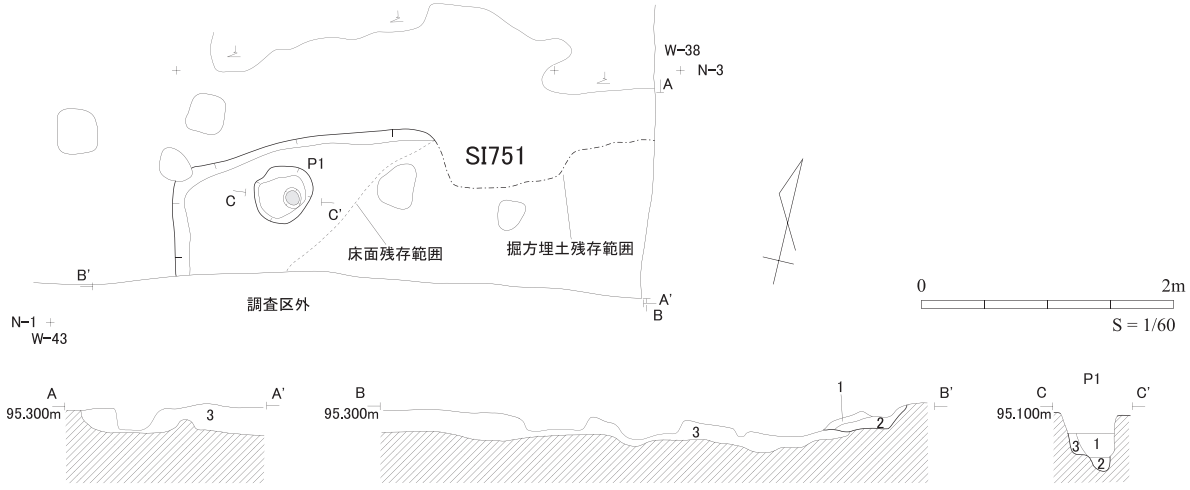
〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。床面からほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で床面から 30cm である。

〔床面〕Ⅴ層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としている。ほぼ平坦で、中央部の南北約 2.5m、東西約 2.0m の範囲に暗褐色シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕なし

〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 20cm、下端幅 15cm、床面からの深さ 10cm で断面形が U 字状ないし逆台形を呈する周溝がカマド、貯蔵穴のある東壁の一部をのぞいて全周し、部分的に幅 10cm、深さ 10cm 程度の壁材痕跡が認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土に類似し、黄褐色ロームブロックを多く含む人為的埋土である。

〔カマド〕住居東壁中央やや南寄りに設置されており、燃焼部のみが残存する。燃焼部は長さ



SI751竪穴住居跡

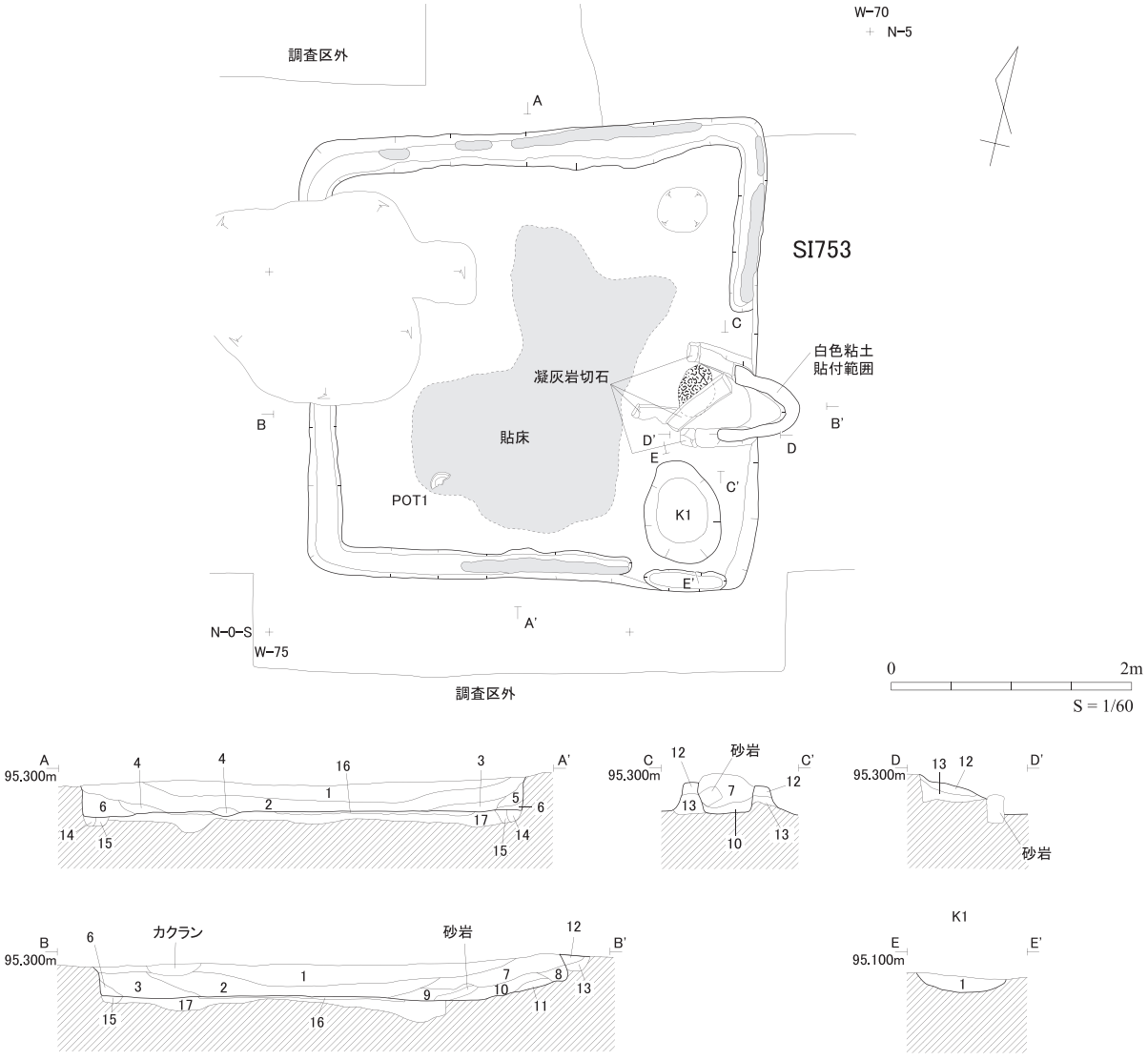
No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に、炭化物粒を含む　カマド崩落土
2	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を多量に含む
3	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に、炭化物を含む 住居掘方埋土

SI751竪穴住居跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱痕跡
3	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土

第 151 図　SI751 竪穴住居跡

102cm、幅 86cm で、焚口幅は 58cm である。燃焼部底面は幅 58cm、奥行 88cm で、床面より 5cm ほど皿状に窪んでいる。底面は黒色を呈し、硬化している。側壁は左側壁で長さ 56cm、幅 24cm、高さ 26cm、右側壁で長さ 60cm、幅 16cm、高さ 15cm が残存している。白色粘土で構築されており、内側は被熱により赤色化している。側壁先端部には 10 ～ 15cm 角の柱状の凝灰岩切石が据えられている。また、カマド崩落土中にも長さ 90cm で 15cm 角の柱状の凝灰岩切石がみられ、



SI753竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む多量に含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、褐色ロームブロックを含む
6	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む
7	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物粒を含む
8	10YR3/3 暗褐	シルト	白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物粒を含む
9	10YR2/3 黒褐	シルト	白色粘土ブロック、砂岩切石を含む　下面は炭化して黒色に硬化　カマド崩落土
10	7.5YR4/4 褐	シルト	焼土を多量に、白色粘土ブロックを含む　カマド崩落土
11	7.5YR3/2 黒褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む　カマド機能時の堆積

No.	土色	土性	備考
12	10YR7/4 にぶい黄橙	粘土	白色粘土を主体とする　黒褐色シルトを少量含む カマド側壁構築土
13	10YR4/6 褐	シルト質粘土	黄褐色ローム土を主体とする　12層との境に焼面形成 カマド側壁構築土
14	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　住居壁材痕跡
15	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　周溝掘方埋土
16	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居貼床
17	10YR5/6 黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　住居掘方埋土

SI753竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量、焼土粒、炭化物粒を少量、白色粘土ブロックを含む

第 152 図　SI753 竪穴住居跡

これらは焚口部を構成していたものと考えられる。奥壁は住居の東壁を35cmほど張り出させた内側に15cmほどの厚さで白色粘土を貼り付けて構築されている。なお、燃焼部底面の一部に焼土と炭化物粒を主体とする堆積層がみられ、カマド機能時の堆積土と考えられる。

〔貯蔵穴〕カマド右側の住居南東コーナー部で土坑1基(K1)が確認された。長軸87cm、短軸64cmの楕円形を呈している。深さ16cmで底面は皿状を呈する。床面から掘り込まれており、位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、焼土、炭化物粒を含む人為的埋土である。

〔堆積土〕住居内堆積土は10層に細分される。いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面より土師器坏（第153図1）が、貯蔵穴堆積土より土師器坏（第153図2）が、カマド崩落土より土師器台付鉢（第153図4）が、住居内堆積土より土師器坏（第153図3）が出土した。いずれも非ロクロ調整で、1は口縁部横ナデ、体部内面はヘラナデ調整が施されている。2・3は外面が口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ調整が施され、内面は黒色処理が施されている。

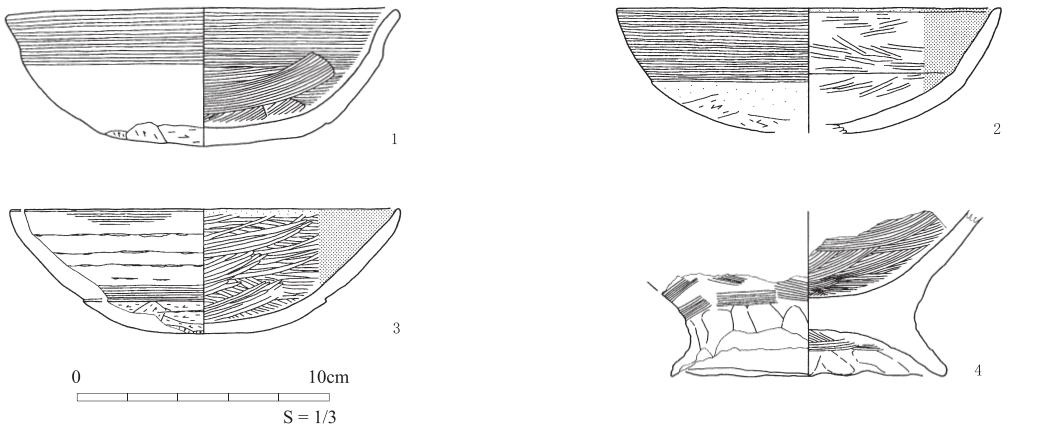
このほか、住居内堆積土・カマド内堆積土・貯蔵穴堆積土・床面・掘方埋土より土師器坏・鉢・壺？・甕、須恵器坏の破片が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は体部に屈曲を有し、外面の口縁部に横ナデ調整が、下半部にケズリ調整が施され、内面に黒色処理が施されている。壺？は頸部～体部の破片で、外面にミガキ調整の後に赤彩が施されている。甕は外面にミガキ調整が施されているもの、ケズリ調整が施されているもの、ハケメ調整が施されているもの、外底面に木葉痕のみられるものがある。ハケメ調整が施されているものは頸部に段を有さないものである。

【SI755竪穴住居跡】（第154・155図、図版24-4）

〔位置・確認面〕N8西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SI755》→ SI753

〔規模・形状〕残存状況が良好でないこと、住居北半は調査区外にのびていることから全体の形状は



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量(cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	床	土師器	坏	G	外：(口)ヨコナデ（底面）ヘラケズリ　内：(口)ヨコナデ（体）ヘラナデ	15.5	8.0	5.5	2/3	06027	37-6
2	貯蔵穴堆	土師器	坏	D2	外：(口)ヨコナデ（体）ヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	—	(4.9)	1/3	06028	—
3	堆2層	土師器	坏	D1	外：(口)ヨコナデ（体）ケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理　内面口縁部に使用痕跡	(15.4)	—	4.9	一部	06031	—
4	カマド崩	土師器	台付甕	A	外：指オサエ→ナデ　内：ヘラナデ（高台）指オサエ→ナデ　（底径＝高台径）	—	10.8	(6.5)	一部	06029	37-7

第153図　SI753竪穴住居跡出土遺物

不明であるが、東西約 4.3m 以上、南北約 1.5m 以上の方形を呈していたとみられる。

〔方向〕西辺：N－19°－W

〔壁面〕残存しない。

〔床面〕一部を残して削平されているが、Ⅴ層起源の黄褐色ロームブロックを多く含む掘方埋土を床面としていたとみられる。中央南寄りの南北 60cm、東西 85cm の範囲に灰黄褐色粘質シルトを主体とする硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕なし

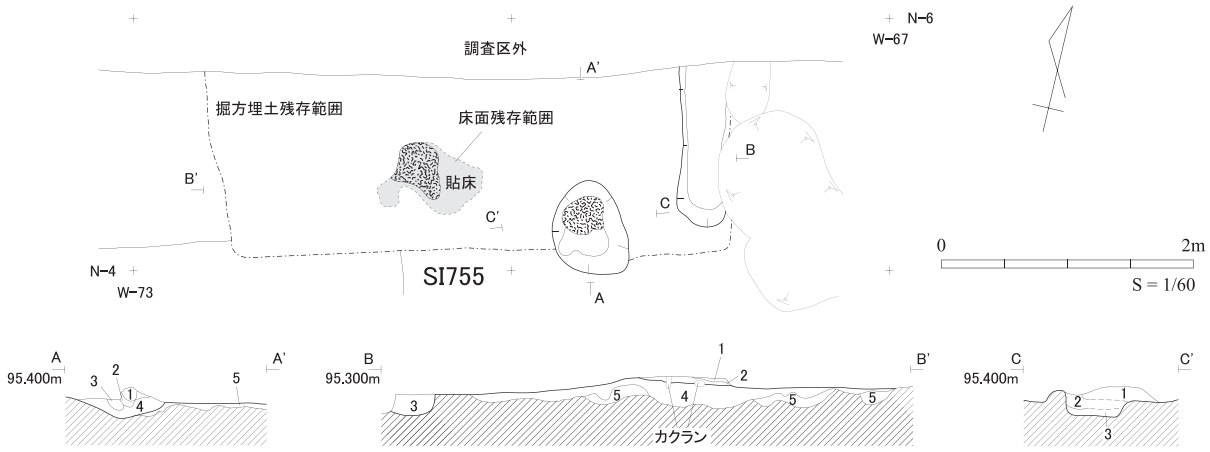
〔周溝・壁材痕跡〕上端幅 45cm、下端幅 30cm、床面からの深さ 15cm で断面形が U 字状を呈する周溝が東辺に巡る。壁材痕跡は認められないが、周溝の堆積土は人為的埋土の可能性がある。

〔カマド〕住居南壁の東寄りに設置されている。幅 60cm、奥行 75cm の燃焼部底面のみが残存し、底面は床面より 10cm ほど皿状に窪んでいる。

〔貯蔵穴〕なし

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕カマド付近の床面より鉄釘（第 186 図４・５）が、周溝内堆積土よりロクロ調整の土師器坏の破片（第 155 図）が、掘方埋土より砥石（第 188 図３）が、確認面より砥石（第 188 図２）



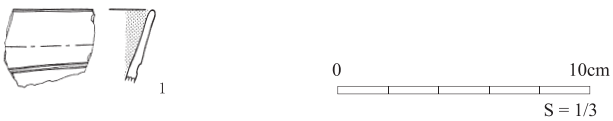
SI755竪穴住居跡南北断面・カマド断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/1 褐灰	シルト	白色粘土ブロックを多量に含む　カマド崩落土
2	5YR4/2 灰褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を含む　カマド崩落土
3	5YR8/2 灰白	灰	一部赤化している　カマド機能時の堆積
4	2.5YR3/6 暗赤褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　カマド機能時堆積
5	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　住居掘方埋土

SI755竪穴住居跡東西断面

No.	土色	土性	備考
1	2.5YR4/4 にぶい赤褐	粘質シルト	焼土を主体とする
2	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を均質に含む　住居貼床
3	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を均質に含む
4	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　住居掘方埋土
5	10YR5/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　住居掘方埋土

第 154 図　SI755 竪穴住居跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	周溝内堆	土師器	坏	—	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　内：ﾐｶﾞｷ→黒色処理　外面に墨書「□」	—	—	(3.15)	一部	06103	37-8

第 155 図　SI755 竪穴住居跡出土遺物

が出土した。第 155 図 1 は内面に黒色処理が施され、外面に墨書（判読不能）がみられる。

このほか、住居内堆積土・カマド内堆積土・カマド崩落土・周溝埋土よりロクロ調整の土師器坏・甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕の破片が、住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。ロクロ調整の土師器坏は内面に黒色処理が施されている。非ロクロ調整の土師器甕は外面にハケメ調整が施されている。

B．落し穴状土坑

落し穴状土坑は 4 基確認された。第 6 表に特徴を示す。

C．土坑

【SK759 土坑】（第 156・158 図）

〔位置・確認面〕N8 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

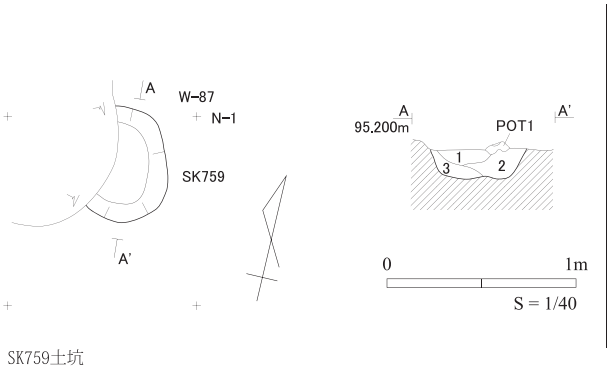
〔重複〕なし

〔規模・形状〕西半部が残存しないため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 65cm、短軸 50cm の楕円形を呈していたとみられる。断面形は逆台形を呈し、深さは 25cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。黄褐色ロームブロックと焼土粒を含む暗褐色・灰黄褐色シルトである。

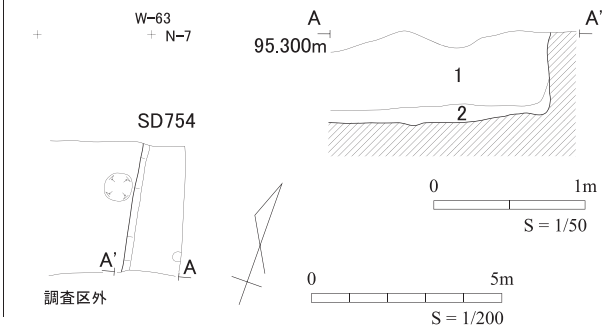
〔出土遺物〕堆積土よりロクロ調整の土師器坏（第 158 図）と甕の破片が出土した。土師器坏は内面に黒色処理が施されている。



SK759土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を多量に含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
3	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

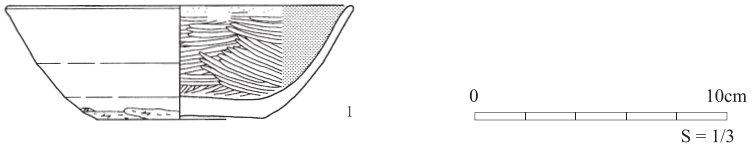
第 156 図　SK759 土坑



SD754溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を均質に含む
2	10YR4/1 褐灰	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 157 図　SD754 大溝跡



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	堆	ﾛｸﾛ土師器	坏	E	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→ﾍﾗｹｽﾞﾘ（底面）切り離し不明→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	(13.6)	6.6	4.5	1/3	06026	37-9

第 158 図　SK759 土坑出土遺物

D．大溝跡

【SD754 大溝跡】（第 157 図、図版 23- 5）

〔位置・確認面〕N8 西区の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SK757 →《SD754》

〔規模・形状〕幅 1.7m 以上、長さ 3.5m 以上の南北大溝跡で、調査区外の南北へ延びている。断面形は箱状を呈し、深さは 54cm である。

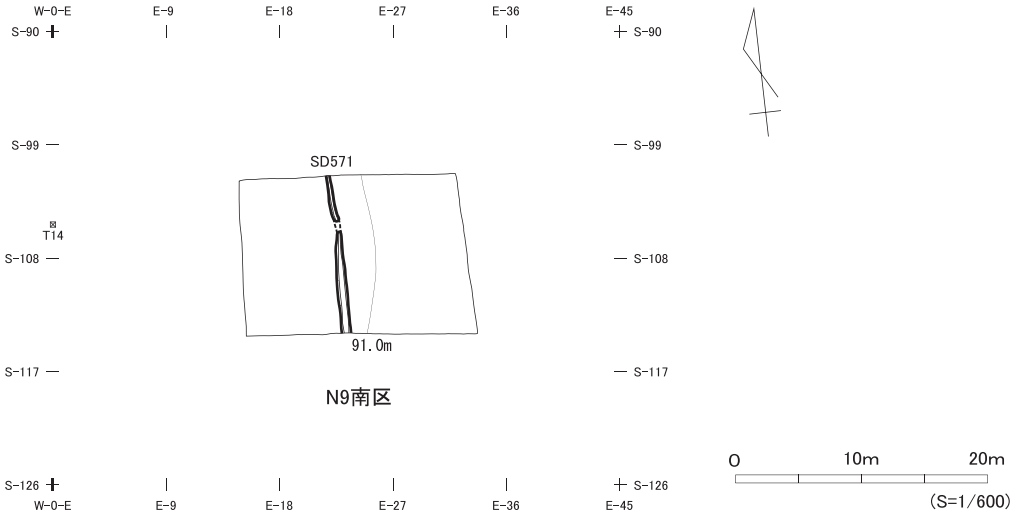
〔方向〕南北方向

〔堆積土〕堆積土は 2 層に細分される。黄褐色ロームブロック･粒を多く含む暗褐色･褐灰色シルトで、人為的埋土の可能性がある。

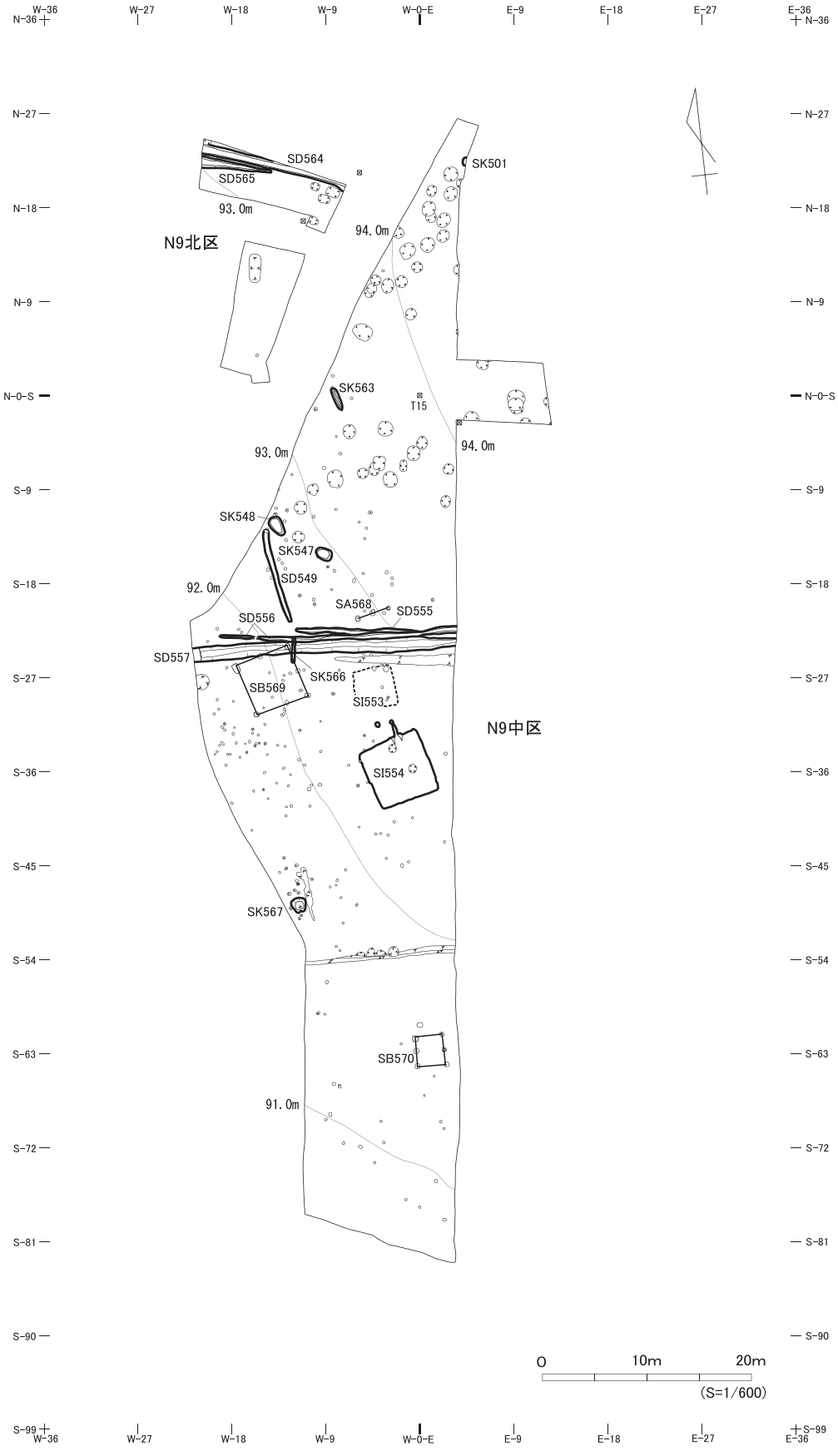
〔出土遺物〕堆積土より土師器坏・甕、須恵器鉢・甕の破片、鉄鏃（第 186 図 2）が出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏は外面にケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されているもの、外底面に木葉痕のみられるものがある。また、器種は不明だが内外面にヘラミガキの後に赤彩が施された口縁部～体部の破片がある。

（12）Ｎ９区

遺跡の立地する丘陵の西縁部で、南西向きの斜面となっている。丘陵東側に比して傾斜が急で、黒ボク土および漸移層は残存せず、黄褐色ローム層が露出している。北区、中区、南区を設定して調査を行なった（第 159・160 図）。北区は後世の削平が著しく、溝跡 2 条のみが確認された。中区は北東部の削平が著しいが、丘陵縁辺部の南西部では黒ボク土および漸移層が残存する。遺構は竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 2 棟、柱列跡 1 条、落し穴状土坑 2 基、土坑 4 基、溝跡 6 条が確認された。南区は後世の削平が著しく、溝跡 1 条のみが確認された。以下、主要な遺構について述べる。



第 159 図　Ｎ９南区遺構配置図



第 160 図　Ｎ９北・中区遺構配置図

A．竪穴住居跡

【SI553 竪穴住居跡】（第 161 図、図版 25- 4 ）

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SI553》→ Pit

〔規模・形状〕後世の削平が著しく全体の形状は不明であるが、東西 3.9m 以上、南北 3.9m 以上の方形を呈していたとみられる。掘方埋土のみが残存する。

〔方向〕東辺：N－8°－W

〔壁面・床面〕残存しない。

〔主柱穴・壁柱穴・周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居北壁東寄りに設置されている。燃焼部底面と右側壁の基部のみが痕跡的に残存する。燃焼部底面は幅 40cm、奥行 34cm の範囲で残存し、被熱による赤色化がみられる。側壁は右側の基部のみ残存する。掘方埋土を掘り込んで構築されており、長さ 57cm、幅 23cm、深さ 5cm が残存する。構築土には白色粘土と黄褐色ロームを含む。

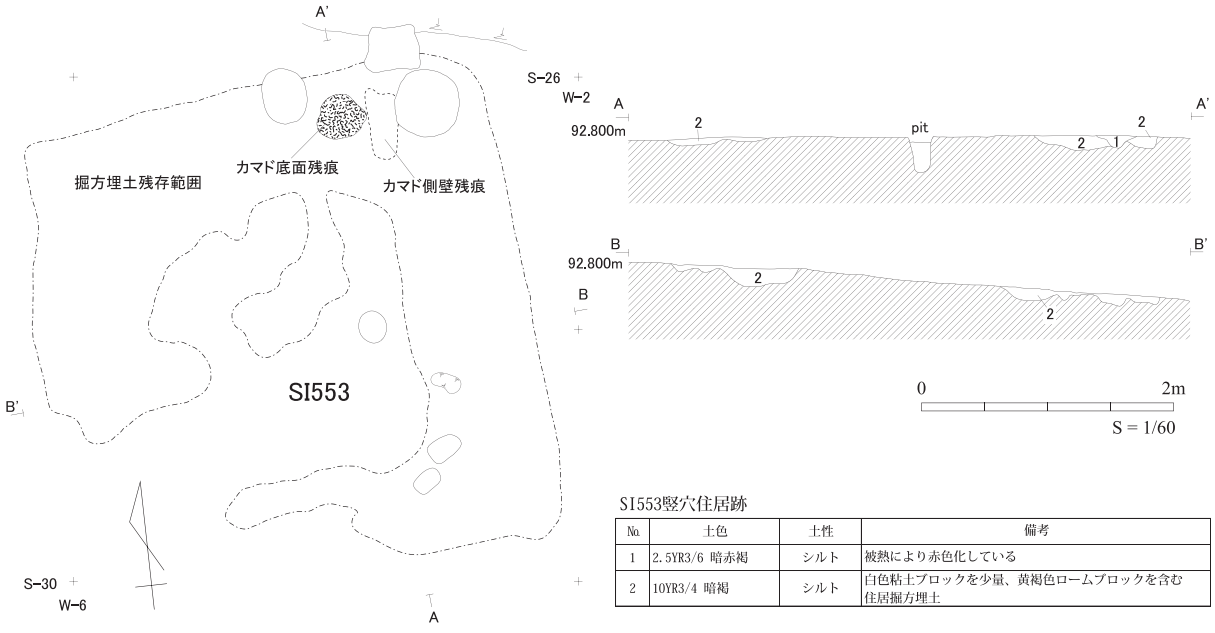
〔貯蔵穴〕不明

〔堆積土〕残存しない。

〔出土遺物〕P3 掘方埋土で須恵器坏の破片が出土した。外底面に回転ヘラケズリ調整が施されている。

【SI554a・b・c 竪穴住居跡】（第 162 ～ 169 図、図版 25- 5 ・ 6 、26- 1 ・ 2 ）

SI554 は同一のプランを踏襲しながら 3 時期 (a・b・c) に変遷する。SI554a は北壁中央にカマド、北東コーナー部に貯蔵穴を持ち、北・東・西壁に壁柱が巡る。主柱穴は 3 基確認され、掘方の平面形は隅丸長方形ないしは楕円形である。床面は残存しないが、掘方埋土下で床下土坑 2 基が確認されている。SI554b は SI554a のカマド撤去後に床面の再構築が行なわれている。東壁中央にカマドを持ち、各壁とコーナー部に壁柱が巡る。主柱穴は 3 基確認され、掘方の平面形は隅丸方形である。床面はほぼ全面に貼床が施されている。SI554c は SI554b の床面を踏襲する。北壁東寄りにカマド、

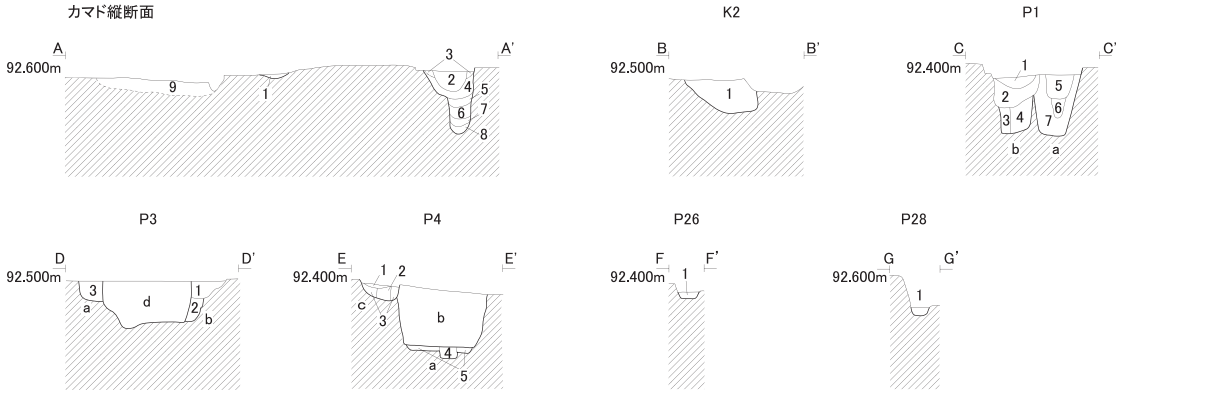


SI553竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	2.5YR3/6 暗赤褐	シルト	被熱により赤色化している
2	10YR3/4 暗褐	シルト	白色粘土ブロックを少量、黄褐色ロームブロックを含む 住居掘方埋土

第 161 図　SI553 竪穴住居跡





SI554a竪穴住居跡カマド縦断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、焼土ブロックを多量に含む
2	10YR4/4 褐	シルト	焼土ブロックを多量に含む
3	10YR3/4 暗褐	シルト	炭化物粒を多量に含む
4	10YR3/4 暗褐	シルト	焼土ブロック、炭化物粒を少量含む
5	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

No.	土色	土性	備考
6	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土粒を多量に含む
7	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	焼土ブロックを少量含む
8	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に、焼土粒を少量含む
9	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒、白色粘土粒を少量含む カマド燃焼部撤去痕跡

第 162 図　SI554a 竪穴住居跡 (1)

北東コーナー部に貯蔵穴を持ち、周溝と壁材痕跡がほぼ全周する。主柱穴は掘方の平面形が楕円形を呈する小規模なものが 4 基、隅丸方形を呈する比較的規模の大きなものが 4 基確認され、前者から後者へ建て替えが行なわれている。以下に詳細を述べる。

【SI554a 竪穴住居跡】（第 162 ～ 164・169 図、図版 26- 2）

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕《SI554a》→ SI554b → SI554c

〔規模・形状〕東西 5.7m、南北 6.2m の方形を呈する。

〔方向〕東辺：N - 7° - W

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。ほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で 15cm である。

〔床面〕残存しない。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に 120 ～ 200cm の位置で掘方埋土上面より柱穴 3 基を確認した (P1a、P3a、P4a)。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。SI554b・c の主柱穴との重複により北東側の 1 基は残存しない。3 基についても掘方の残存状況は良好でないが、平面形は長軸 45 ～ 85cm、短軸 30 ～ 50cm の隅丸方形ないしは楕円形を呈していたとみられ、確認面からの深さは 35 ～ 66cm である。このうち 2 基で平面形が直径 13cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の確認面からの深さは 50cm で、掘方底面よりやや深く沈みこむ。また、1 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔壁柱穴〕住居北壁で 3 基、東・西壁でそれぞれ 2 基の柱穴を確認した。平面形は直径 13 ～ 28cm の円形ないしは楕円形を呈し、確認面からの深さは 10 ～ 30cm である。位置と形状、規模から壁柱穴と考えられる。

〔周溝・壁材痕跡〕なし

〔カマド〕住居北壁中央に設置されていたとみられる。煙道の一部と煙出しピットが残存する。燃焼部は SI554b 構築時に撤去されており、残存しない。煙道は住居北壁から北に 28 ～ 50cm の位置にわずかに底面の痕跡を残す。煙出しピットは住居北壁から 175cm の位置で確認した。平面形は長軸

SI554a竪穴住居跡(K2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む

SI554a竪穴住居跡(P1a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P1b柱抜き取り痕跡
2	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P1b柱抜き取り痕跡
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　P1b柱痕跡
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P1b柱穴掘方埋土
5	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P1a柱抜き取り痕跡
6	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P1a柱抜き取り痕跡
7	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を多量に、炭化物粒を少量含む P1a柱穴掘方埋土

SI554a竪穴住居跡(P3a・b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む P3b柱抜き取り痕跡
2	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む P3b柱穴掘方埋土
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、礫を多量に含む P3a柱穴掘方埋土

SI554a竪穴住居跡(P4a・c)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P4c柱抜き取り痕跡
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　P4c柱抜き取り痕跡
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　P4c柱穴掘方埋土
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P4a柱痕跡
5			

SI554a竪穴住居跡(P26)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　P26柱抜き取り痕跡

SI554a竪穴住居跡(P28)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	白色粘土粒を多量に、黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む P28柱抜き取り痕跡

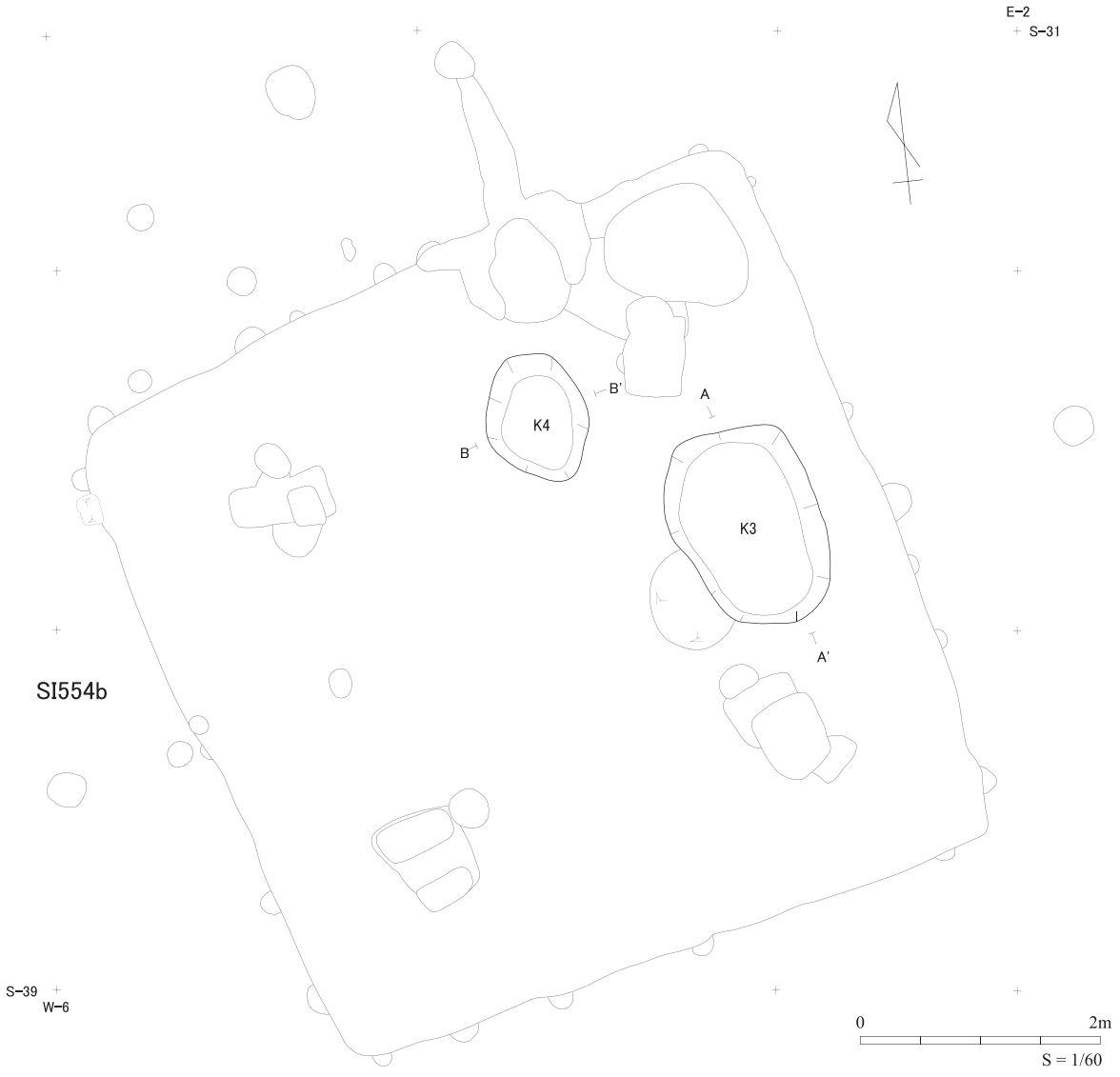
第 163 図　SI554a 竪穴住居跡 (2)

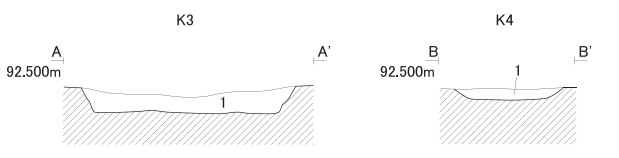
45cm、短軸 35cm の楕円形を呈し、煙道底面からの深さは 54cm である。

〔貯蔵穴〕住居北東コーナー部で土坑 1 基 (K2) が確認された。長軸 130cm、短軸 83cm の楕円形を呈し、深さは 22cm で底面は皿状を呈する。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 1 層で、SI554b 構築時に埋め戻された人為的埋土と考えられる。

〔床下土坑〕住居北東部の掘方埋土下で土坑 2 基 (K3、K4) を確認した。K3 は平面形が長軸 175cm、短軸 122cm の楕円形を呈し、深さは 20cm である。K4 は平面形が長軸 112cm、短軸 85cm の楕円形を呈し、深さは 17cm である。埋土はいずれも白色粘土ブロックを多量に含む暗褐色 (10YR3/4) 粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔堆積土〕煙道の一部と煙出しピットの堆積土のみ残存する。7 層に細分され、焼土ブロック・粒、





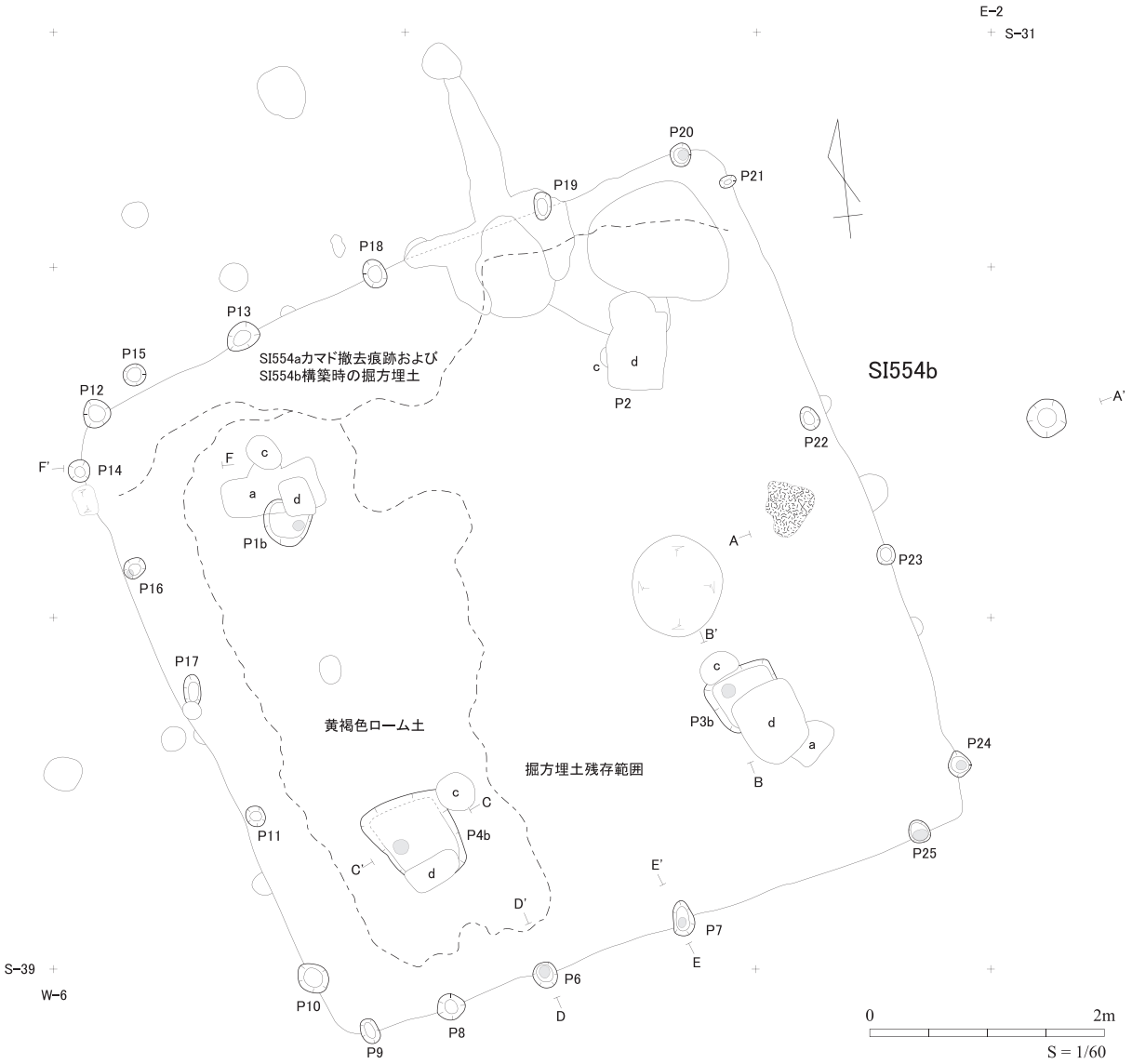
SI554a竪穴住居跡(K3)

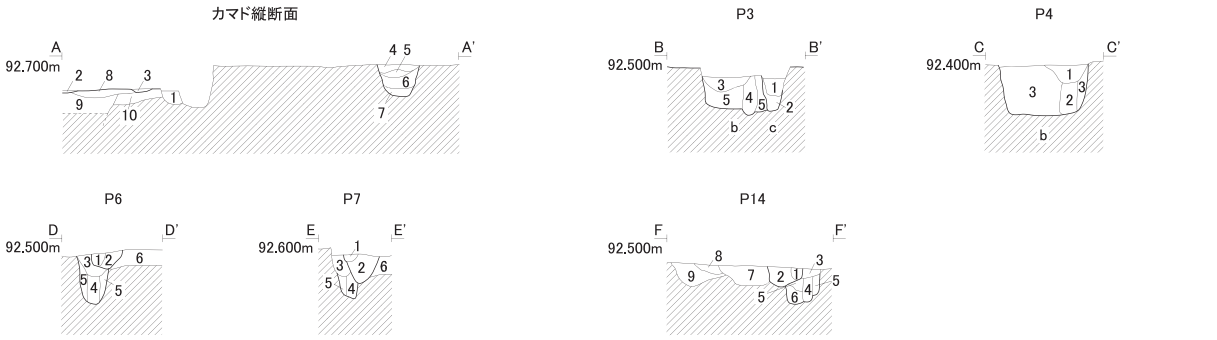
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを多量に、黄褐色ロームブロックを少量含む

SI554a竪穴住居跡(K4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む

第 164 図　SI554a 竪穴住居跡 (3)





SI554b竪穴住居跡カマド縦断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SI554c周溝掘方埋土
2	10YR3/3 暗褐	シルト	焼土粒を多量に含む　住居床面機能時堆積
3	10YR4/6 褐	シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む　カマド機能時堆積
4	10YR2/3 黒褐	シルト	炭化物粒を少量含む
5	10YR2/3 黒褐	シルト	焼土ブロックを多量に含む

No.	土色	土性	備考
6	10YR3/2 黒褐	シルト	焼土ブロックを多量に含む
7	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	焼土ブロックを多量に含む
8	2.5YR4/6 赤褐	シルト	被熱により赤色化している　カマド底面構築土
9	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　K3埋土
10	10YR5/6 黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　SI554a住居掘方埋土

第 165 図　SI554b 竪穴住居跡 (1)

炭化物粒、地山ブロックを多量に含む自然崩落土ないしは自然堆積土である。

〔出土遺物〕住居掘方埋土よりミニチュア土器（第 169 図 1 ）が出土した。外底面に木葉痕がみられる。

このほか、P1a 抜き取り痕跡・住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋の破片が出土した。土師器坏は外面にケズリ調整またはケズリ調整の後にミガキ調整が、内面に黒色処理が施されている。甕は外面にケズリ調整が施され、外底面に木葉痕のみられるものがある。

【SI554b 竪穴住居跡】（第 165・166 図、図版 26- 1 ）

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SI554a →《SI554b》→ SI554c

〔規模・形状〕東西 5.7m、南北 6.2m の方形を呈する。

〔方向〕カマド中軸線：E - 7° - N

〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。ほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で 15cm である。

〔床面〕西側は削平により残存しないが、東側のほぼ全面に焼土・炭化物・白色粘土粒を含む黒褐色シルトからなる硬化層が形成されており、貼床と考えられる。

〔主柱穴〕住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に 120 ～ 170cm の位置で床面より柱穴 3 基を確認した (P1b、P3b、P4b)。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。SI554b・c の主柱穴との重複により北東側の 1 基は残存しない。3 基についても掘方の残存状況は良好でないが、平面形は長軸 61 ～ 83cm、短軸 44 ～ 70cm の隅丸方形を呈していたとみられ、確認面からの深さは 32 ～ 44cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が認められ、その底面で平面形が直径 10 ～ 14cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱穴確認面からの柱痕跡の深さは 40 ～ 60cm である。

〔壁柱穴〕住居壁面に沿って 20 基 (西・北壁でそれぞれ 3 基、東・南壁でそれぞれ 2 基、北西・南西コーナー部でそれぞれ 3 基、北東・南東コーナー部でそれぞれ 2 基) の柱穴を確認した。平面形は直径 15 ～ 30cm の円形ないしは楕円形を呈し、確認面からの深さは 10 ～ 30cm である。位置と形状、規模から壁柱穴と考えられる。

SI554b竪穴住居跡(P3b・c)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、礫を多量に含む P3c柱抜き取り痕跡
2	10YR4/6 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む P3c柱抜き取り痕跡
3	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、礫を多量に含む P3b柱抜き取り痕跡
4	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	白色粘土粒を多量に含む　P3b柱痕跡
5	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む P3b柱穴掘方埋土

SI554b竪穴住居跡(P4b)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P4b柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を含む　P4b柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P4b柱穴掘方埋土

SI554b竪穴住居跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SI554c住居壁材痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　SI554c周溝掘方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P6柱抜き取り痕跡
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P6柱抜き取り痕跡
5	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を含む　P6柱穴掘方埋土
6	10YR4/6 褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含む　SI554a住居掘方埋土

SI554b竪穴住居跡(P7)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SI554c住居壁材痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　SI554c周溝掘方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P7柱抜き取り痕跡
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P7柱痕跡
5	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を含む　P7柱穴掘方埋土
6	10YR4/6 褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含む　SI554a住居掘方埋土

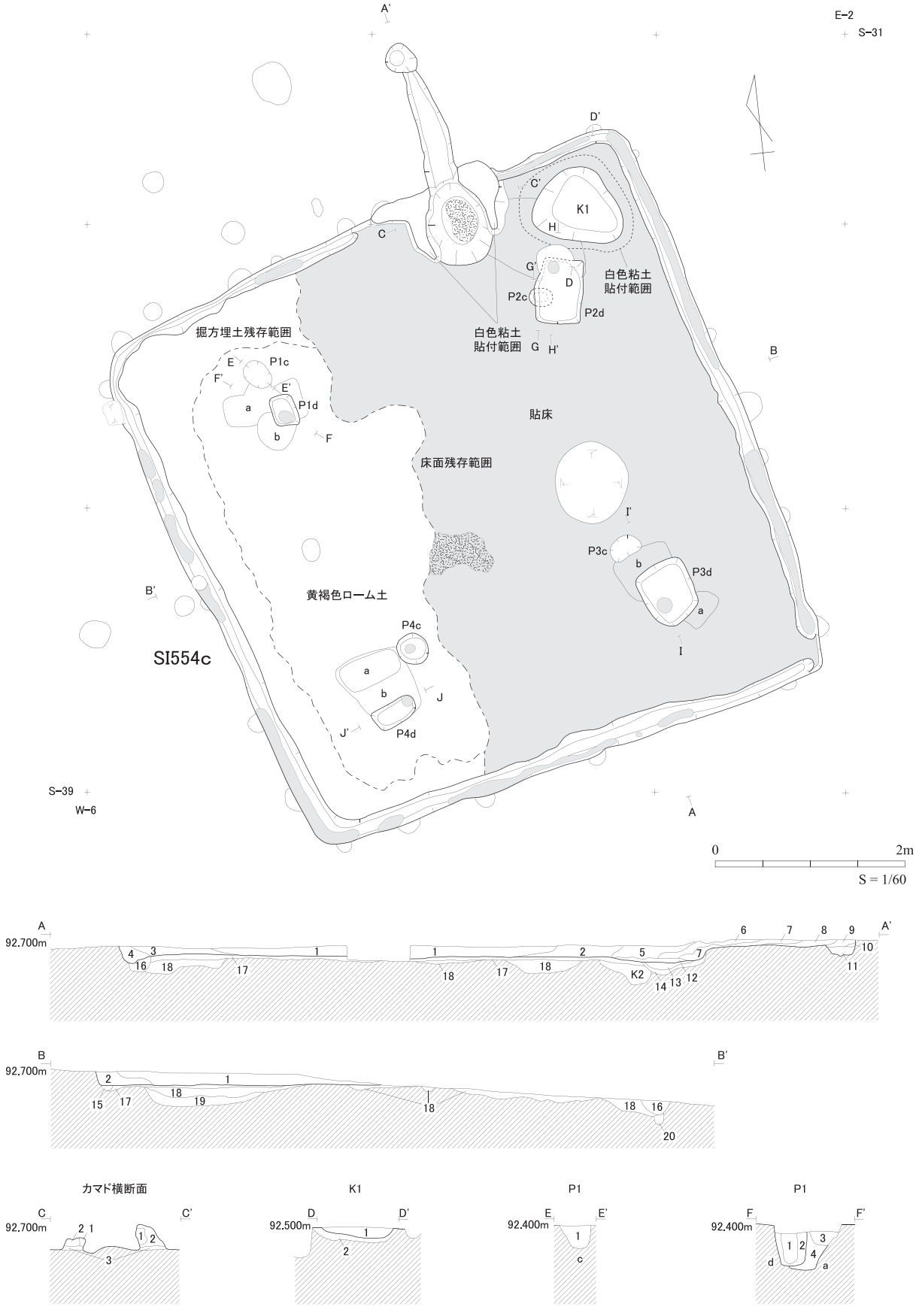
SI554b竪穴住居跡(P14)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒を少量含む　SI554c住居壁材痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に、焼土を少量含む　SI554c周溝掘方埋土
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P14柱抜き取り痕跡
4	10YR2/3 黒褐	シルト	P14柱痕跡
5	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P14柱穴掘方埋土
6	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P14柱穴掘方埋土
7	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土粒、焼土粒を少量含む　SI554b住居掘方埋土
8	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む　SI554a住居掘方埋土
9	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	SI554a住居掘方埋土

第 166 図　SI554b 竪穴住居跡 (2)

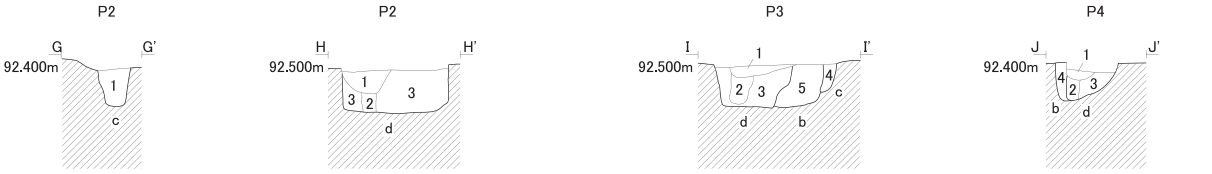
〔周溝・壁材痕跡〕なし
〔カマド〕住居東壁中央に設置されていたとみられる。燃焼部底面と煙出しピットが残存する。燃焼部はSI554c構築時に撤去されており、底面のみが幅50cm、奥行45cmの範囲で残存し、被熱による赤色化がみられる。煙出しピットは住居東壁から150cmの位置で確認した。平面形は直径32cmの円形を呈し、確認面からの深さは25cmである。
〔貯蔵穴〕なし
〔堆積土〕煙出しピットの堆積土のみ残存する。4層に細分され、焼土ブロックと炭化物粒を多量に含む自然崩落土ないしは自然堆積土である。
〔出土遺物〕煙出しピット堆積土より須恵器短頸壺の破片が、P4b抜き取り痕跡・P4b掘方埋土・住居掘方埋土より非ロクロ調整の土師器坏・大形坏・甕、須恵器坏の破片が出土した。土師器坏・大形坏は外面にヘラケズリ調整が、内面に黒色処理が施されている。

【SI554c竪穴住居跡】（第167～169図、図版25-5・6、26-1）
〔位置・確認面〕N9中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕SI554a → SI554b →《SI554c》
〔規模・形状〕東西5.7m、南北6.2mの方形を呈する。
〔方向〕カマド中軸線：N－7°－W
〔壁面〕Ⅴ層を壁とする。ほぼ垂直に立ち上がり、残存壁高は最も残存状況の良好な東壁で15cmである。
〔床面〕SI554b床面と同一面を床面とする。西側は削平により残存しないが、東側のほぼ全面に焼土・炭化物・白色粘土粒を含む黒褐色シルトからなる硬化層が形成されており、貼床と考えられる。
〔主柱穴〕主柱穴と見られる柱穴が床面で8基確認され、掘方の形状などから2時期の変遷が考えられる。1時期目の柱穴は住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に140～230cmの位置で4基(P1c～P4c)確認した。位置と形状、規模から主柱穴と考えられる。掘方の平面形は直径30～34cmの円形ないしは楕円形を呈し、深さは23～28cmである。3基で柱材の抜き取り痕跡が確認され、このうち1基で平面形が直径約12cmの円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡が確認された。2時期目の柱穴は住居平面形の対角線上でコーナー部より内側に135～175cmの位置で4基(P1d～P4d)確認した。掘方の平面形は長軸34～65cm、短軸24～55cmの隅丸方形を呈し、深さは30～42cmである。いずれも柱材の抜き取り痕跡が確認され、その底面で平面形が直径12～16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の床面からの深さは28～40cmで、掘方底面に達するものと達しないものとがある。
〔壁柱穴〕なし
〔周溝・壁材痕跡〕上端幅8～26cm、下端幅8～20cm、床面からの深さ7～15cmで断面形がU字状を呈する周溝がカマド部分を除いてほぼ全周する。幅8～12cm、深さ7～10cm程度の壁材痕跡が断続的に認められる。周溝の堆積土は住居掘方埋土に類似し、黄褐色ロームブロックを含む人為的埋土である。
〔カマド〕住居北壁の東寄りに設置されている。燃焼部と煙道、煙出しピットが残存する。燃焼部は長さ93cm、幅113cmで、焚口幅は側壁先端間で66cmである。燃焼部底面は幅56cm、奥行



第 167 図　SI554c 竪穴住居跡 (1)

90cm で、床面より 6cm ほど皿状に窪んでいる。底面は被熱により赤色化している。側壁は左側壁で長さ 56cm、幅 24cm、高さ 13cm、右側壁で長さ 62cm、幅 34cm、高さ 27cm が残存し、内側は被熱により赤色化している。焼土ブロックを多量に含む白色粘土で構築されており、SI554b の旧カマド構築土が再利用されたと考えられる。奥壁は住居の北壁とほぼ一致し、奥壁から北側へ延びる煙道は長さ 154cm で、幅 18 ～ 30cm、深さ 5 ～ 8cm が残存する。底面は奥壁との接続部からスロープ状に立ち上がり、中ほどから先はほぼ平坦である。煙道の先端部には長軸 36cm、短軸 26cm、深



SI554a・b・c竪穴住居跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒、炭化物粒を少量含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、白色粘土ブロック、炭化物粒を少量含む
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒、炭化物粒を少量含む
4	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む
5	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	焼土粒、白色粘土ブロックを多量に含む
6	2.5Y5/6 黄褐	シルト質粘土	白色粘土ブロックを主体とする　被熱により赤色化している カマド天井崩落土
7	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む
8	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	焼土粒、炭化物粒を少量含む　煙道天井崩落土
9	10YR2/3 黒褐	砂質シルト	焼土粒、炭化物粒を多量に含む
10	10YR4/4 褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
11	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を多量に含む
12	10YR2/3 黒褐	シルト	焼土粒を多量に含む　カマド機能時の堆積土
13	5YR4/6 赤褐	シルト	被熱により赤色化している　カマド底面の構築土
14	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　カマド構築時の掘方埋土
15	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　住居壁材痕跡
16	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　周溝掘方埋土
17	10YR2/3 黒褐	シルト	焼土粒、白色粘土粒、炭化物粒を少量含む　住居貼床
18	10YR4/6 褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを少量含む　住居掘方埋土
19	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	白色粘土ブロックを多量に含む　SI554b K3埋土
20	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SI554b P7柱抜き取り痕跡
21	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む SI554a K2埋土

SI554c竪穴住居跡カマド横断面

No.	土色	土性	備考
1	10YR6/6 明黄褐	粘土	焼土ブロックを多量に含む　カマド側壁構築土
2	10YR6/6 明黄褐	粘土	灰白色粘土ブロック、灰黄色粘土ブロックを多量に含む カマド側壁構築土
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、灰白色粘土粒を多量に含む カマド側壁構築土

SI554c竪穴住居跡貯蔵穴(K1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	炭化物粒を少量、黄褐色ロームブロックを含む
2	10YR5/4 にぶい黄褐	粘質シルト	白色粘土による壁面・底面構築土

SI554c竪穴住居跡(P1c)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量含む　P1c柱抜き取り痕跡

SI554c竪穴住居跡(P1a・d)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P1d柱痕跡
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を均質に含む　P1d柱穴掘方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P1a柱抜き取り痕跡
4	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、粒を多量に、炭化物粒を少量含む P1a柱穴掘方埋土

SI554c竪穴住居跡(P2c)

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、礫を多量に含む P2c柱抜き取り痕跡

SI554c竪穴住居跡(P2d)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P2d柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　P2d柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、礫を多量に含む　P2d柱穴掘方埋土

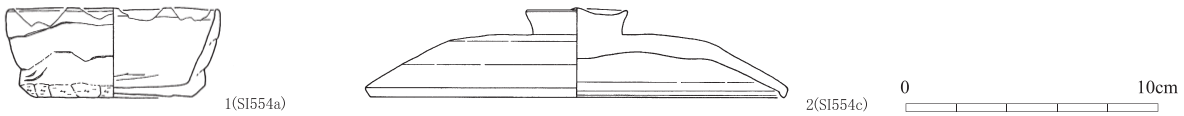
SI554c竪穴住居跡(P3b・c・d)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　P3d柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　P3d柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、礫を含む　P3d柱穴掘方埋土
4	10YR4/3 にぶい黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロック、礫を多量に含む P3c柱抜き取り痕跡
5	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む P3b柱穴掘方埋土

SI554c竪穴住居跡(P4b・d)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P4d柱抜き取り痕跡
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　P4d柱痕跡
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P4d柱穴掘方埋土
4	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　P4b柱穴掘方埋土

第 168 図　SI554c 竪穴住居跡 (2)



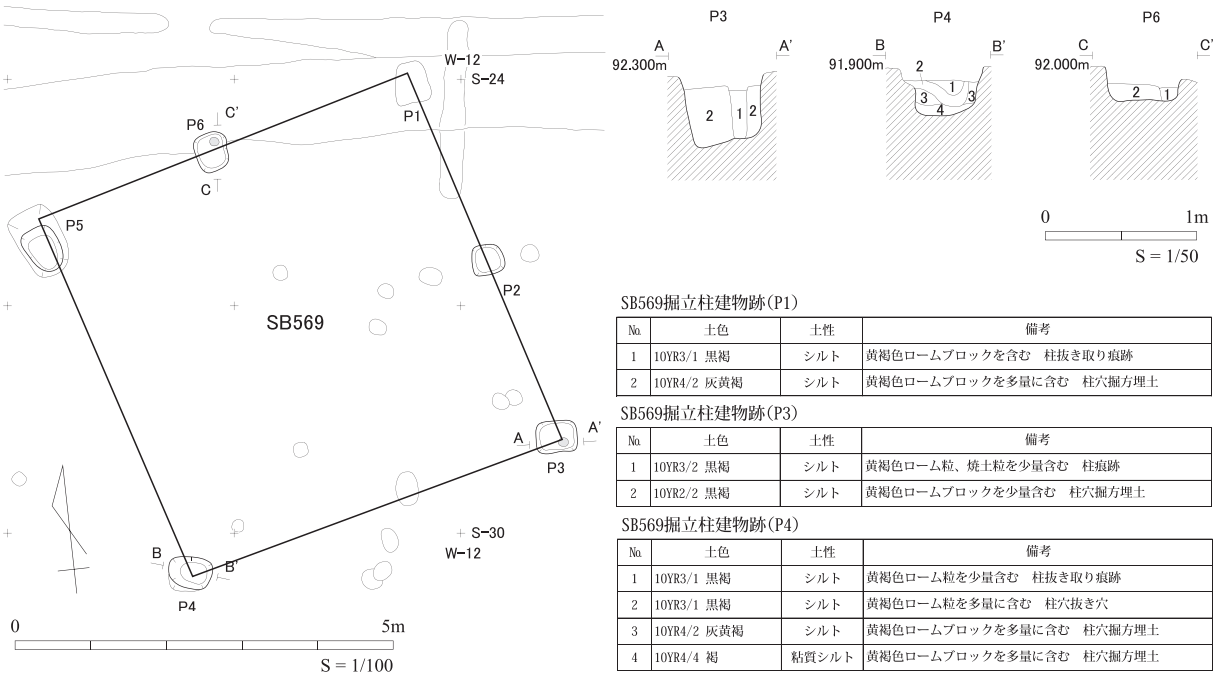
No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	住居掘方埋土	ミニチュア土器	—	—	外：(体)ﾅﾃﾞ→ﾍﾗｹｽﾞﾘ(底面)木葉痕　内：(体)ﾍﾗﾅﾃﾞ	(8.1)	6.1	4.5	1/3	06034	37-10
2	床	須恵器	蓋	A	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　ﾂﾏﾐ径 4.0	(16.6)	—	3.5	1/8	06033	—

第 169 図　SI554a・c 竪穴住居跡出土遺物

さ 16cm の煙出しピットが確認された。
〔炉〕住居床面中央やや南西寄りの長軸 70cm、短軸 42cm の範囲が皿状に 3cm ほど窪み、被熱による著しい赤色化がみられる。炉跡と考えられる。
〔貯蔵穴〕住居北東コーナー部で土坑 1 基 (K1) が確認された。長軸 98cm、短軸 77cm の楕円形を呈し、深さは 12cm で底面は皿状を呈する。底面は 5 ～ 8cm の厚さで白色粘土を貼り付けて構築されている。位置と形状から貯蔵穴と考えられる。堆積土は 1 層で、自然堆積土と考えられる。
〔堆積土〕住居内堆積土は 12 層に細分され、いずれも住居廃絶以降の自然崩落土ないしは自然堆積土である。
〔出土遺物〕床面より須恵器蓋（第 169 図２）が出土した。
　このほか、遺構確認面・住居内堆積土・カマド内堆積土・カマド底面・カマド崩落土・煙出しピット堆積土・貯蔵穴底面・壁材痕跡・P4c 抜き取り痕跡・P2d 掘方埋土・P9 掘方埋土・床面より非ロクロ調整の土師器坏・甕・壺、須恵器坏・蓋・甕の破片が出土した。土師器坏は外面にケズリ調整が施されるもの、ケズリ調整の後にミガキ調整が施されるものがあり、いずれも内面に黒色処理が施されている。甕は外面にハケメ調整が施されているもの、横ナデとケズリ調整が施されているものがあり、後者は頸部に段を有する。壺は体部外面にヘラミガキの後に赤彩が施されている。

Ｂ．掘立柱建物跡

【SB569 掘立柱建物跡】（第 170 図、図版 26- ３）
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕SK566 ―《SB569》→ SD557
〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 5.2m)、南北 2 間 (総長 5.0m) の建物跡である。
〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 40 ～ 54cm、短軸 38 ～ 44cm の隅丸方形を呈し、深さ 22 ～ 45cm である。このうち 3 基で柱材の抜き取り痕跡を確認した。また 3 基で平面形が直径 12 ～ 14cm の円形を呈し、掘方底面に達する柱痕跡を確認した。
〔柱間寸法〕北側柱列で西から 290 - 230cm、東側柱列で北から 240 - 260cm である。
〔方向〕東側柱列：N - 17° - W
〔出土遺物〕P5 堆積土より非ロクロ調整で外面にハケメ調整の施された土師器甕の破片が出土した。
【SB570 掘立柱建物跡】（第 171 図、図版 26- ４・５）
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕南北 2 間 (桁行総長 3.0m)、東西 1 間 (梁行総長 2.7m) の南北棟建物跡である。
〔柱穴〕6 基確認した。掘方の平面形は長軸 40 ～ 50cm、短軸 38 ～ 48cm の隅丸方形を呈し、深さ 18 ～ 32cm である。このうち 4 基で平面形が直径 14 ～ 15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡の深さは 22 ～ 34cm で、掘方底面に接するものと 3 ～ 8cm 程度沈み込むものとがある。また、2 基で柱材の抜き取り痕跡が確認された。
〔柱間寸法〕北側柱列で 270cm、東側柱列で北から 160 - 140cm である。
〔方向〕東側柱列：N - 1° - E



SB569掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

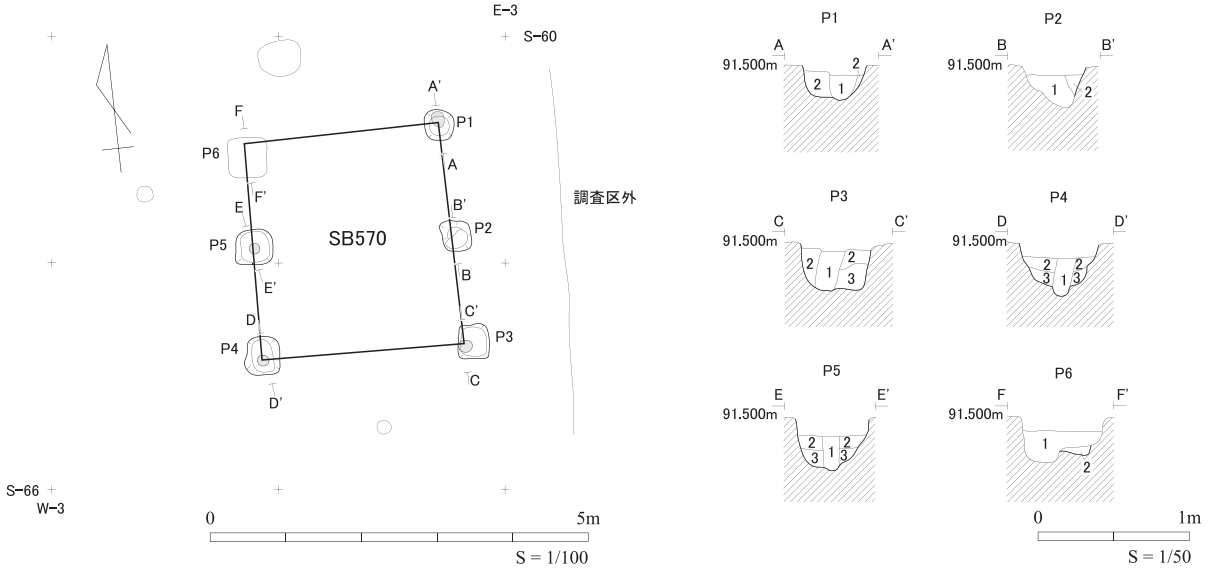
SB569掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、焼土粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SB569掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　柱穴抜き穴
3	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
4	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

第 170 図　SB569 掘立柱建物跡



SB570掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB570掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR4/4 褐	粘土	黄褐色ロームブロックを大量に含む　柱穴掘方埋土

SB570掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
3	10YR2/3 黒褐	粘土	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB570掘立柱建物跡(P4)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱痕跡
2	10YR3/4 暗褐	粘土	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
3	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

SB570掘立柱建物跡(P5)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱痕跡
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SB570掘立柱建物跡(P6)

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

第 171 図　SB570 掘立柱建物跡

〔出土遺物〕P4 堆積土より非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

C．柱列跡

【SA568 柱列跡】（第 174 図、図版 26- 6）

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西 2 間 (総長 3.1m) の柱列跡で、南側へ展開する掘立柱建物跡であった可能性がある。

〔柱穴〕3 基確認した。掘方の平面形は長軸 44 ～ 46cm、短軸 34 ～ 46cm の隅丸方形を呈し、深さ 26 ～ 57cm である。いずれも柱材の抜き取り痕跡が認められ、柱痕跡は残存しない。

〔柱間寸法〕東から 150 - 160cm である。

〔方向〕E - 13° - N

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

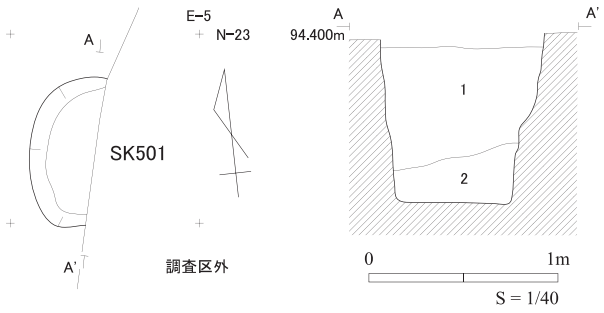
D．落し穴状土坑

落し穴状土坑は 2 基確認された。第 6 表に特徴を示す。

E．土坑

【SK501 土坑】（第 172 図）

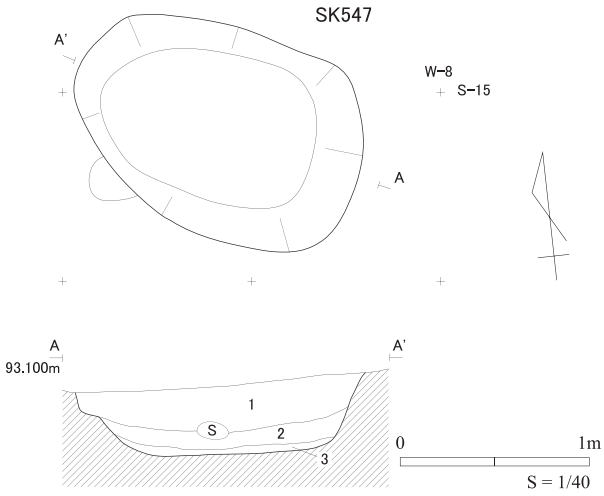
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。



SK501土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐	シルト	炭化物粒を少量、礫を含む
2	10YR3/3 暗褐	シルト	礫を多量に含む

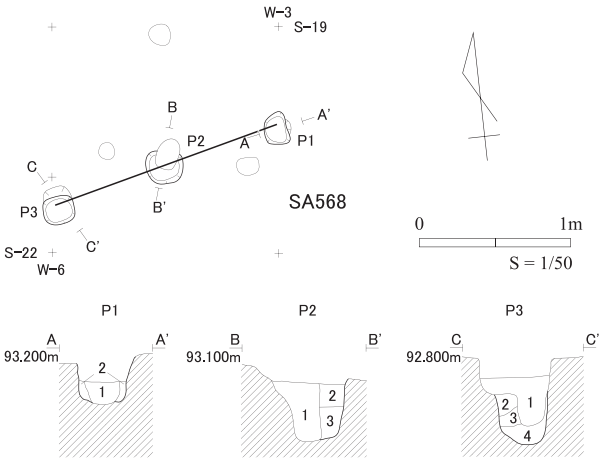
第 172 図　SK501 土坑



SK547

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を少量、暗褐色シルトを含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	炭化物粒を多量に含む
3	10YR1.7/1 黒	シルト	炭化物粒を多量に、黄褐色ロームブロックを少量、焼土粒を含む　機能時の堆積

第 173 図　SK547 土坑



SA568掘立柱建物跡(P1)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む　柱穴掘方埋土

SA568掘立柱建物跡(P2)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　柱穴掘方埋土
3	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土

SA568掘立柱建物跡(P3)

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む　柱抜き取り痕跡
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　柱穴掘方埋土
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　柱穴掘方埋土
4	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む　柱穴掘方埋土

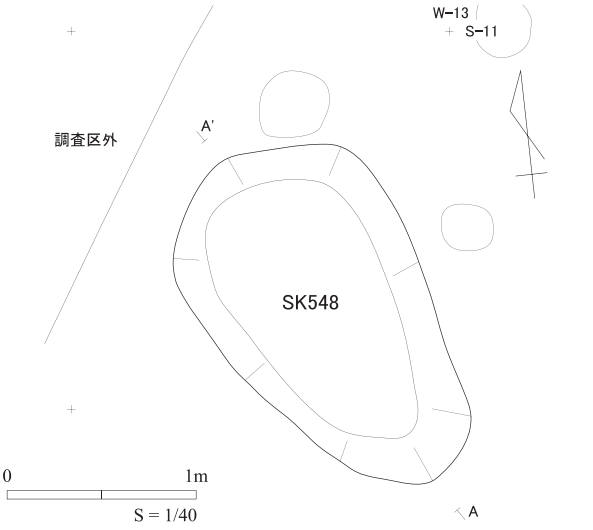
第 174 図　SA568 柱列跡

Ⅴ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕東側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、直径 86cm 以上の円形を呈するとみられる。断面形は逆台形を呈し、深さ 88cm である。
〔底面〕平坦である。
〔堆積土〕堆積土は 2 層に細分される。小礫と炭化物粒を含む褐色・暗褐色シルトで、人為的埋土の可能性がある。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SK547 土坑】（第 173 図、図版 26- 7 ）
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 156cm、短軸 58cm の不整楕円形を呈する。断面形は東側に段の付く逆台形を呈し、深さ 44cm である。
〔底面〕皿状を呈する。
〔堆積土〕堆積土は 3 層に細分される。1 層は炭化物・黄褐色ローム粒を少量含む暗褐色シルト、2 層は炭化物粒を多量に含む黒褐色シルト、3 層は炭化物粒と焼土を極めて多量に含む黒色シルトである。1・2 層は自然堆積、3 層は土坑機能時の堆積土と考えられる。
〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏または蓋の破片が出土した。

【SK548 土坑】（第 175 図、図版 26- 8 ）
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅳ層で確認した。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕平面形は長軸 230cm、短軸 117cm の不整楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さ 17 ～ 30cm である。
〔底面〕皿状を呈する。
〔堆積土〕堆積土は 2 層に細分される。ブロックを含む黒褐色のシルトと粘質シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

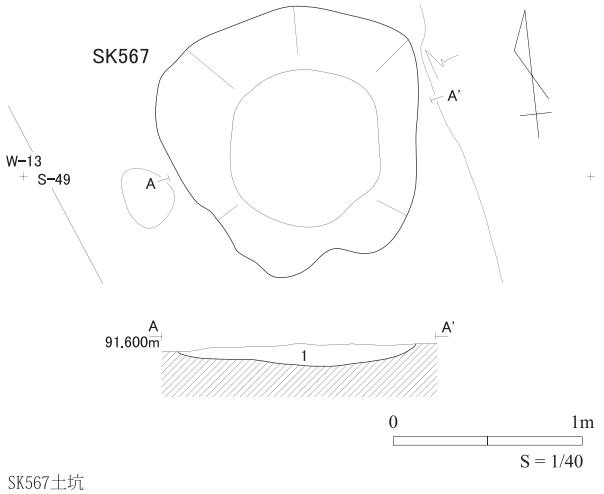
【SK567 土坑】（第 176 図）
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。



SK548土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む
2	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

第 175 図　SK548 土坑



SK567土坑

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

第 176 図　SK567 土坑

Ⅴ層で確認した。

〔重複〕Pit →《SK567》

〔規模・形状〕平面形は長軸 150cm、短軸 110cm の不整楕円形を呈する。断面形は皿状を呈し、深さ 10cm である。

〔底面〕皿状を呈する。

〔堆積土〕堆積土は 1 層で、粒をわずかに含む黒褐色シルトである。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

Ｆ．溝跡

溝跡は 6 条確認された。ここではこのうち主要なものについて記述し、これ以外については第 10 表に特徴を示す。

【SD555 溝跡】（第 177 図）

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SK566・SB569・《SD555》→ SD556 → SD557

〔規模・形状〕長さ 11.7m 以上の東西溝跡で、調査区外の東側へ延びている。上端幅 50cm、下端幅 30cm で断面形は皿状を呈し、深さ 10 ～ 13cm である。

〔方向〕東西方向

〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色シルトである。

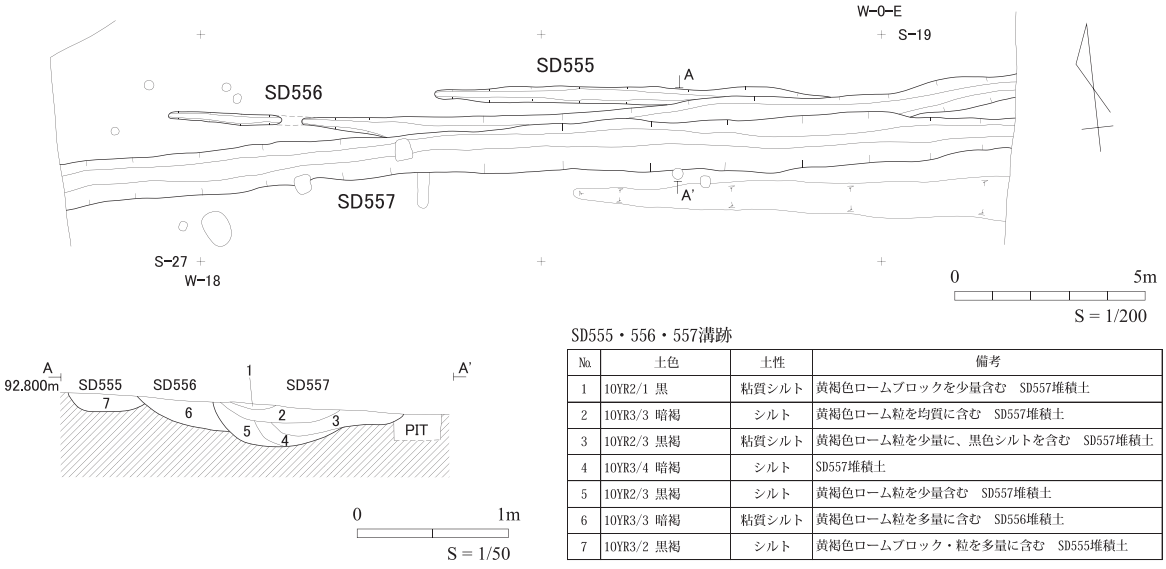
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SD556 溝跡】（第 177 図）

〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。

〔重複〕SK566・SB569・SD555 →《SD556》→ SD557

〔規模・形状〕長さ 22.3m 以上の東西溝跡で、調査区外の東側へ延びている。上端幅 40 ～ 50cm、下端幅 15 ～ 30cm で断面形は皿状を呈し、深さ 8 ～ 20cm である。



SD555・556・557溝跡

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む　SD557堆積土
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を均質に含む　SD557堆積土
3	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量に、黒色シルトを含む　SD557堆積土
4	10YR3/4 暗褐	シルト	SD557堆積土
5	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む　SD557堆積土
6	10YR3/3 暗褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む　SD556堆積土
7	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む　SD555堆積土

第 177 図　SD555・556・557 溝跡

〔方向〕東西方向
〔堆積土〕堆積土は 1 層で、黄褐色ローム粒を含む暗褐色シルトである。
〔出土遺物〕堆積土より土師器破片と須恵器甕の破片が出土した。

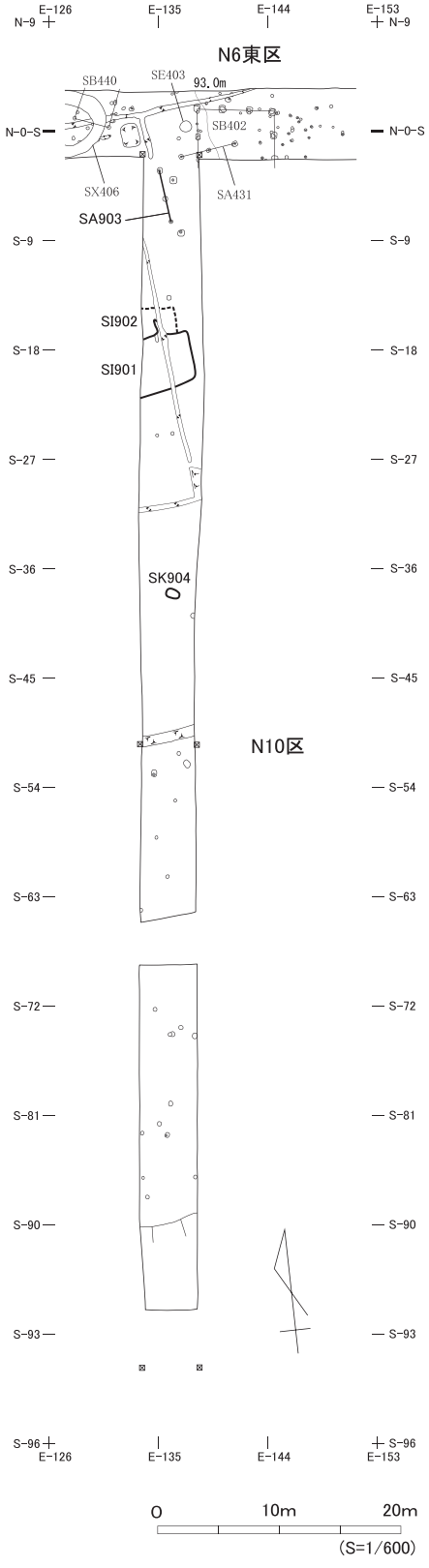
【SD557 溝跡】（第 177 図）
〔位置・確認面〕N9 中区の南西斜面に立地する。Ⅴ層で確認した。
〔重複〕SK566・SB569・SD555 → SD556 →《SD557》
〔規模・形状〕長さ 24.5m 以上の東西溝跡で、調査区外の東西へ延びている。上端幅 90 ～ 140cm、下端幅 30 ～ 60cm で断面形は皿状を呈し、深さ 10 ～ 30cm である。
〔方向〕東西方向
〔堆積土〕堆積土は 5 層に細分され、黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色粘質シルト、黒褐色・暗褐色シルトである。
〔出土遺物〕堆積土より非ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕、近世陶器（銅緑釉、大堀相馬焼）の碗の破片が出土した。

（13）N 10 区

遺跡の立地する丘陵中腹部の南向き緩斜面に位置する。南端部はＮ 1 南区からＮ 2 中区を通って南東方向からのびる沢の先端部にあたる。遺構は竪穴住居跡 2 軒、柱列跡 1 条、土坑 1 基が確認された（第 178 図）。以下、主要な遺構について述べる。

A．竪穴住居跡

【SI901 竪穴住居跡】（第 178 図、図版 27- 3・4）
〔位置・確認面〕N10 区北側の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。
〔重複〕SI902 →《SI901》
〔規模・形状〕西側が調査区外へ延びるため全体



第 178 図　N10 区遺構配置図

の形状は不明であるが、東西 5.0m 以上、南北 4.5m 以上の方形を呈するとみられる。
〔方向〕
〔カマド〕住居北壁に設置されている。燃焼部と煙道部が残存する。
〔堆積土〕確認面の堆積土は黄褐色ローム粒を含む黒色 (10YR2/1) シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SI902 竪穴住居跡】（第 178 図、図版 27- 3）
〔位置・確認面〕N10 区北側の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。
〔重複〕《SI902》→ SI901
〔規模・形状〕南側が SI901 と重複し、西側が調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、東西 2.8m 以上、南北 2.4m 以上の方形を呈するとみられる。掘方埋土のみが残存する。
〔方向〕カマド中軸線：N - 7° - W
〔カマド〕不明である。
〔堆積土〕確認面の住居掘方埋土は白色粘土ブロックと黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色 (7.5YR2/2) シルトである。なお表土掘削の際に削平してしまったが、調査区西側の断面観察の結果、住居床面および住居内堆積土がわずかに残存することが確認された。住居内堆積土は黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色 (10YR2/2) シルトである。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

B．柱列跡

【SA903 柱列跡】（第 178 図、図版 27- 5）
〔位置・確認面〕N10 区北側の平坦面に立地する。Ⅴ層で確認した。平面プランのみの確認である。
〔重複〕なし
〔規模・形状〕南北 2 間 (総長 4.3m) の柱列跡である。N6 東区で確認された SA431 とほぼ直行する関係にあり、同時に存在していた可能性がある。
〔柱穴〕3 基確認した。掘方の平面形は長軸 30 ～ 50cm、短軸 25 ～ 40cm の円形ないしは楕円形を呈する。2 基で平面形が直径 15 ～ 20cm の円形を呈する柱痕跡が確認された。
〔柱間寸法〕南から 190 - 240cm である。
〔方向〕
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

C．土坑

土坑は 1 基確認した。第 8 表に特徴を示す。

（14）その他の出土遺物

これまで述べた各遺構から出土した土器類以外の遺物（金属製品、石製品、石器、縄文･弥生土器、中世・近世陶磁器など）および遺構外からの出土遺物について述べる。

A．土師器・ロクロ土師器・須恵器（第 179 ～ 184 図）

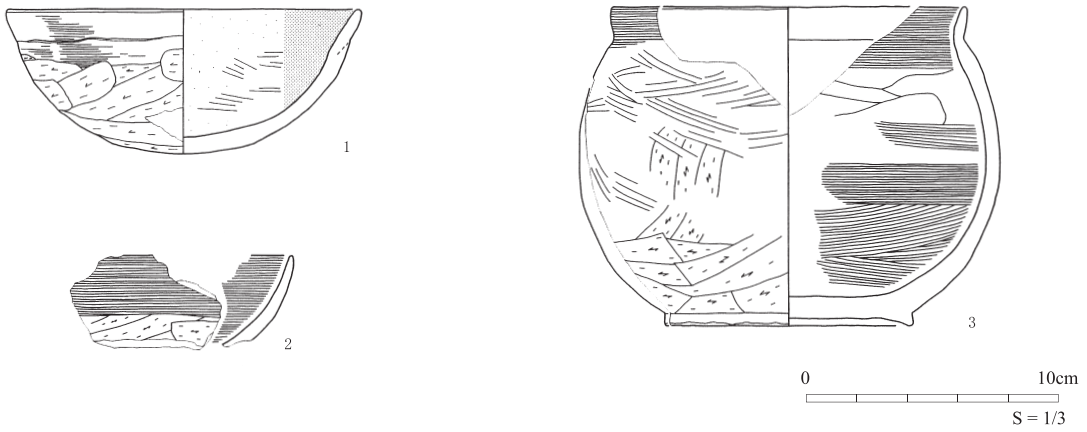
表土および基本層、遺構確認面などから多量に出土したが、小破片が多く図示できるものは少ない。

Ｓ１区ではロクロ調整の土師器坏（第 179 図１）と非ロクロ調整の土師器坏（第 179 図２）が出土した。１は外底面に回転糸切り痕がみられ、内面は黒色処理が施されている。２は内外面に横ナデ調整が施され、外面にはケズリの後に沈線が加えられている。内面に黒色処理が施されていない。



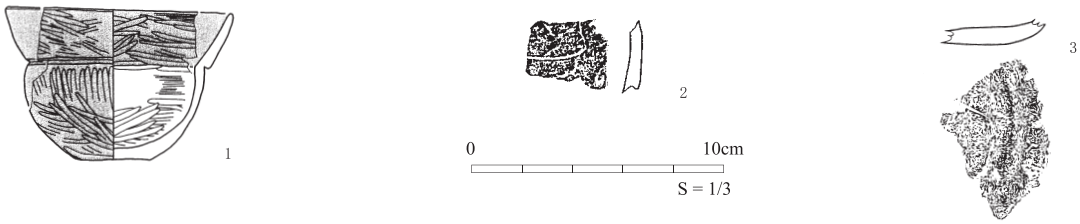
No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	遺確	ﾛｸﾛ土師器	坏	A	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ（底面）回転糸切　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	(14.2)	(5.6)	4.9	1/3	06107	38-1
2	遺確	土師器	坏	Ｉ？	外：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ→ｹｽﾞﾘ→沈線　内：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ	—	—	(3.7)	一部	06101	—

第 179 図　S1 区遺構外出土遺物



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	Ⅲ層	土師器	坏	Ｄ２	外：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ→（体～底）ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ→黒色処理	(14.0)	—	(6.75)	1/5	06089	—
2	遺確	土師器	坏	Ｉ？	外：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ→（体）ｹｽﾞﾘ　内：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ	—	—	(3.6)	一部	06191	—
3	表土	土師器	壺	Ｃ	外：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ（体）ｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ（底面）ｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ　内：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ（体）ﾅﾃﾞ（底径＝高台径）	(14.0)	9.8	12.6	1/4	06087	38-2

第 180 図　S3 区遺構外出土遺物

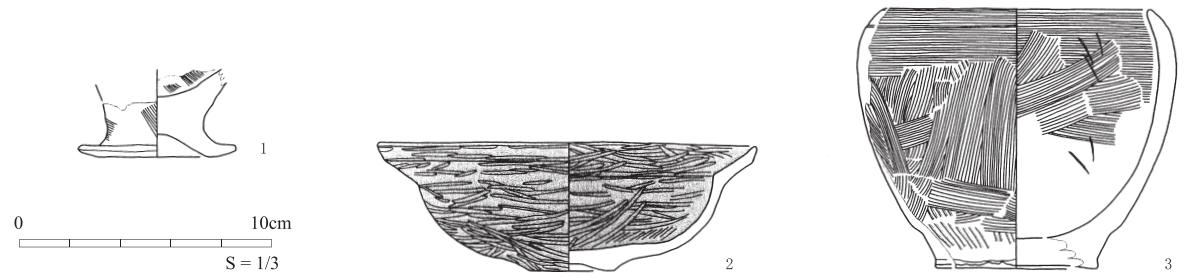


No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	遺確	土師器	坏	Ａ１	外：（口～体）ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩 内：（口）ﾖｺﾅﾃﾞ（体）ﾅﾃﾞ→（口、体下）ﾍﾗﾐｶﾞｷ（口～体上）赤彩	8.9	2.9	5.9	3/4	06048	38-3
2	遺確	土師器	坏？	—	外：ｹｽﾞﾘ→ﾍﾗ書　内：ﾍﾗﾐｶﾞｷ　外面にﾍﾗ書	—	—	—	一部	06047	38-4
3	ｶｸﾗﾝ	須恵器	坏	—	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ　外底面にﾍﾗ書	—	(1.0)	—	一部	06041	38-5

第 181 図　N2 区遺構外出土遺物

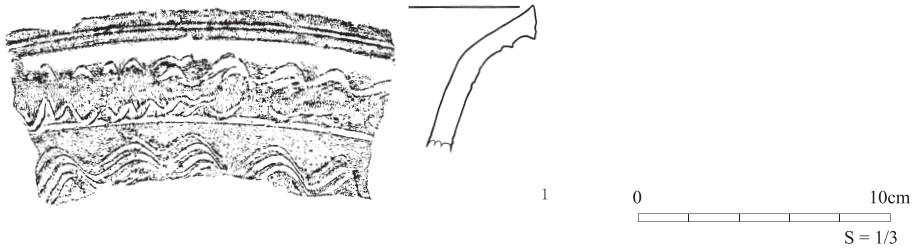
Ｓ３区では非ロクロ調整の土師器坏（第 180 図１・２）と土師器短頸部壺（第 180 図３）が出土した。１は丸底で外面は口縁部ヨコナデ調整の後に体部にケズリ調整、内面は黒色処理が施されている。２は外面の口縁部にヨコナデ調整とケズリ調整が、内面にヨコナデ調整が施され、黒色処理が施されていない。３は底部に低い高台がつくもので、体部外面にケズリ調整の後にヘラミガキ調整が、内面にナデ調整が施されている。

Ｎ２区では非ロクロ調整の土師器坏（第 181 図１）とヘラ書きのある土師器・須恵器片（第 181 図２・３）が出土した。１は内外面に丹念なヘラミガキの後に赤彩が施されている。２は内面にヘラミガキ調整が施され、外面にケズリ調整の後にヘラ書きが施されている。３は外底面にヘラ書きが施されている。



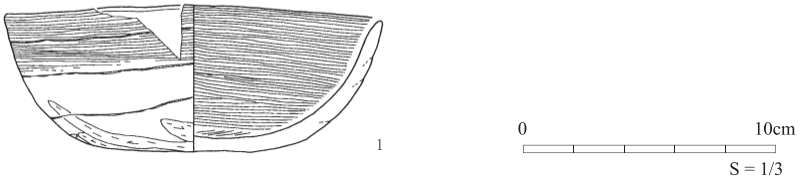
No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	遺確	ﾐﾆﾁｭｱ土器	—	—	外：(脚) ﾅﾃﾞ　内：(体) ﾅﾃﾞ　(底径＝裾径)、脚部は完形	—	6.2	(3.45)	一部	06069	38-6
2	遺確	土師器	坏	A２	外：(口～体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ (底面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ﾍﾗﾐｶﾞｷ 赤彩　内：(体) ﾍﾗﾐｶﾞｷ→赤彩	14.95	3.3	5.1	完形	06067	38-7
3	遺確	土師器	鉢	A	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾊｹﾒ→ﾅﾃﾞ (底面) 木葉痕　内：(口～体) ﾍﾗﾅﾃﾞ→ﾖｺﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ 最大径 12.3	(10.4)	(6.4)	10.25	1/5	06068	38-8

第 182 図　N2 南区遺構外出土遺物



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	表土	須恵器	甕	A２	外：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ→波状文　内：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	—	—	—	一部	06032	38-9

第 183 図　N5 区遺構外出土遺物



No.	層位	種類	器種	分類	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
1	表土	土師器	坏	H	外：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体～底) ﾍﾗｹｽﾞﾘ　内：(口) ﾖｺﾅﾃﾞ (体) ﾅﾃﾞ	14.8	—	5.8	1/2	06025	38-10

第 184 図　N9 区遺構外出土遺物

Ｎ２南区ではミニチュア土器（第 182 図１）と非ロクロ調整の土師器坏（第 182 図２）、鉢（第 182 図３）が出土した。１は脚部の破片で、内外面にナデ調整が施されている。２は内外面に丹念なヘラミガキと赤彩が施されている。３は体部外面にハケメの後にナデ調整が施され、外底面に木葉痕がみられる。

Ｎ５区では須恵器甕（第 183 図）が出土した。口縁部から頸部にかけての破片で、外面に波状文が施されている。Ｎ９区では非ロクロ調整の土師器坏（第 184 図）が出土した。外面の体部にヘラケズリ調整が、内面にヨコナデ調整が施され、黒色処理が施されていない。

Ｂ．瓦（第 185 図１・２）

Ｎ６西区の SI424 竪穴住居跡堆積土などから２点出土した。いずれも平瓦の小破片である。１は凸面に斜格子タタキが、凹面と側面にヘラケズリが施されている。古代の瓦である。同様に破片資料であるが本遺跡の南に位置する蔵王町都遺跡（蔵王町教委 2005）に類例が認められる。２は凸面と側面に面取りが施され、凹面にナデ調整が施されている。近世の瓦とみられる。

Ｃ．陶磁器（第 185 図３～９）

表土および基本層、遺構確認面、土坑、溝跡、柱穴などから約 90 点が出土した。ほとんどが小破片である。３は青磁碗である。12 世紀後半から 13 世紀初頭の中国龍泉窯産の可能性がある。４・５は中世陶器の擂鉢で在地産とみられる。６・７は中世陶器の甕で、簾状押印がみられる。６は常滑産、７は渥美産とみられる。８・９は瀬戸美濃産志野織部の丸皿で、高台は削り出しである。８は内面に鉄絵がみられる。17 世紀初頭のものである。本遺跡の東に位置する蔵王町鍛冶屋敷遺跡（蔵王町教委 2006）に類例が認められる。

このほか、小破片ながら遺構に伴うものとしてはＳ３中区 SK78 土坑の堆積土から中世陶器の甕が、Ｓ１南区 SK625 土坑の堆積土から青磁碗が出土した。近世陶磁器はＳ１南区 SB615P7 掘方埋土、Ｎ６西区 SK439 土坑、Ｎ９北区 SK562 土坑、SD557 溝跡、SD564 溝跡の堆積土から出土している。

Ｄ．金属製品（第 186 図）

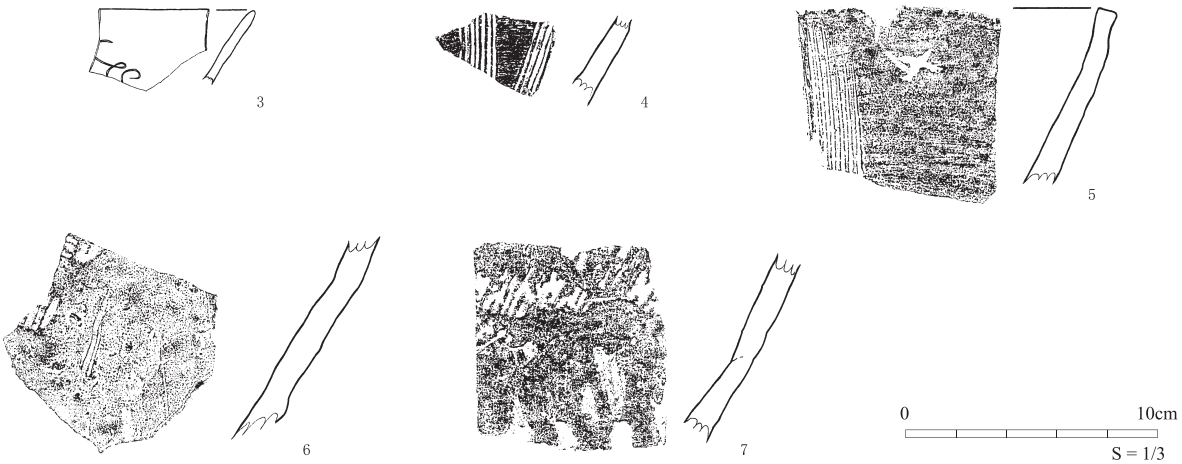
遺構確認面、竪穴住居跡、土坑、溝跡、柱穴などから 23 点が出土した。鉄鏃、鉄製刀子、鉄釘、銅銭がある。１・２は鉄鏃で、細長い柳葉形の刃部と短い茎部からなる。刃部上半部の横断面形は扁平なレンズ状を呈し、刃部下半部から茎部にかけては方形を呈する。３は鉄製の刀子で、刃部の破片である。４～ 10 は鍛造による鉄釘で、脚部の横断面形は方形を呈する。４・６・８・９は折り曲げによる不定形の頭部が残存する。11 は銅銭で、寛永通宝である。

Ｅ．転用砥、砥石（第 187・188 図）

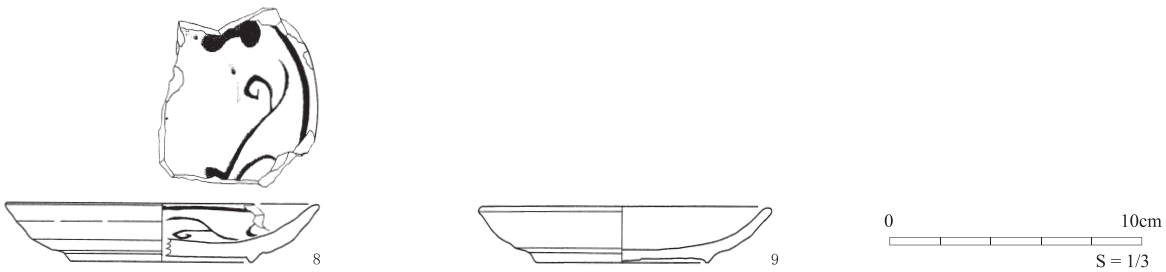
遺構確認面、竪穴住居跡、土坑などから転用砥１点、砥石 11 点が出土した。第 187 図１は転用砥で、須恵器甕の胴部破片の一辺に砥面がみられる。第 187 図２～４、第 188 図１～３は凝灰岩製の砥石である。長方形の板状で長辺の４面に砥面を持つ。第 188 図２・３はＮ８西区 SI755 竪穴住居跡から出土したもので同一個体であるが、中央部で折損した後にそれぞれ別個体として使用されている。



No.	区	遺構	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm) 長	幅	厚	残存	登録	写真
1	N6 西	SI424	堆 3 層	瓦	平瓦	凸面：斜格子ﾀﾀｷ　凹面：ﾍﾗｹｽﾞﾘ　側面：ﾍﾗｹｽﾞﾘ　古代瓦	(8.5)	(7.1)	3.0	一部	06109	39-1
2	S1 西	ｶｸﾗﾝ		瓦	平瓦	凸面：面取り　凹面：ﾅﾃﾞ　側面：面取り　近世瓦	(16.0)	(11.4)	1.9	一部	06108	39-2

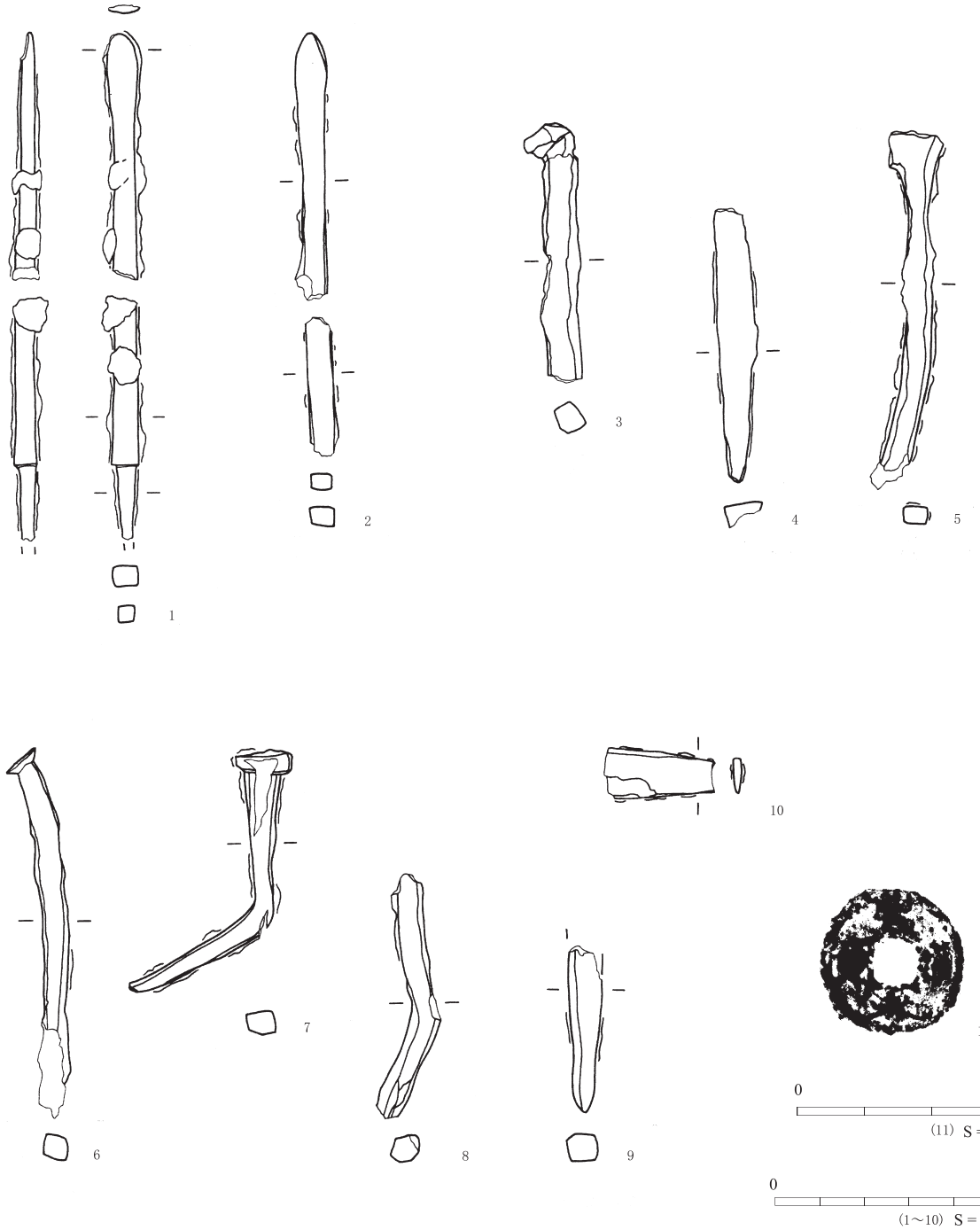


No.	区	遺構	層位	種類	器種	産地	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
3	N2 南 T7	遺確		青磁	碗	中国か	青磁釉　内面：刻線	-	-	(2.75)	一部	06121	39-3
4	S1 南	ｶｸﾗﾝ		中世陶器	擂鉢	在地か	ﾅﾃﾞ　内面：条線帯	-	-	-	一部	06116	39-4
5	S1 西	ｶｸﾗﾝ		中世陶器	擂鉢	在地か	ﾅﾃﾞ　内面：条線帯　刻印「×」	-	-	(6.9)	一部	06117	39-5
6	S3 西	遺確		中世陶器	甕	常滑	ﾅﾃﾞ　内面：簾状押印	-	-	-	一部	06120	39-6
7	N4 南	遺確		中世陶器	甕	渥美か	ﾅﾃﾞｵｻｴ　内面：簾状押印	-	-	-	一部	06112	39-7



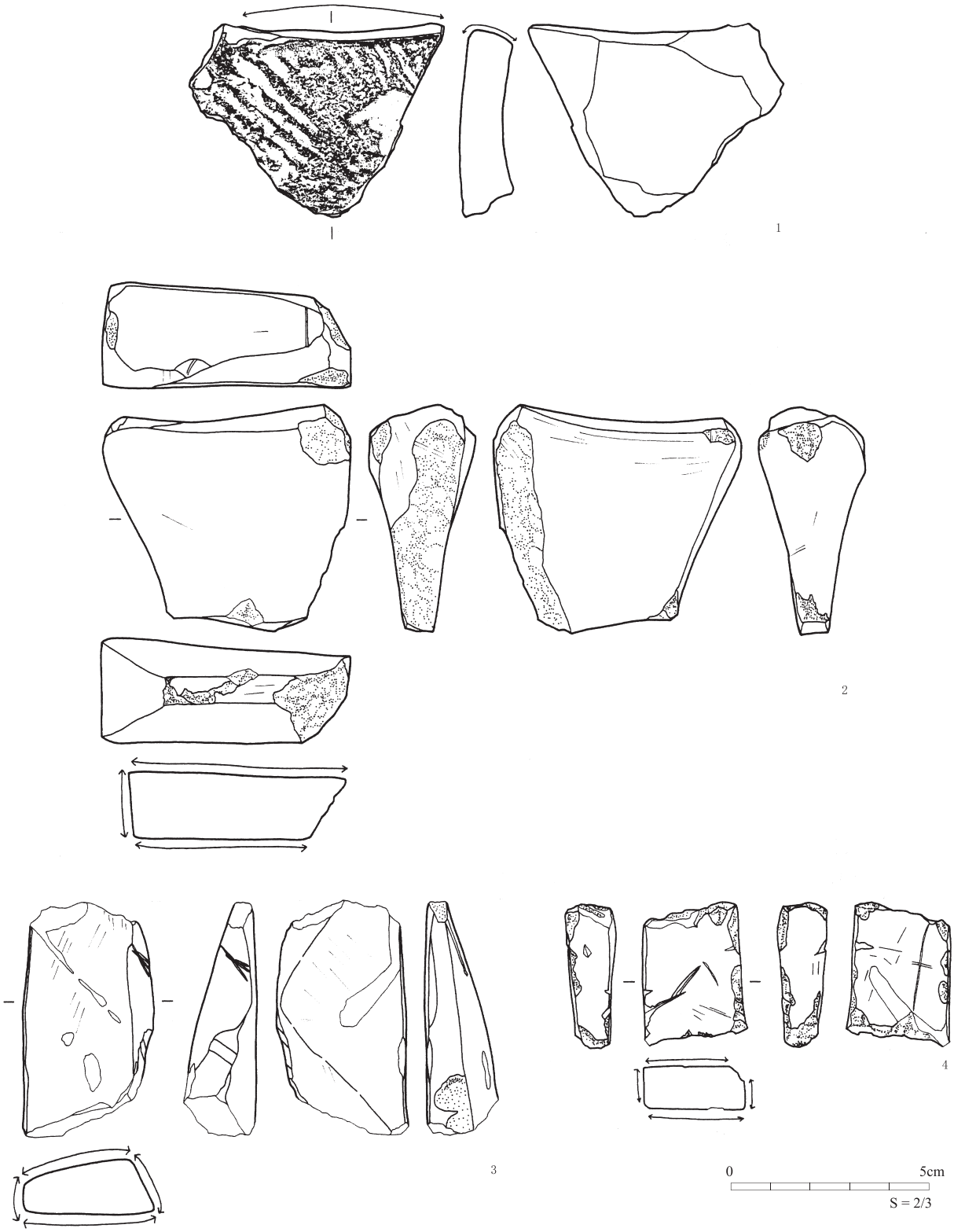
No.	区	遺構	層位	種類	器種	産地	器面調整・特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高	残存	登録	写真
8	S 1 南	ｶｸﾗﾝ		近世陶器	Ⅲ	瀬戸美濃	志野織部　鉄絵、長石釉	(12.4)	7.2	2.3	1/3	06154	39-8
9	S1 西	Ⅲ層		近世陶器	Ⅲ	瀬戸美濃	志野織部　長石釉	11.6	6.8	3.2	完形	06153	39-9

第 185 図　瓦、陶磁器



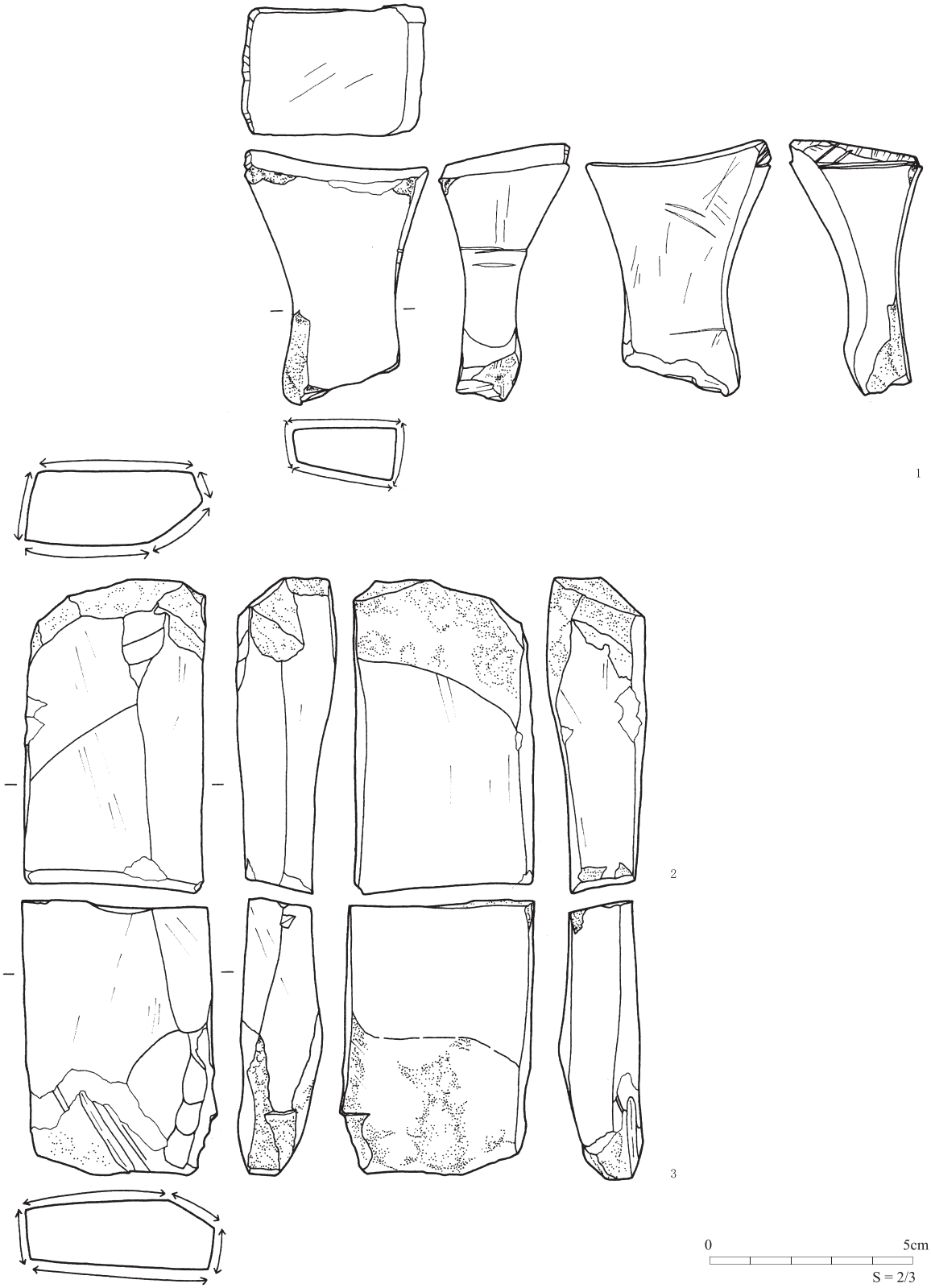
No.	区	遺構	層	種類	法量 (cm・g) 長	幅	厚	重	備考	登録 No	写真
1	N2 中	SI210	堆	鉄鏃	5.5	0.8	0.5	9.1		06126	40-1
					5.5	0.7	0.5				
2	N8 西	SD754	2 層	鉄鏃	6.0	0.8	0.4	4.9		06136	40-2
					3.1	0.6	0.5				
3	N8 西	SI755	カマド付近	鉄釘	5.8	0.8	0.7	6.5	頭部幅：11.0mm　脚部断面：方形	06134	40-3
4	N8 西	SI755	カマド付近	鉄釘	6.1	0.9	0.5	5.2	脚部断面：方形	06135	40-4
5	N6 西	SI424	確認面	鉄釘	8.1	0.6	0.4	7.9	頭部幅：12.5mm　脚部断面：方形	06133	40-5
6	N9 中	遺確		鉄釘	7.8	0.6	0.6	6.7	頭部幅：8.0mm　脚部断面：方形	06138	40-6
7	N9 中	遺確		鉄釘	5.4	0.6	0.5	5.7	頭部幅：13.0mm　脚部断面：方形	06139	40-7
8	N9 中	遺確		鉄釘	5.5	0.6	0.6	4.5	脚部断面：方形	06137	40-8
9	S1 南	遺確		鉄釘	3.7	0.7	0.6	2.2	脚部断面：方形	06140	40-9
10	N6 西	SI424	堆	刀子	2.5	1.2	0.2	2.3		06132	40-10
11	N2 南 T2	遺確		古銭	2.2	2.2	0.1	1.9	寛永通宝	06155	40-11

第 186 図　金属製品



No.	区	遺構	層	種類	材質	法量 (cm・g)				形状	砥面数	残存	備考	登録 No	写真
						長	幅	厚	重						
1	N4 南	遺確	—	転用砥	須恵器・甕	4.8	6.4	1.3	40.2	板状	1	完形	外面に平行タタキ目	06110	41-1
2	N6 西	SI424	掘方埋土	砥石	細粒凝灰岩	5.7	6.3	2.6	93.0	板状	6	ほぼ完形		06147	41-2
3	S1 南	遺確	—	砥石	細粒凝灰岩	6.0	3.3	1.4	39.8	板状	4	下端折損		06149	41-3
4	N2 南 T1	遺確	—	砥石	細粒凝灰岩	3.4	2.7	1.1	18.0	板状	4	下端折損		06152	41-4

第 187 図　転用砥、砥石 (1)



No.	区	遺構	層	種類	材質	法量 (cm・g)				形状	砥面数	残存	備考	登録 No	写真
						長	幅	厚	重						
1	S1 南	SI601	堆上層	砥石	細粒凝灰岩	6.3	4.6	3.1	56.0	直方体	5	下端折損		06151	41-5
2	N8 西	SI755	確認面	砥石	細粒凝灰岩	7.7	4.5	2.4	119.0	板状	6	下端折損	3 と同一個体	06150	41-6
3	N8 西	SI755	掘方埋土	砥石	細粒凝灰岩	6.8	4.7	2.0	90.0	板状	5	上端折損	2 と同一個体	06148	41-7

第 188 図　砥石 (2)

F．縄文・弥生土器（第 189 図）

表土、遺構確認面などから多数の破片が出土した。小破片が多く図示できるものは少ないが、主なものについて以下に記述する。また、竪穴住居跡、土坑、柱穴などから出土したものもあるが、いずれも混入の可能性が高く、遺構に伴うと考えられるものはない。

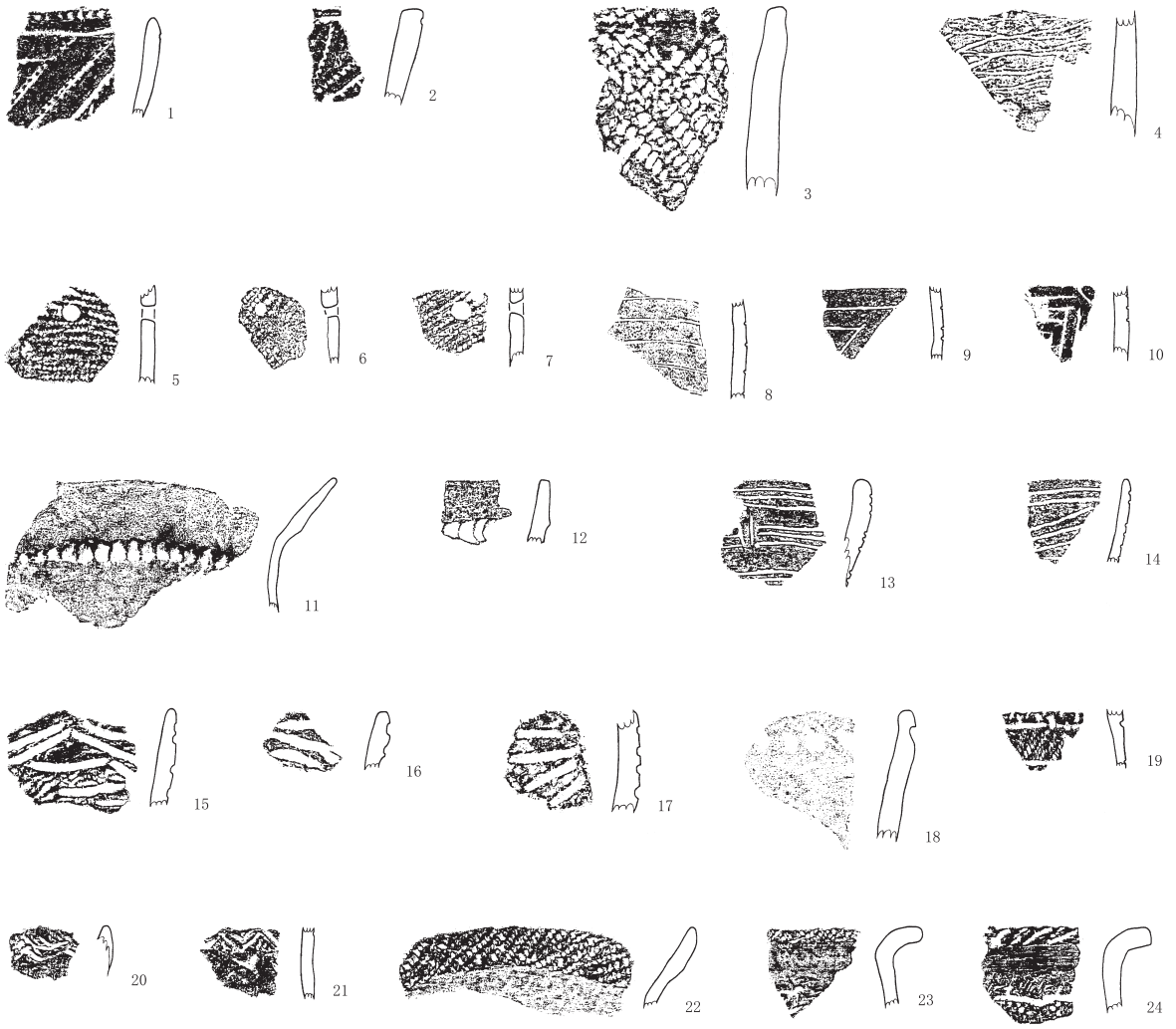
第 189 図 1 ～ 7 は縄文土器である。1 ・ 2 は貝殻腹縁文土器で、沈線文と貝殻腹縁文による幾何学文様が施文されている。3 は繊維土器で、0 段多条の羽状縄文が施文されている。4 は撚糸文が施文されている。5 ～ 7 は縄文が施文されており、焼成後に補修孔とみられる穿孔が行なわれている。

第 189 図 8 ～ 24 は弥生土器である。8 ～ 10 は円田式土器で、先端の鋭い工具による細い沈線で円弧状や菱形状の施文が行なわれている。11 ～ 19 は天王山式土器の範疇に含まれると考えられる。11・12 は頸部に連続する刺突文が施されている。13・14 は先端の鋭い工具による細い沈線の施文がみられる。15 ～ 17 は棒状工具によるやや太めの沈線の施文がみられる。18 は棒状工具の先端による列点状の刺突文が施されている。19 は交互刺突文が施されている。20・21 は波状ないしは鋸歯状の沈線文が施されている。22 は口縁部に縄文が施文されている。23･24 は口縁部が短く外反し、口唇部と体部に撚糸圧痕文が施文されている。

G．石器（第 190・191 図）

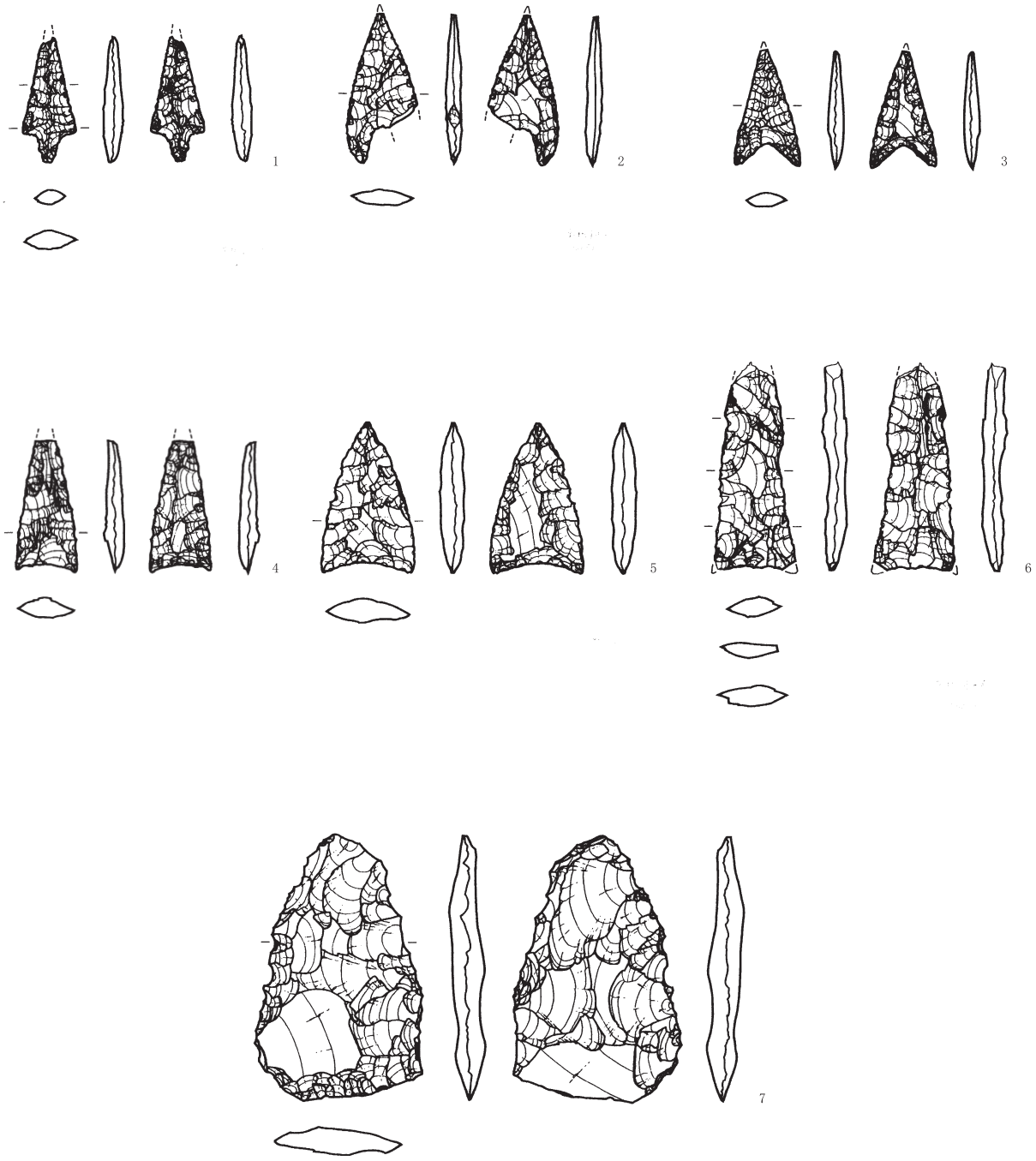
表土、遺構確認面などから 60 点が出土した。竪穴住居跡、土坑、柱穴などから出土したものもあるが､いずれも混入の可能性が高く､遺構に伴うと考えられるものはない｡器種別に見ると石鏃 13 点、箆形石器 1 点、二次加工ある剥片 4 点、石核 3 点、剥片・砕片 39 点である。石鏃は凹基無茎の三角形鏃が主体である。二次加工ある剥片はいずれも剥片の切断面に剥離または使用の痕跡が認められるものである。石核はいずれも打面転移を頻繁に行って小形の剥片を剥離するものである。剥片類に母岩を共有するものはなく、遺跡内での石器製作の痕跡は認められない。石材は珪質頁岩 43 点、玉髄 5 点、鉄石英 3 点、珪化凝灰岩・流紋岩・石英岩が各 2 点、碧玉・珪化木・黒耀石が各 1 点である。日本海側の珪質頁岩を主体に、玉髄など在地産の石材が利用されている。

第 190 図 1 ～ 6 は石鏃で、1 は玉髄製、2 は碧玉製、3・4・6 は珪質頁岩製、5 は流紋岩製である。1 は細身の二等辺三角形の鏃身にＶ字状の茎部を持つ。2 は側縁下部に丸みを持ち、基部にＵ字状の抉りを持つ。3 ～ 6 は二等辺三角形の鏃身に逆Ｖ字状ないし浅い皿状の抉りを持つ。1 ・ 4 は先端部に衝突剥離痕がみられる。第 190 図 7 は珪質頁岩製の箆形石器で、片面からの連続する剥離で刃部が形成されている。刃部裏面には素材剥片の腹面を残す。第 191 図 1 ・ 2 は二次加工ある剥片である。1 は珪化凝灰岩製で、両側縁に二次加工を加える過程で折損した後、折断面から腹面側に剥離が加えられている。折断面と腹面のなす縁辺には使用による磨滅が観察される。2 は珪質頁岩製で、剥片の折断面から背面側に剥離が加えられている。第 191 図 3 は流紋岩製の分割礫を素材とする石核で、打面転移を頻繁に行なって末端がヒンジ・フラクチャーとなるような寸詰まりの小形剥片を剥離している。打面はいずれも単一の剥離面からなり、調整剥離は認められない。



No.	区	遺構	層位	種類	部位	特徴	器厚 (mm)	登録	写真
1	N9 中	排土		縄文土器	口縁部	沈線文→貝殻腹縁文 口唇部に刻み	6.0	06174	42-1
2	N9 中	SI554	掘方埋土	縄文土器	口縁部	貝殻腹縁文 沈線文	9.0	06178	42-2
3	N8 西	表土		縄文土器	口縁部	0段多条羽状縄文 口唇部に撚糸圧痕文 胎土に繊維混入	11.0	06171	42-3
4	N4 中	SI701	堆	縄文土器	体部	撚糸文	9.0	06181	42-4
5	N2 西	SI223	2 層	縄文土器	体部	縄文 焼成後外面より穿孔 内面剥落	5.0	06184	42-5
6	N2 西	SI223	掘方埋土	縄文土器	体部	縄文 焼成後穿孔 内面剥落	6.0	06185	42-6
7	N2 西	SI223	2 層	縄文土器	体部	縄文 焼成後外面より穿孔 内面剥落	5.0	06186	42-7
8	S1 西	SI2	堆	弥生土器	体部	円弧状の沈線文 円田式	4.0	06165	42-8
9	N4 中	P705	堆	弥生土器	体部	菱形状の沈線文 円田式	4.0	06168	42-9
10	S1 南	遺確		弥生土器	体部	菱形状の沈線文 円田式	5.0	06188	42-10
11	N8 西	SI753	1 層	弥生土器	口縁部	頸部に連続刺突文 胎土に砂粒多量 天王山式	3.0	06176	42-11
12	S1 西	表土		弥生土器	口縁部	頸部に連続刺突文 天王山式	6.0	06167	42-12
13	N4 中	SI701	1 層	弥生土器	口縁部	沈線文 天王山式	8.0	06187	42-13
14	N4 中	遺確		弥生土器	口縁部	沈線文 天王山式	4.0	06166	42-14
15	S1 南	遺確		弥生土器	口縁部	縄文→沈線文 天王山式	6.0	06169	42-15
16	N8 西	遺確		弥生土器	体部	沈線文 天王山式	6.0	06179	42-16
17	N2 東	遺確		弥生土器	体部	沈線文 胎土に砂粒多量 天王山式	8.0	06180	42-17
18	N2 東	SI201b	1 層	弥生土器	口縁部	縄文→刺突文 天王山式	8.0	06170	42-18
19	N2 東	遺確		弥生土器	体部	縄文→沈線文→交互刺突文 天王山式	5.0	06172	42-19
20	N4 中	SI701	堆	弥生土器	口縁部	弧状の沈線文	4.0	06182	42-20
21	N2 南T2	遺確		弥生土器	体部	鋸歯状の沈線文	4.0	06183	42-21
22	N2 西	SI230	1 層	弥生土器	口縁部	口縁部に縄文	6.0	06177	42-22
23	N4 中	SI701	1 層	弥生土器	口縁部	口縁部外反 口唇部・体部に撚糸圧痕文	6.0	06173	42-23
24	S1 南	SB615	P1	弥生土器	口縁部	口縁部外反 口唇部・体部に撚糸圧痕文	6.0	06175	42-24

第 189 図　縄文・弥生土器

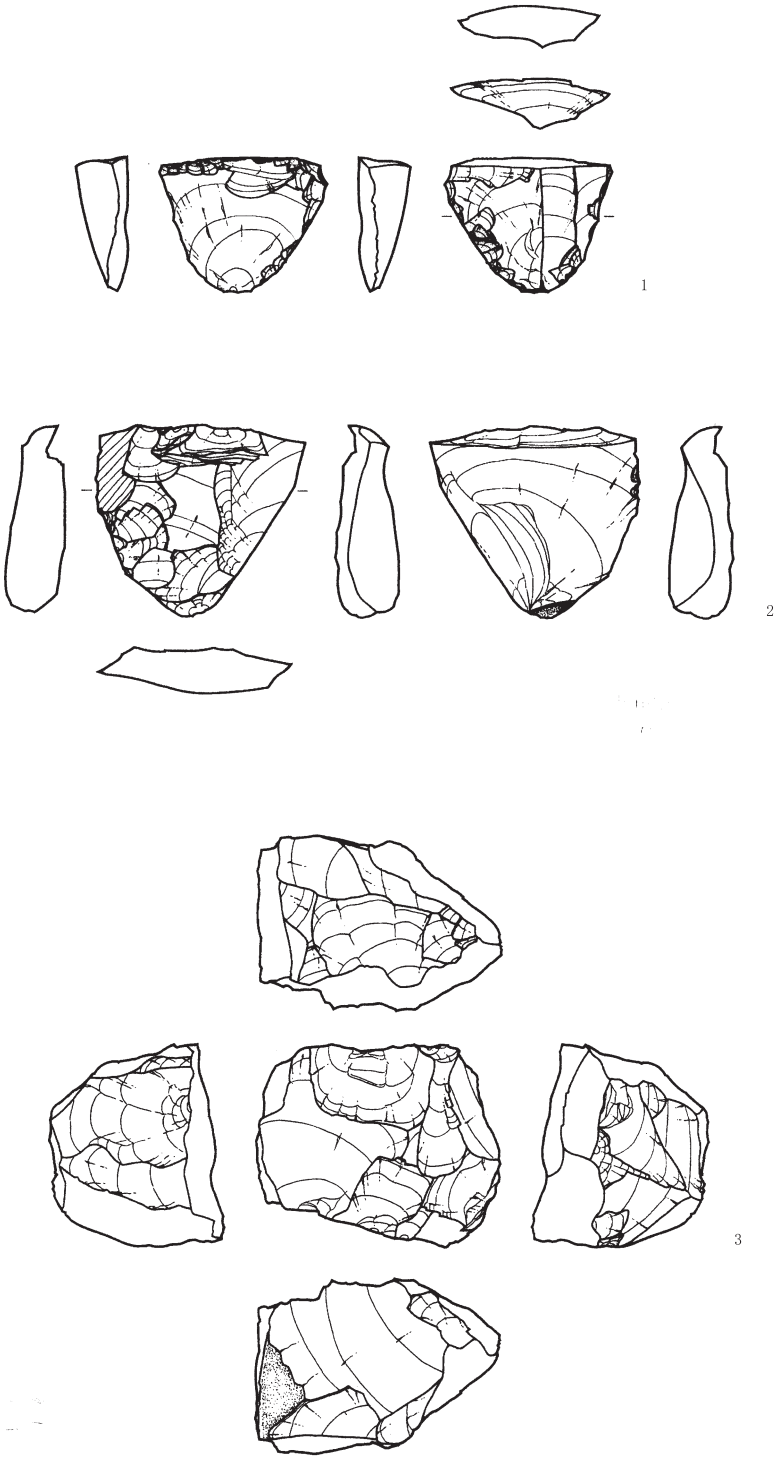


0 5cm

S = 2/3

No.	区	遺構	層	種類	石材	法量 (mm・g)				備考	登録No	写真
						長	幅	厚	重			
1	N9 中	SK538	堆	石鏃	玉髄	(28.9)	12.3	4.5	1.1	先端部に衝突剥離痕	06163	42-25
2	S1 南	遺確		石鏃	碧玉	(34.7)	(15.7)	3.6	1.6	先端部・基部一部欠損	06161	42-26
3	N2 中	SI209	掘方埋土	石鏃	珪質頁岩	(26.9)	14.9	3.5	0.9	先端部欠損	06158	42-27
4	N2 南 T1	遺確		石鏃	珪質頁岩	(30.6)	14.2	4.7	1.7	先端部に衝突剥離痕	06193	42-28
5	S1 南	遺確		石鏃	流紋岩	34.8	21.4	5.5	3.4		06162	42-29
6	S1 西	遺確		石鏃	珪質頁岩	(48.1)	(18.5)	5.4	4.1	先端部・基部ガジリ	06159	42-30
7	N2 南 T2	遺確		箆形石器	珪質頁岩	62.0	38.1	7.6	18.2	刃部裏面に素材腹面を残置	06156	42-31

第 190 図　石器 (1)



0 5cm

S = 2/3

No.	区	遺構	層	種類	石材	法量 (mm・g)				備考	登録No	写真
						長	幅	厚	重			
1	S1 南	SI609	2 層	二次加工ある剥片	珪化凝灰岩	27.2	32.6	10.2	6.7	折断面と素材腹面のなす縁辺に使用による磨滅	06157	42-32
2	N9 中	遺確		二次加工ある剥片	珪質頁岩	37.6	41.0	11.3	17.0		06160	—
3	S1 西	排土		石核	流紋岩	39.9	48.9	30.9	75.0	分割面 1、打面数 5、作業面数 4、打面調整なし	06164	42-33

第 191 図　石器 (2)

第５章　考　　察

第４章で記載した本遺跡の発掘調査結果を踏まえて、あらためて遺物と遺構について検討を加え、遺構の時期と変遷、遺跡の性格などについて考察する。なお、今回の発掘調査で確認した遺構と遺物は縄文時代から近世までのものがあるが、主体となるのは古墳時代～奈良・平安時代のものである。

１．遺物

遺物は土師器類が最も多く、須恵器が少量出土した。土器類以外では、瓦、土製品（ミニチュア土器）、石製品（砥石）、金属製品（鉄鏃・刀子）が出土した。これらの大半が古墳時代と奈良・平安時代のものである。また、このほかに縄文・弥生時代の土器・石器、中世・近世の陶磁器などが少量出土した。

以下、主体となる古墳時代～奈良・平安時代の土器類について検討する。はじめに土器類の分類を行い、これをもとに土器群を設定し各土器群の編年的位置づけなどについて検討する。

Ａ．分類

土師器（非ロクロ調整）、ロクロ土師器（ロクロ調整）、須恵器がある。これらは器形と細部調整によって以下のように細分することができる（第 192・193・194 図）。土師器には坏・大型坏・器台・高杯・鉢・壺・短頸壺・甑・甕・台付甕がある。ロクロ土師器と須恵器には坏・甕がある。

（ａ）土師器

【　坏　】口縁部や体部の形態、器面調整と黒色処理の有無などから分類できる。内外面に丁寧なヘラミガキ調整が施され、器面に赤彩が施されるか胎土が赤色を呈するもの（Ａ～Ｃ類）、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施すもの（Ｄ～Ｆ類）、内面にヨコナデ調整が施され黒色処理を施さないもの（Ｇ～Ｉ類）に大別できる。

Ａ：平底で体部と口縁部の境界に強い屈曲をもつ。体部が内湾し口縁部が内湾気味に外傾するもの。内外面に丁寧なヘラミガキ調整の後に赤彩を施すものが多い。

１：器高と口縁部径の割合が１：２を超えないもの。

２：器高と口縁部径の割合が１：２を超えるもの。

Ｂ：平底で体部が内湾気味に外傾し、口縁端部がやや内湾するもの。内外面に丁寧なヘラミガキ調整を施し、胎土が赤色を呈する。

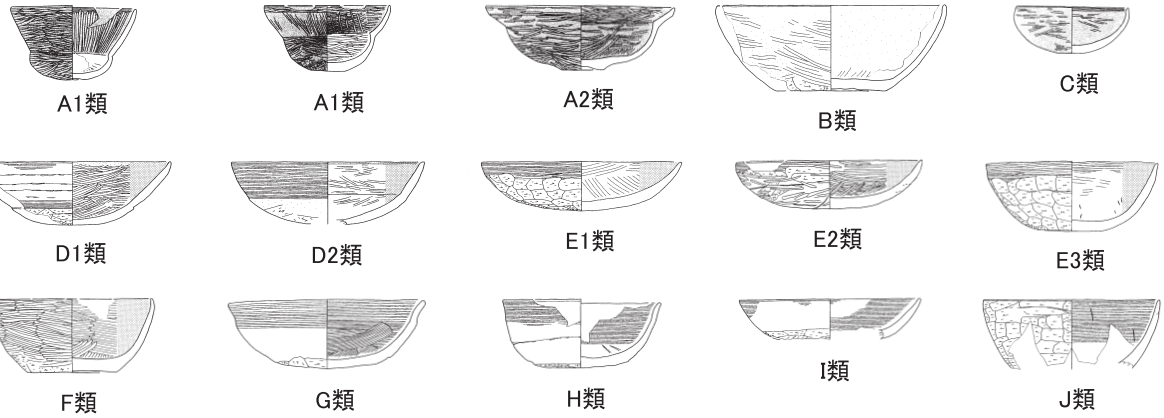
Ｃ：丸底で体部が内湾し口縁部がつまみ出されて直立するもの。内外面に丁寧なヘラミガキ調整の後に赤彩を施す。

Ｄ：丸底で体部外面に段をもち、口縁部が外傾あるいは外反するもの。外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整を施し、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。

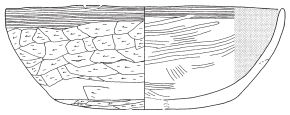
１：体部外面の下部に明瞭な段をもち、内面には屈曲をもたないもの。口縁部はやや内湾気味に外傾する。

《土師器》

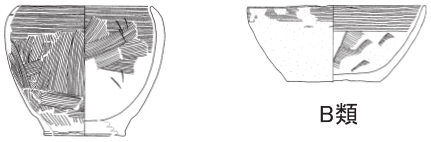
（坏）



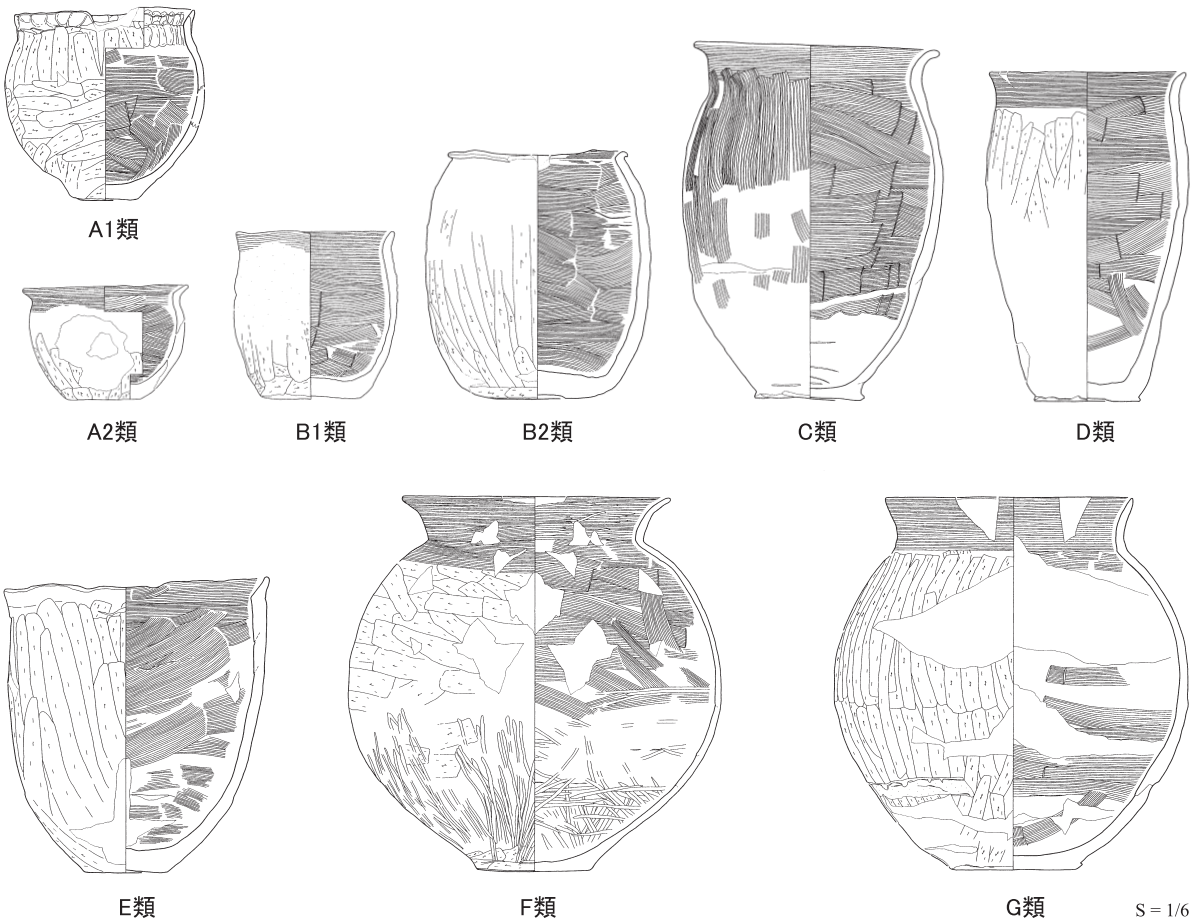
（大型坏）



（鉢）



（甕）



S = 1/6

第 192 図　土師器分類図

２：体部外面の中位に弱い段をもち、内面にも屈曲をもつもの。口縁部は外傾あるいは短く外反する。

Ｅ：丸底あるいは平底気味の丸底で、体部がゆるやかに内湾しながら口縁部にいたるもの。外面の口縁部にヨコナデ調整、体部から底部にかけてケズリ調整を施し、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。

１：丸底で半球形を呈するもの。

２：丸底で半球形を呈し、外面に粗いミガキ調整を施すもの。

３：底部が平底あるいは平底気味の丸底を呈するもの。

Ｆ：平底で体部が直線的に外傾し、口縁端部が内湾するもの。外面にケズリ調整の後にミガキ調整を施し、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。

Ｇ：丸底で体部外面の上位に屈曲をもち、口縁部が短く外反するもの。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部から底部にかけては外面にケズリ調整、内面にヘラナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む。

Ｈ：丸底気味の平底で、体部がわずかに内湾しながら立ち上がるもの。外面に輪積み痕を明瞭に残し、口縁部にヨコナデ調整、底面にケズリ調整を施す。内面にはヨコナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む。

Ｉ：丸底で体部がわずかに内湾しながら口縁部にいたるもの。口縁部から体部にかけては内外面ともヨコナデ調整を施し、底部外面にはケズリ調整を施す。胎土がきめ細かく、明るい赤褐色を呈する。

Ｊ：体部がわずかに内湾しながら立ち上がるもの。底部の形態は不明である。外面は底部から口縁部までケズリ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む。

【大型坏】坏のうち口径が 20cm を超えるもの。

Ａ：平底気味の丸底で、体部が緩やかに内湾しながら口縁部にいたるもの。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部から底部にかけては外面にケズリ調整、内面にヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。

【 器台 】いわゆる粗製器台がある。

Ａ：わずかに内湾しながら外傾し、外上方にひらく受部をもつもの。受部と脚部の間には貫通孔をもつ。器壁が厚手で、内面にヘラナデ調整、外面にハケメ調整を施す。

【 高杯 】坏部と脚部の形態により分類できる。

Ａ：わずかに内湾しながら外傾し、外上方にひらく坏部をもつもの。坏部のみのため全体の器形は不明である。

１：坏部と脚部の接合部付近に稜をもつもの。外面にハケメ調整、内面にヘラミガキ調整を施し、胎土が赤色を呈する。

２：坏部と脚部の接合部に稜をもたないもの。内外面に丁寧な縦位のヘラミガキ調整の後に赤彩を施す。

Ｂ：上半部が中実で、下半部が外反しながらひらく脚部をもつもの。外面に丁寧な縦位のヘラ

ミガキ調整を施し、赤彩を施すものがある。脚部のみのため全体の器形は不明である。

C：短く八の字状にひらく脚部をもつもので、内面にミガキ調整の後に黒色処理を、外面にケズリ調整を施す。脚部のみのため全体の器形は不明である。

【　鉢　】器面調整はヘラナデ調整が主体である。

A：口径と器高がほぼ同じで、体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がやや強く内湾するもの。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部は外面にハケメ調整の後にヘラナデ調整、内面にヘラナデ調整を施す。平底で底面に木葉痕をもつ。

B：平底で体部が直線的に外傾し、口縁部にヨコナデ調整を施すもの。底面に木葉痕をもつ。

【　壺　】短い単純口縁をもつ小型壺と、口縁部が外上方に長くひらく直口壺、広口でごく短い口縁をもつものとに分類できる。

A：平底で体部が球形を呈し、外傾する短い単純口縁をもつもの。外面にヘラミガキ調整を施し、赤彩を施すものがある。

B：体部が球形を呈し、外上方に長くひらく口縁部をもつ直口壺である。内外面に丁寧なヘラミガキ調整の後に赤彩を施す。

C：体部が球形を呈し、広口でごく短い口縁をもつもの。体部の外面に粗いヘラミガキ調整を施し、口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施す。

【　甑　】鉢形で多孔式のものと単孔式のもの、長胴形で無底式のものに分類できる。

A：鉢形で折り返し口縁をもつもの。口縁部外面にはユビオサエ痕がみられる。

1：多孔式のもの。器面調整はハケメ調整が主体である。

2：単孔式のもの。器面調整はヘラケズリ調整が主体である。

B：長胴形で無底式のもの。器面調整は縦位のヘラケズリ調整が主体である。

【　甕　】口径と器高の比率、器形によって鉢形・長胴形・球胴形に大別できる。器高が 20cm を超えない小型のものと、20cm を超える大型のものとがある。

A：小型で口径に対して器高が低い鉢形のもの。頸部がくびれて口縁部が外傾あるいは外反する。器面調整は外面にケズリ調整、内面にヘラナデ調整を施す。

1：胴部最大径に対して底径が小さく、体部がやや球胴を呈するもの。頸部から口縁部にかけてユビナデあるいはユビオサエ痕がみられる。

2：胴部下半が外傾し、上半が直立気味に立ち上がるもの。頸部がくびれて口縁部が外傾あるいは外反する。

B：小型で口径と胴部径がほぼ同じ円筒形を呈するもの。器壁が厚く器面調整は粗雑である。

1：頸部がわずかにくびれて口縁部が外傾するもの。

2：頸部が明瞭にくびれて口縁部が短く外反するもの。

C：長胴形で胴部最大径を中位にもつもの。頸部がくびれて口縁部が外反する。外面にハケメ調整を施し底面に木葉痕がみられる。

D：長胴形で胴部最大径を上位にもつもの。頸部がくびれて口縁部が外傾あるいは外反する。外面に縦位のケズリ調整を施し底面に木葉痕がみられるものがある。

E：長胴形で胴部最大径が頸部との境界となるもの。頸部が屈曲して口縁部が外傾する。外面

に縦位のケズリ調整を施し底面に木葉痕がみられるものがある。

Ｆ：球胴形を呈するもので、頸部がくの字状に屈曲して口縁部が外反する。器面調整はヘラケズリ調整・ヘラナデ調整・ハケメ調整の各種があり、粗いミガキ調整を施すものが多い。

Ｇ：球胴気味の長胴形を呈するもので、口縁部が直立し、中ほどから外反する。口縁部は内外面ヨコナデ調整で、体部外面に縦位のヘラケズリ調整を施した後に粗いミガキ調整を施す。胎土が赤褐色を呈する。

【台付甕】小型の甕に短脚が付くもの。

Ａ：八の字状に短くひらく脚部をもつもので、ユビオサエ痕がみられる。脚部のみのため全体の器形は不明である。

（ｂ）ロクロ土師器

【　坏　】平底で、体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がそのまま外傾あるいはわずかに外反する。内面はヘラミガキ調整の後に黒色処理を施す。底部の切り離し方法とその後の再調整の有無によって分類できる。

Ａ：回転糸切りの後に再調整を施さないもの。

Ｂ：回転糸切りの後に手持ちヘラケズリ調整を施すもの。

Ｃ：切り離し方法が不明で回転ヘラケズリ調整を施すもの。

Ｄ：静止糸切りの後に手持ちヘラケズリ調整を施すもの。

Ｅ：切り離し方法が不明で手持ちヘラケズリ調整を施すもの。

【　甕　】

Ａ：口径に対して器高が低い鉢形のもの。底面には網代痕がみられる。

Ｂ：長胴形で胴部最大径を中位にもつもの。底部の切り離し方法は不明で手持ちヘラケズリ調整を施す。

Ｃ：長胴形で胴部最大径が頸部との境界となるもの。底部の切り離し方法は不明で胴下部に縦位のヘラケズリ調整を施す。

Ｄ：上半部が不明で底部の切り離しが回転糸切りによるもの。胴下部から底部外周に手持ちヘラケズリ調整を施す。

（ｃ）須恵器

【　坏　】平底で、体部がゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁部がそのまま外傾あるいはわずかに外反する。底部の切り離し方法とその後の再調整の有無によって分類できる。

Ａ：ヘラ切りの後に再調整を施さないもの。

Ｂ：回転糸切りの後に手持ちヘラケズリを施すもの。

Ｃ：切り離し方法が不明で回転ヘラケズリ調整を施すもの。

【高台坏】付高台をもつもので、坏部と高台部の形態により分類できる。

Ａ：坏体部に稜をもち、内面にも屈曲をもつもので、口縁部が外反する。底部の切り離し方法が不明で、高台部は直線的に外傾する。

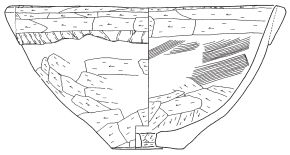
Ｂ：坏体部が直線的に外傾し、そのまま口縁部にいたるもの。底部の切り離し方法が不明で、高台部は八の字状に外反する。

《土師器》

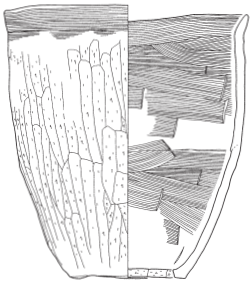
（甑）



A1類



A2類



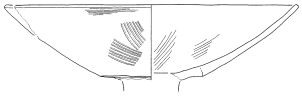
B類

（台付甕）

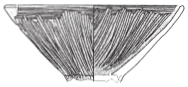


A類

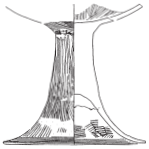
（高杯）



A1類



A2類



B類



C類

（器台）

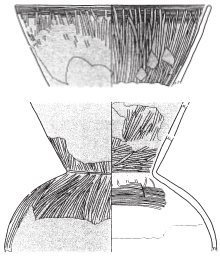


A類

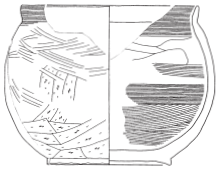
（壺）



A類



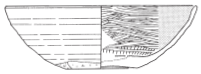
B類



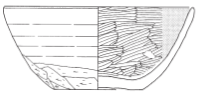
C類

《ロクロ土師器》

（杯）



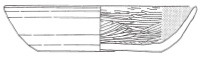
A類



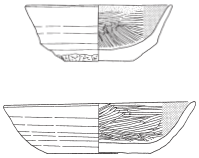
B類



C類

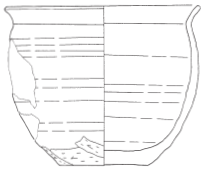


D類

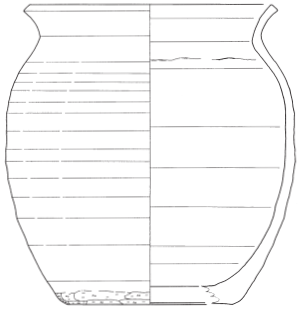


E類

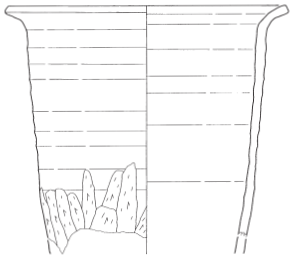
（甕）



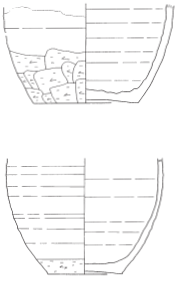
A類



B類



C類



D類

S = 1/6

第 193 図　土師器・ロクロ土師器分類図

【　蓋　】

Ａ：中央がやや突出するリング状のつまみをもち、天井部と体部がゆるやかに屈曲し、口縁端部を短く折り返すもの。

【　甕　】部分的な資料が多く全体の分かるものはない。口縁部の形態などから分類できる。

Ａ：頸部に櫛描波状文をもつもので、口縁部の形態により分類できる。

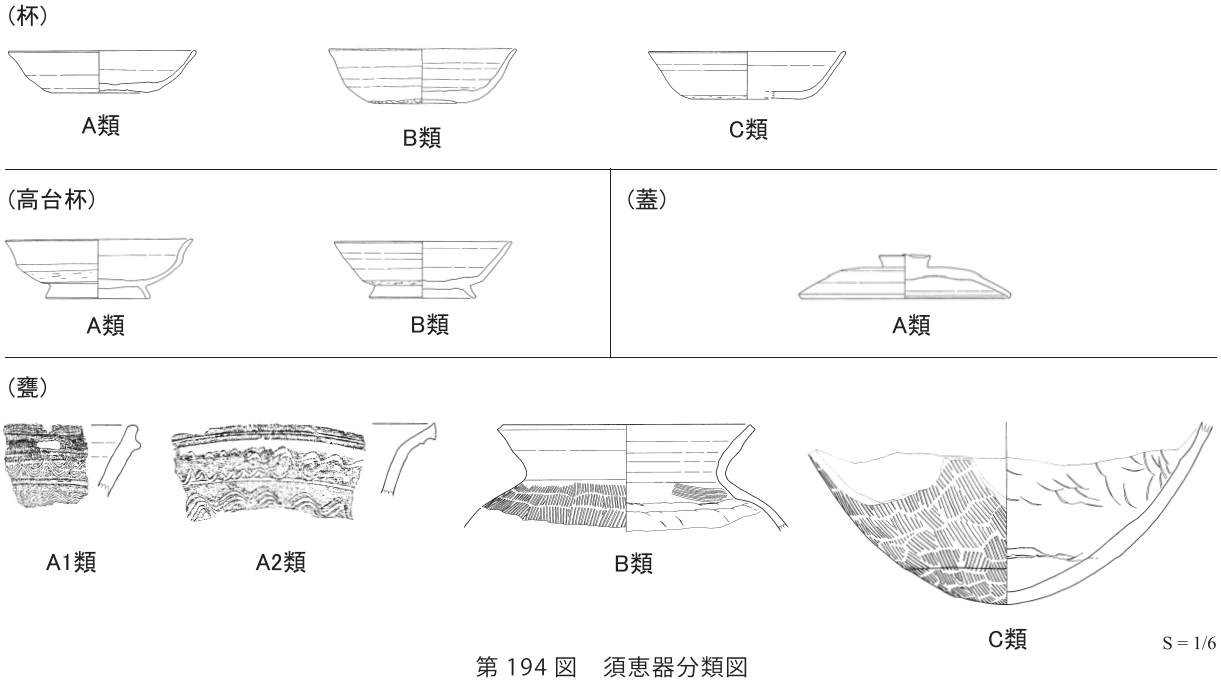
１：口縁部が直線的に外傾するもの。口縁部の外面に隆帯をもつ。

２：口縁部がゆるやかな屈曲をもって外反するもの。口唇部につまみ出しをもつ。

Ｂ：体部に平行タタキ目をもつもので、口縁部がゆるやかに外反するもの。

Ｃ：上半部が不明で体部に平行タタキ目をもつもの。

《須恵器》



S＝1/6

第 194 図　須恵器分類図

Ｂ．土器群の設定と編年的位置づけ

前項で分類した土器類を遺構ごとにまとめると第２表のようになる。全体的な器種構成などを検討することが困難な遺構が多いが、これらの中で、ある程度まとまりをもった遺構出土土器として挙げられるのは、SI1・SI91・SI210・SI231・SI424・SI601・SI621・SI701・SI753 竪穴住居跡出土土器である。以下、これらの遺構出土土器を中心にしながら器種構成と主に坏類の特徴から土器群を設定し、各土器群の編年的位置づけを検討する。なお、各竪穴住居跡出土土器のうち、堆積土などの出土遺物で他の床面・貯蔵穴などの出土遺物との様相が異なり、層位的に遺構外からの混入と考えられるものについては検討の対象から除外する。

第１群土器（第 195 図・SI222・SI225・SI230・**SI231**・**SI701**・SK628 出土土器）

器種構成には、土師器坏 A1・A2・B 類、甕 A1・F 類、甑 A1・A2 類、高杯 A1・A2・B 類、器台 A 類、壺 A・B 類が含まれる。第１群土器については、器種構成とその形態的特徴から古墳時代前期の塩釜式（氏家 1957）の範疇に含まれるものと考えられる。宮城県内における当該期の土器編年については、

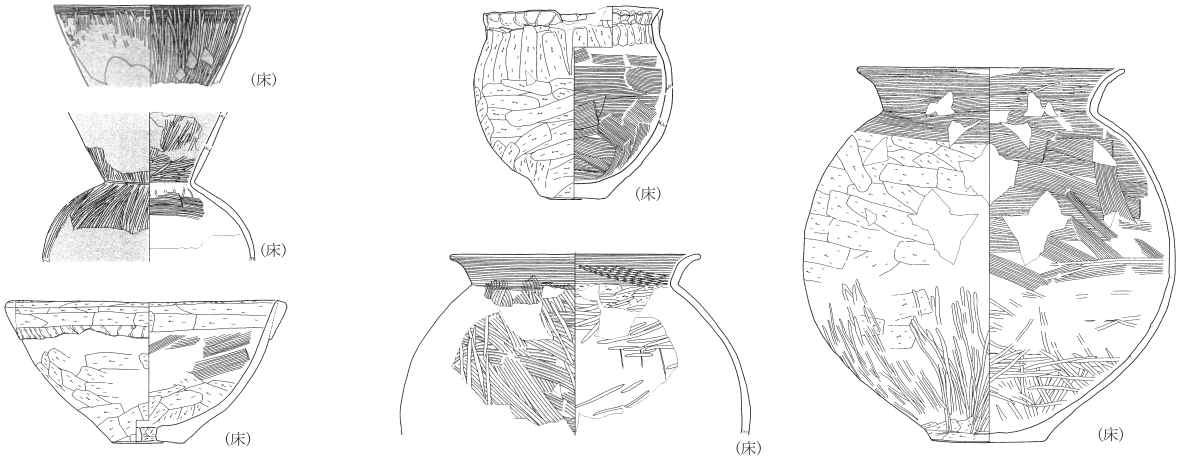
辻秀人により細分が図られている（辻 1994・1995）。塩釜式は辻編年Ⅱ～Ⅲ期に該当し、Ⅱ期では多様な「小型鉢」が存在し、小型器台との緩やかなセット関係をもつのに対して、Ⅲ期では小型器台の上に乗せることを前提に体部を小型で球形に近い形とする「小型丸底鉢」と小型器台とのセット関係が成立するとされている。第 1 群土器に主体的に組成する坏 A1 類は辻編年における器種分類で「鉢 G（小型丸底鉢）」とされたものに該当する。また、高杯 B 類は辻編年の「高杯 F」に該当し、脚上半部が中実、下半部が外反しながらひらくもので、辻編年Ⅲ期に広く認められている。器台 A 類は辻編年の「器台 F」に該当する粗製器台で、辻編年Ⅲ－３期に類例が知られている。以上のことから、第 1 群土器は古墳時代前期の塩釜式期のもので、辻編年Ⅲ期に位置づけられるものと考えられる。

第２群土器（第 195 図・SI753 出土土器）

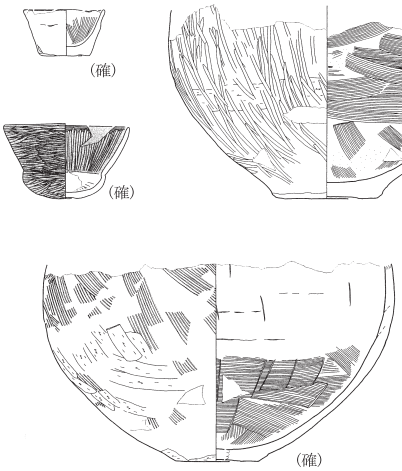
器種構成には、土師器坏 D1・D2・G 類、台付甕 A 類が含まれる。第 2 群土器については、土師器坏の形態的特徴から古墳時代後期の栗囲式（氏家 1957）の範疇に含まれるものと考えられる。宮城県内における古墳時代後期から奈良時代の土器編年については、村田晃一により細分が図られている（村田 2007）。坏 D1・D2 類は村田編年における器種分類で「有段丸底坏（坏 B・C）」とされたものに該当し、村田編年２～４段階で坏の主要器種として挙げられている。台付甕 A 類は村田編年の「甕 D」に該当し、２～４段階に認められている。有段丸底坏の体部外面の稜に着目すると１～３段階が顕著で、４段階以降は前者ほど目立たなくなるという。また、体部内面の屈曲は３段階まではほとんどのものに認められるが、４段階になると屈曲をもつものともたないものが共存し、５段階以降は屈曲が認められなくなると指摘されている。こうした特徴から、坏 D1・D2 類は村田編年 4 段階に該当する。ところで、坏 G 類は仙台市郡山遺跡Ⅰ期官衙に伴う SX2093 出土土器（仙台市教委 2004）の中に類例が認められ、いわゆる関東系土師器と考えられる。郡山遺跡 SX2093 出土土器は 7 世紀後半頃に位置づけられている。以上のことから、第 2 群土器は村田編年 4 段階に位置づけられ、年代的には 7 世紀中頃～後半と考えられる。

| 調査区 | 遺構 | 土師器 | | |

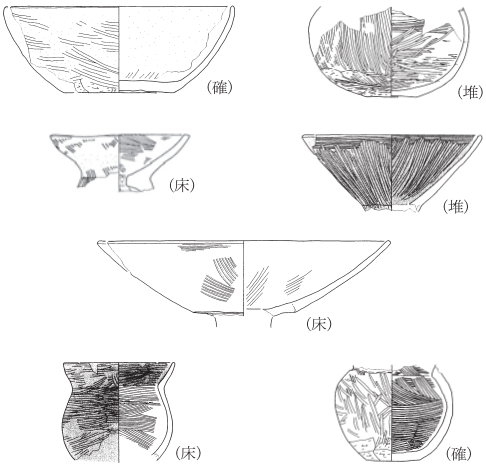
第1群土器



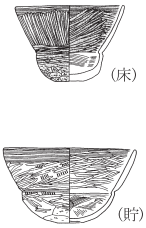
SI231



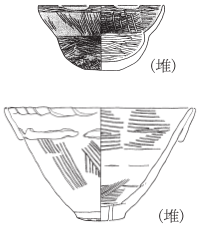
SI225



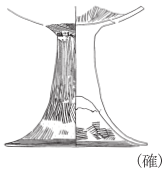
SI701



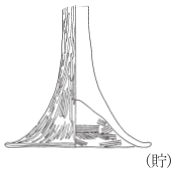
SI230



SK628



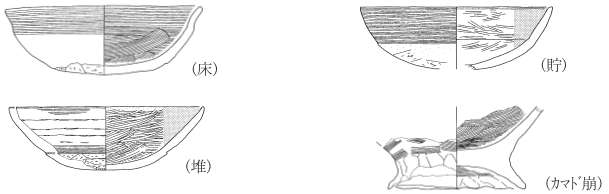
SI811



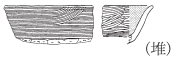
SI222

S = 1/6

第2群土器



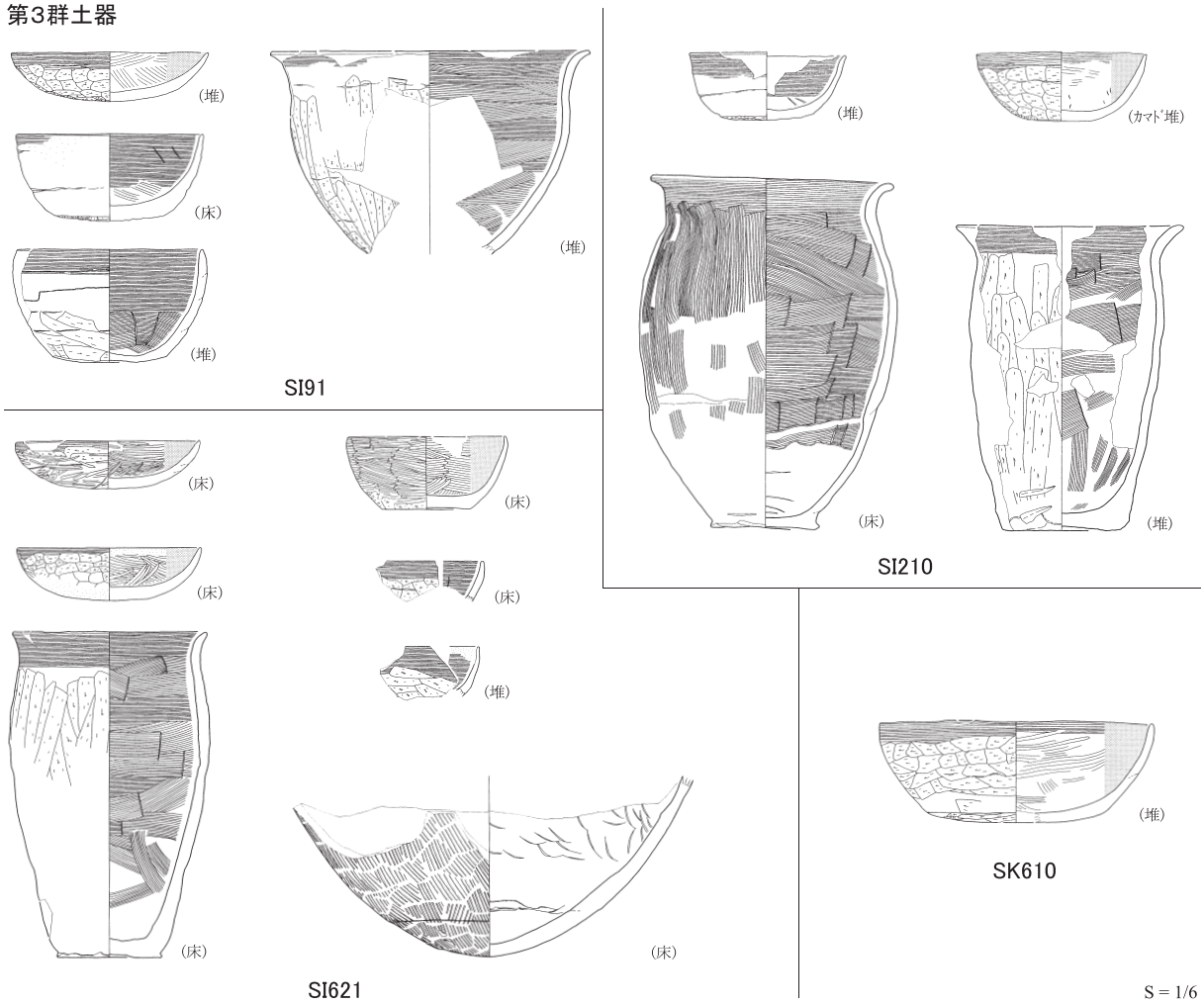
SI753



SI603

S = 1/6

第 195 図　第 1 群土器・第 2 群土器



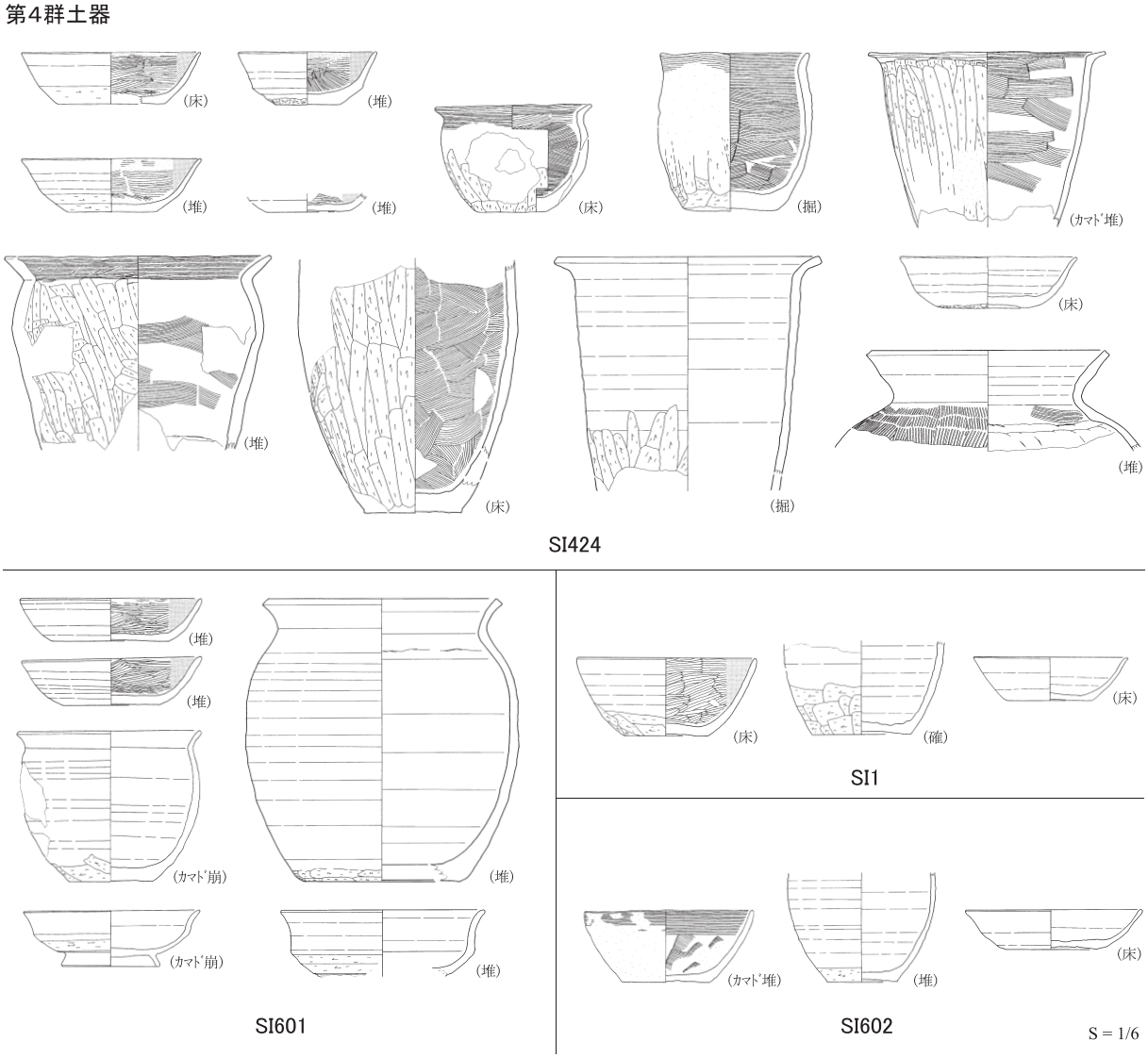
第 196 図　第 3 群土器

第 3 群土器（第 196 図・SI91・SI210・SI621・SI634 出土土器）

器種構成には、土師器坏 E1・E2・E3・F 類、鉢 B 類、甕 A2・C・D 類が含まれる。第 3 群土器については、器種構成とその形態的特徴から国分寺下層式（氏家 1967・桑原 1976）の範疇に含まれるものと考えられる。坏 E1・E2・E3 類は村田編年の「坏 G」に該当し、村田編年 7 段階の主要器種として挙げられている。また、坏 F 類は村田編年の「椀 B」に該当し、4 ～ 7 段階に認められている。ところで、坏 H 類は蔵王町堀の内遺跡 11 号住居跡出土土器（蔵王町教委 1997）の中に類例が認められ、いわゆる関東系土師器と考えられる。堀の内 11 号住居跡出土土器は村田編年 6 段階に該当すると考えられる。村田編年 6 段階は 8 世紀前半、7 段階は 8 世紀中頃～後半と位置づけられており、第 3 群土器については 8 世紀前半～中頃の年代を考えておきたい。

第 4 群土器（第 197 図・SI1・SI424・SI601・SI602・SI755・SK759）

器種構成には、ロクロ土師器坏 C・D・E 類、甕 A・B・C・D 類、土師器甕 A2・B1・D・E 類、鉢 C 類、須恵器坏 A・B 類、高台坏 A 類・甕 B 類が含まれる。第 4 群土器については、ロクロ調整の土師器坏・甕を中心に構成されることから、表杉ノ入式（氏家 1957・1967）の範疇に含まれる。表杉ノ入式の年代的位置づけは 8 世紀末から 12 世紀頃と幅広いが、第 4 群土器についてはロクロ土師器坏の底部切り離し後に再調整が施されることや、ロクロ・非ロクロ調整の甕を伴うことなどが特徴



第 197 図　第 4 群土器

として挙げられる。これと共通する特徴をもつ資料としては 8 世紀末～ 9 世紀初頭に位置づけられている利府町郷楽遺跡 105A 号住居跡（宮城県教委ほか 1990）、栗原市大境山遺跡 25 号住居跡（瀬峰町教委 1983）出土土器、9 世紀前半～中葉に位置づけられている利府町郷楽遺跡 10 号住居跡（宮城県教委ほか 1990）、大河原町台ノ山遺跡 8 号住居跡（宮城県教委 1980）出土土器などがある。このことから、第 4 群土器については 8 世紀末～ 9 世紀中葉頃の年代を考えておきたい。

2．遺構

今回の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡 52 軒、掘立柱建物跡 29 棟、柱列跡 10 条、井戸跡 1 基、落し穴状土坑 39 基、土坑 71 基、大溝跡 6 条、溝跡 44 条、円形周溝跡 1 基、性格不明遺構 1 基、柱穴多数である。以下、これらの各調査区における遺構確認状況について概括した後に遺物の検討結果などをもとに遺構期を設定し、本遺跡の遺構群の変遷について考察する。

Ａ．遺構の確認状況

本遺跡の立地する丘陵は盆地北側から中央部に向かって南東方向に延びており、丘陵の西斜面は比較的な急な傾斜をもち、東斜面および丘陵先端部の南斜面ではきわめてなだらかな傾斜をもって盆地底面と接している。発掘調査は、道路・水路・田面の整備によって遺構面が削平される範囲を主な対象として実施した。このため、遺跡範囲の全域に東西・南北方向の調査区が配置されたことになる。以下、各調査区における遺構確認状況について述べる。

Ｓ１区

丘陵の先端部で、遺跡範囲の南端部に位置する。東・南側はきわめてなだらかに傾斜して黒ボク土が厚く堆積するのに対し、西側はローム層が露出し比較的急な傾斜となる。遺構は竪穴住居跡 12 軒、掘立柱建物跡 9 棟、柱列跡 1 条、落し穴状土坑 14 基、土坑 23 基、溝跡 5 条、性格不明遺構 1 基のほか、柱穴多数が確認された。竪穴住居跡と掘立柱建物跡は東斜面の中腹から辺縁部にかけて分布する。斜面の上部から丘陵の尾根筋にかけてもこれらが分布していた可能性があるが、後世の削平を受けており確認できなかった。落し穴状土坑は調査区北西部の丘陵の尾根筋から西斜面と、調査区南東部の丘陵南端部の緩斜面にややまとまって確認された。

Ｓ２区

丘陵中腹部の尾根筋から北東斜面に位置する。全体に削平を受けており、黒ボク土は残存せず、ローム層が露出している。遺構は落し穴状土坑 1 基のみが確認された。

Ｓ３区

丘陵中腹部を東西に横断する調査区である。丘陵の尾根筋から東斜面上部にかけては S1・S2 区と同様に黒ボク土は残存せず、ローム層が露出している。東斜面の中腹には南東方向から小規模な沢状の地形が延びている。遺構は竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 5 棟、落し穴状土坑 3 基、土坑 14 基、溝跡 15 条のほか、柱穴多数が確認された。竪穴住居跡は調査区西部の丘陵東斜面上部と中腹部に各 1 軒、東部の丘陵東縁部に 1 軒が分布する。調査区中央部の東斜面には溝跡と掘立柱建物跡が分布している。落し穴状土坑は調査区西部の丘陵尾根筋から東斜面上部にまとまって分布している。

Ｎ１区

丘陵東斜面の中腹部を南北に縦断する調査区である。調査区南部は切土によりローム層が露出し、遺構は確認できなかった。調査区北側は黒ボク土が堆積する南向き斜面で、遺構は竪穴住居跡 5 軒、掘立柱建物跡 1 棟、落し穴状土坑 1 基、土坑 1 基、溝跡 1 条、少数の柱穴が確認された。

Ｎ２区

丘陵を東西に横断する調査区である。調査区西部は丘陵頂部の平坦面にあたり、上部は削平によりローム層が露出しているが、東へ行くにつれて漸移層と黒ボク土が堆積している。調査区東部は東向き斜面で、黒ボク土が厚く堆積する。N1 区と交差する付近の丘陵中腹部には南東方向から小規模な沢状の地形が延びている。遺構は竪穴住居跡 12 軒、掘立柱建物跡 6 棟、柱列跡 3 条、落し穴状土坑 8 基、土坑 14 基、大溝跡 3 条、溝跡 11 条のほか、柱穴多数が確認された。また、このほかに N2 南区の遺構確認調査では竪穴住居跡 10 軒、溝跡 13 条などが確認されている。

遺構の多くは調査区西部の丘陵頂部から東斜面の上部にまとまって分布し、竪穴住居跡 10 軒、掘立柱建物跡 6 軒などが密集する。落し穴状土坑も同様の範囲に分布がみられる。沢状の地形を挟ん

だ調査区東部の丘陵東縁部には竪穴住居跡２軒が分布する。この沢地に近い場所にSD206大溝跡が南北方向に延びている。後述のN5区に位置するSD354大溝跡と接続していると考えられ、延長90m以上となる。また、調査区西部から南側にかけての平坦面には北辺約40m、東辺約75m、西辺約70m、南辺約57mの不整方形のプランとなるSD228a・b大溝跡による区画が位置する。この大溝跡はほぼ同一のプランを踏襲する形で二時期の変遷が認められ、さらにこれに先行してSD228a・bの南辺部分を通って東西方向に70m以上延びるSD801大溝跡が位置している。N2南区で実施したSD228a・bによる区画内部の遺構確認調査では、時期不明の竪穴住居跡などが確認された。

Ｎ３区

丘陵中腹の西斜面に位置する。全体に削平を受けており、遺構は確認されなかった。

Ｎ４区

丘陵の東縁部に位置する。南東方向と東方向から入る二つの小規模な沢によって開析され、小規模な舌状丘陵を形成している。丘陵の上部は若干の削平を受けて漸移層が露出しているが、斜面下部には黒ボク土およびその二次堆積層がみられる。遺構は丘陵先端部の東斜面に竪穴住居跡１軒、柱穴列１条、落し穴状土坑２基のほか、柱穴多数が確認された。

Ｎ５区

丘陵東斜面を南北に縦断する調査区である。N4区に東から入る小規模な沢が本調査区南部で屈曲して北西方向に延びる。このため本調査区の大半は埋没した沢地上に位置し、黒ボク土およびその二次堆積層がみられる。遺構は大溝跡１条、溝跡１条、落し穴状土坑２基、小数の柱穴が確認された。

Ｎ６区

丘陵の頂部を東西に横断する調査区である。西部は丘陵頂部の平坦面にあたり、漸移層およびローム層が露出している。東部はN5区に入る小規模な沢に向かって緩やかに傾斜し、黒ボク土の堆積がみられる。遺構は東斜面の上部から中腹部で竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡６棟、柱列跡３条、井戸跡１基、落し穴状土坑２基、溝跡２条、円形周溝跡１基のほか、柱穴多数が確認された。

Ｎ７区

丘陵の東斜面に位置する。全体に削平を受けており、遺構は確認されなかった。

Ｎ８区

丘陵の付け根部分を東西に横断する調査区である。ほぼ平坦であるが、削平を受けており漸移層およびローム層が露出している。調査区東部は東向きの緩斜面となる。遺構は調査区西部の平坦面を中心に竪穴住居跡３軒、落し穴状土坑４基、土坑１基、大溝跡１条、少数の柱穴が確認された。

Ｎ９区

丘陵の付け根部分から西縁部に位置する。南西向きの傾斜のある斜面となっており、斜面上部ではローム層が露出している。遺構は斜面中腹部を中心に竪穴住居跡４軒、掘立柱建物跡２棟、柱列跡１条、落し穴状土坑２基、土坑４基、溝跡６条のほか、柱穴多数が確認された。

Ｎ10区

丘陵の東斜面上部を南北に縦断する調査区である。調査区北部はN6区から延びる平坦面で、ローム層が露出している。調査区南部はN2区から続く小規模な沢の先端付近にあたり、黒ボク土がみられる。遺構は北部の平坦面を中心に竪穴住居跡２軒、柱列跡１条、土坑１基、少数の柱穴が確認された。

B．遺構期の設定

前述のように、今回の調査で出土した遺物のうち主体を占める古墳時代と奈良・平安時代の土器類については、古墳時代前期の塩釜式で辻編年Ⅲ期の第1群土器、栗囲式で村田編年4期の第2群土器（7世紀中頃～後半）、国分寺下層式で村田編年7段階の第3群土器（8世紀中頃）、表杉ノ入式の第4群土器（8世紀末～9世紀中葉）に分けられた。これをもとにして、以下のように本遺跡における遺構期を設定する。なお、縄文時代～弥生時代の土器・石器類が表土や基本層などから出土しているが、これらを伴う遺構は確認されなかった。

A期（縄文時代）

S1区のSK29・SK30・SK33・SK38・SK612・SK613・SK617・SK620・SK622・SK627・SK637・SK640・SK644、S2区のSK151、S3区のSK92・SK93・SK94、N1区のSK308、N2区のSK218・SK219・SK216・SK217・SK229・SK238・SK250・SK258、N5区のSK351・SK352、N6区のSK419・SK401・SK409、N8区のSK756・SK757・SK760・SK761、N9区のSK563・SK566落し穴状土坑によって構成される。いずれの遺構にも遺物は伴っていないため、その時期は明確にしえないが、黒ボク土の上面から掘り込まれているものがあること、遺構の性格から考えて集落と同時期に構築されることはないとみられることなどから、後期旧石器時代以降でB期の集落が形成される以前、縄文時代～弥生時代のある時期に機能したものと考えられる。さらに、後述するように、落し穴状土坑の形態的特徴と配置状況などからみて、これらの落し穴状土坑群は縄文時代中期～後期に位置付けられる可能性が考えられる。

B期（古墳時代前期塩釜式期・第1群土器）

N2区のSI212・SI222・SI225・SI230・SI231、N4区のSI701竪穴住居跡などによって構成される。このうちN2区の竪穴住居跡は丘陵平坦面にまとまって分布し、住居の方位をそろえている。この付近で確認されたSI209・SI223についても、その位置や方位からこれらと同一の住居群を形成していたとみられることや、堆積土中より出土した土師器破片が第1群土器に該当することから当該期に属すると考えられる。

C期（7世紀中頃～後半・第2群土器）

S1区のSI603、N2区のSI259、N8区のSI753竪穴住居跡などによって構成される。

D期（8世紀前半～中頃・第3群土器）

S1区のSI621・SI634、S3区のSI91、N2区のSI201a・bとSI210、N9区のSI554a・b・c竪穴住居跡などによって構成される。また、N2区のSB235a・b掘立柱建物跡とSB251a・b掘立柱建物跡、SD228a・b大溝跡はそれぞれ2時期の変遷をもち、方角もそろえていることから相互に意識した立地で同時期に機能していた可能性がある。SD228a・b掘立柱建物跡出土土器は破片資料であるが、第3群土器に相当する。また、柱穴掘方埋土からも破片資料ではあるが第3群土器に相当するものが出土している。このことから、これらの遺構はD期に位置づけられる可能性が考えられる。さらに、N2区のSD206大溝跡およびこれに接続するとみられるN5区のSD354大溝跡についても、規模・形状と堆積土中の遺物の特徴などからD期に位置付けられる可能性がある。また、遺物の特徴が不明なもののSD228a・b大溝跡に先行するSD801大溝跡についても、SD228a・bの南辺と一致していることやその規模・形状などから、ごく近接した時期のものとしてD期に位置付けて大過ない

ものとみられる。なお、SD801 大溝跡が SD206・SD354 大溝跡とコーナー部を形成して接続していた可能性も考えられるが、接続部と推定される付近は削平を受けており不明である。

E 期（8 世紀末～ 9 世紀中葉・第 4 群土器）

S1 区の SI1・SI601・SI602・SI609・SI645、N6 区の SI424、N8 区の SI755 竪穴住居跡などによって構成される。SI1 竪穴住居跡と重複関係にあり、これに先行する SI9 竪穴住居跡は、カマドが東壁に付設され、焚口部を凝灰岩切石で構築することから SI1 竪穴住居跡に近接した時期のものと考えられる。また、SI9 竪穴住居跡で出土した B2 類の土師器甕は白石市植田前遺跡 2 号溝跡（宮城県教委 1981）でロクロ土師器坏と共伴していることから、E 期に位置づけられると考えられる。このほか、SI2 竪穴住居跡についても SI1・9 竪穴住居跡の付近に位置し、同様に東壁にカマドが付設されていることや堆積土中より内面に黒色処理を施すロクロ土師器坏の破片が出土していることから E 期に位置づけられると考えられる。

その他の遺構について

以上のほか、土器類の破片資料あるいは竪穴住居の構造などからみて、N2 区の SI201a 竪穴住居跡は B 期または C 期、S1 区の SI633、N2 区の SI261、N9 区の SI553 竪穴住居跡は B 期またはそれ以降、S 1 区の SI633 竪穴住居跡は D 期またはそれ以降と考えられるが、明確な帰属時期については不明である。

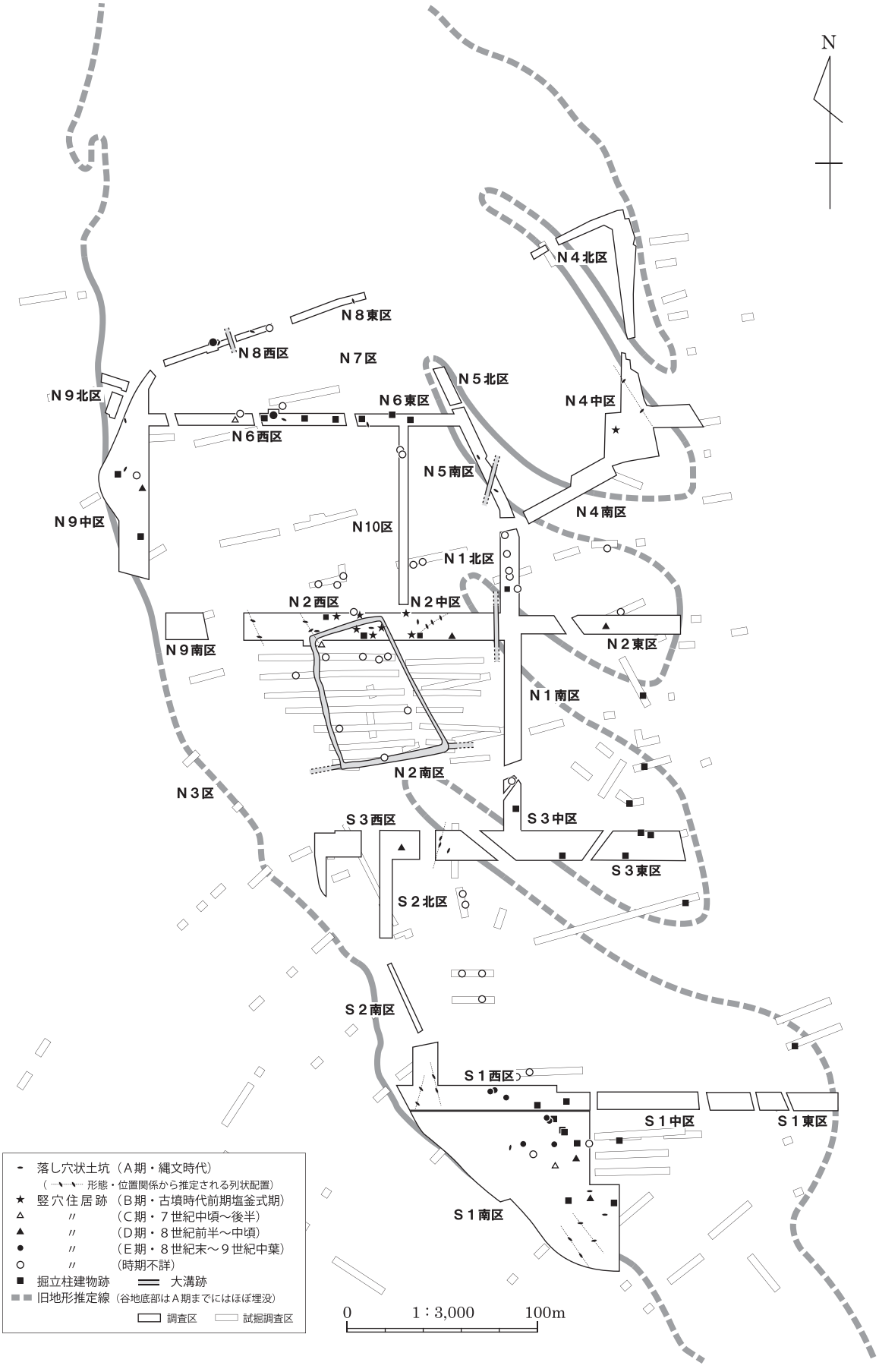
また、上述した以外の掘立柱建物跡については出土遺物に乏しく、明らかに古代に遡ると考えられるものは確認できなかった。S1 区の SB615 掘立柱建物跡は柱穴掘方埋土より近世陶磁器の破片が出土しており、近世以降のものと考えられる。また、これと隣接する SB650・SB657・SB655 掘立柱建物跡については、SB615 掘立柱建物跡と方角をそろえていることから相互に意識した立地で同時期に機能していた可能性が考えられる。同様に、S3 区 SB66・SB68 掘立柱建物跡と SD55 溝跡についても相互に意識した立地で同時期に機能していた可能性が考えられる。このほかの掘立柱建物跡についても、建物の構造および柱穴の形状と規模などからみて、多くは中～近世に帰属するものと考えられる。本遺跡の東側に位置する蔵王町車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡（蔵王町教委 2006）では掘立柱建物跡と区画溝などからなる近世の屋敷跡が確認されており、本遺跡も同時期の屋敷地として利用されていた可能性が考えられる。

C．遺構の分布と特徴

ここでは、遺物の検討結果などから設定した A 期～ E 期までの各遺構期の遺構の立地と分布の状況（第 198 図）、および遺構の特徴について述べる。

A 期（縄文時代）

遺構は落し穴状土坑に限られる。丘陵の尾根筋から東側・南側の緩斜面と湿地際にかけて広範囲に分布する。調査区の制約から詳細な状況は明らかでないが、S1・S3・N2・N4 区などでは数基がまとまって列状に配置されている状況が確認できた。落し穴状土坑には平面形が楕円形を呈し断面形が U 字状を呈するものと、平面形が細長い溝状を呈し横断面形が V 字状を呈するものの二形態があり、前者は短軸方向に、後者は長軸あるいは斜位方向に一定間隔で列状に配置される傾向が認められる。また、前者については底面にピットをもつものもある。



第 198 図　主な遺構の分布と変遷

落し穴状土坑については今村啓爾らによる研究があり、落し穴猟に関わる遺構とされている（今村1973・佐藤 1989）。本遺跡で確認された二形態のうち平面形が楕円形を呈するものは今村分類Ｂ型、溝状を呈するものは今村分類Ｅ型に該当し、Ｂ型はイノシシ、Ｅ型はシカが主な狩猟対象であったとされている。また、列状配置の落し穴は民族例などから穴と穴の間に簡易な柵を設置し、柵を回避しようとする動物が落ち込むように工夫されたもので、大規模なものは追い込み猟とも結びついていた可能性があるとされている。このような列状配置の落し穴状土坑は東北地方では縄文時代中～後期に多く確認されており、本遺跡の落し穴状土坑についても同時期に属する可能性が考えられる。

Ｂ期（古墳時代前期塩釜式期・第１群土器）

遺構はN2区に竪穴住居跡６軒、N4区に竪穴住居跡１軒が分布する。N2区の竪穴住居跡は似通った住居方位のものが近接して配置されている。また、平面プランのみの確認のため帰属時期が不明なN1区の竪穴住居跡の中にもN2・N4区の竪穴住居跡と似通った住居方位でカマドをもたない竪穴住居跡がみられる。こうしたことから、Ｂ期にはN2区からN4区にかけて、丘陵の尾根筋にあたる平坦面を中心に一部東側緩斜面にまでおよぶ比較的まとまった集落が形成されていたと考えられる。

Ｃ期（7世紀中頃～後半・第２群土器）

遺構はS1・N2・N8区にそれぞれ竪穴住居跡１軒が分布する。調査範囲の制約も考えられるが、Ｃ期の集落は丘陵の広範囲に竪穴住居が散漫に点在する状況であったと考えられる。

竪穴住居跡のカマドの位置をみると、S1・N2区の２軒は北壁に、N8区の１軒は東壁に付設されている。N8区SI753竪穴住居跡はカマド側壁を凝灰岩切石によって構築し、焚口上部にも凝灰岩切石を据え付けていたと考えられる。

Ｄ期（8世紀前半～中頃・第３群土器）

遺構はS1区に竪穴住居跡２軒、S3区に竪穴住居跡１軒、N2区に竪穴住居跡２軒、N9区に３回の建て替えがみられる竪穴住居跡１棟が分布する。Ｄ期の集落は、丘陵の中腹から先端部にかけて竪穴住居が散在する状況であったと考えられる。また、丘陵中腹の平坦面を中心に立地するN2区の掘立柱建物跡２棟と大溝跡による区画もＤ期に属するものとみられるが、その性格については現段階では不明であると言わざるを得ない。また、N2南区の遺構確認調査では大溝跡による区画の内外で複数の竪穴住居跡が確認されたが、これらの時期や区画に伴うものかどうかについても不明である。

竪穴住居跡のカマドの位置をみると、S1区の２軒とN2区の２軒は北壁、S3区の１軒は北→西壁へ付け替え、N9区の１軒は北→西→北壁へ付け替えが行なわれている。S1区SI621竪穴住居跡はカマド側壁の構築材として河原石を用い、焚口上部に凝灰岩切石を据え付けていたと考えられる。S3区SI91竪穴住居跡はカマド煙道が先端部に行くにつれて深くなる構造で、一般的な構造と異なっている。N9区SI554a・ｂ竪穴住居跡は住居壁際に壁柱がめぐる構造である。SI554aは２基の床下土坑をもち、人為的に埋め戻されている。また、SI554cの北東コーナ部で確認された貯蔵穴は、底面および側面に５～8cmの厚さで白色粘土を貼り付けて構築している。

Ｅ期（8世紀末～９世紀中葉・第４群土器）

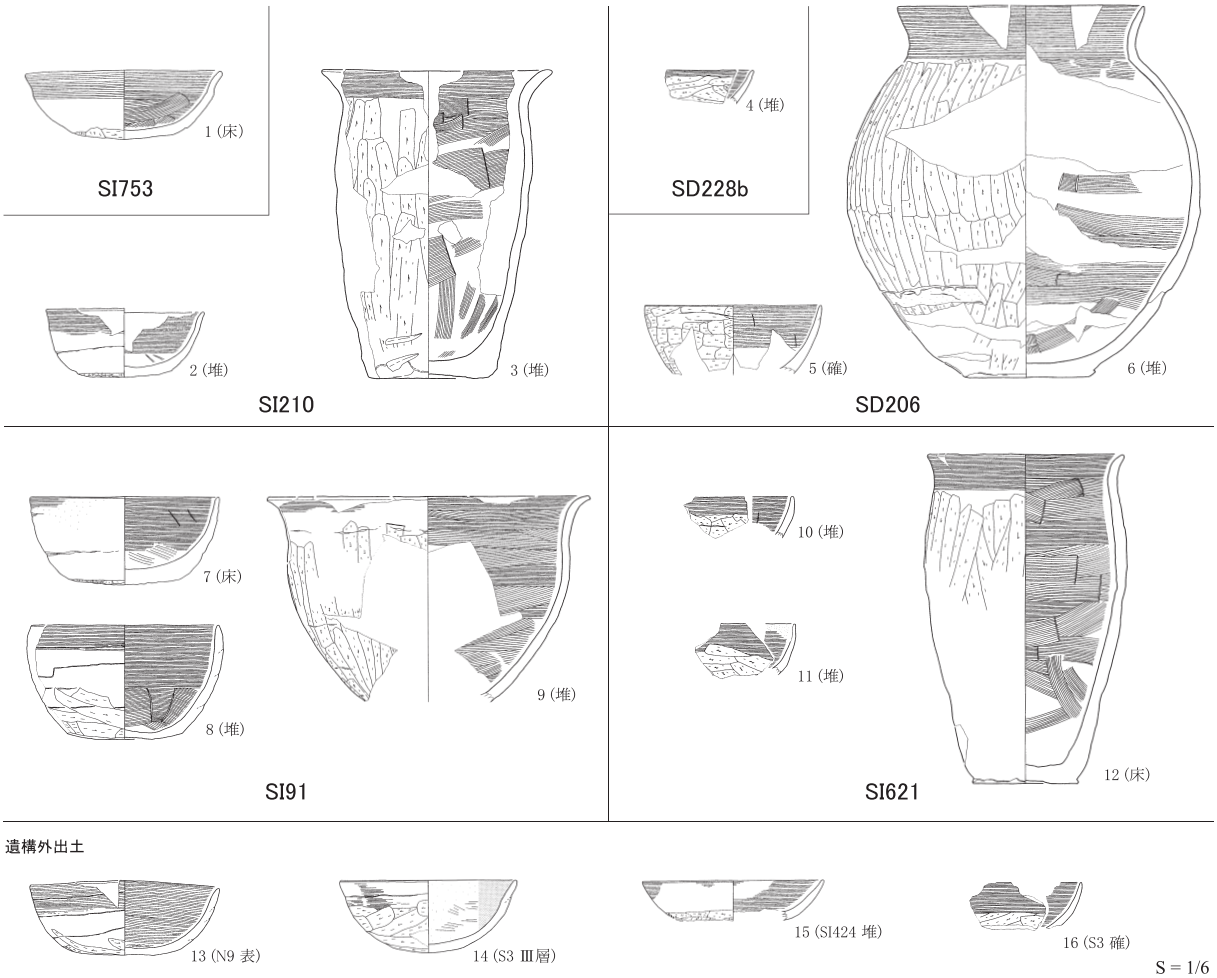
遺構はS1区に竪穴住居跡７軒、N6・N8区に竪穴住居跡各１軒が分布する。S1区にまとまって分布する。Ｅ期の集落は丘陵南端部に竪穴住居跡がまとまって分布し、丘陵の付け根部分に少数が散在する状況であったと考えられる。

竪穴住居跡のカマドの位置をみると、S1 区の 4 軒が東壁で、北壁と南壁が各 1 軒である。N6 区のものは北壁、N8 区のものは南壁である。S1 区 SI1・SI9 竪穴住居跡はカマド側壁を凝灰岩切石で構築している。SI601 竪穴住居跡は 2 基の床下土坑をもち、住居掘方埋土に似た埋土で人為的に埋め戻されている。N6 区 SI424 竪穴住居跡はカマド煙道部を掘削した後にカマド側壁と一連の構築土を貼り付けることによって煙道側壁から天井部を構築している。また、4 基の床下土坑をもち、住居掘方埋土と一連の埋土で人為的に埋め戻されている。

D．関東系土師器・関東型カマドをもつ竪穴住居跡

C 期・D 期段階の土器には、他の土師器類とは胎土や焼成、器面調整などが異なるいわゆる関東系土師器とみられるものが含まれている（第 199 図）。内面調整がヨコナデ主体で黒色処理を施さない坏と、長胴あるいは球胴状で口縁部にヨコナデ、胴部にケズリ調整を施す甕がある。

1 は丸底で体部の上位に屈曲をもち、口縁部が短く外反する坏である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施し、体部から底部にかけては外面にケズリ調整、内面にヘラナデ調整を施す。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含んでいる。これと共通する特徴を持つものとしては、仙台市郡山遺跡 I 期官衙に伴う SX2093 出土土器（仙台市教委 2004）の中に類例がみられる。SX2093 は 7 世紀後半に位置づけられている。



第 199 図　関東系土師器

２・７・８・13 は丸底気味の平底で、体部がわずかに内湾しながら立ち上がる土師器坏である。内外面ともにヨコナデ調整を施し、外底面にはケズリ調整を施す。５は外面の口縁部付近までケズリ調整が施されるもので、内面にヨコナデ調整を施す。いずれも外面には輪積み痕が明瞭である。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多量に含んでいる。これらと共通する特徴を持つものとしては、蔵王町堀の内遺跡 11 号住居跡（蔵王町教委 1997）出土土器の中に類例がみられる。堀の内 11 号住居跡は８世紀前半頃と位置づけられている。また、14 は丸底で体部の上位に屈曲をもち、口縁部が短く外傾する土師器坏で、内面にミガキ調整の後に黒色処理を施すものであるが、胎土と外面の調整がこれらと共通しているものである。

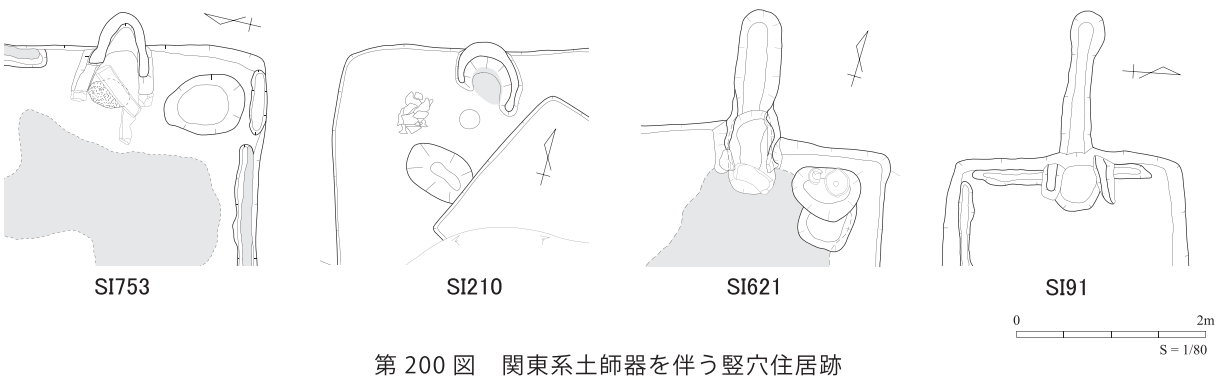
４・10・11・15・16 は体部がわずかに内湾する土師器坏である。外面の上部に稜をもつものともたないものとがある。内面はヨコナデ調整で、外面は口縁部にヨコナデ調整、体部にケズリ調整が施されている。胎土がきめ細かく、明るい赤褐色を呈する。これらと共通する特徴を持つものとしては仙台市郡山遺跡（仙台市教委 2005）、東松島市赤井遺跡（矢本町教委 2001）などに類例がみられ、７世紀後半～８世紀前半頃に位置づけられている。

３・６・９・12 はこれまで述べた土師器坏に共伴するもので、口縁部が外反し、頸部に段をもたない土師器甕である。口縁部の内外面にヨコナデ調整、体部外面に縦位のケズリ調整が施されている。胎土が赤褐色を呈し、粗い砂粒を多く含む点が上述の土師器坏と共通している。３・12 は長胴形で、胴部がほぼ直立する。６は球胴に近い長胴形で、口縁部が直立し、中ほどから外反する。胴部外面にはケズリ調整の後に幅広の粗いミガキ状の調整が施されている。９は底部に向かってすぼまる鉢形を呈し、頸部が直立して口縁部が外反する。これらと共通する特徴を持つものとしては、栗原市御駒堂遺跡 1・6・29 号住居跡（宮城県教委 1982）出土土器、東松島市赤井遺跡（矢本町教委 2001）出土土器の中に類例がみられ、８世紀前葉もしくは前半頃と位置づけられている。

以上のことから、本遺跡では SI91・SI210・SI621・SI753 竪穴住居跡、SD206・SD228b 大溝跡で関東系土師器が出土しており、年代的には７世紀後半に位置づけられるものと、８世紀前葉あるいは前半頃に位置づけられるものとがあると考えられる。

次に、これらが出土した竪穴住居跡の主にカマドの構築方法の特徴について述べる。

SI753 竪穴住居跡では、住居の壁を掘り込んでカマド燃焼部を構築し、その最奥部に煙道としての機能をもたせたと考えられる。側壁および奥壁は白色粘土で構築され、焚口部を凝灰岩切石で構築している。SI210 竪穴住居跡では煙道部の状況が不明だが、住居の壁を掘り込んでカマド燃焼部を構築している。側壁および奥壁は白色粘土で構築されている。SI621 竪穴住居跡では、住居の壁を掘り込



第 200 図　関東系土師器を伴う竪穴住居跡

んでカマド燃焼部を構築し、その先に煙道が設けられている。側壁は白色粘土で構築され、焚口部を河原石と凝灰岩切石で構築している。また、SI554c 竪穴住居跡でも住居の壁を掘り込んでカマド燃焼部を構築し、その先に煙道が設けられており、側壁は白色粘土で構築されている。これらの竪穴住居跡でみられるカマドの構築方法は、いわゆる関東型カマド（村田 2000）と考えられる。SI753・SI210 は村田氏によるカマド分類の 2a 類、SI621・SI554c は 3 類に該当する。これまで宮城県北部地域を中心に分布が確認されており、前者は 7 世紀中葉～ 8 世紀前半、後者は 8 世紀以降に位置づけられている。なお、SI91 は煙道部が先端に向かって深く落ち込む点が特異ではあるが、基本的には一般的な在地型カマドの構築方法である。側壁は黄褐色ロームで構築されている。

3．旧地形と集落形成の様相

本遺跡は、高木丘陵から派生して円田盆地北東部に延びる低平な丘陵上に立地する。今回の調査では遺跡範囲の全域に対して縦横に調査区が配置され、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、落とし穴状土坑などを中心とする多数の遺構が確認された。これによって、遺跡の立地する丘陵の旧地形と集落形成の様相、およびその変遷などについての概要を把握することができた。ここでは、これまで述べてきた遺物と遺構の検討結果を踏まえ、本遺跡の性格についての概括を述べる。

蔵王山東麓の高木丘陵から派生して、円田盆地の盆底部へ南東方向に延びる本遺跡の丘陵は、その東側を流れる雁柄川に注ぐ小規模な沢地形が発達し、羊歯状に開析された。そして、その後の沖積作用による盆底部の形成にあわせて沢地形が埋没し、現在の景観に近いきわめて低平な舌状の丘陵地に変化したと考えられる。

本遺跡において最も初期に認められる人間活動の痕跡は、縄文時代中期～後期のものとみられる多数の落し穴状土坑である。丘陵の尾根筋から辺縁部の湿地際まで広範囲に分布し、一定間隔で列状に配置される傾向がみられた。落し穴状土坑には二形態がみられ、それぞれ狩猟対象獣の違いが考えられる。落し穴状土坑は本遺跡北東部に隣接する原遺跡のほか、盆地西縁部の堀の内遺跡や東縁部の上葉の木沢遺跡などでも確認されている。本遺跡と近接した位置に当該期の集落跡は確認されていないが、西方に位置する高木丘陵上には鞘堂山遺跡、湯坂山 B 遺跡などの縄文時代中期～後期を中心とした集落跡が複数立地している。こうしたことから、本遺跡を含めて高木丘陵の東端部に位置する盆地周縁部が縄文時代中期～後期には狩猟場として利用されていたと考えられる。

このほか、縄文・弥生時代の土器と石器類が出土したが、遺構に伴うものではないため具体的にどのような活動が営まれていたのかについては明らかにできなかった。土器は小破片が多く、石器には多数の石鏃のほか箆形石器などが含まれており、製品の搬入が主体的である。少なくとも、本遺跡内では土器や石器の製作といった活動は低調であったとみられる。

古墳時代前期塩釜式期になると、丘陵中腹部の平坦面あるいは、埋没が進んで窪地状になった小規模な埋没谷に挟まれた舌状丘陵上に集落が形成される。丘陵中腹部の平坦面では方位をそろえた複数の竪穴住居跡が相互に重複せずに近接して立地することから同時並存していた可能性が高く、比較的規模の大きいまとまった集落が形成されていたものと考えられる。

7 世紀中葉～後半には、丘陵上の広範囲に単独の竪穴住居が点的に分布する状況で、まとまった集落を形成することはなかったものとみられる。なお、7 世紀後半の竪穴住居跡には関東系土師器と関

東型カマドをもつものが確認できた。

8 世紀前半～中頃になると丘陵の中腹から南端部にかけて数軒ずつの竪穴住居が散在する状況となり、相互に関連しながら集落を形成していたとみられる。また、8 世紀前半頃には丘陵中腹部の平坦面を中心に大溝による不整方形の区画が形成されたとみられる。この区画には一部掘立柱建物を伴う可能性が推定できたが、具体的な性格については今回の調査では明らかにできなかった。なお、8 世紀前半の竪穴住居跡には、関東系土師器と関東型カマドをもつものが複数確認できた。

8 世紀末～ 9 世紀中葉には、丘陵の付け根部分と南端部にそれぞれ竪穴住居がまとまって分布し、二つの集落が形成されたとみられる。

なお、8 世紀前半～ 9 世紀中葉頃の竪穴住居跡には、住居掘方の底面に土坑状の落ち込みを持つものが複数確認された。これらはいずれも住居掘方埋土などで人為的に埋め戻されており、住居構築時に床面やカマドで使用する粘土を採掘する目的で掘られた可能性が考えられる。

このほか、時期を特定できなかった掘立柱建物跡や溝跡の多くは中世～近世に形成されたものとみられる。丘陵中腹部の東斜面や丘陵南端部の東斜面には区画溝と掘立柱建物数棟が方向をそろえて配置されている。盆地東縁部の車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡には同様の区画溝と掘立柱建物跡などで構成される近世の屋敷が立地しており、近世には本遺跡を含めて盆地周縁部の微高地上に複数の屋敷地が点在していたとみられる。

以上のことから、本遺跡の考古学的変遷を簡単にまとめると、縄文時代中～後期には落とし穴猟を行なう猟場として利用され、古墳時代前期塩釜式期・7 世紀中頃～後半・8 世紀中葉・8 世紀末～ 9 世紀中葉の各時期には竪穴住居を中心とする集落が、近世には区画溝と掘立柱建物などで構成される屋敷が形成されていたことが分かった。

また、7 世紀後半～ 8 世紀前半頃には、関東系土師器と関東型カマドをもつ竪穴住居跡が存在し、8 世紀前半頃には大溝による区画施設などが形成されるとみられるが、相互の関連性および区画施設の性格等については今回の調査では明らかにはできなかった。本遺跡の南東約 1km の円田盆地中央部に位置する都遺跡では、7 世紀末～ 8 世紀前半の材木塀による区画施設や、大型の掘立柱建物跡のほか、多賀城政庁Ⅰ期のものと共通する特徴をもった軒平瓦などが採集されている。また、未報告ではあるが、本遺跡の西約 0.5km の盆地西縁部に位置する十郎田遺跡では平成 19 年度の発掘調査で丘陵の辺縁部を長方形に区画する材木塀跡が確認されている。

陸奥国府と考えられる仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙の設置は 694 ～ 700 年頃とされており、7 世紀末には仙台平野南部が律令国家の安定した統治下に置かれていたことがうかがえる。さらに、神亀元年（724 年）には多賀城が創建され、国府の機能が仙台平野北部に移された。続日本紀によれば、養老５年（721 年）には陸奥国柴田郡から苅田郡が分置されている。また、これに先立って霊亀２年（716 年）には陸奥国最上・置賜郡が出羽国に移管されている。

こうしたことから、8 世紀前半頃には律令国家による現在の宮城県南部から山形県南部にかけての地域に対する統治および経営体制の再編が行われたとみられる。阿武隈川水系の薮川流域に形成された円田盆地は当時の苅田郡内でもまとまった耕地を有していたとみられ、地域経営に関わる拠点的な施設が置かれていた可能性も考えられる。本遺跡および周辺の遺跡を含め、当該期の円田盆地おける今後の検討課題のひとつとしておきたい。

第６章　ま と め

１．六角遺跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北東部に位置し、蔵王山東麓の高木丘陵から派生して盆地中央部に向かって南東方向に延びる低平な舌状丘陵上に立地している。

２．今回の発掘調査は経営体育成基盤事業の円田Ⅱ期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）を原因として実施した。調査区は遺跡範囲の全域に縦横に配置され、調査面積は約 25,800 ㎡である。

３．確認した遺構は、竪穴住居跡 52 軒、掘立柱建物跡 29 棟、柱列跡 10 条、井戸跡 1 基、落し穴状土坑 39 基、土坑 71 基、大溝跡 6 条、溝跡 44 条、円形周溝跡 1 基、性格不明遺構 1 基、柱穴多数である。このうち、竪穴住居跡は古墳時代前期塩釜式期・7 世紀中葉～後半・8 世紀前半～中頃・8 世紀末～ 9 世紀中葉の各時期のものである。掘立柱建物跡と大溝跡の一部には 8 世紀前半頃とみられるものがある。このほかの掘立柱建物跡・溝跡の多くは中世～近世のものとみられる。落し穴状土坑は縄文時代中期～後期のものとみられる。

４．出土した遺物は、土師器、ロクロ土師器、須恵器、瓦、土製品（ミニチュア土器）、石製品（砥石）、金属製品（鉄鏃･鉄製刀子）、縄文土器、弥生土器、石器、中世･近世の陶磁器、古銭である。このうち、主体を占めるのは上述した古墳時代～奈良・平安時代の各時期の竪穴住居跡に伴う多数の土師器・ロクロ土師器と若干数の須恵器である。

５．発掘調査の結果、本遺跡の立地する丘陵にはその東側を流れる雁柄川に注ぐ小規模な沢地形が発達し、羊歯状に開析された後、沖積作用による盆底部の形成に合わせて沢地形が埋没し、現在の景観に近い極めて低平な舌状の丘陵地に変化したことが分かった。本遺跡における人間活動の痕跡は、沢地の埋没がほぼ完了して丘陵地が黒ボク土に覆われた段階から認められる。

６．本遺跡の立地する丘陵は、縄文時代中～後期には落し穴猟を行なう狩猟場として利用され、古墳時代前期塩釜式期・7 世紀中葉～後半・8 世紀中葉・8 世紀末～ 9 世紀中葉の各時期には竪穴住居を中心とする集落が、近世には区画溝と掘立柱建物などで構成される屋敷が形成されていたことが分かった。各時期の遺構の分布状況と占地の様相にはそれぞれ違いが認められ、上述した地形の形成過程および当時の人びとの生業形態の変化、あるいは政治的な要因などによって集落が変遷している可能性が想定される。

７．今回の発掘調査成果は、円田盆地北東部における土地利用のあり方の歴史的な変化と、そこに居住した当時の人びとの具体的な暮らしぶりを知る上で貴重な手がかりとなるものである。

引用・参考文献（著者名五十音順）

今泉隆雄・辻　秀人・熊谷公男 2000「第二章　陸奥国と仙台平野」『仙台市史　通史編２　古代中世』
今村啓爾ほか編 1973『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団
氏家和典 1957「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第 14 輯
氏家和典 1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安土師器の諸問題－」『山形県の考古と歴史』
大場正善 2004「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について」『宮城考古学』第 6 号
加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
熊谷公男 2004『古代の蝦夷と城柵』「歴史文化ライブラリー 178」吉川弘文館
桑原滋郎 1976「東北地方北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について」『考古学雑誌』第 61 巻第 4 号
佐藤宏之 1989「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族誌』
蔵王町教育委員会 1990『堀の内遺跡』「蔵王町文化財調査報告書」
蔵王町教育委員会 1997『堀の内遺跡』「蔵王町文化財調査報告書第 1 集」
蔵王町教育委員会 2002『諏訪舘前遺跡』「蔵王町文化財調査報告書第 2 集」
蔵王町教育委員会 2005『都遺跡ほか』「蔵王町文化財調査報告書第 3 集」
蔵王町教育委員会 2006『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』「蔵王町文化財調査報告書第 4 集」
蔵王町教育委員会 2007『中沢Ａ遺跡』「蔵王町文化財調査報告書第 5 集」
蔵王町史編纂委員会 1987『蔵王町史　資料編Ⅰ』
蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史　通史編』
佐藤洋一 2003「蔵王町円田盆地における遺跡分布状況」『宮城考古学』第 5 号
佐川正敏・鈴木　雅・安倍奈々子 2005「賀篭沢遺跡 2005 年度発掘調査の成果」
　　『第 19 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』
白鳥良一・古川一明「８. 東北」「２. 土師器の編年」『古墳時代の研究　第６巻　土師器と須恵器』
白石市史編纂委員会 1976『白石市史　別巻　考古資料篇』
瀬峰町教育委員会 1983『大境山遺蹟』「瀬峰町文化財調査報告書第 4 集」
仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編 (1)・(2) －』「仙台市文化財調査報告書第 283 集」
仙台市教育委員会 2004『郡山遺跡 24』「仙台市文化財調査報告書第 269 集」
辻　秀人 1994「東北南部における古墳出現期の土器編年　その１」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』第 26 号
辻　秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年　その２」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』第 27 号
辻秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
　　「平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書」
東北福祉大学 116 番教室 1994『宮城県蔵王町　兵衛館　第 1 次発掘調査報告書』
東北福祉大学 116 番教室 1995『宮城県蔵王町　兵衛館　第 2 次発掘調査報告書』
東北福祉大学 116 番教室 1996『宮城県蔵王町　兵衛館　第 3 次発掘調査報告書』
東北福祉大学 16 番教室 1997『宮城県蔵王町　兵衛館　第 4 次発掘調査報告書』
東北福祉大学 16 番教室 1998『宮城県蔵王町　兵衛館　第 5 次発掘調査報告書』
東北福祉大学 16 番教室 1999『宮城県蔵王町　兵衛館　第 6 次発掘調査報告書』
東北福祉大学吉井研究室 2000『宮城県蔵王町　兵衛館　第 7 次発掘調査報告書』
東北福祉大学吉井研究室 2001『宮城県蔵王町　兵衛館　第 8 次発掘調査報告書』
宮城県教育委員会 1980「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』「宮城県文化財調査報告書第 62 集」
宮城県教育委員会 1981「植田前遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』「宮城県文化財調査報告書第 81 集」
宮城県教育委員会 1982「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』「宮城県文化財調査報告書第 83 集」
宮城県教育委員会 1989『三十三間堂遺跡ほか』「宮城県文化財調査報告書第 131 集」
宮城県教育委員会 1990『寂光寺ほか』「宮城県文化財調査報告書第 135 集」
宮城県教育委員会 1991『合戦原遺跡ほか』「宮城県文化財調査報告書第 140 集」
宮城県教育委員会 1992『下草古城跡ほか』「宮城県文化財調査報告書第 160 集」
宮城県教育委員会 2002『名生館遺跡ほか』「宮城県文化財調査報告書第 188 集」
宮城県教育委員会 2003『壇の越遺跡ほか』「宮城県文化財調査報告書第 195 集」
宮城県教育委員会 2005『角山遺跡』「宮城県文化財調査報告書第 200 集」
宮城県教育委員会・利府町教育委員会 1990『利府町郷楽遺跡Ⅱ』
　　「宮城県文化財調査報告書第 134 集・利府町文化財調査報告書第 5 集」
宮城県高等学校理科研究会地学部会 1975『宮城県の地質案内』宝文堂
村田晃一 2000「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－」『宮城考古学』第 2 号
村田晃一 2007「ｖ. 宮城県中部から南部」「第Ⅱ章 東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係」
　　『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
矢本町教育委員会 2001『赤井遺跡Ⅰ』「矢本町文化財調査報告書第 14 集」

第３表　竪穴住居跡観察表

区	遺構名	位置	方向	規模(m)		残存壁高	構造				施設		床下土坑	出土遺物	重複関係	図No.	
				長	幅	(cm)	床面	主柱穴	壁柱穴	周溝	ｶﾏﾄﾞ・炉	貯蔵穴				平面	断面
S1西	SI1	東斜面	E-4° -N	(1.20)	3.50	15	Ⅳ層	なし	なし	なし	東ｶﾏﾄﾞ	-	なし	土師器 須恵器	SI9より新	12	12
	SI2	東斜面	E-13° -S	3.10	3.20	26	掘方 埋土	なし	なし	なし	東ｶﾏﾄﾞ	南東1	なし	土師器 須恵器	なし	15	15
	SI9	東斜面	E-5° -S	(1.90)	(1.30)	10	Ⅳ層	なし	なし	なし	東ｶﾏﾄﾞ	南東1	なし	土師器	SI1より古	12	12
S1南	SI601	東斜面	N-25° -W	4.30	3.00	27	貼床	なし	なし	なし	北ｶﾏﾄﾞ	北東2	2基	土師器 須恵器 砥石	SK647より新	18 19	18 19
	SI602	東斜面	E-2° -N	2.60	(2.20)	8	貼床	なし	なし	なし	東ｶﾏﾄﾞ	-	なし	土師器 須恵器	なし	21	21
	SI603	東斜面	N-0° -E	3.30	(3.40)	4	貼床	なし	なし	なし	北ｶﾏﾄﾞ	北東1	なし	土師器	なし	23	23
	SI609	東斜面	S-1° -E	3.00	3.10	33	Ⅳ・ Ⅴ層	なし	なし	なし	南ｶﾏﾄﾞ	なし	なし	土師器	SI645より新 SB643・SB615より古	25	25
	SI621	東斜面	N-13° -W	3.10	3.60	27	貼床	なし	なし	なし	北ｶﾏﾄﾞ (関東型)	北東2	なし	土師器 須恵器	SK651より古	27	27
	SI633	東斜面	N-5° -E	4.60	(3.80)	9	貼床	3基	なし	なし	-	-	なし	土師器 須恵器	なし	29	29
	SI634	東斜面	N-11° -W	4.50	4.70	12	掘方 埋土	4基	なし	全周	北ｶﾏﾄﾞ	なし	なし	土師器 須恵器	SK644より新	31	31
	SI635	東斜面	N-12° -W	(4.40)	(3.00)	-	-	4基	なし	なし	-	-	なし	土師器	なし	34	34
	SI645	東斜面	N-2° -E	(4.40)	(4.20)	8	掘方 埋土	なし	なし	なし	なし	なし	なし	土師器	SI609・SB643・SB615より古	35	35
S3中	SI62	南緩斜面	N-12° -E	(4.80)	(2.80)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	60	-
S3西	SI91	東斜面	W-1° -S	2.90	2.60	40	掘方 埋土	なし	なし	一部	北→西 ｶﾏﾄﾞ	なし	なし	土師器 須恵器	なし	61	61
N1北	SI301	平坦面	N-3° -E	4.20	(4.30)	-	-	-	-	-	北ｶﾏﾄﾞ	-	-	土師器	-	75	-
	SI302	平坦面	E-4° -S	3.50	4.50	-	-	-	-	-	東ｶﾏﾄﾞ	-	-	-	-	75	-
	SI303	平坦面	N-2° -E	4.30	4.80	-	-	-	-	-	-	-	-	土師器 ﾐﾆﾁｭｱ土器	SI304より新 SD307より古	75	-
	SI304	平坦面	N-35° -W	5.20	5.20	-	-	-	-	-	-	-	-	土師器	SI303・SB306・SD307より古	75	-
	SI305	平坦面	N-10° -W	(4.50)	(2.00)	-	-	-	-	-	北ｶﾏﾄﾞ	-	-	土師器	SK309より古	75	-
N2中	SI209	平坦面	N-24° -E	(6.00)	7.00	-	-	2基	なし	なし	北西炉	なし	なし	土師器	SB256・SK214と重複	84	84
	SI210	東斜面	N-14° -W	(2.20)	3.20	13	掘方 埋土	なし	なし	なし	北ｶﾏﾄﾞ (関東型)	なし	なし	土師器 須恵器 鉄鏃	SI261・SK211より古	85	85
	SI212	平坦面	N-35° -E	(2.80)	(3.80)	-	-	1基	なし	なし	-	南東1	-	土師器	なし	87	-
	SI261	東斜面	N-35° -E	1.90	1.80	13	掘方 埋土	なし	なし	なし	北ｶﾏﾄﾞ	なし	なし	土師器	SI210より新 SK211より古	85	85
N2西	SI222	平坦面	N-1° -W	4.70	(4.80)	14	貼床	なし	なし	全周	北東炉	南西1	なし	土師器	SD228・SI804・SD221・ SD802・SD803・SD805より古	88	88
	SI223	平坦面	N-31° -W	5.50	6.30	38	掘方 埋土	3基	なし	全周	中央炉	-	-	土師器 ﾐﾆﾁｭｱ土器 鉄製品	SB251より古	90	90
	SI225	平坦面	N-40° -W	5.10	6.10	-	-	-	-	-	北西炉	-	-	土師器 ﾐﾆﾁｭｱ土器	SD228・SI804・SD221・ SD802・SD803・SD805より古	75	-
	SI230	平坦面	N-38° -E	4.30	3.70	12	掘方 埋土	なし	なし	なし	-	南西1	なし	土師器	SD228・SI804・SD221・ SD802・SD803・SD805より古	93	93
	SI231	平坦面	N-42° -E	(3.00)	(2.50)	12	掘方 埋土	なし	なし	なし	-	-	-	土師器 ﾐﾆﾁｭｱ土器	なし	95	95
	SI259	平坦面	N-6° -W	(1.60)	(4.20)	-	-	-	-	-	北ｶﾏﾄﾞ	-	-	土師器	SD228・SI804・SD221・ SD802・SD803・SD805より古	75	-
	SI260	平坦面	N-25° -W	(2.00)	(1.20)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Pitより古	75	-
N2東	SI201a	平坦面	N-2° -W	3.90	4.70	-	貼床	4基	なし	全周	-	-	なし	土師器	SI201bより古	79	79
	SI201b	平坦面	N-2° -W	5.6	5.00	14	貼床	4基	6基	全周	北ｶﾏﾄﾞ	北東1	4基	土師器 須恵器	SI201a・SD205より新	80 83	80 81 83
N4中	SI701	平坦面	N-14° -W	5.50	5.30	5	貼床	4基	なし	なし	中央炉	南東1	なし	土師器	SA707より古	123	123 125
N6西	SI424	平坦面	N-1° -W	4.50	5.60	36	貼床	4基	7基	なし	北ｶﾏﾄﾞ	北東1	4基	土師器 須恵器 砥石 瓦 刀子 鉄釘	SD437・SX459より古	131 133	131 132
	SI443	平坦面	N-32° -W	(1.50)	(2.50)	24	掘方 埋土	-	-	一部	-	-	-	土師器	なし	136	136
N8西	SI751	平坦面	N-16° -W	(3.80)	(1.30)	-	-	1基	なし	-	西ｶﾏﾄﾞ	-	-	なし	なし	151	151
	SI753	平坦面	E-7° -N	3.70	4.00	30	貼床	なし	なし	全周	東ｶﾏﾄﾞ (関東型)	南東1	なし	土師器 須恵器	SI755より新	152	152
	SI755	平坦面	N-19° -W	(1.50)	(4.30)	-	貼床	なし	なし	一部	南ｶﾏﾄﾞ	なし	-	土師器 須恵器 砥石 鉄釘	SI753より古	154	154
N9中	SI553	南西斜面	N-5° -W	(3.90)	(3.90)	-	-	なし	なし	なし	北ｶﾏﾄﾞ	-	なし	須恵器	Pitより古	161	161
	SI554a	南西斜面	N-15° -W	6.20	5.70	15	-	3基	7基	なし	北ｶﾏﾄﾞ	北東1	2基	土師器 須恵器 ﾐﾆﾁｭｱ土器	SI554b・SI554cより古	162 164	162 163 164
	SI554b	南西斜面	E-15° -N	6.20	5.70	15	貼床	3基	20基	なし	東ｶﾏﾄﾞ	なし	なし	土師器 須恵器	SI554aより新 SI554cより古	165	165 166
	SI554c	南西斜面	N-15° -W	6.20	5.70	15	貼床	8基	なし	全周	北ｶﾏﾄﾞ (関東型) 中央炉	北東1	なし	土師器 須恵器	SI554a・SI554bより新	167	167 168
N10	SI901	平坦面	N-10° -W	(4.50)	(5.00)	-	-	-	-	-	北ｶﾏﾄﾞ	-	-	-	SI902より新	178	-
	SI902	平坦面	N-3° -W	(2.40)	(2.80)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SI901より古	178	-

第４表　掘立柱建物跡観察表

区	遺構名	位置	方向	構造	間数	総長(m)	柱間寸法(北・東より)		柱穴(cm)					出土遺物	重複関係	図No.	
					桁×梁	桁行×梁行	桁行(m)	梁行(m)	平面形	長軸	短軸	深さ	柱痕跡径			平面	断面
S1西	SB11	東斜面	N-13° -W	南北棟	2×1	3.9×2.9	1.9-2.0	2.9	楕円形 隅丸方形	20～38	15～35	18～48	10～15	-	-	36	36
	SB12	東斜面	E-30° -N	東西棟	2×1	2.7×2.3	1.3-1.4	2.3	円形 楕円形	23～35	20～30	13～25	12～18	-	-	37	37
S1南	SB615	東斜面	N-4° -W	南北棟	4×1	7.2×4.5	2.0-2.0 -1.6-1.6	4.5	隅丸方形 楕円形	60～100	50～65	15～45	-	土師器 須恵器 近世 陶磁器	SI645・SI609・ SB643より新	38	38
	SB616	東斜面	N-16° -W	南北棟	3×2	5.2×3.9	1.8-1.7 -1.7	2.1-1.8	隅丸方形 楕円形	18～38	17～22	5～26	12	-	-	39	39
	SB636	東斜面	N-5° -W	-	1×1	2.7×2.6	2.7	2.6	隅丸方形	33～47	26～40	28～38	14～20	-	SK629より古	40	40
	SB643	東斜面	N-8° -W	-	1×1	2.1×3.0	2.1	3.0	不整円形	30～38	27～32	60～70	12～14	土師器	SI645・SI609 より新 SB615より古	41	41
	SB650	東斜面	N-2° -W	-	2×2	4.2×4.7	2.3-2.4	2.1-2.1	楕円形 不整円形	58～66	46～62	24～50	14～20	土師器 須恵器	SX623より古 SB657と重複	42	42
	SB655	東斜面	E-5° -N	東西棟	3×1	6.5×4.5	2.0-2.5 -2.0	4.5	不整円形 楕円形	36～50	28～40	9～28	10～14	-	SK656より新	43	43
	SB657	東斜面	N-2° -W	-	1×1	4.6×2.7	4.6	2.7	楕円形	26～55	24～48	33～47	14～16	-	SX623より古 SB657と重複	44	44
S3中	SB72	東緩斜面	E-3° -N	東西棟	2×1	4.8×3.0	2.4-2.4	3.0	円形 楕円形	28～38	28～38	14～24	14～20	土師器	-	66	66
	SB95	東緩斜面	E-27° -S	東西棟	1×2	3.2×2.2	1.1-1.1	3.2	円形 楕円形	28～36	28～36	12～24	10～15	-	-	67	67
S3東	SB66	東緩斜面	N-19° -E	-	1×1	4.7×(2.2)	4.7	2.2	円形 楕円形	40～44	40	10～30	12～20	-	-	63	63
	SB67	東緩斜面	E-3° -S	東廂付 建物	身舎 2 廂部 1×1	4.3	-	2.2-2.1	身舎: 円形 楕円形 廂部: 楕円形	身舎 32～40 廂部 28～40	身舎 32～34 廂部 24～28	身舎 24～32 廂部 15	身舎 14～15 廂部 12～14	-	-	64	64
	SB68	東緩斜面	E-15° -S	南廂付 建物	4×1	7.8×(2.4)	1.9-2.0 -2.0-1.9	2.4	身舎: 楕円形 隅丸方形 廂部: 楕円形 隅丸方形	身舎 32～41 廂部 30～32	身舎 27～38 廂部 20～22	身舎 27～36 廂部 -	身舎 14～20 廂部 10～15	-	SA96・SK71・ SD69と重複	65	65
N1北	SB306	平坦面	N-3° -E	-	2×2	4.6×4.9	2.4-2.2	2.5-2.4	円形 楕円形	34～60	34～60	-	9～12	土師器	SI304・SD307 と重複	77	-
N2中	SB256	平坦面	N-12° -W	-	2×1	3.8×(1.6)	2.0-1.8	1.6	円形 楕円形	36～48	28～38	14～34	22	土師器	SI209と重複	101	101
N2西	SB235a	平坦面	-	-	3×2	4.3×(4.4)	-	-	隅丸方形	56	40	55	-	-	SB235bより古	98	98
	SB235b	平坦面	N-13° -W	-	3×2	4.7×(4.4)	1.6-1.3 -1.8	2.2-2.2	楕円形	32～64	28～40	60	12	土師器	SB235aより新	98	98
	SB239	平坦面	N-13° -W	-	1×1	2.3×2.3	2.3	2.3	隅丸方形	44～52	44～52	24～32	20	-	-	99	99
	SB251a	平坦面	-	-	2×2	5.0×(4.9)	-	-	隅丸方形 楕円形	45～50	35	32～55	-	-	SI223より新 SB251bより古	100	100
	SB251b	平坦面	N-5° -W	-	2×2	5.0×(4.9)	2.8-2.2	2.7-2.2	楕円形	35～47	20～40	40～67	10～18	土師器	SI223・SB251b より新	100	100
N6西	SB414	平坦面	N-12° -W	南北棟	3×2	(4.7)×(4.6)	2.4-2.3	2.3-2.3	円形 楕円形	45～65	28～60	5～26	16	-	SD413より古	138	138
	SB434	平坦面	N-15° -W	-	1×1	2.35×2.45	2.35	2.5	円形 楕円形	25～35	23～30	12～24	8～10	-	-	140	140
	SB436	平坦面	E-6° -N	東西棟	2×1	(4.7)×3.7	2.6-2.1	3.7	円形 楕円形	20～26	18～22	24～38	8～15	-	-	142	142
N6東	SB402	平坦面	E-8° -S	-	3×2	6.3×(4.0)	2.0-2.2 -2.1	2.1-1.9	隅丸方形	45～59	37～50	20～35	15～18	-	SA431と重複	137	137
	SB432	平坦面	N-16° -W	南北棟	2×1	(3.1)×3.0	1.4-1.7	3.0	円形 楕円形	32～40	25～28	10～15	10～12	-	-	139	139
	SB440	平坦面	N-20° -E	-	2×1	3.0×(2.1)	1.6-1.4	2.1	楕円形	20～32	15～30	10～33	-	-	SX406より古	141	-
N9中	SB569	南西斜面	N-17° -W	-	2×2	5.2×5.0	2.9-2.3	2.4-2.6	隅丸方形	40～54	38～44	22～45	12～14	土師器	SD557より古 SK566と重複	170	170
	SB570	南西斜面	N-1° -E	南北棟	2×1	3.0×2.7	1.6-1.4	2.7	隅丸方形	40～50	38～48	18～32	14～15	土師器	-	171	171

第５表　柱列跡観察表

区	遺構名	位置	方向	構造	間数	総長(m)	柱間寸法 (北・東より)	柱穴(cm)					出土遺物	重複関係	図No.	
								平面形	長軸	短軸	深さ	柱痕跡径			平面	断面
S1西	SA10	東斜面	E-4° -S	東西柱列	(3間)	(6.20)	2.3-2.0 -2.1	不整円形	28～33	23～30	26～33	10～14	土師器	-	45	45
S3東	SA96	東緩斜面	E-19° -S	東西柱列	(2間)	(5.00)	2.6-2.4	隅丸方形	40～50	34～40	-	12～15	-	SD69より新 SB68・SK71と重複	68	-
N2西	SA253	平坦面	E-9° -N	東西柱列	2間	3.50	1.7-1.8	円形 楕円形	28～30	23～27	15～25	10	-	-	103	103
	SA254	平坦面	E-14° -N	東西柱列	3間	4.00	1.4-1.3 -1.3	円形 楕円形	28～35	25～33	47～64	10	-	SD252より新 SD234と重複	104	104
N2東	SA203	平坦面	E-7° -N	東西柱列	(3間)	(5.10)	1.7-1.7 -1.7	円形 楕円形	36～40	28～37	23～28	15～18	-	Pitより古	102	102
N4中	SA707	平坦面	E-3° -S	東西柱列	(3間)	(2.80)	0.8-1.0 -1.0	円形 楕円形	20～30	20～25	37～47	8～11	-	SI701より新	126	126
N6西	SA435	平坦面	E-6° -N	東西柱列	(2間)	(3.40)	1.6-(1.8)	円形 楕円形	35	30	33～46	12	-	-	144	144
N6東	SA431	平坦面	E-8° -N	東西柱列	(2間)	(4.50)	2.2-2.3	隅丸方形	35～40	30～40	33～40	13～16	-	SB402と重複	143	143
N9中	SA568	南西斜面	E-13° -N	東西柱列	2間	3.10	1.5-1.6	隅丸方形	44～46	34～46	26～57	-	-	-	174	174
N10	SA903	平坦面	N-7° -W	南北柱列	2間	4.30	1.9-2.4	円形 楕円形	30～50	25～40	-	15～20	-	-	178	-

第６表　落し穴状土坑観察表

区	遺構名	位置	方向	形状			規模(m)			出土遺物	重複関係	図No.	
				平面	横断面	底面	長	幅	深			平面	断面
S1西	SK29	丘陵頂部	SE-NW	溝状	漏斗状	平坦	3.20	0.27	1.10	なし	なし	46	46
	SK30	丘陵頂部	SE-NW	溝状	Ｖ字状	平坦	2.76	0.24	0.78	なし	なし	47	47
	SK33	西斜面	SE-NW	楕円形	漏斗状	南東に傾斜	1.90	0.90	1.64	なし	なし	48	48
	SK38	西斜面	SE-NW	楕円形	漏斗状	北西に緩く傾斜	2.36	1.55	1.28	なし	なし	49	49
S1南	SK612	南斜面	E-W	溝状	Ｖ字状	平坦	1.04	0.24	0.48	なし	なし	14	－
	SK613	南斜面	SW-NE	溝状	Ｕ字状	平坦	2.60	0.22	0.69	なし	なし	14	－
	SK617	南斜面	SE-NW	溝状	漏斗状	平坦	2.64	0.62	0.95	なし	なし	14	－
	SK620	南斜面	E-W	楕円形	逆台形	平坦	1.24	0.70	0.76	なし	なし	14	－
	SK622	南斜面	SE-NW	溝状	漏斗状	平坦	2.33	0.30	0.75	なし	なし	14	－
	SK627	東斜面	S-N	楕円形	逆台形	皿状	1.45	0.80	0.63	なし	なし	14	－
	SK637	東斜面	E-W	楕円形	逆台形	平坦	1.38	0.75	0.70	なし	なし	14	－
	SK640	東斜面	S-N	溝状	Ｖ字状	平坦	2.26	0.23	0.20	なし	なし	14	－
	SK644	南斜面	E-W	楕円形	Ｕ字状	平坦	1.10	0.58	0.60	なし	S1634より古	14	－
S2北	SK151	北東斜面	SW-NE	楕円形	逆台形	平坦	(1.40)	0.35	0.39	なし	なし	60	－
S3西	SK92	東斜面	S-N	溝状	－	－	2.50	0.40	－	－	－	60	－
	SK93	東斜面	S-N	溝状	漏斗状	平坦	2.30	0.30	0.53	なし	なし	60	－
	SK94	東斜面	S-N	溝状	－	－	2.50	0.35	－	－	－	60	－
N1北	SK308	平坦面	E-W	溝状	－	－	(3.10)	0.60	－	－	－	75	－
N2中	SK216	平坦面	S-N	溝状	漏斗状	平坦	2.60	0.48	1.04	なし	なし	105	105
	SK217	東斜面	E-W	楕円形	逆台形	平坦	1.40	0.74	0.70	なし	なし	106	106
	SK218	東斜面	E-W	楕円形	－	－	1.30	0.75	－	－	－	75	－
	SK219	東斜面	E-W	楕円形	－	－	1.35	0.70	－	－	－	75	－
N2西	SK238	平坦面	E-W	溝状	漏斗状	平坦	2.30	0.45	0.55	なし	なし	75	－
	SK250	平坦面	SE-NW	楕円形	漏斗状	平坦	1.35	1.00	1.05	なし	なし	75	－
	SK258	平坦面	E-W	溝状	漏斗状	西に緩く傾斜	3.70	0.90	1.00	なし	なし	107	107
N2東	SK229	平坦面	E-W	楕円形	Ｕ字状	平坦	1.22	0.72	0.46	なし	なし	78	－
N4中	SK703	丘陵落際	SW-NE	楕円形	逆台形	平坦	1.30	0.85	0.85	なし	なし	127	127
	SK705	丘陵落際	SW-NE	楕円形	逆台形	東に緩く傾斜	1.15	0.72	0.65	なし	なし	122	－
N5南	SK351	沢地際	SE-NW	楕円形	漏斗状	平坦	(1.16)	0.77	0.91	なし	なし	129	－
	SK352	沢地際	SE-NW	楕円形	漏斗状	南に傾斜	1.50	0.87	0.91	なし	なし	129	－
N6西	SK419	平坦面	E-W	溝状	漏斗状	平坦	3.30	0.43	0.85	なし	なし	146	146
N6東	SK401	平坦面	SE-NW	楕円形	漏斗状	浅い皿状	0.95	0.54	0.75	なし	なし	129	－
	SK409	平坦面	SW-NE	楕円形	漏斗状	中央部が高い	(1.72)	1.06	1.37	なし	なし	146	146
N8西	SK757	平坦面	E-W	溝状	漏斗状	平坦	(0.40)	(0.50)	0.90	なし	SD754より古	150	－
	SK760	平坦面	SW-NE	隅丸方形	逆台形	平坦	(1.40)	0.80	1.40	なし	なし	150	－
	SK761	平坦面	S-N	溝状	漏斗状	平坦	(2.60)	0.50	0.95	なし	なし	150	－
N8東	SK756	平坦面	S-N	溝状	漏斗状	平坦	(0.60)	(0.35)	0.83	なし	なし	150	－
N9中	SK563	南西斜面	S-N	不整楕円形	逆台形	皿状	(2.70)	(1.10)	0.43	なし	なし	160	－
	SK566	南西斜面	S-N	溝状	漏斗状	平坦	2.16	0.34	0.57	なし	SD556・SD557より古 SB569と重複	160	－

第７表　土坑観察表（１）

区	遺構名	位置	形状			規模(m)			出土遺物	重複関係	図No.	
			平面	横断面	底面	長	幅	深			平面	断面
S1中	SK4	東斜面	不整楕円形	－	－	3.30	2.60	－	－	－	14	－
S1西	SK13	東斜面	楕円形	皿状	皿状	1.30	1.20	0.25	なし	なし	14	－
	SK14	東斜面	不整円形	箱形	平坦	0.60	0.35	0.48	土師器	なし	14	－
	SK15	東斜面	楕円形	Ｕ字状	皿状	0.60	0.40	0.35	なし	SK16より新	14	－
	SK16	東斜面	不整楕円形	Ｕ字状	凹凸あり	0.49	0.38	0.73	土師器	SK15より古	14	－
	SK26	南斜面	不整楕円形	逆台形	平坦	(1.20)	1.00	0.55	なし	なし	14	－
	SK36	西斜面	隅丸方形	箱形	平坦	3.25	(0.75)	0.67	なし	なし	50	50
	SK40	東斜面	不整円形	Ｕ字状	皿状	0.50	0.46	0.38	なし	なし	14	－
	SK41	東斜面	不整円形	Ｕ字状	皿状	(0.40)	(0.40)	0.43	なし	なし	14	－
S1南	SK610	南斜面	楕円形	逆台形	平坦	0.70	0.30	0.30	土師器	なし	51	51
	SK611	南斜面	楕円形	逆台形	平坦	0.70	0.55	0.16	なし	なし	14	－
	SK619	南斜面	不整楕円形	逆台形	平坦 (段有)	2.68	1.60	0.52	土師器	なし	54	54
	SK624	東斜面	楕円形	皿状	皿状	1.60	1.10	0.25	土師器 鉄滓	なし	52	52
	SK625	東斜面	楕円形	皿状	皿状	(2.40)	2.70	0.36	土師器 須恵器 青磁	なし	55	55
	SK626	東斜面	楕円形	逆台形	皿状	2.50	0.30	0.56	なし	なし	56	56
	SK628	東斜面	円形	逆台形	皿状	0.40	0.37	0.17	土師器	なし	57	57
	SK629	南斜面	楕円形	逆台形	皿状	1.58	0.90	0.60	土師器	SB636より古	14	－
	SK630	南斜面	楕円形	皿状	皿状	1.32	0.85	0.18	土師器	SK631・SK632より新	14	－
	SK631	南斜面	楕円形	皿状	皿状	0.70	0.50	0.11	なし	SK632より新 SK630より古	14	－
	SK632	南斜面	楕円形	皿状	皿状	1.28	1.13	0.20	土師器	SK630・SK631より古	14	－
	SK642	東斜面	楕円形	Ｕ字状	平坦	0.48	0.30	0.44	土師器	SB655と重複	14	－
	SK647	東斜面	隅丸方形	逆台形	平坦	0.50	(0.40)	0.22	なし	S1601より古	14	－
	SK648	東斜面	不整円形	皿状	平坦	0.55	0.55	0.13	なし	なし	14	－
	SK651	東斜面	不整円形	Ｕ字状	平坦	0.74	0.70	0.45	なし	なし	14	－
	SK656	東斜面	溝状	皿状	平坦	1.95	0.48	0.07	なし	SB655より古	14	－
S3中	SK76	東緩斜面	不整円形	－	－	1.20	1.20	－	－	SK77より新 SD79・SD73・SD74・SD75より古	60	－
	SK77	東緩斜面	不整円形	－	－	(1.40)	(1.10)	－	－	SK76・SD79・SD73・SD74・SD75より古	60	－
	SK78	東斜面	楕円形	－	－	(1.60)	0.60	－	中世陶器	－	60	－
	SK85	東緩斜面	楕円形	－	－	1.80	1.20	－	－	－	60	－
	SK90	東緩斜面	不整円形	－	－	0.50	0.50	－	－	SD80より古	60	－
S3東	SK52	東緩斜面	隅丸方形	－	－	2.50	2.00	－	須恵器	－	60	－
	SK54	東緩斜面	溝状	－	－	1.50	0.30	－	－	－	60	－
	SK56	東緩斜面	楕円形	Ｕ字状	皿状	(1.00)	1.00	0.20	なし	なし	69	69
	SK58	東緩斜面	溝状	－	－	(2.00)	0.60	－	－	Pitより古	60	－
	SK61	南緩斜面	不整形	浅い皿状	皿状	0.84	0.58	0.20	金属製品	なし	70	70
	SK63	東緩斜面	楕円形	－	－	(0.76)	(0.28)	－	－	－	60	－
	SK64	東緩斜面	楕円形	逆台形	平坦	1.40	0.90	0.20	なし	なし	71	71
	SK65	東緩斜面	楕円形	皿状	平坦	1.60	0.80	0.20～0.25	なし	SD60と重複	60	－
	SK71	東緩斜面	溝状	－	－	2.10	0.50	－	－	Pitより新 SB68と重複	60	－
	SK81	東緩斜面	楕円形	Ｕ字状	皿状	1.55	(1.00)	0.60	なし	SD80より古	72	72
N1北	SK309	平坦面	溝状	－	－	(1.60)	0.30	－	－	S1305より新	75	－
N2中	SK211	東斜面	楕円形	皿状	皿状	0.90	0.78	0.15	土師器	S1210より新	75	－
	SK214	東斜面	楕円形	浅い皿状	皿状	0.96	0.60	0.08	土師器	S1209と重複	75	－

第８表　土坑観察表（２）

区	遺構名	位置	形状			規模(m)			出土遺物	重複関係	図No.	
			平面	横断面	底面	長	幅	深			平面	断面
N2西	SK224	平坦面	不整楕円形	逆台形	皿状	2.80	2.20	0.43	土師器 須恵器	SK257より新	108	108
	SK227	平坦面	楕円形	-	-	0.65	0.50	-	土師器	-	75	-
	SK236	平坦面	長方形	箱形	平坦	1.90	0.90	0.33	土師器	なし	110	110
	SK237	平坦面	不整長方形	逆台形	平坦	2.35	0.47	0.20	なし	なし	75	-
	SK241	丘陵頂部	不整長方形	逆台形	平坦	0.90	0.47	0.08	なし	なし	75	-
	SK242	丘陵頂部	不整長方形	-	-	1.65	0.55	-	-	-	75	-
	SK243	丘陵頂部	不整長方形	箱形	平坦	1.33	0.70	0.80	土師器	なし	111	111
	SK244	平坦面	不整円形	-	-	0.55	0.55	-	土師器	-	75	-
	SK246	平坦面	楕円形	-	-	1.00	0.70	-	-	SB235と重複	75	-
	SK247	平坦面	不整円形	-	-	0.65	0.55	-	土師器	-	75	-
	SK249	平坦面	溝状	U字状	皿状	0.96	0.30	0.30	なし	Pitより新	75	-
	SK257	平坦面	不整楕円形	逆台形	皿状	(2.70)	(1.10)	0.43	なし	SK224より古	108	108
N6西	SK417	平坦面	不整形	逆台形	平坦	(1.90)	(0.30)	0.20	なし	なし	130	-
	SK418	平坦面	不整円形	箱形	平坦	0.60	0.60	0.20	土師器 須恵器	なし	147	147
	SK420	平坦面	長楕円形	皿状	皿状	1.45	0.35	0.10	なし	なし	130	-
	SK421	平坦面	楕円形	逆台形	皿状	0.58	(0.30)	0.65	なし	なし	130	-
	SK422	平坦面	楕円形	逆台形	平坦	1.10	(0.70)	0.17	土師器	なし	130	-
	SK423	平坦面	楕円形	皿状	平坦	2.23	1.05	0.15	土師器 須恵器	なし	148	148
	SK428	平坦面	楕円形	箱形	平坦	1.40	0.80	0.20	なし	なし	130	-
	SK433	平坦面	楕円形	逆台形	皿状	(1.80)	(0.40)	0.55	なし	なし	130	-
	SK439	平坦面	楕円形	皿状	皿状	0.65	0.50	0.21	なし	なし	130	-
	SK446	平坦面	溝状	V字状	線状	2.10	0.30	0.26	土師器	なし	130	-
N8西	SK759	平坦面	楕円形	逆台形	皿状	0.65	0.50	0.25	土師器	なし	156	156
N9中	SK501	南西斜面	円形	逆台形	平坦	(0.86)	(0.86)	0.88	なし	なし	172	172
	SK547	南西斜面	不整楕円形	逆台形	皿状	1.56	0.58	0.44	土師器 須恵器	なし	173	173
	SK548	南西斜面	不整楕円形	皿状	皿状	2.30	1.17	0.17～0.30	なし	なし	175	175
	SK567	南西斜面	不整楕円形	皿状	皿状	1.50	1.10	0.10	なし	Pitより新	176	176
N10	SK904	平坦面	不整楕円形	-	-	1.10	0.70	-	-	-	178	-

第９表　大溝跡観察表

区	遺構名	位置	方向	規模(m)				断面形	出土遺物	重複関係	図No.	
				検出長	上端幅	下端幅	深				平面	断面
N2中	SD206	低位部	S-N	11.60	1.90～2.20	1.60～1.90	0.20～0.33	逆台形	土師器 須恵器	なし	113	113
N2西～南	SD228a	平坦面	S-N 不整方形	北辺 37 東辺 74 南辺 54 西辺 68	2.00～2.90	1.20～1.90	0.50～0.80	逆台形	土師器 須恵器	SI222・SI225・SI230・SI259・SI807・ SD234・SD252・SD801より新 SD228b・SI804・SD221・SD802・SD803・SD805より古	115 118 119	115 110 119 120
	SD228b				2.10～2.70	0.50～1.50	0.30～0.50	皿状	土師器 須恵器	SI222・SI225・SI230・SI259・SI807・SD234・SD252・ SD234・SD252・SD801・SD228aより新 SI804SD221・SD802・SD803・SD805より古	115 118 119	115 118 119 120
N2南	SD801	平坦面	E-W	64.00	1.90～2.20	1.00～1.80	0.30～0.80	逆台形	土師器	SD228・SI804・SD802・SD805より古	118 119	118 119
N5南	SD354	沢地上	S-N	8.70	1.90～2.30	1.50～1.70	0.11～0.23	逆台形	土師器 須恵器	なし	128	128
N8西	SD754	平坦面	S-N	3.50	(1.70)	(1.50)	0.54	箱形	土師器 須恵器 鉄鏃	SK757より新	157	157

第 10 表　溝跡観察表

区	遺構名	位置	方向	規模(m)				断面形	出土遺物	重複関係	図No.	
				検出長	上端幅	下端幅	深				平面	断面
S1中	SD5	丘陵東縁	SE-NW	23.00	0.70～0.80	0.40	0.07	浅い皿状	なし	なし	14	-
	SD6	丘陵東縁	NW-SE	9.00	0.80～1.20	0.50～0.80	0.15	浅い皿状	なし	なし	14	-
	SD7	西側	NW-SE	9.00	1.10～1.80	0.30	0.28	U字状	なし	なし	14	-
S1西	SD39	西斜面	S-N	3.60	0.35～0.40	0.15～0.20	0.09～0.18	浅い皿状	土師器	なし	14	-
S1東	SD8	丘陵東縁	NW-SE	8.00	0.90	0.50	0.03～0.10	浅い皿状	なし	なし	11	-
S3中	SD73	東緩斜面	NE-SW	12.00	0.90～1.20	0.30	0.30	逆台形	土師器	SK77・SD79より新 SD74・SD75より古	74	74
	SD74	東緩斜面	NE-SW	6.70	0.30～0.90	-	-	-	-	SK77・SD79・SD73より新 SD75より古	74	-
	SD75	東緩斜面	NE-SW	19.00	0.80～1.40	0.30～0.50	0.15	逆台形	なし	SK77・SD79・SD73・SD74より新	74	74
	SD79	東緩斜面	E-W	33.00	0.30～1.40	-	-	-	-	SK77より新 SD73・SD74・SD75より古	74	-
	SD80	東緩斜面	NE-SW	28.00	0.60	0.30	0.10	浅い皿状	なし	SK90・SK81より新	60	-
	SD82	東緩斜面	NW-SE	5.50	0.40	0.20	0.03	浅い皿状	なし	なし	60	-
	SD83	東緩斜面	NW-SE	6.00	0.30	0.20	0.03～0.08	浅い皿状	なし	なし	600	-
	SD84	東緩斜面	NW-SE	2.50	0.32	0.20	0.20	U字状	土師器	なし	60	-
	SD87	東緩斜面	S-N	1.40	0.15～0.24	0.08	0.03～0.05	U字状	なし	なし	北→西カマド	-
S3東	SD55	東緩斜面	E-W・S-N	東西35 南北7.5	0.20～0.30	0.15	0.04～0.10	浅い皿状	なし	なし	73	73
	SD57	東緩斜面	SW-NE	3.20	0.20～0.30	0.12～0.16	0.03	浅い皿状	なし	なし	60	-
	SD59	東緩斜面	S-N	4.90	0.20～0.46	0.20	0.26	逆台形	なし	SD60より古	60	-
	SD60	東緩斜面	S-N	11.20	0.40～0.60	0.20～0.30	0.20	逆台形	なし	SD59より新 SK65と重複	60	-
	SD69	東緩斜面	E-W	4.00	0.30	-	-	-	-	SA96より古 SB68と重複	60	-
	SD70	東緩斜面	NW-SE	3.00	0.25～0.40	-	-	-	-	-	60	-
N1北	SD307	平坦面	S-N	12.10	0.45～1.10	-	-	-	-	SI304・SI303・SB306より新	75	-
N2中	SD207	低位部	E-W	12.90	0.20～0.65	0.43	0.24	V字状	なし	なし	75	-
	SD208	低位部	E-W	17.00	0.80～2.00	0.45	0.38	皿状	土師器	なし	75	-
N2西	SD220	平坦面	SE-NW	16.00	1.10～2.50	0.70～1.65	0.10～0.25	皿状	土師器	SI222より新	115	-
	SD221	平坦面	SE-NW	16.50	0.90～1.65	0.50～1.40	0.05～0.25	逆台形	土師器 須恵器	SI222・SI225・SI230・SI259・SI807・ SD234・SD252・SD801・SD228より新	115	-
	SD232	平坦面	S-N	2.10	0.28	-	-	-	-	-	75	-
	SD233	平坦面	S-N	3.60	0.16～0.25	0.10～0.13	0.06～0.10	浅い皿状	なし	なし	75	-
	SD234	平坦面	S-N	3.30	0.11～0.30	0.04～0.20	0.05～0.19	浅い皿状	なし	SD228・SI804・SD221・SD802・SD803・SD805より古 SA253と重複	75	-
	SD240	平坦面	E-W	5.00	0.33～0.45	0.25～0.30	0.10	浅い皿状	土師器	なし	75	-
	SD252	平坦面	S-N	0.80	0.25	0.15	0.20	皿状	なし	SA252・SD228・SI804・SD221・SD802・ SD803・SD805より古	75	-
N2東	SD202	平坦面	S-N	10.50	0.65～0.75	0.30～0.45	0.17～0.20	逆台形	なし	なし	112	112
	SD205	平坦面	E-W	3.00	0.14～0.22	0.07～0.09	0.12～0.21	皿状	鉄製品	SI201bより古	79	79
N5南	SD353	沢地上	E-W	4.10	0.32～0.34	0.11～0.14	0.15	浅い皿状	なし	なし	129	-
N6西	SD413	平坦面	E-W・S-N	東西7 南北1	0.34～0.50	0.22～0.35	0.09～0.35	逆台形	なし	SB414より新	130	-
	SD437	平坦面	S-N	7.00	1.56～1.60	0.66～0.80	0.18	浅い皿状	土師器 須恵器	SI424より新 SX459より古	130	-
N9北	SD564	西斜面	E-W	14.00	1.00	0.70	0.05～0.17	逆台形	近世 陶磁器	なし	160	-
	SD565	西斜面	E-W	6.70	0.30～1.28	0.10～0.60	0.05～0.16	浅い皿状	なし	なし	160	-
N9中	SD549	南西斜面	S-N	9.10	0.44～0.60	0.28～0.44	0.20	U字状	なし		160	-
	SD555	南西斜面	E-W	11.70	0.50	0.30	0.10～0.13	皿状	なし	SD556・SD557より古	177	177
	SD556	南西斜面	E-W	22.30	0.40～0.50	0.15～0.3	0.08～0.2	皿状	土師器 須恵器	SK566・SD555より新 SD557より古	177	177
	SD557	南西斜面	E-W	24.50	0.90～1.40	0.30～0.60	0.10～0.30	皿状	土師器 須恵器 近世 陶磁器	SB569・SK566・SD555・SD556より新	177	177
N9南	SD571	西斜面	S-N	12.50	0.30～0.70	0.10～0.35	0.20	逆台形	なし	なし	159	-

第 11 表　井戸跡・円形周溝跡・性格不明遺構観察表

区	遺構名	位置	種別	形状			規模(m)				出土遺物	重複関係	図No.	
				平面	横断面	底面	長	幅		深			平面	断面
								上端幅	下端幅					
S1南	SX623	東斜面	性格不明	隅丸方形	浅い皿状	凹凸あり	3.30	3.00		0.13	土師器 須恵器 鉄滓	SB650・SB657より新	59	59
N6東	SE403	平坦面	井戸跡	円形	円筒形	西に傾斜	0.93	0.87		0.93	土師器 須恵器	なし	145	145
	SX406	平坦面	円形周溝跡	環状	箱型	平坦	外周:5.50 内周:3.40	0.85～1.20	0.75～1.00	0.30～0.45	土師器 須恵器	SB440より新	149	149

写　真　図　版



六角遺跡の位置と周辺の遺跡



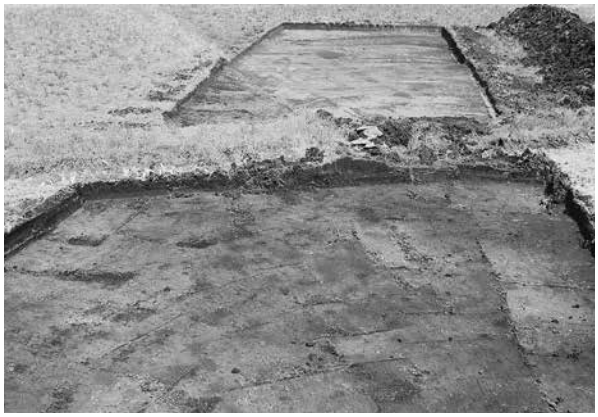
1．青麻山展望台より北東に円田盆地を望む



2．六角遺跡遠景（東から）



1．S1西区全景（東から）



2．S1東区全景（西から）



3．S1中区全景（西から）



4．S1南区全景（南から）



5．S1南区全景（北から）



6．S1南区全景（北西から）



7．SI1・SI9 竪穴住居跡（西から）

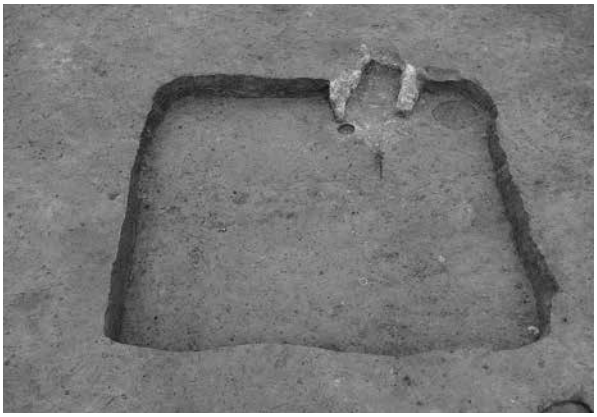
写真図版　4



1．SI1カマド部分（西から）



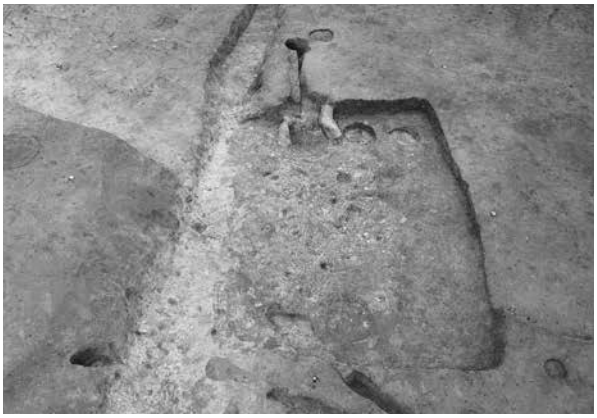
2．SI1床面遺物出土状況



3．SI2竪穴住居跡（西から）



4．SI2カマド部分（西から）



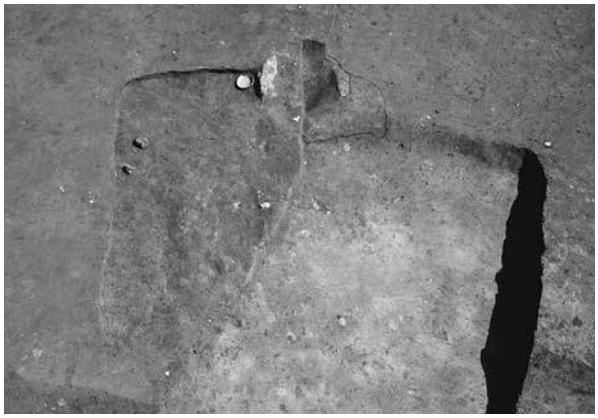
5．SI601竪穴住居跡（南から）



6．SI601カマド部分（南から）



7．SI601床下土坑（南から）



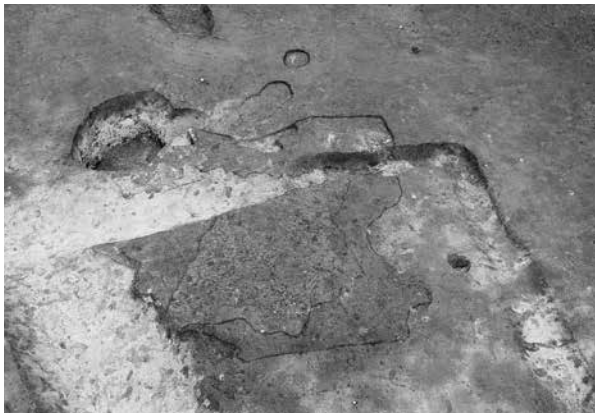
8．SI602竪穴住居跡(西から)



1．SI602カマド部分（西から）



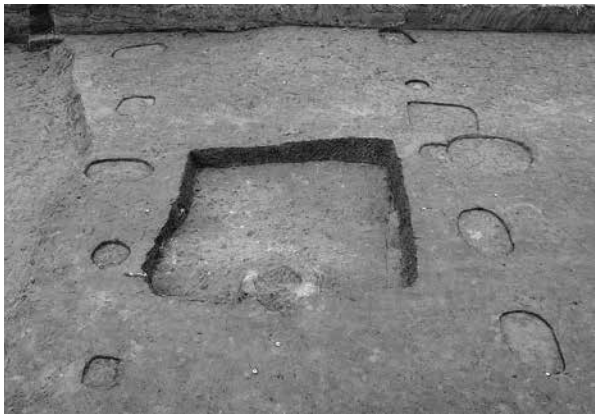
2．SI602カマド付近床面遺物出土状況（西から）



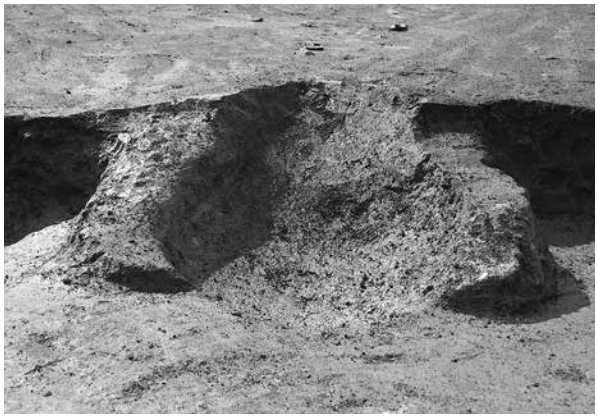
3．SI603竪穴住居跡（南から）



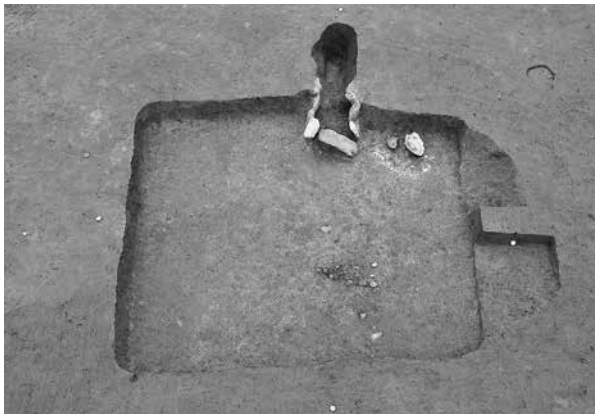
4．SI603カマド部分（南から）



5．SI609竪穴住居跡、SB615掘立柱建物跡（南から）



6．SI609カマド部分（北から）



7．SK621竪穴住居跡（南から）



8．SI621カマド脇床面遺物出土状況（南から）

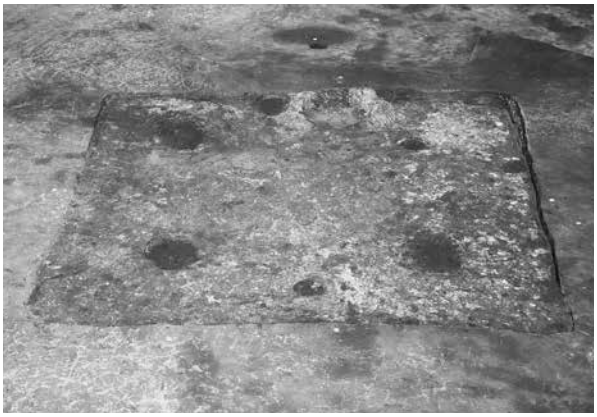
写真図版　6



1．SI621カマド部分（南から）



2．SI633竪穴住居跡（東から）



3．SI634竪穴住居跡（南から）



4．SI634カマド部分（南から）



5．SI635竪穴住居跡（西から）



6．SI645竪穴住居跡、SB643掘立柱建物跡（南から）



7．SB11掘立柱建物跡（東から）



8．SB12掘立柱建物跡（北から）



1．SB616掘立柱建物跡（南から）



2．SB636掘立柱建物跡（南から）



3．SB650、SB657掘立柱建物跡（南から）



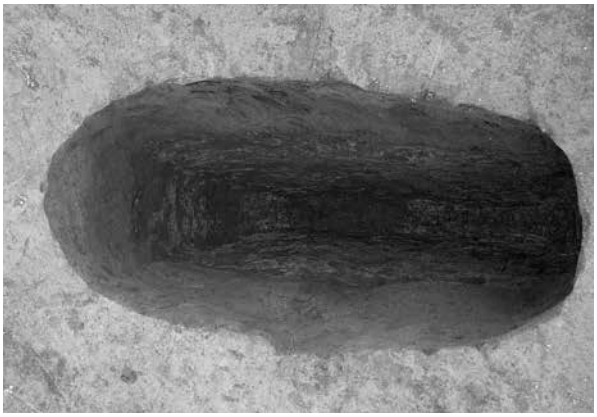
5．SK29落し穴状土坑（南から）



4．SB655掘立柱建物跡（南から）



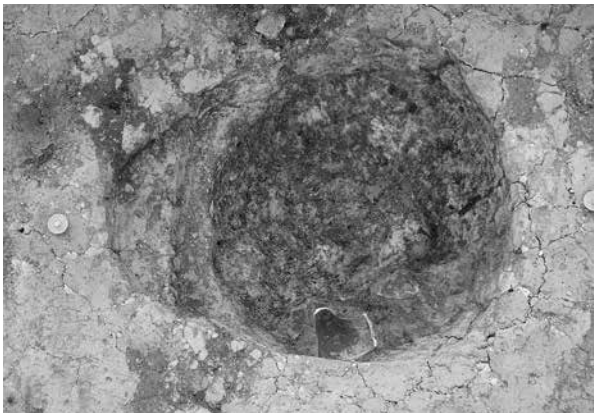
6．SK30落し穴状土坑　（南から）



1．SK33落し穴状土坑（南から）



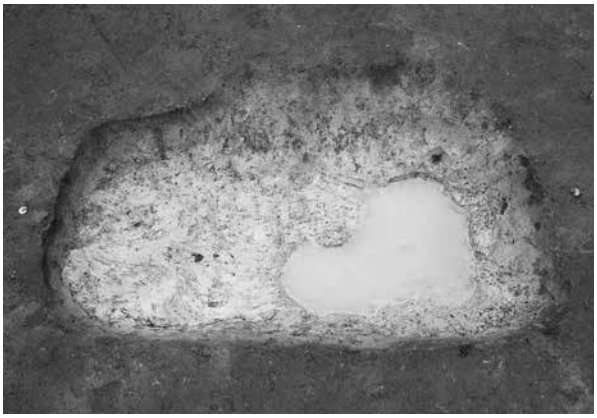
2．SK38落し穴状土坑（東から）



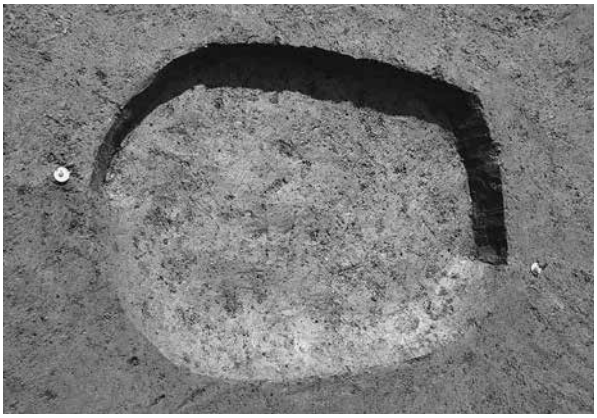
3．SK610土坑（東から）



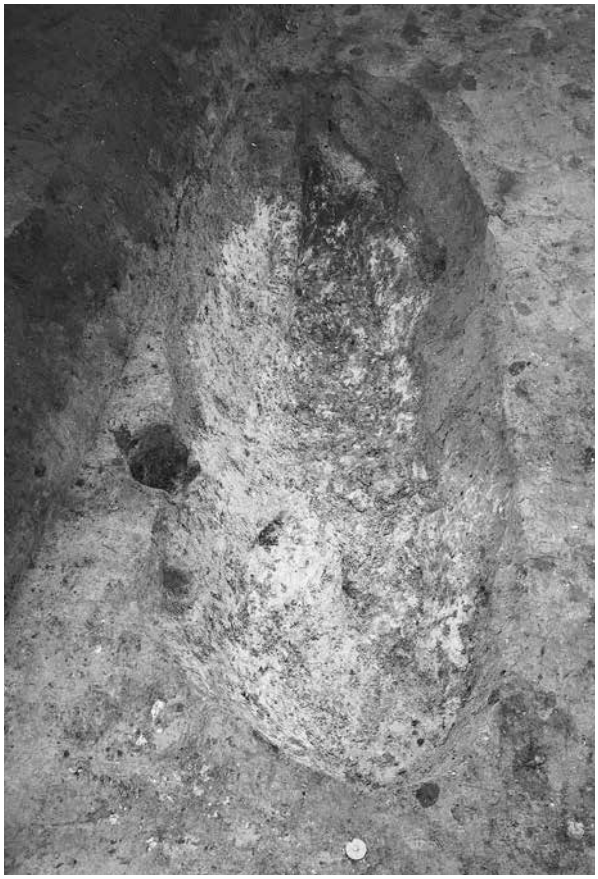
4．SK610遺物出土状況



5．SK619土坑（北から）



6．SK624土坑（北から）



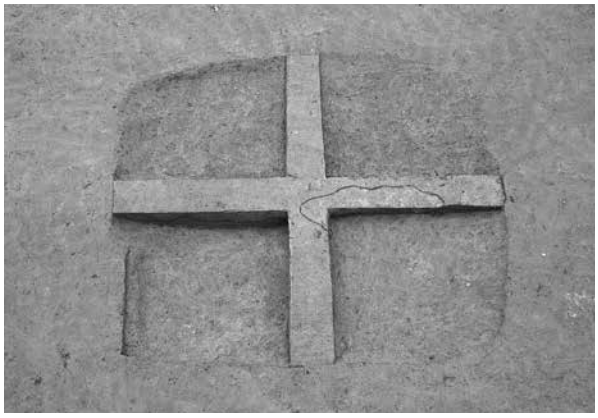
8．SK626土坑（西から）



1．SK625土坑断面（南から）



2．SK628土坑断面（北から）



3．SX623性格不明遺構（北から）



4．S2南区全景（南から）



5．S2北区全景（南から）



6．S2北区、S3西区西側全景（北から）



7．S3西区東側全景（東から）



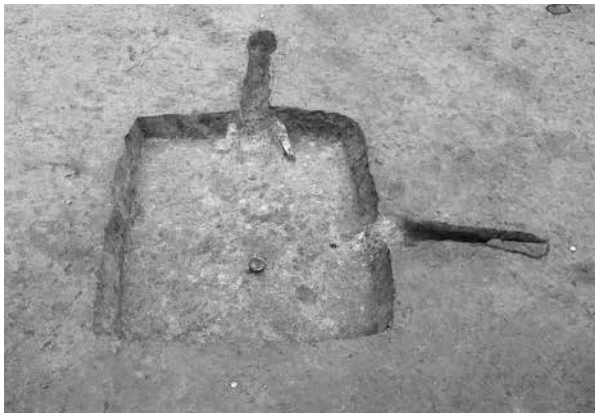
1．S3西区全景（西から）



2．S3中区全景（西から）



3．S3中区北側全景（南から）



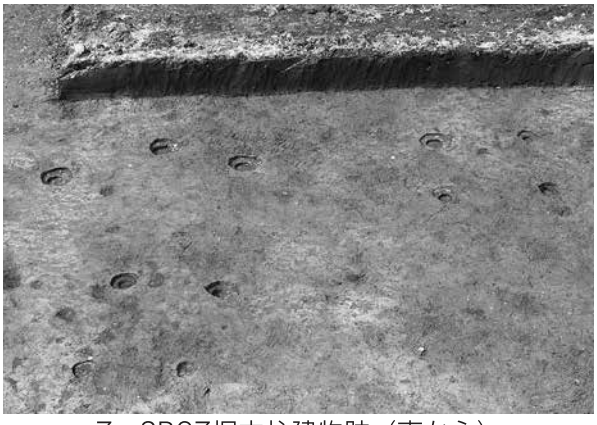
4．SI91竪穴住居跡（東から）



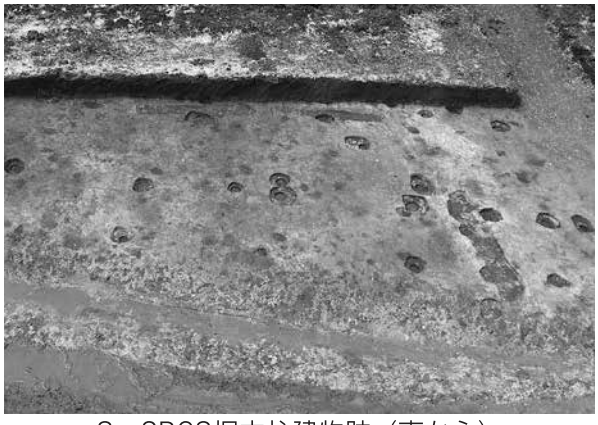
5．SI91床面遺物出土状況



6．SB66掘立柱建物跡（北から）



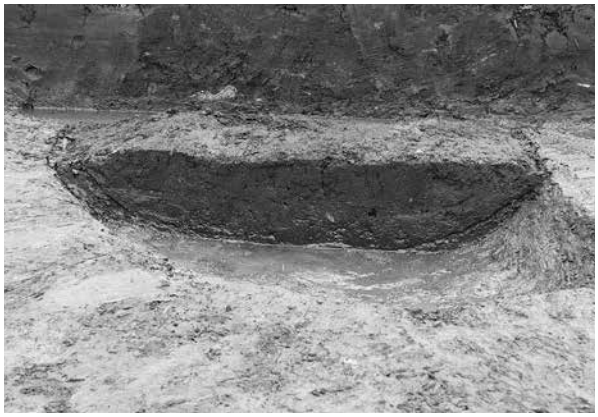
7．SB67掘立柱建物跡（南から）



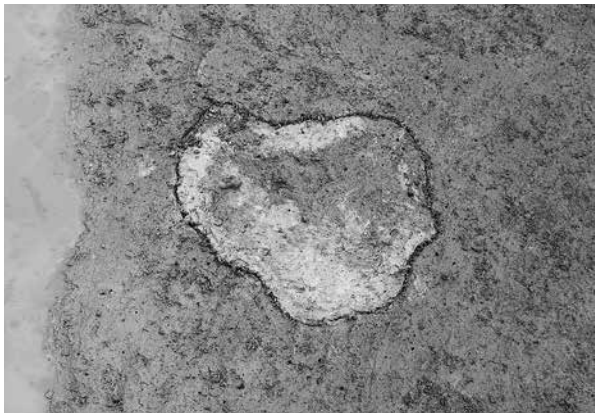
8．SB68掘立柱建物跡（南から）



1．SB72掘立柱建物跡（南から）



2．SK56土坑断面（北から）



3．SK61土坑確認状況（西から）



4．SK61遺物出土状況



5．SK64土坑断面（南から）



6．SK81土坑（南から）



7．SD55溝跡（東から）



8．SD73、SD74、SD75溝跡（東から）



1．N1南区全景（南から）



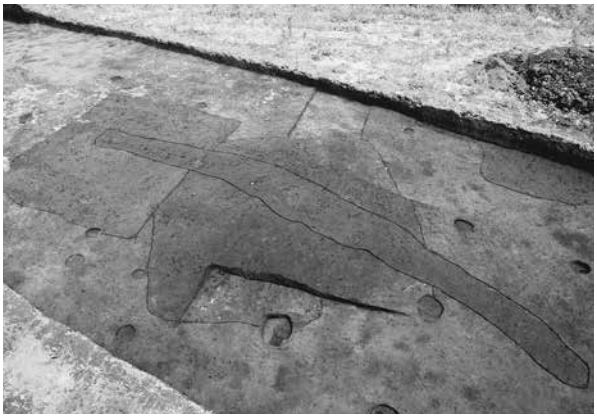
2．N1北区全景（南から）



3．N1北区全景（北から）



4．SB306掘立柱建物跡（西から）



5．SI303・304竪穴住居跡、SD307溝跡（西から）



6．N2東区全景（西から）



1．N2中区東側全景（西から）



2．N2中区西側全景（西から）



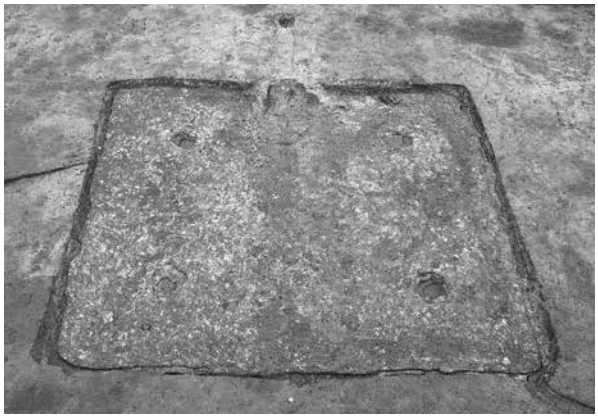
3．N2西区遺構確認状況（西から）



4．N2西区全景（西から）



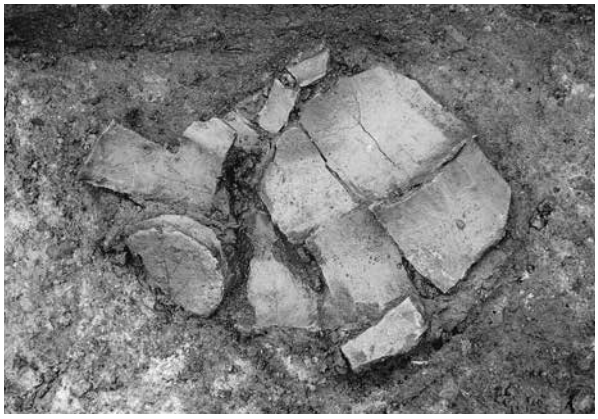
5．SI201a竪穴住居跡（南から）



6．SI201b竪穴住居跡（南から）



7．SI201bカマド部分（南から）



8．SI201b床面遺物出土状況（南から）


1．SI209竪穴住居跡（南から）


2．SI210竪穴住居跡（南東から）

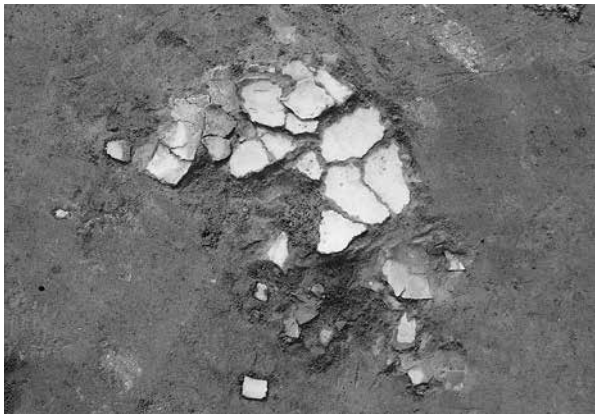

3．SI210床面遺物出土状況


4．SI212竪穴住居跡（北から）


5．SI222竪穴住居跡（南から）


6．SI223竪穴住居跡（北から）


7．SI225竪穴住居跡（北から）


8．SI225遺物出土状況（東から）



1．SI230竪穴住居跡（東から）



SI230床面遺物出土状況



3．SI231竪穴住居跡（北から）



4．SI231 床面遺物出土状況（1）



5．SI231 床面遺物出土状況（2）



6．SI231 床面遺物出土状況（3）



7．SI259竪穴住居跡、SD228a・b大溝跡（南から）



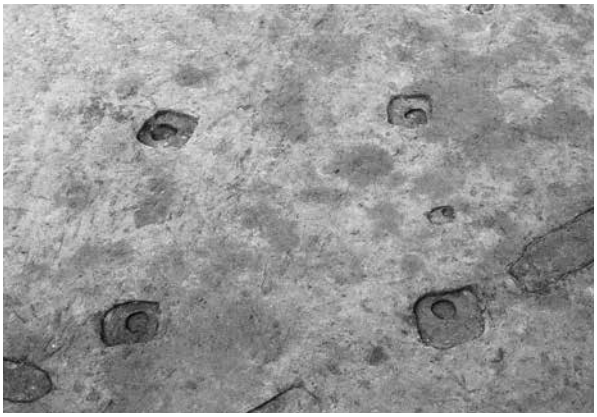
8．SI260竪穴住居跡（北から）



1．SB235掘立柱建物跡（南から）



2．SB235a・b P2柱穴断面（北から）



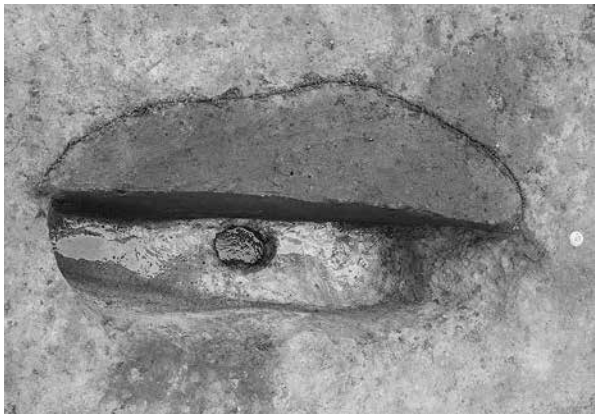
3．SB239掘立柱建物跡（南から）



4．SB251掘立柱建物跡（北から）



5．SB256掘立柱建物跡（南から）



6．SK217落し穴状土坑（北から）



7．SK224土坑断面（西から）



8．SK236土坑（北から）



1．SK243土坑（北から）



2．SD202溝跡（東から）



3．SD206大溝跡（南から）



4．SD206遺物出土状況



5．SD228大溝跡、SD220・221溝跡（東から）



6．SD228a・b大溝跡断面（西から）



7．SD221、SD228断面（北から）



1．N2南区13T SD228a･b､SD801大溝跡（東から）



2．N2南区7T SD228a･b､SD801大溝跡（西から）



4．N4南区全景（西から）



3．N4中区全景（南東から）



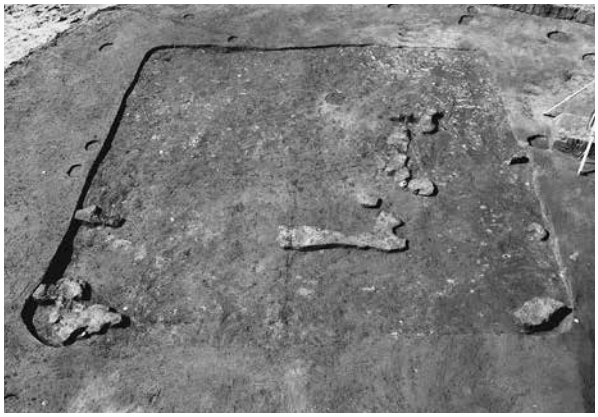
5．N4北区全景（北から）



6．N4北区西側全景（東から）



1．SI701竪穴住居跡（東から）



2．SI701床面焼土検出状況（東から）



3．SI701床面遺物出土状況



4．SK703落し穴状土坑（北から）



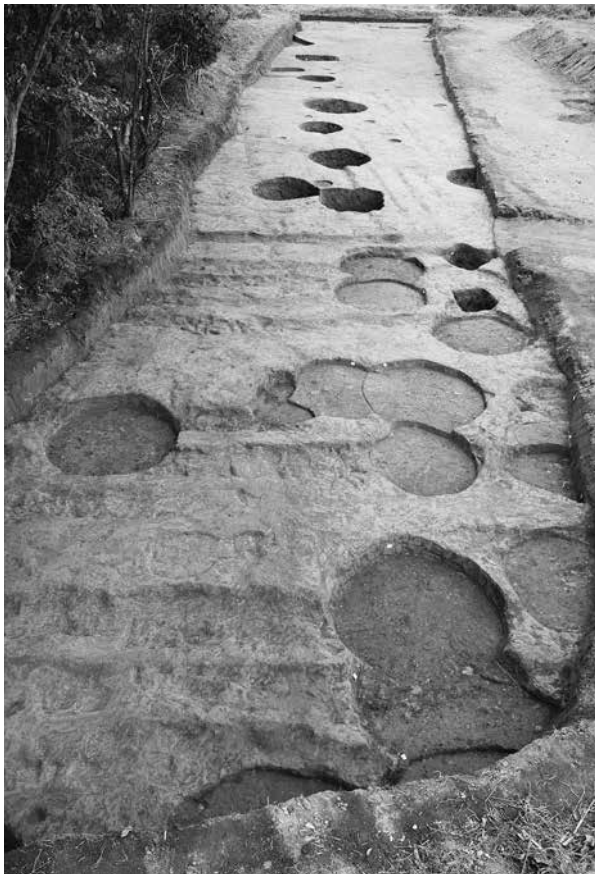
5．N5区全景（南から）



6．N6西区東側全景（西から）



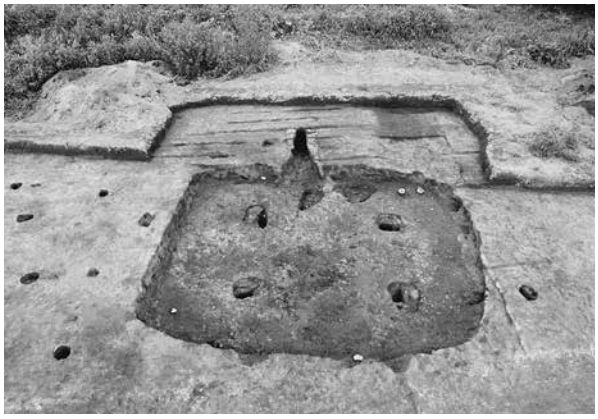
1．N6西区東側全景（東から）



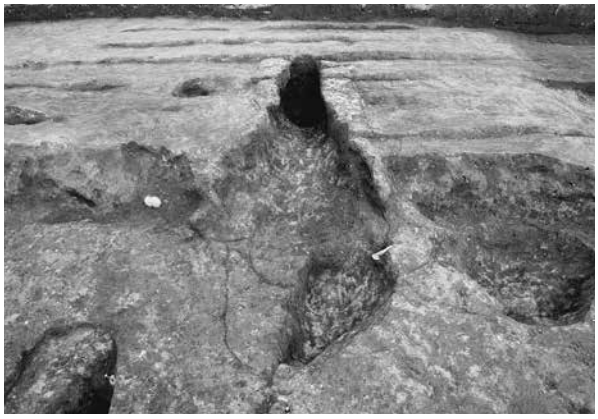
2．N6西区西側全景（西から）



3．N6東区全景（西から）



4．SI424竪穴住居跡（南から）



5．SI424カマド部分（南から）



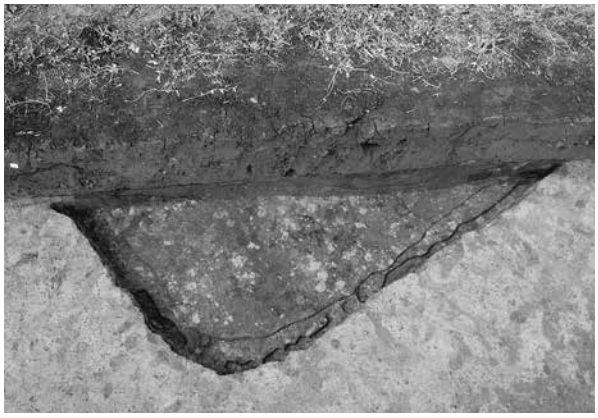
1．SI424煙道部分（東から）



2．SI424床面遺物出土状況（南から）



3．SI424床下土坑（西から）



4．SI443竪穴住居跡（南から）



5．SB402掘立柱建物跡（南から）



6．SB414掘立柱建物跡（南から）



7．SB436掘立柱建物跡（西から）



1．SB432掘立柱建物跡（西から）



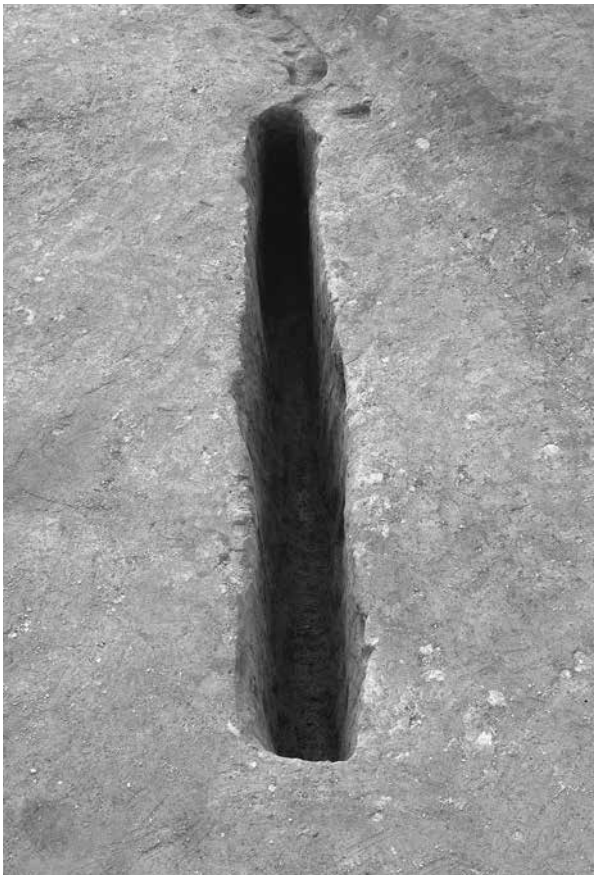
2．SA431柱列跡（南から）



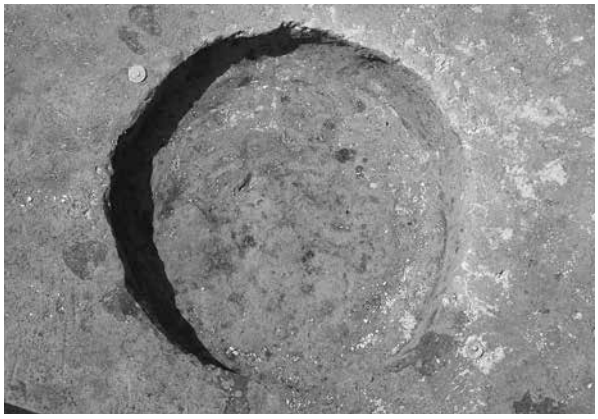
3．SE403井戸跡（南から）



4．SK409落し穴状土坑（南から）



5．SK419落し穴状土坑（東から）



6．SK418土坑（南から）



7．SK423土坑（北から）



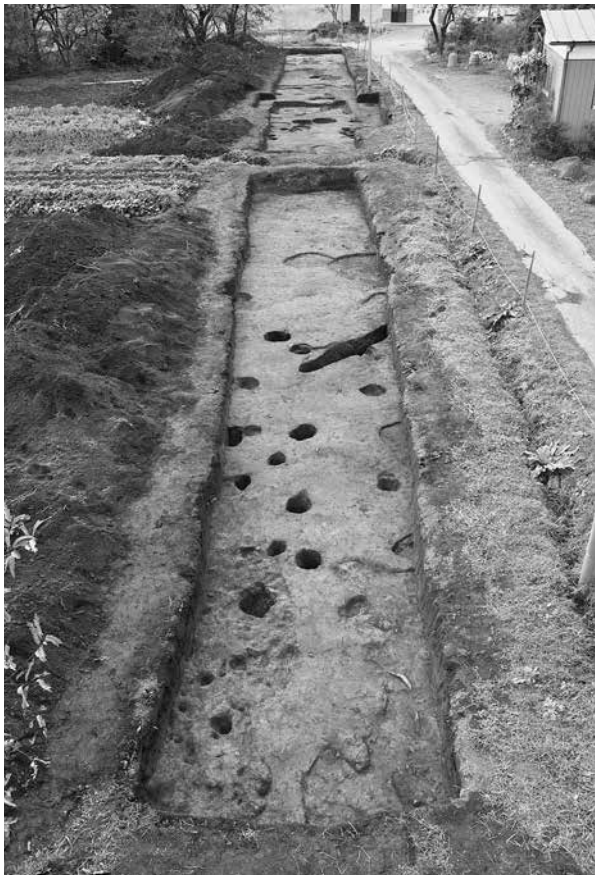
1．SX406円形周溝跡（南から）



2．SX406断面（西から）



3．N8東区全景（東から）



4．N8西区東側全景（東から）



5．N8西区西側全景（東から）



1．SI751竪穴住居跡（北から）



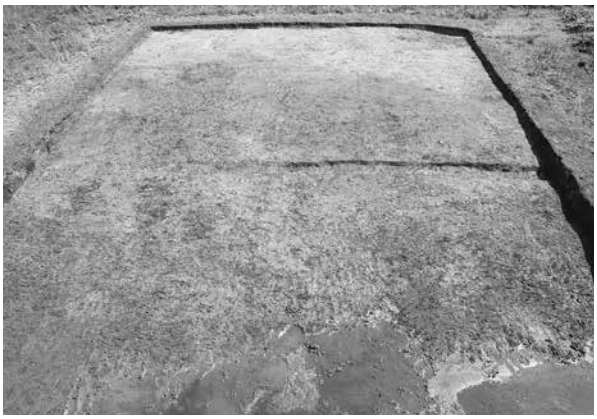
2．SI753竪穴住居跡（西から）



3．SI753カマド部分（西から）



4．SI755竪穴住居跡（北から）



5．N9南区全景（西から）



6．N9区中区全景（南から）



7．N9中区南側全景（南から）



8．N9中区中央部全景（南から）



1．N9中区北側全景（南から）



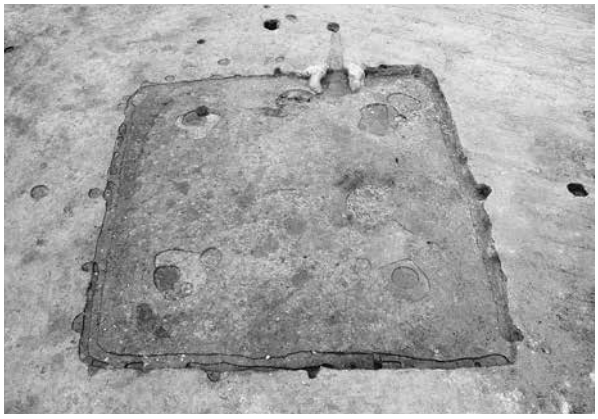
2．N9北区南側（北から）



3．N9北区北側全景（東から）



4．SI553竪穴住居跡（南から）



5．SI554c竪穴住居跡（南から）



6．SI554cカマド部分（南から）



1．SI554c周溝とSI554b壁柱穴P6断面（東から）



2．SI554完掘状況（南から）



3．SB569掘立柱建物跡（南から）



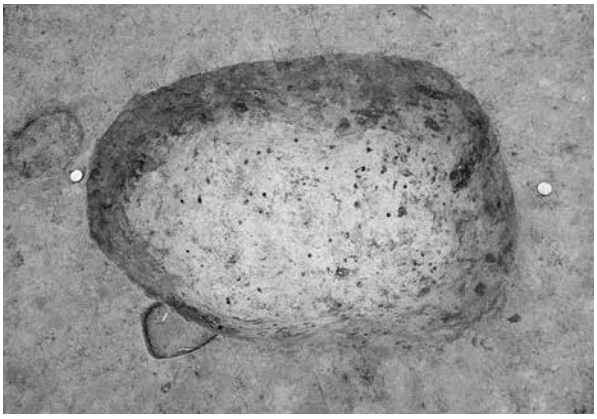
4．SB570掘立柱建物跡（南から）



5．SB570 P3断面（東から）



6．SA568柱列跡（南から）



7．SK547土坑（南から）



8．SK548土坑（南から）



1．N10区全景（南から）



2．N10区全景（北から）



3．SI901・SI902竪穴住居跡（南から）



4．SI901確認状況（東から）



5．SA903柱列跡（北から）


1


2


3


4


5


6

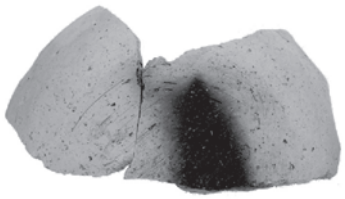

7

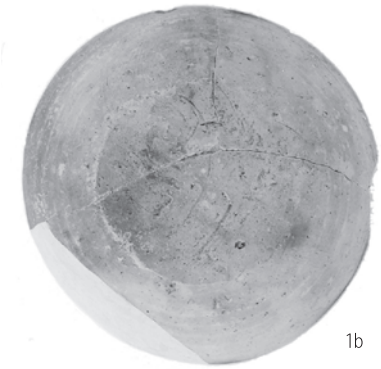
1～3:SI1　4:SI2　5～7:SI9

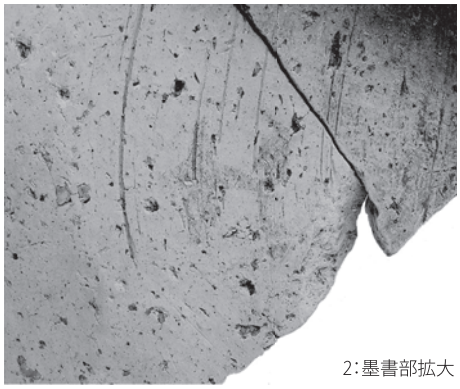
(S≒1/3)

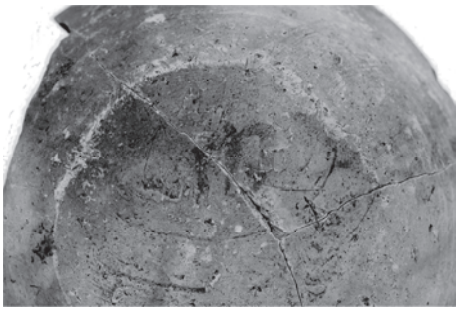
SI1・SI2・SI9竪穴住居跡出土土器


1a


2


1b


2：墨書部拡大


1b：墨書部拡大


4


3


5

1～5：SI601

（S≒1/3）

SI601竪穴住居跡出土土器


1


2


3


4


5


6


7a


7b


8

1～3：SI602　4：SI609　5～8：SI621

(S≒1/3)

SI602・609・621竪穴住居跡出土土器

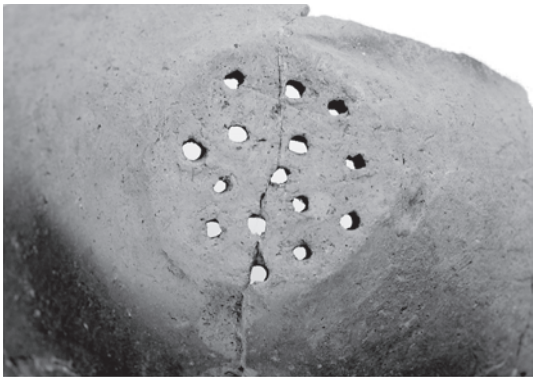

1


2


3


4


5a


5b


6


7


8

1:SI621　2:SI633　3:SK610　4・5:SK628　6〜8:SI91

（S≒1/3、5b:任意）

SI91・SI621・SI633竪穴住居跡、SK610・SK628土坑出土土器


1


2


3


4


5a


5b

1:SI201b　2～5:SI210

（S≒1/3）

SI201b・SI210竪穴住居跡出土土器


1


2


3


4


5


6


7


8


9


10

1:SI222　2～4:SI223　5～8:SI225　9・10:SI230

(S≒1/3)

SI222・SI223・SI225・SI230竪穴住居跡出土土器


1


3


2


4


5

1～5：SI231

（S≒1/3）

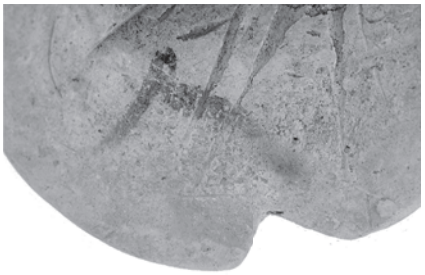
SI231竪穴住居跡出土土器













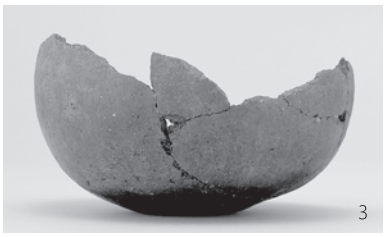
4b：高台内面の墨書部拡大

1：SD206　2：SD228　3：SK224　4・5：SD228b　（S≒1/3）

SD206・SD228a・SD228b大溝跡、SK224土坑出土土器


1


2


3


4

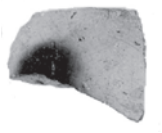

5


6


7


8


9


10

1:SI811　2～6:SI701　7～10:SI424

(S≒1/3)

SI811・SI701・SI424竪穴住居跡出土土器


1


2


3


4


5


6


7


8


9


10

1～5:SI424　6・7:SI753　8:SI755　9:SK759　10:SI554　(S≒1/3)

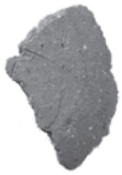
SI424・SI753・SI755・SI554竪穴住居跡、SK759土坑出土土器


1


2


3


4


5


6


7


8

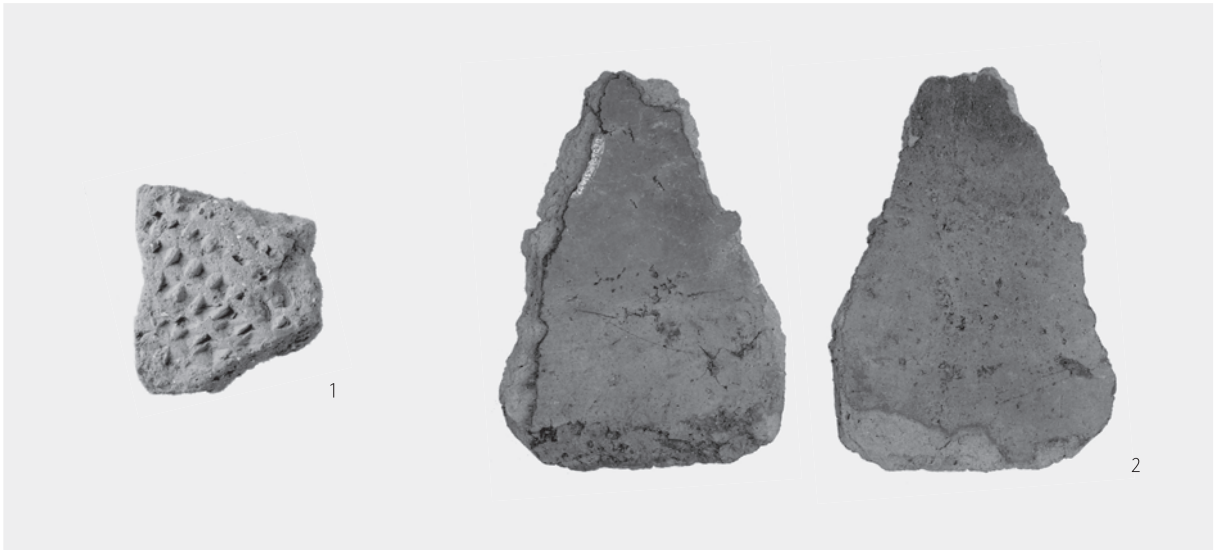

9

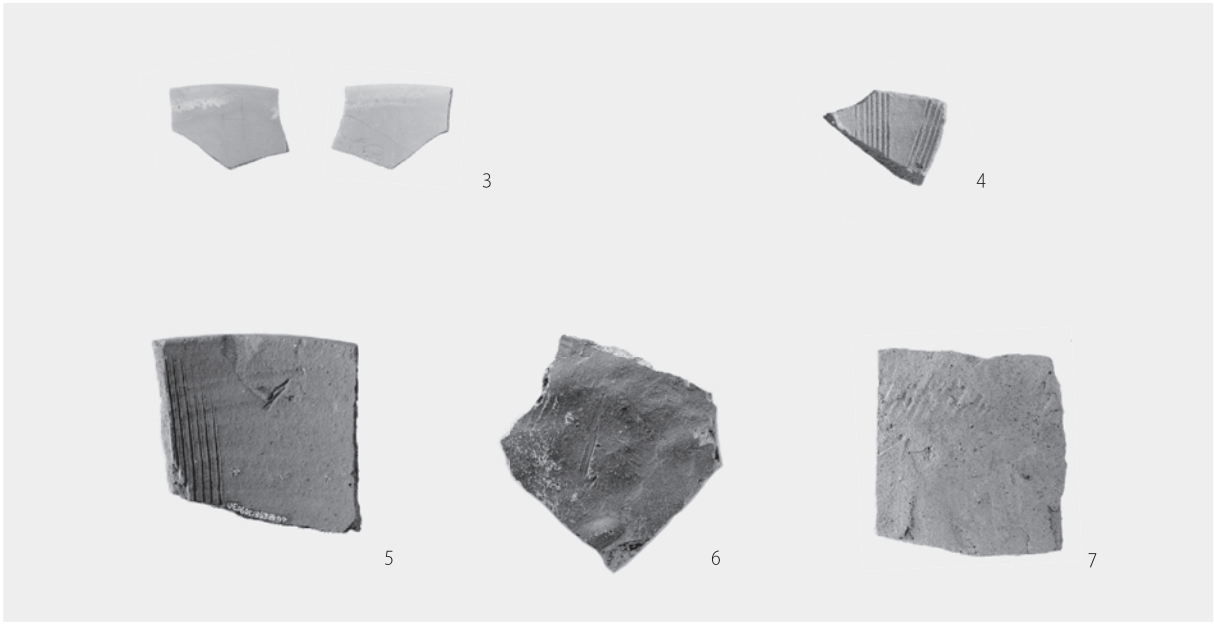

10

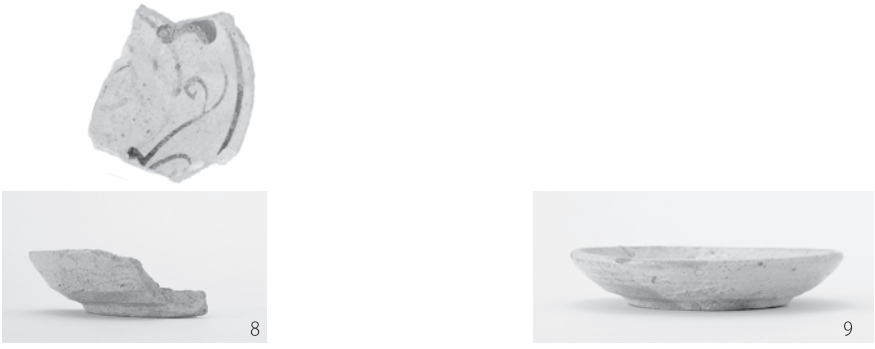
1:S1北 T1遺確　2:S3西 表土　3:N2西 遺確　4:N2中央 遺確　5:N2中央 ｶｸﾗﾝ　6～8:N2南 遺確　9:N5区 表土　10:N9 表土

(S≒1/3)

遺構外出土土器



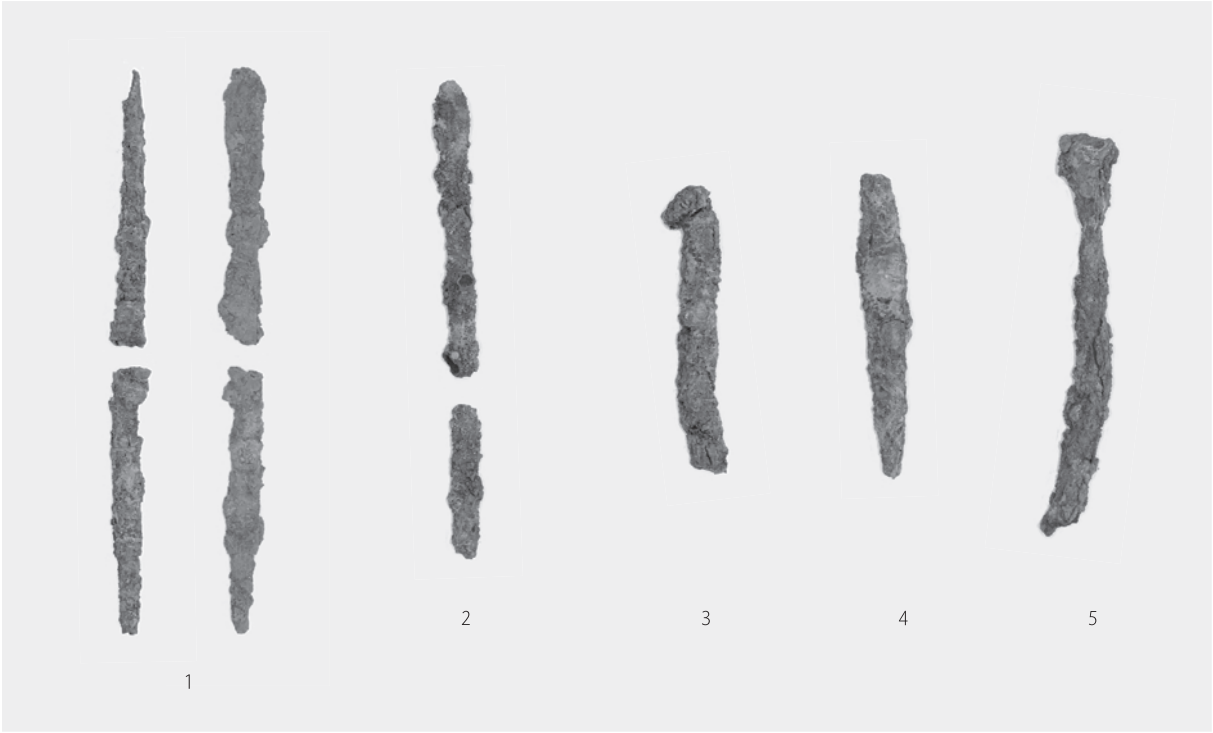


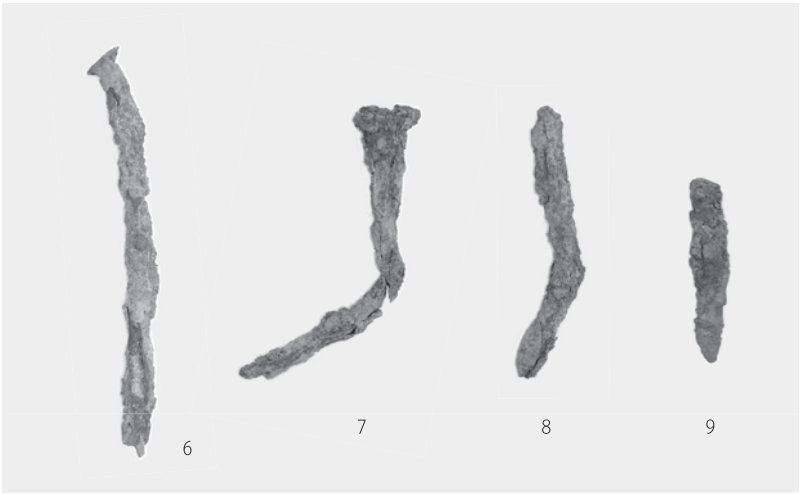


1:SI424　2:S1西 ｶｸﾗﾝ　3:N2南 遺確　4:S1南 ｶｸﾗﾝ　5:S1西 ｶｸﾗﾝ　6:S3西 遺確　7:N4南 遺確　8:S1南 ｶｸﾗﾝ　9:S1西 Ⅲ層

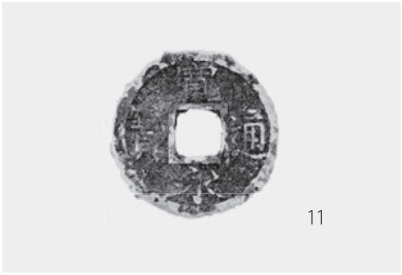
(S≒1/3)

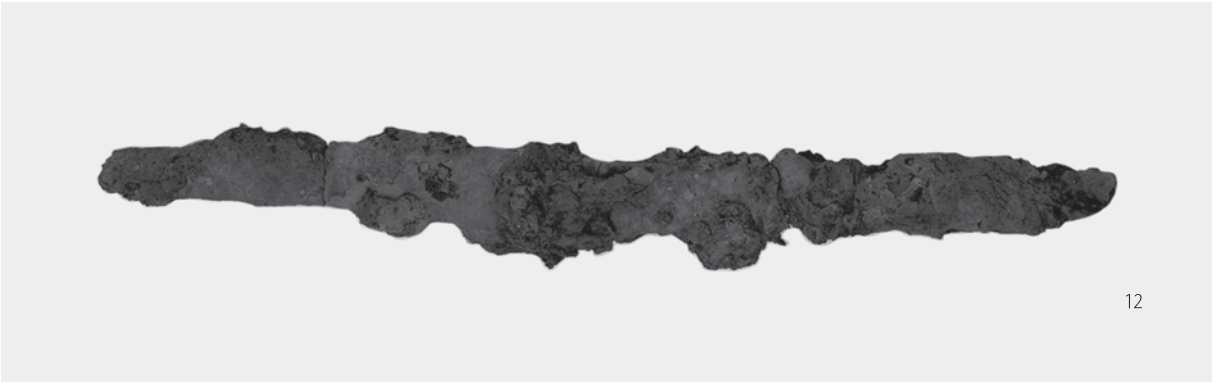
瓦・中世陶器・近世陶磁器







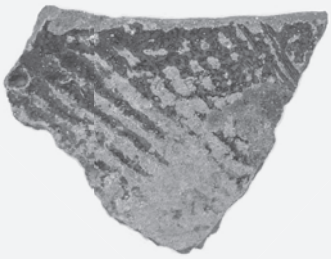




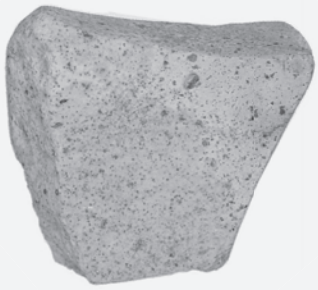
1:SI210　2:SD754　3・4:SI755　5・10:SI755　6～8:N9中 遺確　9:S1南 遺確　11:N2南 遺確　12:SK61

(1～10:S≒2/3, 11:S≒1/1, 12:S≒1/3)

金属製品・古銭



1



2



3



4



6



5

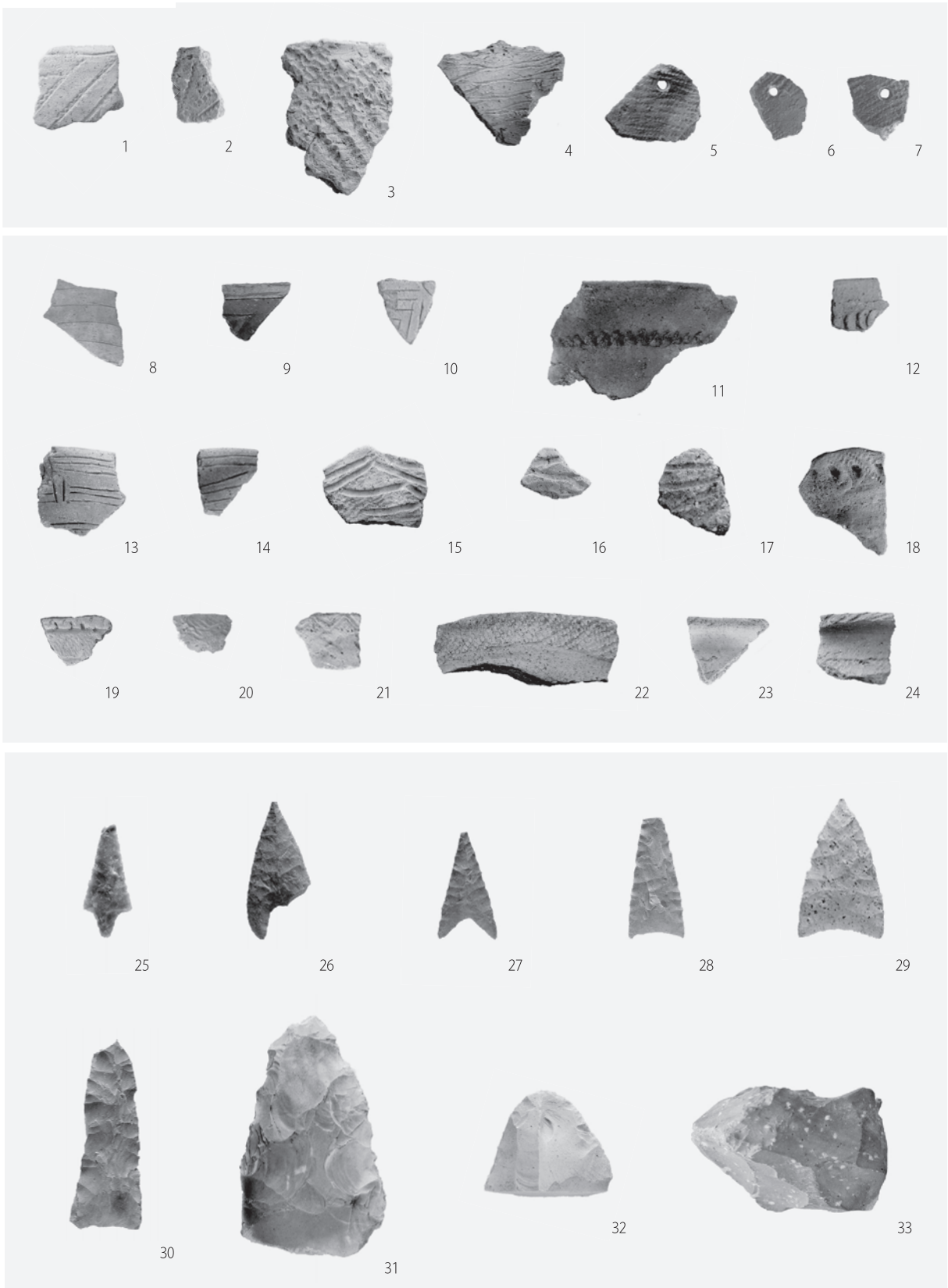


7

1:N4南 遺確　2:SI424　3:S1南 遺確　4:N2南 遺確　5:SI601　6・7:SI755

(S≒2/3)

転用砥・砥石



1:N9中 排土　2:SI554　3:N8西 表土　4・13・20・23:SI701　5～7:SI223　8:SI2　9:N4中 P705　10・15:S1南 遺確　11:SI753　12:S1西 表土
14:N4中 遺確　16:N8西 遺確　17・19:N2東 遺確　18:SI201b　21:N2南 遺確　22:SI230　24:SB615　25:SK538　26・29:S1南 遺確　27:SI209
28:S1N2南 遺確　30:S1西 遺確　31:N2南 遺確　32:SI609　33:S1西 排土　(1～24:S≒1/3,25～33:S≒2/3)

縄文土器・弥生土器・石器

【 解 説 】

かけがえのない遺跡を未来へ

私たちの足もとには、昔の人びとが暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋まっている場所があります。このように、昔の人びとの生活の跡が残されている場所を「遺跡」と呼んでいます。

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた蔵王町には、私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。当時の人びとがどのようにして郷土蔵王に住み着き、稲作はいつから始めたのか。彼らは日々の生活をどのように送り、何歳まで生きたのか。興味の尽きないテーマです。

遺跡を調べることで昔の人びとの知恵に学び、私たちの歴史や文化をよく知ることは、私たちの生活を見直したり、将来を考えるためにとても大切な役割を果たしています。そのためには、長い歴史を経て今に伝えられている大切な遺跡を、未来の子どもたちの世代へ守り伝えていかなくてはなりません。

遺跡を記録に残すための発掘調査

一度壊れた遺跡は、二度と元に戻すことができません。かけがえのない遺跡を将来へ残すためには、そのままで保存することが望ましいのです。ところが、いまの私たちの生活に必要な土木工事などによって、どうしても遺跡が壊されてしまうことがあります。このような時には、工事をする前にそこにどのような遺跡が残されていたのかを調べ、その様子を写真や図面に記録するために、発掘調査を行ないます。

六角遺跡のある小村崎地区の円田盆地では、水田を使いやすく作り変えるほ場整備工事が計画されました。できるだけ遺跡を壊さずに水田を作り変えるために、地元地権者の皆さんや宮城県大河原地方振興事務所ではたくさんの工夫をしました。それでも、どうしても遺跡が壊れてしまう部分では、発掘調査をして記録を残すことになりました。発掘調査では、たくさんの発掘作業員の皆さんが汗を流しました。このように、たくさんの人の努力によって、六角遺跡の記録を残すことができたのです。

六角遺跡から見えてきた郷土の歴史

ここに刊行した「六角遺跡発掘調査報告書」を紐解(ひもと)くと、蔵王の人びとの歴史であり、さらにはエミシと呼ばれた東北地方の人びとと大和朝廷(やまとちょうてい)とのダイナミックな古代史の１ページを知らせてくれる重要な遺跡だったことが分かります。六角遺跡は蔵王町の東部、円田盆地の北の端から張り出した低くなだらかな丘の上にあります。六角遺跡の「六角」という地名は、丘の上にある六つの顔をもった「六角地蔵」にちなんだものだそうです。さて、その「六角地蔵の丘」の歴史をたどってみましょう。

今からおよそ 3000 年から 5000 年ほど前の縄文時代、六角地蔵の丘のまわりは湿原のような状態でした。水辺には多くの動物が集まったのでしょうか、丘のいたるところにシカやイノシシを捕らえるための落し穴が掘られました。六角地蔵の丘は、狩猟場(しゅりょうば)として使われていたのです。落し穴は深さが２メートル近いもの



発掘作業風景（丸く見えるのは建物の柱の跡です）



発掘作業風景（右側は住居跡、手前は落し穴の跡です）

もありました。スコップやツルハシのない時代に、いったいどのようにして掘ったのかと思うほどです。同じ頃、高木丘陵とよばれる円田地区の丘の上にはいくつものムラが作られていました。六角地蔵の丘で捕らえた獲物を手に、子どもたちの待つムラへ帰る人びとの姿が目に浮かぶようです。

さて、今からおよそ1500年ほど前の古墳時代になると、六角地蔵の丘にもムラが作られました。丘の上のいちばん見晴らしのよい場所に、いくつもの家がならんで建てられたのです。円田盆地の周辺には弥生時代からの遺跡も多く、蔵王町内でも早くから稲作が営まれた地域だったようです。今回の発掘調査で水田の跡は見つかりませんでしたが、天然の湿地を利用した稲作が行なわれていたのかもしれません。

さらに時が過ぎて、今からおよそ1300年ほど前の飛鳥～奈良時代になると、六角地蔵の丘にはいくつかの大きな溝が掘られました。この溝は、いったい何のために掘られたのでしょうか。水路ではなかったようです。というのも、溝は丘の上の平らな部分を四角形に取り囲んでいるだけで、どこかへ水を流すようなつくりにはなっていなかったのです。発掘現場では何人もの調査員が頭をひねりましたが、この溝がどのような目的で掘られたものか、その答えを見つけることはできませんでした。今回発掘せずに保存された場所には、この謎を解く鍵が今もひっそりと眠っているのかもしれません。

ところで、この溝や、この頃の家の跡からは、当時のこのあたりの人びとが用いていたのとは少し違ったデザインの土器が出土しました。この土器は、遠く関東地方の人びとの製作技法で作られたもののようです。そして土器だけでなく、家の中で調理をしたカマドもやはり関東地方の人びととおなじ造りでした。この頃、東北地方に暮らしていたのは、エミシと呼ばれた人びとです。考古学の最近の研究成果によれば、飛鳥～奈良時代にかけて大和朝廷がその勢力を拡大させるにあたり、エミシの住んでいた東北地方へ関東地方からの移民が送り込まれたことが分かっています。六角地蔵の丘にも、移民の人びとのムラが作られていたのでしょうか。そして、この土地の人びととの間には、どのような交流があったのでしょうか。

これまでの古代史研究では、宮城県南部の亘理地方までは比較的早くから大和朝廷に同化していたことが分かっていますが、刈田地方の実態はまだ明らかになっていません。六角地蔵の丘に関東地方の人びとが移住してきたことと、丘の上を四角く取り囲む大溝が掘られたこととがどのように関係しているのか。今後の古代史研究に一石を投じることになるのかもしれません。

その後、今から1200年ほど前の平安時代になると、六角地蔵の丘には二つのムラが作られました。さらに時が過ぎて江戸時代には、何軒かの屋敷が作られたようです。このように、六角地蔵の丘には、縄文時代から現在にいたるまで幾重にもわたって人びとの生活の痕跡が残されていることが分かりました。

ここに記録された六角遺跡の考古学的成果は、地域の歴史を解き明かす鍵としてとても貴重なものです。



落し穴跡の調査（深さ２ｍを超えるものもありました）



住居跡の調査（床に置かれたまま土器が出土しました）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ろっかくいせき
書名	六角遺跡
副書名	
巻・次	
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書
シリーズ番号	第６集
編著者名	鈴木　雅
編集機関	蔵王町教育委員会
所在地	〒989-0821　宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10　℡0224-33-3008　Fax0224-33-3831
発行年月日	西暦２００８年（平成２０年）３月２１日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
六角遺跡	宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字六角地蔵ほか地内	43010	05112	38° 7′ 31″	140° 41′ 38″	2006.5.15 ～ 11.24 2007.8.21 ～ 9.24	約 25,800 ㎡ 事前調査分 約16,700㎡ 確認調査分 約 9,100 ㎡	経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業・円田２期地区）に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六角遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中世 近世	竪穴住居跡 52 軒 掘立柱建物跡 29 棟 柱列跡 10 条 井戸跡 1 基 落し穴状土坑 39 基 土坑 71 基 大溝跡 6 条 溝跡 44 条 円形周溝跡 1 基 性格不明遺構 1 基 柱穴 多数	土師器 ロクロ土師器 須恵器 瓦 土製品（ミニチュア土器） 石製品（砥石） 金属製品（鉄鏃・刀子） 縄文土器 弥生土器 石器 中世陶器 近世陶磁器 古銭 （総量コンテナ約 35 箱分）	

要約	縄文時代の落し穴状土坑群、古墳時代前期塩釜式期・７世紀中頃～後半・８世紀前半～中頃・８世紀末～９世紀中葉の集落跡、中・近世の掘立柱建物跡群などを確認した。７世紀後半～８世紀前半の竪穴住居跡には関東系土師器・関東型カマドを伴うものがある。また、８世紀前半頃とみられる大溝跡による区画が確認された。各時期の遺構の分布状況と占地の様相にはそれぞれ違いが認められ、沢地の埋没など地形の形成過程および当時の人びとの生業形態の変化、あるいは政治的な要因などによって集落が変遷している可能性が想定される。

蔵王町文化財調査報告書 第６集

六 角 遺 跡

―経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査―

２００８年（平成２０年）３月２１日　印刷・発行

発行　蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北 10

ＴＥＬ 0224-33-3008　ＦＡＸ 0224-33-3831

印刷　㈱津 田 印 刷

〒989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町 13-5

ＴＥＬ 0224-52-5550　ＦＡＸ 0224-52-3097